大江健三郎の初期、中期小説における
〈政治的人間〉と〈性的人間〉の止揚

ブシマキン・バジム

平成二十六年三月

博士論文

大江健三郎の初期、中期小説における〈政治的人間〉と〈性的人間〉の止揚

金沢大学大学院人間社会環境研究科
人間社会環境学専攻

学 籍 番 号 ０９２１０７２７０９
氏　名 ブシマキン・バジム
主任指導教員名 杉山　欣也

目　　次

初出一覧 …… 2
序論 …… 3

第一章　問題の所在と論文の構成 …… 7
第一節、問題の所在
―大江健三郎における〈政治的〉なものと〈性的〉なものとは― …… 7
第二節、先行研究における大江健三郎の〈政治的〉なものと〈性的〉なものの関係 …… 11
第三節、論文の構成 …… 14

第二章　〈政治的人間〉の成り立ち …… 17
第一節、歴史的背景 …… 18
第二節、外国人問題 …… 27
第二章の結論 …… 30

第三章　〈政治的人間〉の先駆―アメリカ人像― …… 32
第一節、描き方 …… 32
第一節―1、「飼育」 …… 32
第一節―2、「不意の唖」 …… 41
第一節―3、「人間の羊」 …… 48
第一節―4、「暗い川、おもい櫂」 …… 53
第一節―5、「戦いの今日」 …… 57
第一節―6、「後退青年研究所」 …… 62
第二節、主人公同士の関係 …… 64
第二節―1、白人と黒人との対立 …… 64
第二節―2、アメリカ人と日本人との対立 …… 68
第二節―3、軍人とそれ以外のアメリカ人の対立 …… 73
第三章の結論 …… 75

第四章　初期小説における〈政治的人間〉と〈性的人間〉のモチーフの再検討―「飼育」のロシア語訳を中心に― ····· 77
第一節、大江の初期小説における〈政治的人間〉と〈性的人間〉 ·· 78
第二節、ソ連時代の海外小説の翻訳の特徴····· 78
第三節、翻訳の分析―「飼育」····· 79
第四節、翻訳の分析―「不意の唖」 ····· 84
第五節、翻訳された小説をどう読むか ····· 86
第六節、大江作品の翻訳から生まれる新たな小説 ····· 88
第四章の結論····· 90

第五章　ソ連の評論における〈政治的人間〉と〈性的人間〉のモチーフ―「セヴンティーン」の評論を中心に― ····· 91
第一節、ソ連の海外小説出版政策····· 92
第二節、ソ連の『セヴンティーン』評論翻訳 ····· 95
第三節、ソ連の『セヴンティーン』評論の解釈 ····· 97
第五章の結論····· 104

第六章　同時代における〈政治〉と〈性〉―大江健三郎と三島由紀夫の比較研究― ····· 105
第一節、大江を通して「憂国」を読む····· 109
第二節、作家のスタンスの特徴····· 113
第三節、〈見る〉主人公と〈見られる〉主人公 ····· 115
第四節、「憂国」のロシア語訳と〈政治的〉と〈性的〉のモチーフの再検討····· 117
第五節、大江の初期作品を通して中期作品を読み直す ····· 124
第六章の結論····· 127

第七章　〈政治的人間〉と〈性的人間〉の止揚―「性的人間」と「セヴンティーン」を中心に― ····· 128
第一節、活動範囲と主人公の関係····· 131

第二節、主人公とその仲間 137
第三節、現状への不満 138
第四節、止揚 142
第七章の結論 149

結論と展望 150
注 156
参考文献 163
謝辞 167
資料 168

凡例

一、引用文の仮名づかいは、原文通りである。

一、引用文および雑誌名の旧字体はすべて新字体に直し、促音・拗音はすべて小文字に統一した。ただし、人名に関しては、旧字体を用いたものもある。

一、年月日はすべて西暦に統一した。ただし、引用文における年月日は原文通りにした。

一、数字は漢数字に統一した。ただし、引用や書籍題名などの場合は原文の通りにした。また、英語とロシア語文献の記載事項のところは横文字のためアラビア数字にした。

一、引用中の傍点・ルビなどは、特に記さない限りすべて原文によるものである。

一、引用中の明らかに誤植と思われるものについては、引用の際に訂正した。

一、引用・言及に際しては書誌に関して次の順で書誌に関して記した。
題名(「」で囲む)、雑誌名または単行本名(『』で囲む)、出版社名、発行・刊行年も記した。出版事項に明記がある場合に出版月も記した。
ただし、雑誌に関しては発行月も、新聞に関しては発行月日も記した。

一、作品からの引用は『大江健三郎小説』新潮社、一九九六―一九九七年による。
ただし、下記のものはそれと別に用いた。「憂国」は『花ざかりの森・憂国』新潮社、二〇一〇年十二月、「セヴンティーン」と「性的人間」は『性的人間』新潮社、一九九八年五月。「政治少年死す」は『文学界』、一九六一年二月号によるものである。

一、引用は一行空け一段下げて記した。

一、英語文献とロシア語文献からの引用においては、まず日本語訳を掲げ、その後に原文を括弧に入れて示した。日本語訳は全てブシマキンによる。

初出一覧

本論文の章の初出は次の通りである。執筆にあたり、一部加筆と修正をしたが、基本的な論旨は変わらない。その他の部分に関しては書き下ろしである。

第四章　ブシマキン・バジム「大江健三郎の初期小説に於ける政治的人間・性的人間のモチーフの再検討―「飼育」のロシア語訳を中心に―」//『金沢大学国語国文』三十六号　二〇一一年三月

第六章　ブシマキン・バジム「三島由紀夫の『憂国』と大江健三郎の『セヴンティーン』ー見る主人公と見られる主人公ー」//『金沢大学人間社会環境研究科紀要』二十三号　二〇一二年三月

第七章　ブシマキン・バジム「大江健三郎の〈政治的人間〉と〈性的人間〉の止揚」//『金沢大学人間社会環境研究科紀要』二十五号　二〇一三年三月

序論

本論文は、初期小説から中期小説にかけて大江健三郎が描く〈政治的人間〉と〈性的人間〉について論じ、両者の関係を明らかにするものである。

本論文で扱う「初期」とは、篠原茂が大江の文壇での出発点とみなす[1]「死者の奢り」(『文学界』一九五七年八月号）から、大江が長編小説を書き始めた一九六〇年代までを指す。この時期には、大江は主に短編小説を発表しているが、途中から小説の主なテーマは〈監禁状態〉となる。これに続く「中期」は、筆者の定義によれば、小説の主要なテーマが〈村＝国家＝宇宙〉に変わる一九八〇年代までである。具体的には、『個人的な体験』(一九六四年八月、新潮社）から『同時代ゲーム』(一九七九年十一月、新潮社）までの十五年間である。初期の作品とは異なり、包括的なテーマは〈政治的人間と性的人間〉に変わっている。

初期作品の〈監禁状態〉というテーマについては、『死者の奢り』(一九五八年、文芸春秋新社）の後書きで大江自身が次のように説明している。

> 僕はこれらの作品を一九五七年のほぼ後半に書きました。監禁されている状態、閉ざされた壁の中に生きる状態を考えることが、一貫した僕の主題でした[2]。

上記の引用から窺えるように、初期作品群における〈監禁状態〉は大江の目で見た戦後日本の社会状況の一つの反映である。大江は、当時の日本の若者が戦後処理と米軍の占領などによって圧迫され、自由でない、という状況を、〈監禁〉に喩えて描いている。国の状況は各国民に反映され、国民の一人ひとりによって国の様子が象徴されるという考え方は大江の小説の土台にある。そして、当時の日本のあり方は大江の登場人物に反映されている。主人公とその他の登場人物は限られた空間で活動するが、それは広く国民全体を象徴するものと言える。〈監禁状態〉は大江の主人公が置かれている状態であり、国もこれと同じ状態にあると大江は言う。

この〈監禁状態〉からの展開として、〈政治的人間〉と〈性的人間〉の関係が生まれたことは、先行研究ですでに指摘されている。一例として、一条孝夫の「戦争文学と性」という論がある[3]。

ところで、既述した初期・中期・後期という時期区分は、複数の先行研究に窺え、例えば Yasuko Claremont の“The novels of Ōe Kenzaburō”の序章でも同じように分析されている[4]。この時期区分はほぼ定着していると言ってよく、本論文もこれに従うことにする。

本論文を書くに至った背景は以下の通りである。

大江健三郎の小説は本論文の筆者の母国のロシアで多数翻訳されている。筆者も学生時代にそれを読み、大江健三郎という作家に興味を持つようになった。管見の限り、ロシア語に翻訳された大江作品は二十点ほどであるが、なぜか中期の作品はほとんどない（大江作品のロシア語訳の目録は資料 I にあげてある）。筆者はこのギャップに関心を抱いた。詳しくは第四章に論じるが、作品の内容、〈政治的人間と性的人間〉というテーマのために翻訳が困難であったからであろう。このテーマを研究する動機もこのギャップに依っている。

本論は、この〈政治的人間と性的人間〉というテーマを、主に下記のような側面から分析していく。

まずはこのテーマの先駆である、初期小説に見られる〈政治的人間〉と〈性的人間〉のあり方を考察する。第三章で論じるように、初期小説においては〈監禁状態〉が主題であり、まだ明確な〈政治的人間〉と〈性的人間〉は現れていないが、その基となる主人公のタイプはすでに現れている。そこで初期作品における〈政治的人間〉と〈性的人間〉の芽生えを、本論文の前半部の研究対象とする。初期小説を研究することによって〈政治的人間〉と〈性的人間〉の形成過程を突き止めることができるだろう。特に第三章で注目したいのは、〈政治的人間〉の先駆であるアメリカ人の像と、〈性的人間〉の先駆である若い主人公の像、そして両者の関係である。

次に、大江の小説のロシア語訳においてこのテーマがどのように扱われているかを検討する。第四章で論じるように、小説の翻訳は原文の小説とある程度違うテキストになる。翻訳とは、原文を違う言葉で書き換えるものであるため、訳者の解釈がある程度その新しいテキストに導入されることがある。本論文の考察を通して、そのことを具体的に示す。翻訳テキストには訳者の理解と訳者の態度が現れる。これによって、新しいテキストは評論性をも持つようになると言える。出来上がったテキストと元のテキストの差異を比較考察することによって原文の

新たな面を発見することができるようになる。それゆえ、原文のみでは見えない、若しくは見えにくい面を追究し、翻訳と原文との比較を、本研究の一部に含める。筆者は、この初期小説における芽生えから中期小説における展開の流れを踏まえつつ、初期作品の芽生えについて詳しく論じる。

第一章から第三章までは、本論文の前半を成し、本題への導入と位置づけられる。第四章は、前半と後半を結びつける章であって、初期小説と中期小説との関係について論じる。

第五章では、大江健三郎の、ソ連時代のロシア語訳と評論を例にし、ソ連における外国文学の翻訳過程、検閲過程、そして出版過程を分析し、それらが小説に対してどのような影響をもたらしたかについて考察する。小説の翻訳とそれに関する評論は、如何なるプロセスを経て出来上がり、そのプロセスが文章を如何に変えるかということを明らかにする。また、翻訳の形で生まれ変わった小説、その生まれ変わった形を解釈する評論が原作からどれほど離れていて、原作の理解が如何に変わるかを明らかにする。これによって原作の〈政治的人間〉と〈性的人間〉の依存性を再確認することができる。

第六章は同時代作家における同じテーマの扱い方を論じる。〈政治的人間〉と〈性的人間〉というテーマは、必ずしも大江独自のテーマではなく、より広い〈政治的〉と〈性的〉という形で同時代の日本文学にしばしば見られるテーマである。それらの同時代文学と大江文学との関係に焦点を当てることによって、大江の小説に対する理解をより明確にする。〈政治的〉と〈性的〉というテーマの流行は戦後日本の文学における一つの現象であり、フランス文学の影響によって日本で一時期流行っていたものである。大江健三郎もサルトルやロレンスなどの影響を受けて、このテーマに取り組んでいる。このテーマは戦後の日本における若者の状況によく合うと大江は考え[5]、小説と評論で自分独自の捉え方を発表した。

> ぼくは現代日本の青年一般をおかしている停滞をえがきだしたいと考え、性的イメージを固執することでリアリスチックな日本の青年像をつくりだすことを意図してきた[6]。

これについては、大江に大きな影響を与えた三島由紀夫を比較対象に選び、両

作家のこのテーマの捉え方の相違点を分析する。

最後の第七章では、本論文の主題である〈政治的人間〉と〈性的人間〉の〈止揚〉について論じる。そこでは、両者の関係を分析し考察する。

以上のように、本論文は各章において、異なる側面から〈政治的人間と性的人間〉の問題を取り上げる。また各章内において、これらの諸側面をさらに細分化し、より詳細な考察を行っていく。

本論文が特に着目するのは、大江作品における〈政治的人間〉と〈性的人間〉、小説における二つの登場人物類型の関係である。それゆえ、大江の政治思想や性に関する思想はそれ自体としては扱わない。

本論文の特徴として挙げられるものは次の通りである。第一に、初期小説と中期小説を大きなテーマの中で一緒に論じることである。従来の大江研究においてはこの二つの時期を区別して論じることが一般的であった。それに対して本論文は、初期小説と中期小説における同一テーマの連続性と、それが変化していく過程に着目した。第二の特徴は、ロシア語に翻訳されたテキストを研究対象に含めたことである。翻訳テキストから小説の新たな理解を見出し、翻訳を一種の評論とみるというアプローチは、本論独自のものとは言えない。しかし、管見の限り、少なくとも大江作品の研究においてそのような試みは見あたらない。この研究方法によって、先行研究が着目してこなかった小説の特徴、〈政治的人間〉は〈性的人間〉がいない限り成り立たない、両者は分離不可能な関係に置かれている、ということが明らかにされる。第三に、大江の小説を論じるに当たって、先行研究と評論と小説自体を資料として使用するだけではなく、大江自身の評論も幅広く視野に入れる。その必要性は詳しく第四章で論じるが、大江の小説の完全かつ充実した解釈のためには、大江自身の評論も考察対象に含めることが不可欠であると考える。従来の大江研究は、小説を論じる場合には基本的に小説のテキストのみを扱うものが多かった。

また、日本における従来の大江研究は、日本国内の先行研究や評論を基にして行うことが普通になっている。これに対し、本論文は、日本以外で発表された研究（英語、ロシア語で公表されているもの）も扱っている。これにより、従来よりも多面的な先行研究に基づいて議論を進めることができる。

第一章　問題の所在と論文の構成

第一節、問題の所在
—大江健三郎における〈政治的〉なものと〈性的〉なものとは—

大江健三郎の初期から中期にかけての小説は、政治的な問題と性的な問題とを小説のテーマにする傾向がある。この時期の大江は〈政治的人間〉と〈性的人間〉という用語をエッセイ上と小説上に導入し、さらに両者の交錯してゆく過程を小説において展開する。本論文は、大江の主に小説を対象にして、そこに現れる〈政治的人間〉と〈性的人間〉の関係を明らかにする。

〈政治的〉なものと〈性的〉なものについての大江自身の解釈は、エッセイ「われらの性の世界」において明確に説明されている。大江は、

「政治的人間は他者と硬く冷たく対立し抵抗し、他者を撃ちたおすか、あるいは他者に他者であることをみずから放棄させる。」「性的人間はいかなる他者とも対立せず抗争しない。かれは他者と硬く冷たい関係をもたぬばかりか、かれにとって本来、他者は存在しない。かれ自身、他のいかなる存在にとっても他者でありえない。」[7]

と定義している（傍点は原文）。言い換えれば、〈政治的人間〉は他人を同化させるタイプの人間であり、〈性的人間〉は同化するタイプである。〈政治的人間〉はは自己と他者とを二分する世界にいるが、他者を負かせて支配することを熱望する。〈性的人間〉はそれとは反対に他者と一緒になる。言ってみればどちらもは他者の存在を認めることはしないが、その他者とどう向き合うかという行動パターンでは異なっている。これが両者についての基本的な説明である。また、両者の関係に関しては同じエッセイに次のような言及がある。

この二つのベクトルが同じ内容をあわせもつことはありえない[8]

〈政治的人間〉と〈性的人間〉は正反対の方向へ進む存在であり、別々の存在であると言っている。この定義は、本論文の議論の基盤の一つとなる。この定義

の是非については第七章で検討する。エッセイにおける理念的な定義と小説に見られる理念の応用はどのような関係にあるか、また、その関係は〈政治的人間〉と〈性的人間〉の関係にどのような影響を与えているか、といった点が本論文の中心的な問題である。

大江は、戦後日本の若者が置かれていた状況が生み出した現象として、〈政治的人間〉と〈性的人間〉の出現を扱っている。大江は、社会状況による圧迫のために若者は両者の何れかにならなければならなかったという。

この社会的な状況は、大江が自分の目で見て実感したものである。その体験は例えば「戦後世代のイメージ」というエッセイで語られている。

> 占領されたまえと、占領されたあとでは事情が同じであるはずはない。しかもわれわれは、心のかたすみに、この二つの時期のあいだの、多かれ少なかれ屈辱的な溝をうずめてしまいたいという、甘えんぼうな希望がうまれていることも、確かめなければならないのだから、ことは複雑になる[9]。

上記のような作家の戦後時代の回顧と感想は、大江の戦後時代に対する敏感な認識を示している。なお、初期小説においても同様の社会状況を描いた作品があるし、〈政治的人間〉と〈性的人間〉という角度から、中期と初期の小説を比較することも可能である。

また、先に引用したエッセイ「われらの性の世界」の〈政治的人間〉と〈性的人間〉の定義からも窺えるように、大江のこのテーマにおいて、狭義の〈政治〉と狭義の〈性〉は直接関わらないことが肝要である。この点は重要であるのであるが、〈性〉に関する異説が従来の評論や研究には多く見られる。確かに〈政治的人間〉と〈性的人間〉を扱う一群の作品には〈性〉に関わる描写が溢れるほど多い。〈政治〉に関わる描写も多い。この多さが意図的な手法であることは、大江自身の解説からも分かる。

> ぼくにとって同時代の人間をえがくリアリズムとは、現代日本の青年をえがくリアリズムであり、この現実世界の性的人間をえがくリアリズムであり、その達成のためにぼくは性的イメージが有効な武器であると考えたのである[10]。

それに加え、先行研究の解釈でも〈性〉に関わる描写と〈政治〉に関わる描写の大江の意図に賛意を示すものがある。一例としては、菅野昭正による同時代評論が挙げられる。

倒錯した性的欲望を通じて、習慣的な性のありかたの欺瞞と不毛を照らしだそうとする作家の意図は、私にもほぼ納得できる[11]。

このような解釈を通して、大江による〈性〉に関わる描写の道具的な使用を明らかにしているが、〈政治〉に関わる描写の使用も同じである。

〈政治的人間〉と〈性的人間〉は、〈政治〉や〈性〉とは直接関わらないとする解釈のもう一つの根拠として、興味深い例を挙げたい。

本論文で取り扱う小説の一つである「セヴンティーン」とその続編「政治少年死す」は、大きな社会的反響を起こし、右翼等の脅迫により出版社が謝罪文を発表せざるを得なくなった。そのため、「政治少年死す」が発表された翌月の同じ雑誌の三月号に、『文学界』編集長小林米紀による「謹告」が掲載された。その中に本論文の主題に関連する以下のような箇所がある。

「セヴンティーン」は〔中略〕現代の十代後半の人間の政治理念の左右の流れを虚構の形をとり創作化し、氏の抱く文学理念を展開したものである[12]。

ここで興味深いのは、編集者が、小説は政治的な思想を表明するものではなく、虚構であると指摘し、小説の政治的性質を否定したことである。

大江は、〈政治〉と〈性〉に満ちた言葉や場面を読者に浴びせかけてショックを与え、それによって背後に控えている問題に注意を向けさせる。その意味では、小説中に〈政治〉と〈性〉の描写は多いものの、それら自体は小説のテーマではない。特に〈性〉描写の多さで大江の中期の小説はしばしば批判されているが、それらは大江の意図を十分読み取っていない。批判の一例として、河上徹太郎による「性的人間」に対する同時代評論がある。

不潔不愉快な小説である。〔中略〕はじめの七人の男女の性格を紹介する不愉快

なつきあいはもうご免だ〔中略〕。このいまわしい犠牲において、作家あるいは作品がえたものは何だろう？性は描けても、それがどうして二十世紀後半の現実なのだろう？。〔中略〕「映倫」ならぬ「文倫」があれば禁止すべき作品である[13]。

大江の〈性〉描写に圧倒された評論家は、小説の意図が分からないと嘆く。本稿の考えでは、小説のみを対象とする大江研究の危うさはこのようなところに現れている。本論文が先に引用したように大江がエッセイで長々と自分の小説の方法を説明していることを、評論家は承知していなかったかも知れない。それゆえに小説の意味の理解不足が生じたとも考えられる。

恐らく、名高い評論家として、最も明確に大江の意図を見抜き、評論で何度もその点を評価しているのは、平野謙であろう。平野の指摘では、大江における〈性〉は「単なる官能的なもの」[14]である。先述したように、大江の小説における〈政治〉と〈性〉の描写はテーマではなく、手段であることを平野も訴えていると考えられる。この解釈は筆者にとっても研究を進める上での拠り所となっている。大江は〈的〉という小さなニュアンスを〈政治〉と〈性〉という二つの用語に付け加えることによって、狭義の〈政治〉＝政界や政治思想、〈性〉＝性欲やポルノグラフィーという概念からこの二つの用語を切り離した。新しく生まれた〈政治的〉なものと〈性的〉なものという概念は、大江の主人公の行動のタイプを指すようになった。先に引用した〈政治的人間〉と〈性的人間〉の大江の説明は、その応用である。本論文はその意図を追究するものであって、小説に描かれている狭義の〈政治〉と〈性〉は問題としない。

本論文の中心的問題は、大江が定めた定義が果たして小説にそのまま現れているかどうか、その定義は小説にそのまま適用されうるかどうか、ということである。定義は一種の理念であろう。小説に現れている〈政治的〉なるものと〈性的〉なるものは必ずしもこの理念と一致するわけではない。それは当然のことである。菅野昭正が小説「性的人間」に関して述べているように、「意図は意図、実現は実現」[15]である。理念を応用し、様々な発展形や異形を生み出す試みが、大江の小説には窺える。ここで明確にしたいのは、この理念的定義と実際の形がどのような関係を持つかということである。

そのためにまず、初期作品を見直し、先行研究に見られる〈政治的〉なものと〈性的〉なものの関係を把握し、考察する。結論から言えば、すでに述べたように、小説上に現れる主人公は評論における定義に当てはまらないものが多く、そのずれは当然のものである。この点については本論文の第五章に詳しく論ずるが、理論の小説における様々な適用の試みが、そのずれの原因であろう。

そこで本論文は、大江が評論で示した定義を乗り越え、小説のなかに見られる〈政治的人間〉と〈性的人間〉の具体的様態を見ていくこととする。

なお、この〈政治的〉なものと〈性的〉なものの関係という問題は、大江独自のテーマというわけではなく、同時代の他の作家にも見られる。本稿が特に注目したいのは三島由紀夫である。先行研究ですでに述べられている通り[16]、このテーマについて大江は、三島から大きな影響を受けている。本論文はその影響について考察し、二人の作品テキストの差異と類似性を明らかにしたい。

第二節、先行研究における大江健三郎の〈政治的〉なものと〈性的〉なものの関係

〈政治的〉なものと〈性的〉なものをテーマとする大江の小説は、スキャンダル性を帯び、文壇に様々な反応を呼び起こした。このテーマを扱う先行研究は、幾つかのタイプに分けることができる。ここでそれぞれのタイプの特徴とその代表的な論文を見ておく。

なお、大江健三郎は現代作家であり、本論文執筆時にも活発に書き続けている作家である、そのため、大江を論じる同時代評論と研究論文は厳密に区別することが困難である。故にここでは評論も研究も同じように扱いつつ分析する。

第一のタイプの研究は、おおよそ先述の大江の定義を受け、それをもとにして、〈政治的人間〉と〈性的人間〉のあり方を論ずる。両者を対立するものと捉え、その各々の特徴を大江の小説から引き出し、同時代の他の作家の小説のものと比べている。例えば、イワモト（一九八七）[17]は「セヴンティーン」の主人公について次のように論じている。

> 主人公は性的人間であり、一所懸命政治的に変わる努力をするが、その挙げ句に徐々に自分の性的側面を深めるのである[18]。

両者は全く別々の存在であり、交わることはない。これは大江の定義通りの解釈であり、大江の立場を敷衍して更に詳しく小説を見ていきながらこのテーマを論じている。他には一条（一九七七）[19]や渡辺（一九九四）[20]も同じような方法を取る。この扱い方は、しかし、大江の定義をありのままに受けとっているために限界性ぶつかっている。この限界性に関しては本論文の第七章で論ずる。また、既述のイワモト（一九八七）においてのメインテーマは、〈アイデンティティー探求〉であるため、ここで問題にしている論点については深く論じていない。

第二のタイプの研究は、大江健三郎における〈政治〉と〈性〉を狭義に理解するもので、その一例は安藤（二〇〇六）[21]である。安藤は特に〈性〉に関して論じ、「大江健三郎は性的なものを人間の本質として見ようとした」とする。逆に、大江の政治的な思想からその小説を論じるものとしては、Napier（一九八九）[22]と蘇（二〇〇六）[23]などがある。川口（一九九七）[24]は「セヴンティーン」二部作における大江の政治思想と〈純粋天皇〉のあり方を論じる。饗庭（一九七一）[25]は本題を〈政治〉としながら〈性〉をも論じている。黒古（一九八九）[26]は大江の政治思想における天皇制について論じている。この狭義の扱い方の研究や評論には、〈性〉か〈政治〉のいずれか一つのテーマを選び、それについてのみ論じる傾向が見られる。〈性〉に関して評論するものには、「単調さ以外のなにものも感じることはできなかった」という佐々木（一九六三）[27]、「禁止すべき」と不愉快を感じた河上（一九六三）[28]、「私の手にはおえない」と感じた森（一九六三）[29]などがある。

このタイプのより詳細な研究としては次のものが挙げられる。森川（一九七一）[30]は日本文学の〈性〉ディスクールの中における大江の〈性〉について論じる。山田（一九七〇）[31]は大江の文学における〈性〉は、「性的情緒を抹殺する」と論じる。秋山（二〇〇五）[32]は「性的人間」における〈性〉を論じ、それは〈反社会〉的であり〈反逆〉的であるとする。これらの研究では大江の小説における一つの要素のみを対象としているため、〈政治〉と〈性〉の関係性について論じていない。また、松原（一九七一）[33]は、大江における〈政治〉と〈性〉を一つの論考の中で扱ってはいるが、両者を別々のものとして論じている。本稿の考えでは、このようなアプローチは、大江における〈政治〉と〈性〉を表面的に解釈するにとどまり、大江が〈政治的〉なものと〈性的〉なものによって含意したことを十

全に捉えることができないように思われる。

第三のタイプの研究は、大江の定義を取り入れずに、大江が〈政治的〉なものと〈性的〉なものを通して意味することを独自に探る研究や評論である。高橋（一九六四）[34]は大江における〈性〉を同時代の〈性素材主義〉というディスクールの中で扱う。「性的人間」と「セヴンティーン」は「現代社会の病根を映すことの批判作業としてまず証明しうる」と定義付けた高橋は、大江に関する具体的な言及はこれ以外には少ないものの、当時の文学全体における〈性〉のモチーフのあり方に関しては深く論じている。そこで論じられていることは、改めて大江の小説に当てはめることができるだろう。岩田（一九九七）[35]は冒頭で〈政治的〉なものと〈性的〉なものに言及するが、その本論では主に〈性〉とそれに対する〈罪意識〉に関して論じている。大江のソ連における翻訳の大半の責任者であった V. グリブニンは大江の初期小説における〈政治的〉と〈性的〉テーマを批判している。大江の初期に関して論じるグリブニンは「この時期は有益な時期とは言えない。なぜなら、大江は自分を裏切って人間の精神的な本質を性的な本質で代用したからである。」（Этот этап нельзя назвать плодотворным, потому что Оэ изменил сам себе, подменив духовную сущность человека сущностью сексуальной）[36]。この論はソ連時代に書かれたものであり、国の要求に応じたものである。そのため、これは果たしてグリブニンの本意であったかどうかは不明である。ソ連時代の大江研究の特徴に関しては詳しく第五章で論じる。

また、〈政治〉と〈性〉というテーマの歴史的な背景、大江の歴史認識に関して論じる研究者もいる。王（二〇〇七）[37]は小説に見られる大江の歴史に対する認識の展開過程に注目し、一九五七年から一九六七年までの大江の進化について考察する。

また、第四のタイプの研究としては、〈政治〉と〈性〉の対立を〈外側〉と〈内側〉の対立に喩える研究がある。例えば蓮實（一九九二）[38]は、「性的人間」の主人公〈J〉を個人が他者と対立する一例として挙げ、大江が小説内に繰り返し並べる数字「一千万人と一人」に注目し、大江の小説における数字の「コード」について論ずる。

多くの研究者や評論家が、大江の〈政治的〉なものと〈性的〉なものというテーマを大江自身の意図とは異なったふうに解釈して論じている現象は興味深い。

その理由としては次の要因が考えられる。まずは、大江の小説のみを研究の対象にしていることである。このような研究は大江の小説と評論を異次元と捉えるように見える。大江の評論を視野に入れない点は問題であり、本論文では小説とエッセイを統一資料として扱うことにしている。大江の小説と評論は密接な関係性を持ち、互いを補うものであるからである。第二に、大江の〈政治的〉なもの・〈性的〉なものの図案化の複雑さもその理由になっていると考えられる。確かに大江の小説世界はしばしば分かりがたいと言われる。また、一条（一九七七）では、〈性的たるもの〉の誤解に関する指摘がある。

〔前略〕この時期の大江作品に対する評価は低い。不評の理由はその方法の問題と、当時の時代背景である。〔中略〕過度に露骨な性用語を濫発して読者の反撥を買い、評論家からは〈性的たるもの〉の意図が奈辺にあるかよみとれないと批判されている〔後略〕[39]。

この指摘は〈政治的〉なものにも当てはまるように思われる。例えば「セヴンティーン」で取り上げられたような当時の鋭い政治的な問題はその鋭さだけで社会的な反発を招き、大江の意図したメッセージは読みづらくなっている。

本論文と主張の近い先行研究は大江の定義を重んじるものである。従来の解釈は大江の定義の通りに、〈政治的〉と〈性的〉とを〈正反対の対立〉として受け止めている。しかし、〈正反対の対立〉ではなく〈止揚〉として解釈する可能性は十分にある。大江自身が提示する定義を乗り越えて、小説のテキストを読み直すことによって、新たな解釈の道が開けてくる。

第三節、論文の構成

本章に続き、本論文は下記の章から成る。

第二章では、大江健三郎の初期作品に見られる〈政治的〉なものと〈性的〉なものというテーマの萌芽について論ずる。この章では、大江の初期作品の歴史的な背景と小説におけるその影響に関して考察する。

第三章では〈政治的人間〉・〈性的人間〉というテーマの展開過程について考察する。そこではまず第一節で〈政治的人間〉の先駆であるアメリカ人像について

論ずる。多くの初期作品において戦後日本におけるアメリカ人の存在を描き出した大江は、当時の日本を圧迫したものとしてその像を扱っている。このアメリカ人像が発展して、〈政治的人間〉という概念が生まれたことを明らかにする。具体的には、初期小説のうちアメリカ人が現れる六篇の小説「飼育」、「不意の唖」、「人間の羊」、「暗い川、思い櫂」、「戦いの今日」と「後退青年研究所」を考察の対象に選ぶ。それぞれの作品ごと項を立てて論述する。また、アメリカ人像を論ずることによってその対立者として設定されている日本人像も明らかにする。第二節では上記の六つの小説に見られるアメリカ人と日本人の関係について論ずる。アメリカ人には白人、黒人、軍人、一般人といったいくつかのタイプがあるが、それぞれの特徴と互いの関係についてここで論ずる。また、それぞれのタイプのアメリカ人が如何に日本人と関わり合うかにも注目する。

第四章では、〈政治的人間〉・〈性的人間〉のモチーフの、初期小説における現れを再検討し、「飼育」のロシア語訳を中心に取り扱う。ここではロシア語訳と原文の差異によって新たに明らかになる〈政治的人間〉と〈性的人間〉の相互依存的関係について論じる。

第五章では大江の作品についてのソ連時代の評論を例にとり、ソ連の公式文化のなかで大江の文学が如何に変形させられたかを明らかにする。また、翻訳によって生まれ変わった小説の形を解釈する評論が現れ、その内容が原作からどれほど遠ざかり、大江の作品に対する理解を如何に変えたかについて論ずる。

第六章では、大江の中期と同時代に〈政治〉と〈性〉というテーマを扱った他の作家として、三島由紀夫を中心的にとりあげる。ここでは、大江の「セヴンティーン」における〈政治的人間〉・〈性的人間〉の捉え方と三島の「憂国」における同様の設定を比較考察する。また、「憂国」のロシア語訳も考察し、翻訳テキストと原文の差異から新たに見えてくる「憂国」における〈政治的人間〉と〈性的人間〉の特徴に関して論ずる。

第七章では本論文の主題である大江の〈政治的人間〉と〈性的人間〉の止揚について論ずる。大江の〈政治的人間〉・〈性的人間〉と小説におけるその応用の関係を考察し、理論と応用のずれを明らかにする。その上で、このずれの原因について考察し、大江の定義を展開する必要性について論ずる。同章の終わりには筆者による〈政治的人間〉と〈性的人間〉の展開型定義を示す。

結論では、本論文の全体をまとめた上で、筆者の今後の研究課題を提示する。

第二章　〈政治的人間〉の成り立ち

大江の中期作品のテーマを理解するため、まず初期の作品を振りかえってみることにしよう。

ここでは、特に大江の初期作品におけるアメリカ人像に注目してみたい。

初期短編小説におけるアメリカ人像とは、言い換えれば、大江のアメリカ人の描き方であると言ってもよいであろう。その描き方には、戦後日本における大江のアメリカに対する思考やアメリカ人の捉え方が窺える。

大江の初期作品では、〈監禁されている状態〉という戦後日本の状況を表すメタファーが主なモチーフになっている。そして作品の登場人物や時空間的な設定は、大江の初期の創作意図および戦後認識の一断面を明確に示している。〈監禁されている状態〉という作家が自ら定義した「一貫した主題」は、戦後日本と日本人の置かれた状況の象徴として、全体的に〈壁〉の中の日本人という発想に焦点が当てられ、弱者である日本人を描き出す構図となっている。大江は『死者の奢り』の後記で、次のような解説を付けている。

> 僕はこれらの作品を一九五七年のほぼ後半に書きました。監禁されている状態、閉ざされた壁の中に生きる状態を考えることが、一貫した僕の主題でした[40]。

これは、大江の目で見た戦後日本の社会現象の一つの反映である。当時の日本の若者は戦後処理や米軍の占領などによって圧迫されて自由ではない、という状態を大江は初期の小説群において〈監禁〉に喩えた。

一方、大江の小説で描かれる壁に囲まれた世界には、日本人のみが登場することもあるが、日本人と外国人（初期作品では特にアメリカ人）が共に登場することが多い。例えば、初期の代表的な小説とも言われている「飼育」と「人間の羊」においては、アメリカ人の存在が大きい。監禁されている日本人とそれに対するアメリカ人の位置と役割は、小説により様々なケースをとって描き出される。

そこで、本章と次の第三章では、初期短編小説におけるアメリカ人の設定に注目し、作品の主なモチーフになっている〈監禁状態〉と、そこにアメリカ人が関わることの意義について検討する。その上で、大江の戦後日本におけるアメリカ

人の像がいかなるものであったのかを、日本人による戦後認識の一つの断面として分析する。

大江の初期小説では主人公の〈内〉と〈外〉が問題とたっている。〈外〉とは主人公の周りの世界であり、主人公はそれと衝突する。〈内〉とは主人公の内面の世界であり、その〈内〉と〈外〉の不調整は主人公を悩ませる。〈外〉である周りの世界と社会は主人公を圧迫し、主人公は〈監禁状態〉に置かれるようになる。その周りの世界の一断面はアメリカ人であり、そのような〈外〉による圧迫に対し、主人公は自分の〈内〉に閉じ込めるようになる。

初期小説ではアメリカ人の他に、〈外〉の世界の断面は様々な形で描かれている。例えば、暴力者や政治活動家は多く登場するが、主人公が青年である場合はさらに大人も〈外〉の存在となる。言い換えれば様々な権力者が弱者である主人公と対面する。

主人公は自分の〈内〉に閉じ込めるようになり、〈外〉の世界から逃げ出す道を探る。その道の一つとしては大江は〈性〉を登場させ、徐々にこの〈性〉が小説の主なテーマになっていく。この逃げ道を選ぶ大江の主人公は〈性的人間〉となる。逆に周りの権力者は〈政治的人間〉となる。

ただし、大江が〈政治的〉なものと〈性的〉なものを意識的に書くことになったのは、より後の中期作品ではあるが、中期作品の概念から遡及して初期作品を振り返ってみると、そこにもすでに〈政治的〉なものと〈性的〉なものの関係が見て取れる。ただ、初期小説においては、それは〈監禁されている弱者〉と〈外の強者〉という関係で現れている。このような形で、初期小説では〈政治的〉なものと〈性的〉なものの対立に関するテーマが芽生えていることに気づく。中期に入って、これが主要なテーマとなり、発展するわけである。

第一節、歴史的背景

アメリカ人を扱う大江の初期小説を理解するには、歴史的な背景を知ることが重要である。小説の背景となる時代において、アメリカ人は避けて済ませることのできない存在であった。当然、この時代を描く初期小説においてもアメリカ人は不可欠な要素になっている。如何なる歴史的経緯からそのような状態が形成されたか、について理解することが、小説を読み解く上で必要であると思われる。

従ってこの節では、簡単に歴史的な背景を見ることにする。

序論で言及したように、大江は基本的に同時代の日本を描く。従って、「飼育」や「人間の羊」の舞台は、大江がその小説を書いた時点より前のことに属する。小説内の時間は本章で後で詳しく見るが、この二篇の小説では大江は同時代性に反しているように見えるかもしれない。しかし、大まかに見ると大江が描くのは「戦後」という広い時代であり、少し前に遡るにしても、それは「現在」の社会をより明確に理解させるためであると見ることができる。戦後の日本社会のあり方は第二次世界大戦のすぐ後の時期に形成されており、そのつながりを切り離すことはできないからである。

この間の主な出来事は、太平洋戦争の勃発、そして終戦と占領であり、さらに朝鮮戦争もこれに続く。

第二次世界大戦は、一九四五年九月二日まで続くが、大江は戦争末期の状態を「飼育」(『文学界』一九五八年一月号)で取り上げている。

「飼育」は戦中の谷間の村を描く。ある日、飛行機が撃墜され、パイロットの黒人は村人に捕らえられ、県の指令がくるまで村のある家の地下倉で〈飼育〉されることになる。囚人に食事を運ぶ仕事を与えられた主人公の〈僕〉は黒人に次第に親しみを覚えるようになる。〈僕〉の手伝いで黒人は足にかかった罠を外して修理し、やがて〈書記〉の義肢を修理したことをきっかけに、黒人兵は村を自由に散歩することが許される。村の子供になつかれるようになった黒人は子供と遊んだり歌を歌ったりする。〈僕〉にとってそれは真夏の至福の絶頂である。しかし結局、黒人兵を県に引き渡さねばならないことになる。恐怖を覚えた黒人兵は暴れて〈僕〉を人質にして地下倉に閉じこもる。盾にされた〈僕〉は黒人が村人に殺された時に手を砕かれる。傷を与えた〈大人〉を信頼しなくなる〈僕〉は「僕はもう子供ではない」という考えを抱きながら友達ではなくなった村の子供のそり遊びを眺める。

この小説の時代設定は日本の研究ではあまり問題にされていないが、ソ連の V. グリブニンの言及は興味深い。その解説によると、「飼育」の小説中の時間は「敗戦後の最初の日々」（В первые дни после поражения[41]）としている。しかし、それは以下のような点から誤りであると思われる。「飼育」の作中時間は夏であるが、それが一九四五年の夏に当たるとすると、そこには次のような背景があるは

ずだ。四月一日に米軍が沖縄に上陸し、六月二十三日まで沖縄戦になる。それは、一般の日本人にとって戦争が、本国に移り、本土合戦が目の前の出来事になったことを意味する。小説の冒頭部分には、この歴史的な背景が暗示されている箇所がある。

最近になって村の上空を通過し始めた《敵》の飛行機も僕らには珍らしい鳥の一種にすぎないのだった。

この箇所の「鳥」という言葉は、当時の一般的な日本人には戦争がまだ実際のものになっていなかったことを意味するように思われる。、戦場から離れた山の谷間の村の人には、戦場の怖さを告げるべき飛行機がその恐ろしさを伝えず、可愛い鳥にすぎないように見えている。

当時、四国には米軍は上陸しなかったが、空爆は行なわれた。小説には四国の空爆への言及もある。歴史的事実に照らし合わせると、ちょうど一九四五年の七月末に当たる。より厳密に時期を特定するために歴史資料を参照した。〈県庁のある市〉とは、大江の生まれた愛媛県の県庁所在地である松山市を指すであろう。『愛媛県史』によると、松山の最初の空襲は一九四五年三月にあった。

3-18 米機 33 機、始めて松山を空襲する[42]。

小説での登場人物は空爆のニュースを初めて聞くような態度を見せるため、恐らくこの三月の空襲のことではない。まず、夏という設定に合わない。第二に、「空襲」とは必ずしも空爆を意味しない。『愛媛県史』では上記の「空襲」の項目に詳細な記述はなく、他の項目に「投弾」や「銃撃」、死者の人数などが記録されている。また、当時の『読売報知』と『朝日新聞』には三月十八日の空襲のニュースは見当たらない。恐らく、これは空爆ではなかったであろう。

夏という設定に該当する項目としては、次のものがある。

7-26 松山市が空襲を受け、旧市内の大部分が焼失する[43]。

更に『読売報知』[44]と『朝日新聞』[45]には七月二十八日付けの第一面で二十六日の松山・徳山攻撃のニュースがあり、明確な空爆の記録がある。これはちょうど小説の以下の文章に合うものである。

> 県庁のある市が空襲で焼けたという噂があったがそれは僕らの村にどんな影響もあたえはしない。

、この小説における時代設定は一九四五年の七月末か八月の初めであることがここで明確になる。

上記の引用の〈村〉と〈県庁のある市〉の無関係性は、〈村〉の空想的な位置を暗示していると考えられる。〈村〉は一応現実世界に置かれているが、それと同時に周りの世界から切り離されたユートピア的な場所にある。空爆の指摘は周りの世界の時間を指しているが、〈村〉の中の時間は小説中に具体化されていない。それにも関わらず、この空爆への言及は時間的な設定を見いだすヒントになる。空爆があったということは特にグリブニンの解説と相反していると考えられる。

連合国軍本部が設置されたのは横浜に米兵が上陸した一九四五年八月二十八日のことであるが、実際の占領が始まったのは九月八日の東京占領からであろう。占領下の時代を描く小説は、「不意の唖」(『新潮』一九五八年九月号）と「人間の羊」(『新潮』一九五八年二月号）の二篇である。「不意の唖」の作中時間は終戦後から多少時間が経った時点であろうが、「人間の羊」における時間は占領時代後半であろう。

「不意の唖」は谷間の村にアメリカ兵と一人の日本人通訳が訪れた時の出来事を描く小説である。村の子供は好奇心に満ちた目で川に水浴する米兵を眺めているが、やがて高慢な態度を取った通訳も川に入る。陸に上がった通訳は自分の靴を見つけられず、主人公の〈僕〉の父である部落長を通じて執拗に追及する。部落長は捜査に協力姿勢を示すが、刃物で切られた靴紐しか見つからなかった。通訳がこれは侮辱だと訴えて怒ると、部落長は関知しないと告げて去る。米兵に「何か」を叫んだ通訳は部落長を殺させる。夕方になると〈僕〉は通訳を川に誘い出し、川の側に待ち伏せしていた村人が通訳の口を押さえて川に沈め溺れさせる。朝になって通訳の遺体を川に見つけた米兵は、それを引き上げるために村人の協

力を身振りで求めるが、村人はまるで〈唖〉になったように米兵を無視する。村から去る兵隊のジープから一人の兵士が道端に遊ぶ女の子にキャンディーを投げるが、それも無視される。

この小説が大江自身の経験にある程度基づいていることが、エッセイから窺える。下記のような、大江の子供の頃の思い出はこの小説の設定と非常に似ている。

> ある時にはジープにのってきた白人の兵隊たちが、村はずれの小川で泳ぐのを見たこともある。かれらは桃色の皮膚と金色の体毛とを水や日の光に、きらめかせていた。あれはまさしく《外国人》そのものであり、《外国》そのものだった。そして黄色い肌のぼくらは、子供の日本人だったわけである。そして自分の内にある《日本》がおびやかされてでもいるような、つきつめた気持ちで、はるか上流の浅瀬に小さな裸の肩をよせあい、ぼくらはかれらをみつめていたのであった[46]。

このエッセイにおける外国人に対する印象は、小説に描かれている描写に似ている。

「不意の唖」の時期の設定が、終戦から多少時間が経ったころであろうという推定は、次の点に基づく。小説の舞台である村に米兵のジープが初めてやってくるというのがその一つ目である。

> かれらは、初めてやって来た外国の兵士たちを見てすっかり動揺していた。

占領下の日本では米兵の姿は市町村のどこでも普通に見られるようになっていくが、ここの「初めて」の設定は占領から間もなくの時間を指していると考えられる。

米兵が村に初めてやって来るにしても、村民はその場合に何をすればいいかはすでに分かっている。

> 半鐘をならして、谷間のすべての人々を、谷を見おろす中腹にある父親の家の前へ招集する。

若い女たちは山の尾根の炭焼小屋へ待避する、男たちは武器と見あやまられるおそれのあるものを畑の小屋へ運んでおく。
そして決してかれらと争うな。
これらの訓辞は、いくたびもくりかえして予行練習されたものだった。

上記のような準備がされていることは、県庁などからそのような指令が来ていることを意味するであろう。、終戦後、軍事占領が実際に全土に広がり、米兵駐屯地ではない市町村に米兵が来る場合に、市町村民はどうすればいいかというマニュアルを作る時間的余裕が必要だっただろう。従って、終戦後多少時間が経ってからであるとの推定ができる。同じような訓練のことが大江のエッセイにも書かれている。

ある朝のこと、ぼくらは校庭に集合させられた。たいせつな訓示があるということで、ぼくら小学生は不安と期待に胸をおののかせていた。教頭が檀にあがっていった。
みなさん、進駐軍が村へ入ってきたら、大きい声で《ハロー》といって迎えましょう。進駐軍をこわがる必要はない。みなさん、大きい声で《ハロー》といって手をふりながら迎えましょう[47]。

このエッセイの描写は小説の場面上の設定と同様ではあるが、村人が取る態度は違う。小説の場合はその態度は用心深く、村人と米兵の間にわざと距離を置く。エッセイで描写されている態度は恐らく時期的に小説の時間より後の時間のものであって、表面的に好奇心をわざと示す態度である。

「不意の唖」は、歴史的な時間に関して「飼育」の次に来る小説であることは明らかである。

「人間の羊」の場面は町に設定され、夜のバスに乗った学生の〈僕〉が米兵と一人のパンパンの出会いを描く小説である。パンパンは米兵をからかうつもりで〈僕〉に寄りかかったりするが、〈僕〉が当惑と恥ずかしさの余り女の手を払いのけると女は倒れる。起こった米兵はナイフで〈僕〉を脅しズボンを引き下ろし、四つんばいにさせる。黙ってそれを見た他の日本人乗客の一部も同じ屈辱を受け

る。〈羊たち〉となった犠牲者は米兵に抵抗もせず涙を流しながら黙ったままで尻を叩かれる。やがて米兵はバスを降りるが、バスの中の乗客は被害者と傍観者の二つに分かれる。傍観者は事件を警察に届けるべきだと訴え、特に〈教員〉はそのなかで一番積極的である。〈僕〉がバスを逃げ降りると〈教員〉は後を追って〈僕〉を交番に無理矢理引きずる。〈教員〉から事情を聞いた警官は米兵の事件に絡みたくないといった態度を示し、〈僕〉はまた逃げ出す。しかし、〈教員〉はどこまでも追いかけてくる。

「人間の羊」が占領時代後半のものであろうという推測は、次の点に基づく。小説の前半の舞台であるバスの中では、「不意の唖」の描写と反対に米兵に驚く人は一人もいない。車掌は平気で米兵が座っている「バスの後部座席の隅の空席を指した」となっているから、皆が米兵を見るのにすでに慣れている印象がある。主人公も、一目で米兵の姿をとらえている。

> あいまいに頭をさげて、僕は郊外のキャンプへ帰る酔った外国兵たちの占めている後部座席の狭いすきまへ腰をおろしに行った。

引用から窺えるように、〈僕〉は「不意の唖」の主人公と違って米兵を見るのは初めてではない。従って占領時代の途中であると推測できる。七年間続いた占領時代は歴史的に見るとさほど長くなかったと言えるから、上記の引用の日本人の馴れた態度は恐らく占領の後半期を示すと推定される。

一九五〇年六月二十五日に朝鮮戦争が勃発するが、日本はまだ占領下である。朝鮮戦争について言及する占領下時代を描く大江の小説は「暗い川、おもい櫂」（『新潮』一九五八年七月号）と「戦いの今日」（『中央公論』一九五八年九月号）である。

「暗い川、おもい櫂」は主人公の〈かれ〉と隣に住んでいる黒人兵とその情婦の出会いを描く小説である。ある日留守番をしていた〈かれ〉は黒人兵と女に頼まれて二人の写真を撮り、一緒に夕食をとる約束を交わす。自分の部屋に帰った〈かれ〉は壁越しに二人の喧嘩を聞いて、窓から立ち去る黒人兵を見送る。女は〈かれ〉をまた隣室に誘い、食事を食べさせ酒を飲ませ、黒人兵の悪口を聞かせる。〈かれ〉と女は一緒に踊ってベッドに入って肉体関係を結ぶ。親子ほど年の違

う女と結婚して一緒に暮らすことを思い描きながら、眠り込んだ女をそのままに残して〈かれ〉は自分の部屋に戻る。新婚旅行の支度をしながら眠り込んだ〈かれ〉は、翌朝二日酔いの頭痛と吐き気で目覚め、隣室の黒人兵の帰る音を聞く。父親の猟銃を取って黒人兵を殺すつもりで隣室のドアを叩く〈かれ〉は真剣である。ドアを開けて結婚の話を聞いた女は彼の目の前で荒々しくドアを閉める。隣室のセックスの音を聞きながら「死ぬほど女をあいしている」〈かれ〉は自分に絶望を覚える。

この小説では、朝鮮戦争からすでに戻った米兵が登場する。戦争がまだ続いているか、すでに終わっているかは明確ではない。その様子は次の箇所から窺える。

「あれで人を殺したこともあるんだから」と女は笑いなごりに喉をひくひくさせながらいった。「朝鮮で五人もやっつけたのよ」

戦争の怖さと黒人兵の怖さはこの文章から伝わってくるが、ここから小説中の時間をより細かく特定することは難しい。

次の小説「戦いの今日」の時代設定は明らかに朝鮮戦争の途中である。

「戦いの今日」は二人の日本人の兄弟と脱走兵の米兵の関係を描く小説である。戦争に出発する米兵に心理的動揺を与える目的でパンフレットを配る主人公の〈かれ〉と〈弟〉は、逃亡希望者の若い金髪の白人兵の世話をある娼婦から頼まれる。〈かれ〉は慌ててパンフレットを作った組織のリーダーに世話を頼むが、パンフレットの配布目的は逃亡を促すものではなかったとして協力を断られる。仕方なく米兵を自分の下宿に迎えいれると決めた兄弟は、興奮しすぎて泣く〈アシュレイ〉と会う。依頼人の娼婦〈菊栄〉も加えて四人の生活が始まるが、〈弟〉は〈アシュレイ〉に好意を持つようになり、〈かれ〉はいらいらしている。暫く時間が経って、キャンプ所属の兵士は皆入れ替わったと聞いた〈アシュレイ〉は、初めて外へ出かけて酒を飲み兄弟を侮辱する。家に帰って〈かれ〉は〈アシュレイ〉を殴りつけるが、〈アシュレイ〉は脱走する。〈かれ〉は自分で何も出来ないと絶望感に陥る。〈アシュレイ〉は憲兵隊に射殺されるが、〈菊栄〉は〈かれ〉を「人殺しジャップ」と罵る。そして〈かれ〉は「開放感に満ちた深い虚脱感」に落ち込む。

この小説中の時間を特定できる箇所は下記の通りである。

パンフレットは朝鮮戦争に出かけて行く若い知識人の兵隊によびかける言葉でうずめられていた。

、朝鮮戦争が続いた一九五〇年六月二十五日から一九五三年七月二十七日までがこの小説の時間に当たると判断される。

一九五二年四月二十八日に日本と連合諸国との平和条約が結ばれ、日本の主権が回復された。これにより連合国最高司令官総司令部（GHQ）の占領が正式に終わる。「後退青年研究所」（『群像』一九六〇年三月号）は一九五三年七月二七日の朝鮮戦争休戦以降だが、占領下の影響がまだ続いていた時代を舞台とする。

「後退青年研究所」は学生運動を止めた学生の調査を行うアメリカの在日組織でアルバイトをしている〈ぼく〉とその組織の活動を描く小説である。ある時、組織がアメリカへ送る情報が減ったのに対して三倍の資料を求められる。そこで〈ぼく〉は〈偽物後退者〉を招く計画を立て、友人に頼んで多数の報告を集めることにする。中の一人は特に研究所のボス〈ゴルソン〉の関心を引くが、研究所の通訳兼タイピストのアルバイトの女子学生は「あんな恥知らず」の人を見たくないという理由でアルバイトを辞める。作り話の中身を喜ぶ〈ゴルソン〉はそれを有名新聞に載せ、それが好評を博したため、ヨーロッパの研究所へ転勤となる。〈偽物後退者〉は新聞に遊びであったと説明して記事の取り消しを頼むが断られる。そして〈ぼく〉は「暗黒の深淵への漏斗状の傾斜」を自分の周りに感じる。

この小説中の時間は「戦いの今日」と同様に文中に下記のように指摘されている。

それは朝鮮動乱が終わったあとのかなり反動的な安定期であった〔後略〕。

ここでは、朝鮮戦争が終わってもまだその記憶が鮮明であったために時期が特定されているが、戦争から経った時間は僅かであると判断できる。また、小説で描かれている研究所の存在自体は占領時代の面影、もしくは占領時代のアレゴリーとして解釈される。

以上の歴史的背景に加えて、それぞれの小説にある説明や場面設定をもとにすると、作品相互の時間順を判断することができる。それぞれの小説は歴史的な時代設定が明確であり、これによって大江の戦争認識のあり方を推し測ることができる。大江は同時代の人物を描くに当たって、その背景となる時代にも大きな役割を与えていたと考えられる。

それぞれの時代設定に従って各小説を時系列順に並べると、登場人物同士の関係がそれとともに変わっていくことが分かる。これについては、本論文の第三章の第二節で論じる。

第二節　外国人問題

この節で論じる外国人問題とは、戦後日本における外国人、とりわけアメリカ人に関わる諸問題である。大江の文学が取り上げているのは、まず日本人とアメリカ人のコミュニケーションの困難とそれにより生ずる事件である。

大江自身のアメリカ人に対する態度は小説にも現れているが、エッセイではそれよりもさらに明確に立場が示されている。「出発点」というエッセイ集で、大江は自分の子供の頃の思い出を描き、アメリカ人、とりわけ黒人兵を怖い目で見たと告白する。

> ぼくは子供のころ、勝った軍隊の兵士として黒人を、初めて見たときの恐怖と嫌悪、それに一種の畏敬の念を忘れることができない[48]。

このような作家の個人的な経験は「飼育」や「暗い川、おもい櫂」にも現れていると思われる。しかし大江は、アメリカ人に対する直接的な反応よりもさらに広い問題を掲げる。アメリカ人とは日本人にとってどのような存在であるかという疑問が、小さい時から大江にはあったようなのである。

小説でアメリカ人をどのように扱うかは、アメリカ人と日本人の間にあった出来事の理解と関係している。、戦争をどう捉えるか、また戦争は終わったのか、負けたのか、という悩みが大江にはあった。「敗戦」と「終戦」という二つの言葉、二つの理解の間に彷徨う作家の思いは、エッセイにも見られるし、小説にも見られる。「戦後時代のイメージ」というエッセイの中には、「敗けと終り」という独

立した項目さえある。その冒頭文はまさに作家のこの悩みを伝えている。

> 戦争に敗けたということと、戦争が終ったということのニュアンスのちがいは、今となってはほとんど深い意味をもたないだろう。少なくとも、そのことにこだわって長いあいだ議論しあう熱情を今や、たれが持つだろうか。
> しかし、あの当時、それはそうではなかった。山村の一人の少年は、敗戦と終戦という二つの言葉を、いくたびもいくたびもノートにならべて書いてみたものだった[49]。

ここでの「少年」は大江自身を指しているが、この問題が大江を悩ませたのは少年の頃だけではなかったであろう。それは、繰り返し繰り返しエッセイや小説で問われるほどのものであった。

このうち、「敗戦」という理解は侮辱を意味し、その侮辱の気持ちは「人間の羊」に現れている。この小説の出来事は先述したように、抵抗できない日本人に対する屈辱を与える米兵を描く。これはアメリカ人を明らかに勝利者として描き、日本人を敗戦者として描くものだ。その反対に、「終戦」という理解は、日本人とアメリカ人の間に平和的な関係が可能であることを意味する。その試みとしては「飼育」のストーリーがある。日本人とアメリカ人が平和的に共生できるのではないか、という牧歌的的なストーリーが途中まで続く。また、「戦いの今日」でも、日本人がアメリカ人と馴染もうとする経験を描く。しかしこの二つの小説において、平和な関係は長く続かず、〈外〉の状況の影響によって崩される。

こうして「敗戦」と「終戦」とのあいだで揺れる大江は、しかし結局「終戦」という言葉を選び取る。先に引用したエッセイの続きには、次の文章がある。

> そして、かれは、終戦という言葉を選んだ。それは、たいていの大人がそうしたことだった[50]。

ここでは大江は「敗戦」と「終戦」の何れか一つの意識を選んだというよりは、その問題の複雑さに気がついたというべきであろう。それは小説の構成から窺え

る。「飼育」における平和的な共生は暫くかのであったにしても、結局それは破壊されてしまった。「戦いの今日」も同じようなパターンである。もし単純で平和的な「終戦」だけしか念頭になかったならば、小説内の平和も永遠に続いていたかも知れない。しかし、主人公同士の関係が〈外〉の影響、社会的な状況によって圧迫され破壊されるという設定は、日本人とアメリカ人の関係の複雑化を意味していると考えられる。

大江は、「終戦」という認識は、日本人にとって歴史的なプライドや自尊心の問題を解消するためにはより便利である、という結論に至っている。そうだとすれば、日本人とアメリカ人の間に生じる問題は、「敗戦」と「終戦」の意識とは別に考えるべきであるとの解釈が大江の小説から導き出せる。なぜなら、「終戦」との認識に立ったとしても、日本人のアメリカ人に対する認識にも関わらない、それだけで解消不能な問題が残り得るからである。小説で見られるようなより日常的な問題、すなわち、「敗戦」か「終戦」かという大きな問いに関わらないような問題は、小説の登場人物にとってはより重要である。日本人がアメリカ人を権力者や圧迫者であると思わなくとも、言葉の壁はとにかく残り、文化の違いも残るため、問題は依然として消えない。それは、大江が気づいた日本における外国人の問題の複雑さであると思われる。大江の小説における登場人物同士の関係も徐々に複雑化し、中期小説に入るとアメリカ人と日本人の関係から日本人同士の関係へと作家の視点が移る。

第二章の結論

本章では、大江の中期作品のテーマである〈政治的人間〉と〈性的人間〉を理解するために、まず初期の作品を振り返ってその時代背景を明らかにした。特に本章では〈政治的人間〉の背景にある大江の初期小説に見える歴史的認識と外国人問題について論じた。初期の作品には日本の戦後の歴史的・社会的状況や日本におけるアメリカ人の存在が現れる。大江の初期短編の世界におけるその描き方には、戦後日本における大江のアメリカに対する思考やアメリカ人の捉え方が窺える。また、大江の戦後状況に対する現実認識と歴史認識の一断面が象徴的に現れている。大江の小説の歴史的な背景とその意義に関しては第一節で論じ、それぞれの小説の時代設定を示した。歴史資料と小説原文を照らし合わせて確認したように、「飼育」は終戦直前の一九四五年の七月末か八月の始りである。この小説は本章で扱った小説の中で時間上、最初に来るものである。他の小説も含めて、日本の占領時代と朝鮮戦争といった歴史的できごとを目印にして、時系列順に並べると、「不意の唖」―「人間の羊」―「暗い川、おもい櫂」―「戦いの今日」―「後退青年研究所」のようになる。次の第三章では、この時代順を重視し、各小説の分析を行う。

第二節で見たように、大江は「日本人」―「白人」―「黒人兵」の関係を優越な存在と劣等な存在に区分る。日本人の中のアメリカ人に対する態度の変更の投影を探る作家は侮辱的な状況におかれた日本人はアメリカ人を嫌っても、日本の生活の一部として彼らを扱う以外に道はなく、一緒に生活をしなければならない、というメッセージが読み取れる。そして、そのことが初期の大江の一連の作品を貫いている。

本章で見てきた歴史的背景は、大江におけるアメリカ人対日本人の意識を形作る要因になっているが、この対立は後になって、〈政治的人間〉と〈性的人間〉の対立に発展する。大江の小説における〈政治的人間〉の先駆者であるアメリカ人登場人物の歴史的な成り立ちとその展開型は歴史的な事実の反映でもあると本章で論じてきた。

また、歴史認識と、外国人、とりわけアメリカ人に対する認識といった二つの問題がともに、「敗戦」と「終戦」という二つの言葉の選択を通じて大江の小説の世界に現れる。この二つの言葉の理解の間で揺れ動く作家の思いは、エッセイに

も見られ、小説にも見られる。これらを通じて、大江は、「終戦」という認識の仕方は、日本人にとって歴史的なプライドや自尊心の問題を解消するためにはより便利である、との結論を示している。そうであると、日本人とアメリカ人の間に生じる問題は、「敗戦」と「終戦」の意識とは別に考えるべきであろう。日本人とアメリカ人の関係の展開の具体相が、大江の小説を通して如何にに窺えるかについては、第四章で論じる。

第三章　〈政治的人間〉の先駆
—アメリカ人像—

本章では、それぞれの小説におけるアメリカ人の描き方の特徴を比較・考察する。

第一節、描き方

第一節—1、「飼育」

「飼育」に出てくるアメリカ人は、一人の黒人兵である。

その登場人物に大江がどのような外見を与えたか、見てみよう。

黒人兵は「背が高く」、「皮膚は非常に黒く」、「指が太く」、「足が非常に長い」、といった描き方である。それはどう見ても、日本における黒人に関するステレオタイプ的な描き方である。Hillenbrand の論によると、大江は当時の日本における黒人のステレオタイプを意識的に使う。

> 大江によるピーターソンの性格と外見の描き方は、黒人にまつわるほぼありとあらゆる日本の決まり文句を援用している。（中略）大江は一般的な日本人の偏見をわざとこのテキストに使うことによって、ピーターソンの人種を確実に問題化しようとするのである。
>
> Ōe's delineation of Peterson's character and physical attributes subscribes virtually every Japanese cliché in circulation about *kokujin*.(…)Ōe plays up to commonly held Japanese prejudices in this text as a means of making Peterson's race an unmissable issue[51].

このステレオタイプを使うことにより、読者に想像しやすいイメージが与えられる。黒人とはまず、恐ろしく、原始的で凶暴な巨人である。

だが黒人の原始的な姿は、村民の描き方にも重なる。兪承昌の指摘[52]の通り、黒人の描き方は村民の描き方とほぼ一致するが、黒人は村民により軽蔑されている。《町》の人の村人に対する軽蔑を、村人はそのまま黒人に移すのである。最初は《敵》（＝人間）であった黒人は、すぐに動物化され、〈獣〉になり、更に〈家

畜〉になる。

そのような描写が如何なる目的を持つのかを考察してみよう。

「飼育」における黒人兵は、監禁され飼育される対象として登場する。この監禁される対象としての黒人兵は、人間としての存在意義を認められず、村人の視線によって動物化され、また家畜のごとく認識される。「飼育」という作品のタイトル自体が、監禁される対象が他人によって支配され服従させられることと、一般的に人間以外の動物が対象であることを含意する語であることを考え合わせると、作品の全体的な構図は、飼育する側と飼育される側という主従関係に基づいた権力構造に支えられていることが分かる。、黒人兵の存在の意味は、その当初から家畜のごとく飼育され利用される人間として位置づけられているのである。

「どうするの、あいつ」と僕は思い切って訊ねた。

「町の考えがわかるまで飼う」

「飼う」と驚いて僕はいった。「動物みたいに～」

「あいつは獣同然だ」と重おもしく父がいった。

「躰中、牛の臭いがする」〔中略〕

黒人兵を飼う、僕は躰を自分の腕でだきしめた。僕は裸になって叫びたかった。

黒人兵を獣のように飼う　（傍線引用者）

「飼育」の冒頭では、村人は外国兵を「敵」として認識し、そこに恐怖を感じている。しかし、右の引用で分かるように、相手が黒人であることを知ってからは、村人の中に「敵」としての認識は薄れる。「あいつは獣同然だ」と、動物的な存在として黒人兵を認識し、黒人兵から人間としての意味を消してしまうのである。先述したように、それは全体的に、日本における黒人のステレオタイプによく当てはまり、読者に驚きを与えない。しかし、黒人の代わりに白人であったら、このような設定はあり得なかったのではないだろうか。この点について詳しくは同章第二節で論じる。

黒人兵を村民と区別するもう一つ重要なアスペクトは言葉である。しかしこの作品の黒人兵は、後ほどの「人間の羊」のアメリカ人のように、言葉が分からないわけではない。Orbaughの指摘では、黒人兵は「一言も話さない」（He never speaks

a word）[53].この指摘は基本的にはその通りであり（ただし黒人兵が歌を歌う場面があり、歌は当然何らかの言葉からなる）、黒人兵から主人公に向けられた言葉は確かに一言もない。唯一コミュニケーションの取れた箇所は、下記の通りである。

それから急に彼は黒く輝く額をあげて僕を見つめ、身ぶりで彼の要求を示した。僕は兎口と顔を見合せながら、頬をゆるめときほぐす喜びを押さえることができない。
黒人兵が僕らに語りかける 、家畜が僕らに語りかけるように、黒人兵が語りかける。（傍線引用者）

上記の引用から窺えるように、黒人本人は言葉によるコミュニケーションをとろうともせず、身振り手振りで済む。主人公と他の子供も、黒人に向かって言葉で話しかけることはない。これは言葉が通じない状態というよりもコミュニケーション不足の状態であり、言葉を交わそうともしない登場人物同士の関係である。この関係は日本人と黒人兵の差をより際立たせる。

一条孝夫は黒人兵に対する村人の視線を「擬動物化」の視線としてとらえ、村の大人たちの視線には蔑視が内在しているが、子供たちの視線には珍奇な獣に対する親和感から人間的な絆が結ばれると述べ、大人と子供の視線の違いを見出す[54]。、子供たちの目で見た黒人兵は「ほとんど人間的」であったが、大人の目では黒人兵はずっと「獣」のままであった。しかし、その二つの捉え方はそれほど違うのであろうか。黒人兵と子供たちが親密な関係になるにもかかわらず、それはやはり人間と動物の関係のままに残る。「村」の中で黒人兵は決して人間として扱われることはない。上記の引用箇所の続きはまた重要である。

黒人兵が僕らに語りかける、家畜が僕らに語りかけるように、黒人兵が語りかける。〔中略〕僕らに家畜のような黒人兵が、かつて戦う兵士であったということは信じられない、〔中略〕
「あいつ人間みたいに」と兎口が低い声で僕にいった時、僕は弟の尻を突っつきながら笑いで躰をよじるほど幸福で得意な気持だった。〔中略〕

黒人兵の黄色く汚れてきた大きい歯が剥き出され頬がゆるむと、僕らは衝撃のように黒人兵も笑うということを知ったのだった。そして僕らは黒人兵と急激に深く激しい、ほとんど《人間的》なきずなで結びついたことに気づくのだった。（傍線引用者）

子供たちの黒人兵を見る視線が変わり、黒人兵は「野獣」から「家畜」に転じるが、「人間」扱いにまでは至らない。黒人兵＝動物的な存在という認識においては、子供は大人たちと何の変わりもないのである。結局、「村」での黒人兵の存在意味は、飼いならされる対象として「村」共同体に所有される「動物」である。〈僕〉の語りの中にしばしば「人間」を意味する表現があっても、決して黒人兵が人間として受け入れられている訳ではないのである。

ロバート・ロルフは「飼育」における動物を連想させる表現に注目して、黒人が脱走を図って〈僕〉を捕虜にしたとき、〈僕〉が感じる恥が「物体、所有物」になった自分に対する恥であり、また動物に関する大量の言及が〈僕〉に向けられることから、「黒人は死に至るまで実際に動物であったとの議論も多分成り立つ」[55]と指摘する。しかし、動物的なイメージが下記の引用に見られる〈臭い〉の形で黒人兵から〈僕〉に移ったことは、決してそれが黒人兵のものではなくなったことを意味しない。動物的な要素の一つである「臭い」が、黒人兵が死んでもそこに残ることは、その証である。

「臭うなあ」と兎口はいった。「お前のぐしゃぐしゃになった掌、ひどく臭うなあ」

僕は兎口の闘争心にきらめいている眼を見かえしたが、兎口は僕の攻撃にそなえて、足を開き、戦いの体勢を整えたのも無視して、彼の喉へ跳びかかってはゆかなかった。

「あれは僕の臭いじゃない」と僕は力のない嗄れた声でいった。「黒んぼの臭いだ」

兎口はあっけにとられて僕を見守っていた。僕は唇を噛みしめて兎口から眼をそらし、兎口の裸の踝を埋めている、小さく細かい草の葉の泡だちを見おろした。兎口は軽蔑をあらわにして肩を揺り、勢よく唾を吐きとばすと、喚きたて

ながら橇の仲間へ駆け戻って行った。（傍線引用者）

上記の箇所から窺えるのは、一回〈臭う〉外国人と付き合った者は周りの日本人の目には同じ〈臭い〉を持つ存在となり、差別的な扱いを受けるということである。一度結んだ関係はもう断つことはできず、〈臭い〉に喩えられた影響は常に残る。主人公は友達にその臭いを指摘され、差別されるように思い、裏切られたと感じてその関係を切ろうとして物理的に離れても、精神的な関係は依然として残る。

黒人兵の動物化のもう一つの理由は、歴史的背景の中にある。戦争中の日本では、欧米諸国に関するプロパガンダが激しく、「鬼畜米英」という概念が一般に流通していた。それは文字通り、戦っている敵国の米英を「獣」として認識する概念であり、実際の外国人を知らない一般市民に悪いイメージを植えつけようとした。「飼育」の村人は、黒人兵が村に預けられることになると分かったら、直ぐに、「預ける」か「留置する」ではなく、「飼う」という言葉を使い始める。

「どうするの、あいつ」と僕は思い切って訊ねた。
「町の考えがわかるまで飼う」
「飼う」と驚いて僕はいった。
「動物みたいに？」
「あいつは獣同然だ」と重おもしく父がいった。
「躰中、牛の臭いがする」

父親から初めて「飼う」と聞いた主人公は上記のように最初驚くが、直ぐ自然と同じ言葉を使うようになる。

「ずっと村で飼っておけないかなあ」と僕はいった。

これは黒人に対する特別な扱い方であるかも知れないが、「鬼畜米英」という言葉の影響でもあるだろう。

もう少し違う観点から、村人の黒人兵に対する関係について見てみよう。黒人

兵とは、村に対してはまず、異質なもの、外的なものである。黒古一夫は、「村」にとって異質な存在となっている黒人兵に注目して、「村」という空間を意図的につくられた古代の原始共同体、そこに下りてきた黒人兵を「異人＝トリックスター（道化）」であるとみなし、黒人の殺害は、こうした異質なものをめぐる関係に基づいた「異人殺し」であると指摘する[56]。確かに異人論の中に黒人兵を当てはめてみると一見合うように見える。しかし、この登場人物はアメリカ人なのであり、黒古のいう異人とはまた違う存在であるように思われる。日本におけるアメリカ人はただの余所者ではなく、先述したように戦争と占領と侮辱という概念に密接に関わる存在である。また、黒古の論の異人は必ずしも黒人兵である必要はない。従って、大江の描く村人の黒人に対する態度は、異人一般に対する態度として片付けることができるものではない。

黒古の異人論は恐らく、大江の後期小説に現れる登場人物に当てはまるかも知れない。しかしここで扱う初期小説における黒人兵の異人性は、やはり危険をもたらす異人性として解釈すべきものである。黒人兵は「敵」であり、暴力を意味する。故に村人は黒人兵を同じ人間として扱うことができない。

この小説における日本人とアメリカ人の接し方は、大江の「終戦」認識に伴い、両者の間に平和的な関係があり得るのではないか、といった思想から生まれた小説であると思われる。この解釈は先述の黒人兵の危険性と矛盾する訳ではない。黒人兵の危険性は一時的なものであった。黒人兵が「大人しい家畜」として振る舞う期間は、小説の時間の三分の一ほどを占める。短いものの、これは大江の描きたかった牧歌的でユートピア的な世界そのものである。従ってこれは小説全体における代表的な部分であり、小説の主要な意味の一つである。ここからは、この小説は、日本人とアメリカ人が平和的関係を築く実験的試みであると言える。

小説の総合的なアイディアとしては、それまで他の国の干渉を知らなかった静かな一般の日本人の生活に突然米兵が侵入した、といった設定である。

先の第二章では、小説における戦争末期に関わる言及を挙げたが、小説に描かれているストーリーは戦後の状況にも喩えられるように思われる。村民が黒人を〈飼育〉することは戦後の状況においては想定しにくいが、兪は、大江がわざと戦後の実際の状況と正反対の設定にしたのだと指摘する[57]。また、日本人の隣に外国兵が住むという設定だけでも戦後の状況の喩えと見ることができる。その関

係の展開も戦後の状況に非常に似ている。第一に、外国人がいきなり日本本土に現れ、普通の日本人の生活の一部になるという点がある。「飼育」ではこれは黒人が村に住むことになるという設定に当たる。第二に、外国人の存在は否定することもできないし、逃げる道、問題を解消する道もない。「飼育」では、これは黒人を《町》に渡そうとしても不可能であったという設定に当たる。第三に、外国人について何の知識も持っていなかった村民が、外国人に慣れていき、少しずつ同情することになる。「飼育」では、特に子供が黒人に親しむことになるという設定がこれに当たる。第四に、平和に暮らそうとしても、問題が起こるという戦後の歴史的な事実もあった。「飼育」では〈僕〉が虜になった事件がこれに当たる。上記の流れを見ると、小説の時代設定は戦争末期であっても、日本の戦後の状況と当時の日本人とアメリカ人の関係にも比較することができる。

特に黒人に対する村民の態度の変化はまた戦後の日本人のアメリカ人に対する態度の変容に喩えられる。最初は抽象的な《敵》として意識され、具体的なイメージはない。直接会うと悪印象を与えるが、時間が経つにつれて印象が改善されていく。小説の半ばあたりでは黒人兵は自由に村を歩き、大人はそれを気にしない。

> 僕らは黒人兵をたびたび地下倉からさそい出して村の敷石道を一緒に散歩しはじめた。
> そして大人たちもそれを咎めなかった。
> 彼らは部落長の家の部落共有の種牛が道を来ると草むらに下りてそれを避けるように、僕ら子供たちに囲まれた黒人兵に出会うと顔をそむけて横に避けるだけなのだった。

小説の終わりの黒人兵が表した凶暴さはさらに戦後の占領軍が起こした諸事件、後に「人間の羊」などで描かれた事件に類似する。

次に、黒人が死ぬという出来事は戦争の終わりの比喩、あるいは占領の終わりの比喩になると考えられる。先ほど「臭い」に関して論じたように、戦争は終わってもその跡を残す。小説ではそれは黒人兵の死体の「臭い」と主人公の砕かれて同じ「臭い」を発する掌として表されている。〈書記〉の言葉を借りて言うと次

のようになる。

「戦争も、こうなるとひどいものだな。子供の指まで叩きつぶす」。

この一行は、大江の戦争に対する意識を表している。この小説の反戦的なスタンスはこの一行でも明らかである。また、これは大江が描く日本人とアメリカ人の理想的な平和的共存をも強調する。戦争さえなければ共存はあり得るというメッセージをここに読むことができる。

では、平和的共存の試みは何故失敗に終わったのであろうか。まずは、戦争という出来事は、日本人とアメリカ人の間に起こった出来事として、取り消しようのない事実であるため、「敗戦」ではなく「終戦」であったと見なそうとしても、日本人とアメリカ人は決して同じ立場の人間として共生することができない、と小説は告げているようである。いくら平和に暮らそうと思っても、日本人とアメリカ人は文化的にあまりにも違いがあり、相互理解が非常に困難であるため、両者の間の問題はどうしても起こる。たとえアメリカ人が「弱者」、「日本人に依存する存在」であったとしても、問題は完全には避けられない。

ここで起こる問題の原因は確かに理解不足であるが、設定をよく見ると、日本人が黒人兵に対して取ろうとした行為（《町》へ移動させること）がその問題の原因でもあった。黒人兵が完全にその状況を理解しなかったとしても、その時点までの平和な暮らしが村民により終わらされようとしているのは確かである。そのために、黒人兵は暴力を振るい出した。このような設定によって、日本人とアメリカ人の間の問題は日本人の行為に依るものでもあると大江は言いたいのであろうか。

また、小説の題名にも注目したい。小説の題名は登場人物のアメリカ人に直接関わっている。「飼育」とは、この小説における黒人兵の状況を表している。言い換えると、黒人兵の姿を喩える表題である。黒人兵は日本人により「飼育」されている。本章ではすでに「飼育」が他の初期の小説と正反対の設定になっているということに言及したが、このタイトルも他の小説のタイトルの意味とは逆の関係を表している。他の小説、例えば「人間の羊」や「不意の唖」のタイトルは、アメリカ人による行為の影響で生じる日本人の状態を表しているが、「飼育」は逆

に日本人の行為の影響で生じるアメリカ人の状況を表す言葉である。

しかし、「飼育」というタイトルは主人公の〈僕〉にも関わりがある。〈僕〉が黒人兵に会い、暫く共生し、人質になり生き抜いた、という一連の出来事は、ある意味では成長物語であり、〈僕〉は成長させられている。小説の初めの〈僕〉は小説の終わりとは全く違う人物である。黒人が突然村に現れなかったら、〈僕〉の成長がは進まなかったのは明らかである。従って〈僕〉が「飼育」されたと言えなくもない。この場合は「飼い主」として特定できる登場人物はいないが、主人公は彼が置かれている状況によって「飼育」される立場になると言える。なぜなら、テキストにおいて〈僕〉と村人は極めて原始的で動物的な暮らしを送る者として描かれているからである。そう考えると、「飼育」という言葉は〈僕〉にも当てはまる。、観点を変えると、この小説のタイトルは、この論文が扱う他の初期短編のタイトルと類似的なものであるということができる。

ここにはまた、小説における黒人兵の役割を見ることができる。黒人兵は〈僕〉がそれまで未知であった世界の代表者として現れ、それまでできなかった体験を与え、他の皆と異なる人間にした。それら全てが育成であり、その動機と原動力は黒人兵でなければならなかった。〈僕〉は黒人兵との付き合いのおかげで、周りの日本人と違う人間になり、それまでの自分の状態には戻れなくなる。

> 僕はもう子供ではない、という考えが啓示のように僕をみたした。〔中略〕僕はその種の、世界との結びつき方とは無縁になってしまっている。

この変化は、、日本人が外国人との付き合いをある程度の時間持つと、元の日本人の状態には戻れなくなる、ということである。

巨視的に見ると、〈僕〉は日本の比喩であり、黒人兵は他の国を意味する。所謂第二鎖国時代の戦争時代を経て、日本は突然その周りの世界と直面することになり、様々な問題を抱えて新しい日本になる。従ってこの短編で大江は日本の歴史、取りわけ終戦と占領時代と占領の終了を比喩的に描いているということができる。

まとめると、「飼育」における黒人兵は、大江によってわざとグロテスクなものにされ、非現実的なものになっている。日本の戦後の状況のなかで正反対の立場におかれた日本人とアメリカ人にとって、平和な共生はいずれにしても困難であ

る。その原因として、第一は理解不足である。

第一節—2、「不意の唖」

「不意の唖」に出てくるアメリカ人は数人の白人兵であり、「飼育」とは反対の試みがなされているかのようである。

まずは、その登場人物を大江がどのような外見に描いたか、見てみよう。

兵隊たちは金髪や栗色髪や褐色の頭、まっ白な皮膚と陽に輝やく金色の体毛、澄んだ青い色の眼をし、背のすばらしく高い巨人である。

この「巨人」という一点意外、「不意の唖」の米兵の描写は「飼育」の黒人の描写とは正反対なものである。これは当時の日本における白人のステレオタイプに依るイメージである。大江は「飼育」と同様、わざと想像しやすい描写をしている。

しかし、この描写は「飼育」と正反対なものであるため、正反対な態度をも意味すると言えるだろう。実際、「不意の唖」の村において、白人兵は「飼育」の黒人兵とは違う扱い方をされるし、反対の役割を演じもする。黒人兵の場合は、

「黒んぼだぜ、敵なもんか」

というように、軽蔑的な扱いを受けていることは明らかであるが、白人兵の場合は

かれらは、初めてやって来た外国の兵士たちを見てすっかり動揺していた。

というように受け止められる。敵としても認識されず「兵士」とも呼ばれていない黒人に対して、「外国の兵士」として身震いさせるほど怖い白人というこの二つの小説の対比的な設定は興味深い。

「飼育」との一番明白な違いは、この小説におけるアメリカ人が強者であることである。小説の舞台設定は、「飼育」とほとんど一緒だが、日本人とアメリカ人の立場は反対になっている。そしてそれは戦後の日本の状況を写している。

村人のアメリカ人に対する態度の展開は、流れとしては「飼育」に似ている。小説の冒頭文の恐れ半分興味半分という態度は、徐々に慣れた姿勢に変わり、平然とした態度となる。しかし、問題が起こる。「飼育」の場合これは人質事件であり、「不意の唖」の場合は〈部落長〉の射殺である。故に村人の態度は敵対意識という状態に戻る。

このような態度の変容は小説ごとに多少の違いはあるものの、本論文で扱うほとんどの小説に見られる。設定の細部は小説により異なるが、基本的な流れは非常に似ているため、筆者はパターンという概念でそれを扱うことにする。本論文が扱う小説には皆同じパターンが見えるため、一貫性のある小説群として考察することができるだろう。

この小説では、「飼育」と同様に、村人が初めてアメリカ人を目にする。結局初期の短編小説では、「飼育」と「不意の唖」の二編だけは初対面という出来事を素材にする小説である。第一章で見た小説における時間の順番で考えると、これはちょうど都合のいい状況である。アメリカ人との対面のありかたは両者で異なっている。「飼育」では村人には不意の対面だったものが、「不意の唖」では準備された対面になる。ここには戦争末期から戦後間もない時点に至るまでに、日本人のアメリカ人に対する意識がすでにかなり変わったという考えが込められていると思われる。小説の設定としては細かな違いであるが、登場人物の心の変化としてはかなり大きな違いである。以下に論じるように、この態度の変化によって日本人のアメリカ人との付き合い方も完全に変わるからである。して、複数の小説をとおして徐々に巧みに設定が変えられることで、日本人の態度の変容過程が物語られる。

付き合い方の違いが小説上にどのように現れるかみてみよう。「不意の唖」の村人は心構えができているため、小説の途中のアメリカ人に対する態度は「飼育」とは全く違う。「飼育」では村長を初めとする村人が誰一人どうすればいいか分からないため、黒人兵の面倒を見る役目は、〈僕〉の〈父〉に適当に与えられた。「不意の唖」では逆に、主に村長が話し合いをし、面倒を見ている。それに依って、他の村人はほとんどアメリカ人に接しない。しかし、「飼育」と同様に、ここでも子供たちが大人よりもアメリカ人に興味を持ち、面白がっている。

子供たちは少しずつ輪をせばめて、もっと良く見るために兵隊たちへ近づいて行った。あまり恐くなかった。

この箇所は、大江のエッセイでの描写[58]と重なり、大江自身の子供の頃の外国人との接し方の思い出が反映しているようである。しかし、この小説では、「飼育」ほど詳しく子供たちの感情が描写されず、子供たちの目で見たアメリカ人像は明確ではない。

また、用心深い心構えのため、この小説の設定は、日本人とアメリカ人の間の平和的な共生の試みであるとは言えなくなる。確かに最初の状況は「飼育」の状況に似ている。大人も子供もアメリカ人を初めて見て、面白がっているが、とりあえずは無視した方がよいと判断する。一見、平和は可能であるように見える。大江は更にここに通訳という存在を加え、日本人とアメリカ人の間のコミュニケーションの手段、、理解不足のために起きそうな問題を防ぐための手段を置く。しかし、この平和は、表面的である。日本人も何か起こらないかと恐がれ、米兵も固まって動き注意している。、両方の内面は乱れて互いの動きを見まもっている。この緊張感は次のような〈通訳〉の言葉に表れている。

この方たちは食事の習慣がちがうから接待する必要はない、やってもむだになる。いいな。

これに対して村人を代表する〈部落長〉も米兵に関わりたくない、〈通訳〉の言葉に賛成する態度を見せる。

「みんな、仕事に帰ろう」と少年の父親がいった。

この態度は村人の以前からの心構えであり、危険を未然に防止にしたいといった態度である。

皮肉にも、コミュニケーションをうまく進める手段であったはずの〈通訳〉が、表面的であってもとにかくそこにあった平和という状況を破壊することになる。この〈通訳〉は本来の通訳者が果たすはずの役割とは反対のことをする。日本人

とアメリカ人の間に多少できた微笑み合い、同情の始まりとも言えるような関係を通訳が敵対関係に戻し、アメリカ人に村長を殺させてしまう。通訳が自分の靴を返すよう要求し、脅した時にはまだ村人が彼のいうことを真面目に捕らえていなかったようである。しかし、村長殺しの時点で、日本人とアメリカ人の間のコミュニケーションの可能性は完全に破壊され、平和の可能性も取り戻すことができなくなる。

村の大人のアメリカ人に対する態度も、この小説では結局、村長殺害事件以降の行為としてしか表れない。先述したように、冒頭辺りでは村長が村の大人を代表し、全てのコミュニケーションを担う。村長以外の村人が直接態度を示す場面はない。村長が殺されると初めて大人の態度が現れる。ここで、村人が「唖」になったことが、日本人とアメリカ人の間にどのような意味をもたらすか、考察してみよう。

村人の沈黙は、まず、外からやってきて、問題を起こした「外の者」に対する拒否という形の防衛として現れる。アメリカ人を無視し、聞こえない振りをするとは、アメリカ人と自分たちの間に防衛の壁、目に見えない妨げを作る行為に他ならない。

外国兵たちが身ぶりでその意志〔〈通訳〉を川から引き出すこと―引用者〕をしめしても大人の村人たちはまったく反応を示さなかった。

この壁を作ることにより、村人は村長の殺害に対して抗議の意を表す。このような反対運動は、日本の戦後の状況を如実に写していると思われる。強者であるアメリカ人に対し、村人は反発できない。「飼育」では人質をとった黒人兵を村人が殺したが、ここでは殺人を起こした白人兵に手を出すことができない。実際に、戦後の日本では、日本人が米兵に侮辱を受けても、あまり対抗できなかった。このような状態は「人間の羊」でより詳しく取り上げられている。

だが、強者に対して沈黙の反論しかできないという「不意の唖」の村人の置かれたような状況は、実際に戦後の日本にあり得たのであろうか。

外国兵たちを樹木か鋪石のように見て、仕事のつづきにとりかかる。

みんな黙りこんで働いていた。
外国兵が村に入っていることを忘れてしまっているようだった。

この描写も、「飼育」のグロテスクさほどでもないが、非現実的な印象を与える。なぜなら、戦後の日本の一般的な状況では、日本人がアメリカ人の存在をいくら否定しても、アメリカ人がこの小説の結末同様にただどこかへ去ることはあり得なかったからである。序論などで論じたように、日本の戦後にはアメリカ人は不可欠な存在であり、日本人の生活のありとあらゆる部分に入ってしまったのである。明確な例としては、「人間の羊」が上げられる。バスの中での日本人とアメリカ人の対立は、日本人は望んだ訳でもないし、むしろ日本人はなるべくアメリカ人に関わらないようにした。積極的なのはアメリカ人であり、日本人はその行動に関わらざるを得なかった。、日本人がアメリカ人の存在を無視することは、現実上ではあり得なかった。更にその非現実性を強調するために、大江は子供までも大人と一緒に「唖」になったという設定を作る。「人間の羊」で見られるように、現実上で日本人はアメリカ人に抵抗することもできなかった。抵抗が非現実的であったとしたら、村人がアメリカ人のやったことに対し、何一つ反発していないに等しい状況になる。しかし、通訳が殺されたことは抵抗ではないか。この疑問を解決するには、村人が通訳に与えた罰をどう捉えればいいか、という問題を考えねばならない。

一方で〈通訳〉はアメリカ人と一緒に動き、村人にとっては完全な余所者である。しかし、アメリカ人としては認識されず、〈通訳〉自身も自分を米兵と区別している様子である。

通訳はわざわざ少年たちの傍まで歩いてきて、にこりともしないで四方を見まわしたりしたあと、ジープの運転台へ入ってしまった。
そこでかれらは、なんの気がねもなしに、この遠来の客を見まもることができるというわけだった。

日本人〈通訳〉は村人には受けられず、中途半端な者として認識された。表面的にはそれは明確に現れず、グリブニンの論では、逆に、〈通訳〉は村人と同じよ

うな人間であったという扱いがなされている。村人は敗戦意識を持ち、勝利者に対し反抗の意志を表すことができない。問題が起こると罰を自分と同じような人間、〈通訳〉に下す。米兵ではなく、〈通訳〉を殺人の原因と見なし、〈通訳〉を殺す。〈通訳〉は同じ日本人ではなく、

> 敵に協力する裏切り者として扱えば殺すことができるが、勝利者の米兵には触れないというのは奴隷意識である。
> (предал соотечественников, пошёл служить к оккупантам, но главное – «своего» можно убить, победитель неприкосновенен. Все та же рабская психология.) [59]

と強調されている。しかし村人の意識に明確な説明はなくても、〈通訳〉は明らかに自分のことを村人と同じような存在とは思わなかったのではなかろうか。彼は靴がなくなったらすぐに村人の悪戯と決めつける。また、靴を取っていないということも信じなかった。このような態度は仲間同士に対する態度ではない。むしろ、〈通訳〉の態度は、「飼育」における《町》の人の村人に対する態度と似ている。町か都会からやってきた〈通訳〉は、村人を自分より下の人間として扱い、その口調や振る舞いにそれを明確に表す。村人が〈通訳〉の命令に素直に従わないというのは、その高慢に対する反応であった。

Steve Redford は、殺害事件の総ての罪は〈通訳〉のみにあり、下された罰は正義であったと述べている。〈通訳〉が自慢をしたり自我を前面に出したりして村人を侮辱し、米兵を騙して村長を殺させたのだと強調している。

> 部落長は振り向いて去るが、通訳は部落長も村人も理解出来ない何ごとかを叫ぶ。それが何であったとしても、以前は「盗まれた」靴の件をくすくす笑う程度のことでしかない可笑しな話だと思っていた兵士にとり、この叫びは銃を上げて部落長の背中を撃つのに十分であった。
> (The head turns to walk away, and the interpreter shouts out something that neither the head nor his fellow villagers can understand, but, whatever it is, it is enough to make a soldier who had earlier found the “stolen” shoes story comical – something to chuckle over and nothing more – to raise a rifle and shoot the village head in the

back[60]).

Paul Sminkey も、

〔前略〕米兵の暴力のせめて幾分かは日本人によって引き起こされている。〔中略〕「不意の唖」の傲慢な通訳は立ち去る村長を殺させる。
(…the violence of the American soldiers is at least partly incited by Japanese:…the arrogant translator in “Sudden Muteness” urges the soldiers to shoot the fleeing village head).[61]。

と述べ、同じような指摘をする。

確かに通訳が正しく訳したかは疑わしいし、自己の高慢さを満足させるためにアメリカ人に酷いことを言い、村長を殺させたかも知れない。ここではまた、普通の日本人とアメリカ人の間にある理解不足とその不能という問題が大江によって取り上げられている。

、事件は日本人通訳のために発生し、その通訳に罰が与えられた。ここでは「飼育」と同じように、日本人とアメリカ人の間に起きる問題の原因として理解不足が挙げられるが、「不意の唖」では日本人もその問題に関わっているのである。

この小説におけるアメリカ人の役割は、「飼育」と同様に、閉ざされた空間に住んでいた〈僕〉に「外」の存在を知らせ、それまでになかった経験を与えるというものである。「飼育」と同様に、その経験は楽しい経験ではなかったが、ある意味で主人公を成長させ、大人にした。この変化も取り返しのできないものであるが、アメリカ人がそこにやって来なければ、その変化はなかったのである。

最後に、小説の題名について考察してみよう。「不意の唖」とは、「飼育」と反対に、アメリカ人の行為の影響で生じた日本人の状態を表している。通訳がアメリカ人の手で村長を殺したため、村の大人も子供も「唖」になる。「飼育」というタイトルと同様に、「不意」という言葉は受け身を表している。

また、観点を変えてみると、「不意の唖」はアメリカ人にも関係があるという解釈もできる。このタイトルは、日本人の行為（通訳の殺害、アメリカ人の存在の否定）のために、アメリカ人に生じた状態（コミュニケーションが取れなくなっ

た、、「唖」になった）を表すとも思われるからである。アメリカ人もこのような状況になることは望んでいなかったのだから、これもまた受け身、状況により無理矢理押し付けられた状態だと言える。
まとめると、「不意の唖」における米兵の描き方は、「飼育」の黒人兵と対比的になるよう、大江によって意図的に当時の日本の白人のステレオタイプに沿うものにされた。外見が異なることから、白人に対する村人の態度は「飼育」の黒人兵に対する態度と異なってくる。「飼育」における日本人とアメリカ人の非現実的な関係は、この小説において（ステレオタイプが用いられながらも）歴史的に現実的なものとなった。しかし、平和な生活は困難であり、その理由はまずもって理解不足であるという設定は「飼育」と同様である。

第一節―3、「人間の羊」

この小説に登場するアメリカ人は、数人の兵隊である。白人とは明確に書かれていないが、白人の描写だけがある。

あいまいに頭をさげて、僕は郊外のキャンプへ帰る酔った外国兵たちの占めている後部座席の狭いすきまへ腰をおろしに行った。

アメリカ人の外見は、「長い膝」、「金色の荒い毛が密生した腕」、「牛のようにうるんで大きい眼」、「短い額」、「太く脂肪の赤い頸」などと描かれている。
「飼育」や「不意の唖」と同様に、ここでの描写もアメリカ人の巨人性を強調し、それはまた非現実的な印象を与える。
日本人である主人公がアメリカ人に会う設定は、上記の二篇と違い、恐らく、初めての出逢いではない。「不意の唖」では村の少年である主人公が初めて米兵を見て、危ないと思うのに対して、「人間の羊」では米兵をバスで目にする主人公は驚きもせず、アメリカ人を見ることにすでに慣れている。バスの他の乗客も、上記の二編の村人と違い、アメリカ人に興味を示しはしない。むしろ、アメリカ人を一所懸命見ないように努力をする。

日本人の乗客たちは両側の窓にそった長い座席に坐って兵隊たちの騒ぎから眼

をそむけていた。

このような主人公や周りの日本人の態度の変化は、戦後日本の当時の状況を映し、これまでの二篇とも連続性をもっている。第一節—2 で論じたように、ここでも大江は、小説の設定を徐々に変えていくことで、アメリカ人に対する日本人の態度の変化の流れをうまく捉えている。

偶然アメリカ人に出会う日本人がしばらく共生せざるを得ない、という基本的な設定は前の二篇と一緒であるが、新しい要素としては、主人公が学生であるという点がある。〈僕〉は外国文化（フランス文学）を勉強しているため、普通の日本人より「外国」に馴染みがありそうで、外国人に関する知識もあるはずである。ここにも前の二編からの変化が見られる。このような〈僕〉が日本人を代表しているとするならば、そこには、終戦から多少時間が経ち、日本人がアメリカ人に慣れていき、アメリカを含む「外国」のことを勉強するようになったという認識が込められていると考えられる。「不意の唖」では、村人がアメリカ人と会う準備はしていたが、それはまだ非日常的な出来事であったことに対して、「人間の羊」では、それは日常の一部になっている。アメリカ人が日本の生活のあらゆる部分に入り込んだ時代がここに映し出されている。

では、日本人とアメリカ人の出会いが日常的な出来事になったというのは、両者の間に平和的関係が生まれたことを意味するのであろうか。否、それは平和ではない。確かに、日本人はこの時期までにアメリカ人の存在を心に受け入れたであろう。しかし、その受け入れは、避けようもない事実の受け入れであった。小説の描写をよく読むと、〈僕〉は直ぐ隣に座っているアメリカ人と自分の間に目の見えない壁を置き、自分を防衛的、自閉的な姿勢にしていることがわかる。

> 僕は硬いシートの背に躰をもたせかけ、頭が硝子窓にぶつかるのを避けてうなだれた。バスが走りはじめると再び寒さが静かにバスの内部の空気をひたしていった。僕はゆっくり自分の中へ閉じこもった。

この引用から窺える通り、他の乗客もアメリカ人を見ないようにしたのは、同じような壁を築くためであっただろう。初対面の時代がすでに終わり、もう誰も

アメリカ人を珍しい動物のようには見ていない。むしろ、アメリカ人と日本人の間に問題があり得るということは一般常識になり、日本人はできるだけアメリカ人との関わりを避けようとしている。言ってみれば、このような日本人の態度は、「不意の唖」の続きである。アメリカ人を気にしはしても、一所懸命無視していれば、問題は避けられる、という態度は、少なくともこの二つの小説の登場人物に共通している。

この小説におけるアメリカ人の描写の重要な要素は、彼らが日本人に行った侮辱的行為である。ロジャー・トーマスは

> この小説の中では、ありそうもない部分は何処であろうか。その非現実性は日本人の読者よりも外国人の読者の感覚を打つかも知れない。なぜなら、この小説で特に空想的で信じ難いのは、外国兵の描写だからである[62]。

と述べ、外国人の描写は信憑性の限界を超えているとする。しかし、~~この~~外見の描写は非現実的としても、このような非現実的な登場人物が非常に現実的な行為を取る。戦時下の日本では、このような事件はあり得ないことではなかった。この行動は確かに読者を驚かせるものとして描かれているであろう。「羊ごっこ」というもの自体、明らかに日本的ではなく、キリスト教圏を起源とするものである。小説の表題にもある「羊」とは、聖書などに出てくる「犠牲の羊」という概念を思わせる。その西洋性、、「外部」性を一層明確するために、「羊」という言葉は米兵によって初めて口にされるという設定になっている。行動も、呼びかけも、暴力によりなされる。犠牲にされた日本人は、米兵の理不尽な暴虐にさらされ、屈辱をなめさせられる。紅野敏郎の表現を借りると、「まさに占領下日本の、やりきれない、屈辱的風景と心情を描いたもの」である[63]。この設定は「不意の唖」の村人と同じ状況である。

しかしこのような屈辱を受けながら、日本人は、直接抵抗しない。この設定もまた「不意の唖」の続きである。木村幸夫の指摘がすでにあるが[64]、「唖」という言葉は「不意の唖」よりは「人間の羊」で数多く繰り返し使われている。

屈辱が与えられている途中、日本人はただ黙って我慢する。しかし、なぜ抵抗しなかったのであろうか。バスの中の日本人の人数は米兵より多い。他方、米兵

は少なくとも一本のナイフを持っている。しかし、決定的なことは二つの表面的な状況の違いではない。

> 車の前部にいる日本人の乗客たち、皮ジャンパーの青年や、中年の土工風の男や、勤人たちが僕と女とを見つめていた。
> 僕は躰をちぢめ、レインコートの襟を立てた教員に、被害者のほほえみ、弱よわしく軽い微笑をおくろうとしたが、教員は非難にみちた眼で僕を見かえすのだ。

とあるように、内面的には日本人は孤立している。それに対して米兵は団体である。ここは「不意の唖」と明らかに違う箇所である。「不意の唖」の村人は皆、団体として唖になり、無口な抵抗をする。「人間の羊」の日本人は一人一人黙り込む。それは抵抗ではなく、抑圧された沈黙である。

小説の後半の教員の行動は、アメリカ人を裁こうとするから、アメリカ人に対する抵抗ではないのか、という問いが生じるかもしれない。しかし、それは抵抗ではない。その行動は遅く、侮辱を加えた米兵たちを裁きようもない。米兵はすでに去ってしまい、危険も去り、侮辱的行為もすでに終わっている。第二に、その行動は侮辱を受けたものを助けるものではなく、反対に侮辱を加えようとする。第三に、教員の目的は自分の正義と思う思想を実現することのみにあり、この事件をただよい機会として使おうとしている印象が強い。Sminkey は、教員は当時の政府に属する人物の喩えであり、日本人とアメリカ人の間に起こる問題を自分のために利用しようとしている者であると述べている[65]。また、木村もその教員を〈政治的人間〉と定義する[66]。

興味深いことに、ここで犠牲者はアメリカ人に何の抵抗もしない。すでに紹介したグリブニンの論はまたここでも当てはまる。グリブニンは、それは勝利者に対する「奴隷の意識の所為」だとする（Все та же рабская психология.）[67]。しかしそれはむしろ、侮辱が終わった時点で侮辱を拒否し忘れようとする犠牲者の防衛的な意識ではなかろうか。侮辱について悩んだり反論したりすると、その恥ずかしさは続くが、忘れようと思えばいくらか心が安らぐであろう。「飼育」でも〈僕〉は黒人兵を恨まない。「不意の唖」に関する項でも既述したように、村人はアメリ

カ人の代わりに通訳を恨む。「人間の羊」で唯一意義を唱える人物は教員である。この人物は被害者ではないからこそ反論が言えるのだと考えられる。そしてその意義が発されるのはすでに米兵が去り、反論を受ける者がいないときである。、教員の反論は、アメリカ人には向けられていない。教員は周りの人に、自分が反論を言う人間だということを見せたいだけである。

また、問題の起こり方も重要である。総ては日本人娼婦の行動のために起こったという設定になっている。これは「飼育」や「不意の唖」の設定の繰り返しであるが、日本人とアメリカ人の間のトラブルには、日本人も関わっているという認識の表れである。

もう一つの面からこの小説を見てみよう。「羊」の動物性は、「飼育」の動物的なモチーフと響き会う。「人間の羊」における米兵の描写は、「飼育」の黒人兵のそれとまでは行かないが、巨人でありと暴力的であるため、非人間的、動物的である。「獣」のような米兵が日本人の青年に暴力を振るい、青年もまた動物の〈羊〉になる。

僕は孤独だった、鼬罠にとらえられた鼬のように見棄てられ、孤りぽっちで絶望しきっていた。

とあるように、「飼育」では、人質になった〈僕〉は自分のことを小さい動物のように感じる。それに対して「人間の羊」では

僕は彼らの列の最後に連なる《羊》だった。

とあるように、〈僕〉は「飼育」で描かれたイメージよりももっと具体的に、「羊」として自分を感じる。二篇の小説において、米兵の属性としてある動物的な要素が主人公にのり移り、主人公はそれを否定し振り落とすことができない。米兵の行動により、「人間の羊」の〈僕〉は「飼育」の〈僕〉と同様に、周りの日本人とは異なる存在になり、元の自分には戻れなくなる。ここからは小説の題名の意義が「飼育」と「不意の唖」と同類のものであることが分かる。タイトルはアメリカ人と日本人双方に関わっているのである。

この小説では、米兵の出現により、主人公と読者は乗客のあいだの分裂に気づく。これは戦後の日本社会の分裂を象徴してもいるのであろう。

《羊たち》はほとんど後部座席にかたまって坐っていた。
そして、教員たち、被害を受けなかった者たちはバスの前半分に、興奮した顔をむらがらせて僕らを見ていた。

とあるように、直接米兵より何らかの被害を受けた乗客と、それをただ観察する乗客とに分かれるのだ。更に〈教員〉のように、その状況から何かを得ようとする者も現れる。被害者となった者たちは、この小説上は「羊」にされた者であるが、小説の背景を踏まえてこれを比喩と捉えるならば、このグループには戦争と占領で被害を受けた総ての人が入る。次のグループは、自分をアメリカ人から目に見えない壁で一所懸命守ることに成功した人間である。彼らはいつでも第一グループに移る可能性があるが、とりあえずは関わりがないという状況を十分に楽しみ、観察を続ける。

外国兵が突然歌いはじめた。そして急に僕の耳は彼らのざわめきの向うで、日本人の乗客がくすくす笑っているのを聞いた。

とあるように、この分裂は数人の乗客が新たに犠牲者になる前、〈僕〉だけが被害者であった時からすでに起きていた。
最後のグループは教員に代表され、「不意の唖」では通訳に代表される。このような人物は明らかに否定的に酷く描かれている。
米兵がバスに乗っていなかったら、あるいは娼婦が〈僕〉に話しかけなかったら、この第三グループの人物は自己を発揮することができなかったろう。

第一節―4、「暗い川、おもい櫂」

この小説で大江は再び黒人兵のモチーフに戻る。その描写は「飼育」の描写の反復となっている。しかも、主人公の〈僕〉もまた少年であり、黒人兵を見る目は「飼育」の〈僕〉とほとんど同じである。子供としてアメリカ人を見ることの

面白さ、、黒人兵に対する興味という設定も大江はこの小説で繰り返している。

かれは外国人と生まれてはじめて握手することを、夏休みのはじめのうまい記念だと考えた。

この描写は村に連れてこられた「飼育」の黒人兵が子供を喜ばせたという場面に似ている。

違いは、「暗い川、おもい櫂」の〈僕〉はより年が上で、アメリカ人を見ることに慣れている。驚いた目ではないのに、描写は同じである。、この小説もステレオタイプ的な描写が使われているのだと言える。前の小説にはなかった要素として、〈僕〉の黒人の受け取り方に大人の〈女〉が影響を与える。

「あの人、ばかみたいでしょ？」と女はいった。「なにからなにまで人一倍ふといのよ」

このような説明を受けた少年は初めから黒人に対してネガティブなイメージを持つようになる。

ここまで取り上げた三篇では、日本人主人公のアメリカ人に対する態度に一連の発展性が見えたが、この小説では主人公の年齢という点でも、主人公の黒人兵に対する興味という設定でもそれまでの進行を一歩手前に戻したように見える。しかし、連続性はここで完全に逆行する訳ではない。主人公がアメリカ人を見ることに慣れている点では、「人間の羊」からの明らかな連続性が見えるが、外国人への興味が元に戻ることが退歩を意味するとは思えない。従来の三篇では大江は日本人とアメリカ人の関係の極端なパターンを描いていた。「飼育」では日本人がアメリカ人を親しい家畜のように扱っているが、「不意の唖」と「人間の羊」ではその反対に、完全に無視している。しかしどちらのやり方も、コミュニケーションの構築という点で成功には終わらない。

「暗い川、おもい櫂」で大江は中道的なパターンを探り始めている。日本人とアメリカ人は親友にはなれないし、離別もできないから、何らかの形での共生の必要性が浮かび上がるのである。この小説で大江は様々な共生の形を設定し、日

本人とアメリカ人の間の平和的関係の可能性を追求する。

「暗い川、おもい櫂」における中道的な設定とは、具体的にどのようなものであるか見てみよう。主人公は黒人兵に対して興味を持つことにより、その存在を受け入れ、それを知りたいと思っている。以前から隣に住んでいる黒人の存在を知っていた〈僕〉はチャンスが与えられたら直ぐにそれを掴み、実行しようとする。

> かれは隣りの女と、その情人に知りあったことが嬉しかった。ピーターソンは朝鮮で人を殺してきた男だ。かれと一緒に夕食をすることは、どんなにおもしろいだろう。〔中略〕かれはピーターソンに英語で話しかけながら食事をしている自分をゆめみた。留守番の最初の夜が楽しくすごせること、それはまったく僥倖というべきだった。

ここで大江は、違う文化の人が隣に住み互いを知る重要さに焦点を与えている。それは平和な関係への第一歩であるからである。

> かれは自分が重要な人生の智恵をさずかったような気がしていた。こんなふうに思いがけなく、しっかりした人生を知ってゆく、これが大人になろうとしている人間のやりかた。

しかし、このような試みはうまく行かない。作者がうまく行かせないのだ。不親切な設定により大江はその平和的共生の試みを破壊し、悲しい結果に小説を導く。その不親切な設定とはすでに触れた主人公の黒人に対するネガティブな態度である。その態度は〈女〉の影響により生まれ、強化される。ストーリーの真ん中辺りで、主人公は黒人兵を軽蔑してほとんど相手にしないのである。その態度は完全に「飼育」における黒人兵に対する軽蔑と類似したものになる。主人公は黒人兵を殺そうとも思うようになる。

〈女〉の形象自体も悪意ある設定になっている。情人を憎む彼女は、黒人とよく喧嘩をし罵り合うが、黒人と関係を切ることはできないため、心が安まらない。そこに〈僕〉が都合よく現れ、自分の中の感情を〈僕〉と寝ることにより自分の

外に出すことができ、〈女〉は一端落ち着くのである。しかし、彼女はそのような行動によって生じた三角関係がいかに危ないかに考えが及ばず、〈僕〉と黒人兵が対立することを気にしない。

この設定は平和的関係を生み出す試みを台なしにし、悲しい結末に結びつく。これも「飼育」と「不意の唖」の設定の繰り返しになる。、主人公である青少年の日本人とアメリカ人の間に起こる問題は、脇役の大人によって引き起こされる。不和をもたらす大人は〈外〉の存在であるが、この〈外〉からの圧迫や〈外〉が生む状況により日本人とアメリカ人の関係は崩れる。「暗い川、おもい櫂」におけるこのパターン化した設定の違いは、〈僕〉と〈女〉の関係にある。「飼育」と「不意の唖」における〈外〉の大人は主人公とは明らかに関係のない存在であったが、「暗い川、おもい櫂」の〈女〉は〈僕〉と直截な関係で結びつく存在である。その点で異なっている。これは主人公が「飼育」と「不意の唖」の主人公より年上という設定とも関係している。しかし、年齢より重要なのは、大江がこの小説群で作り上げる登場人物同士の関係の発展過程である。「暗い川、おもい櫂」は「飼育」と「不意の唖」を次の段階に発展させたものであるため、主人公が結ぶ関係も発展している。

最後に、「暗い川、おもい櫂」という題名について考察してみよう。この言葉は黒人兵が歌っている歌の一行であるという点でやはり他の小説と同じく黒人に繋がっている。主人公〈僕〉との繋がりもここにあり、歌の川とは主人公の人生でもある。小説の最後にその言葉は繰り返され、主人公の人生との繋がりが強調されている。

暗い川、おもい櫂でこいでゆく。おれこそ人生の暗く冷たい川のどん底でげいげいやっている、とかれはざらつくかたまりを吐きだしながら考えた。

、この小説においてもアメリカ人黒人兵と日本人の主人公の出会いの運命的な意義が浮かび上がる。その出会いがなければ主人公は平凡な生活を続けていたのであろう。これも「飼育」と「不意の唖」のアイディアを発展させる設定である。「飼育」と「不意の唖」と同様に、「暗い川、おもい櫂」におけるアメリカ人との出会いは主人公に侮辱をもたらすが、この不幸は主人公を成長させる。黒人兵の

描写自体は「飼育」の描写と同じであるが、主人公の態度は変わる。黒人兵を父の銃で殺そうとする主人公の設定は、特に「人間の羊」の主人公の無抵抗と著しく異なる。登場人物同士の関係については本章の第二節でより詳しく論じる。

第一節—5、「戦いの今日」

ここまで取り上げた小説では、主人公が主にアメリカ人一人と関わっていた。「人間の羊」においても、米兵は数人であったにも関わらず、実際に〈僕〉に話しかけ、侮辱を与えるのは、娼婦の相手一人である。

しかし、「戦いの今日」では主人公が何人かのアメリカ人に接触する。主な出来事は、白人の〈アシュレイ〉という人物に関わるが、他にも違う兵士に話しかけたり、やりとりをしたりする。小説内部における出来事としては細部に属するものであるが、他の初期小説と比べるとその違いは見逃すことができない。

〈アシュレイ〉の描写は今までの小説の白人の描写と違いはなく、ステレオタイプ的な白人を描いている。「金髪」で、「長身」、「鳶色の眼」をし、「立派な顔」、「良い頸」、「良い額」をしている。一方、数カ所に出てくる黒人登場人物の描写はあまり詳しくないものの、いずれも「大男」で「乱暴」である。その点では、「飼育」や「暗い川、おもい櫂」と違わない。

日本人の主人公もアメリカ人に慣れている。進取性があり、初めて主人公が自分の意志でアメリカ人との出会いを果たす。更に主人公は欧米に関する知識が豊富である。その一例としてオーデンの詩が出てくる。また初期短編では初めて主人公が英語を話す能力を持っている。そのような設定により主人公自身にアメリカ人との出会いの豊富な能力が与えられている。

これまでの小説の流れと異なる、重要な新しい設定としては、中心的なアメリカ人の登場人物である〈アシュレイ〉が、日本人の主人公に依存性を持つように設定されていることである。〈アシュレイ〉は戦争に行くのを恐れて、隠れるために日本人に協力を求める。このような設定は「飼育」における状況に似ているが、依存は〈アシュレイ〉の意志で起こる。、「飼育」の黒人兵が偶然日本人の虜になる設定はここでは逆転して、白人が自分の意志で日本人の助けを求め日本人の所にやって来るのである。それまでの小説では日本人とアメリカ人の出会い方はみな偶然であったから、これは大きな違いである。

「戦いの今日」では日本人の主人公もアメリカ人の登場人物も互いに会う希望を持ち努力をする。このような状況はそれまでの小説にはなく、それまでの小説の状況より明らかにポジティブなものである。初期短編における日本人とアメリカ人の出会いの状況としては、恐らく、一番恵まれているものである。登場人物も最初から関係をかなりうまく作り、しばらくは平和的な共生をする。大江が描く日本人とアメリカ人の一緒の朝ご飯はまるで家族のそれのような、幸せで平和的な描写である。主人公と〈アシュレイ〉が友人的な関係を持つようになり、アメリカの映画と女優などに関する話をたくさんする。これは中道的な試みを語る二つ目の作品である。ここの「中道」とは、日本人とアメリカ人が互いを拒否する極端な立場ではなく、互いを受け入れようとする点で中間的な状況を指す。

しかし、このような恵まれた環境に置かれても、主人公同士の関係はうまくいかずに終わる。〈アシュレイ〉が飲み過ぎて〈僕〉の弟を殴り、後に〈僕〉が〈アシュレイ〉を殴る。そして〈アシュレイ〉は〈僕〉の家から逃げ出し、行方不明になる。それは起きた理由は、まずは酔っぱらった上での喧嘩がどのような理由で起こったかという点が重要である。賭けに負けた〈僕〉の弟は罰として〈アシュレイ〉のいう通りにしなければならなくなった。そこで〈アシュレイ〉が狂い〈弟〉に侮辱的なことを求めて〈弟〉を蹴る。

「跳べ、溝のなかへ跳びおりろ」と〈アシュレイ〉がいった。
弟は真剣な顔で〈アシュレイ〉を見かえし、跳ばなかった。
「跳べ」と〈アシュレイ〉が怒りくるって叫んだ。
「賭けに負けたんだ、跳ばないか」
弟はのろのろした動作で体のむきをかえ、ごく短い時間ためらっていた。弟はなお、その場のなりゆきを冗談に解消するきっかけを狙っているようだった。
"Jap ……"
〈アシュレイ〉が呻くように叫び、弟の腰をけりつけた。弟は体をたてなおすために、むなしく腕と脚をばたつかせながら下水路のなかへ頭からおちこんで行った。

この場面は、小説における平和的な関係が壊れ、アメリカ人と日本人が互いに

敵対意識を持つようになる箇所である。まずは〈アシュレイ〉がそれまでの日本人に依存する状況を逆転し、日本人に命令ができるようになったという訳である。そのような状況におかれた彼は、いきなり与えられた力を感じ、力を使う可能性の誘惑に耐えることができず、自分は弱者ではない、自分の言うことを聞かねばならないということを日本人に強く表現したくなった。、この時点で小説の初めにあったポジティブな設定の一つが失われる。連鎖反応のように他のポジティブな設定もそれに連られて綻びる。

喧嘩の第二の理由は酒である。「人間の羊」の米兵も酔っぱらっているため乱暴であるし、「暗い川、おもい櫂」でも〈僕〉を怒らせたのは酔っぱらった黒人が〈女〉と喧嘩したことである。ここでも〈アシュレイ〉は酔っぱらってから暴れる。その設定はやはり時代を映すと思われる。実際にこのような多くの事件を酔っぱらった米兵が起こしたのである。現在の日本でも米軍基地がまだたくさん残っている現状であるため、この小説は現代人が読んでもよく理解されるであろう。

第三の理由は三角関係である。このパターンも大江の初期小説によく出てくる。もともと対立的な立場に置かれている日本人主人公とアメリカ人は、更に日本人の女を間にして対立・葛藤を深め、必ず衝突が生じる。その関係に関しては、後の第二節—2「登場人物としてのアメリカ人と日本人との対立」で詳しく論じる。

ポジティブな設定がネガティブな設定により除去され、日本人主人公とアメリカ人の衝突が生じる。衝突の細かい描写で見逃せないのは〈アシュレイ〉が〈弟〉に向け「ジャップ」という侮辱的な呼び方を使うことである。その言葉は小説中に何回か繰り返されているが、それは〈アシュレイ〉の言葉の後である。その発言より前のアメリカ人の言葉には、日本人に向けられた直接的な罵りは見られない。本稿が取り上げている他の小説でも同じである。むしろ、日本人がアメリカ人に対し、「黒んぼう」や「アメ公」などの侮辱的な言葉をたくさん使う。「戦いの今日」までの日本人主人公は英語が分からなかったから罵り語も分からず、小説に書いてないだけである、という理解もできるかも知れない。しかし、「ジャップ」ぐらいは時代的には「人間の羊」の時期頃から一般の日本人には分かっていた~~の~~であろう。その証拠の一つは、娼婦の〈菊栄〉が〈かれ〉を同じ言葉を使って「人殺しジャップ」と罵る場面である。本論文で扱う大江作品で初めて直

接アメリカ人から罵倒語が主人公に浴びせられるシーンである。そしてこの喧嘩は明らかに〈アシュレイ〉により始まっている。今までの小説では日本人が事件の発端に関わりがあったと論じてきたが、この小説では初めて総ての罪がアメリカ人にあるという設定になっている。日本人だけが総ての問題を起こすという設定はそれまでもなかったが、明らかにアメリカ人が悪いという設定は初めてである。

この設定はまた、〈アシュレイ〉の性格の描写に大きく関わると考えられる。初めて〈兄弟〉に会った〈アシュレイ〉は、

〔前略〕あえぐように泣きはじめ、かれらの腕のなかでぐったり力をぬき地面に膝をついた。

この引用のような描写は〈アシュレイ〉を弱虫としているが、これもまた本論文で扱う初期小説で初めての設定である。ここまで見てきた小説のアメリカ人は皆力持ちで乱暴だったが、〈アシュレイ〉は無力である。後に酒に酔って侮辱を言いながら暴力を振る〈アシュレイ〉は一時的に「人間の羊」のアメリカ人と同様になる。しかし、これは長く続かない。家へ戻った〈アシュレイ〉は〈かれ〉に投げられ、再び無力な者になる。この設定も喧嘩の罪は〈アシュレイ〉にあるという設定とセットになって、今まで考察してきた初期小説と大きく異なる。

最後に、この小説の題名の意味について考察してみよう。この小説の題名は他と違い小説中には出てこない。引用されているオーデンの詩の行の次の行から取られているのである。後に発表された『我らの狂気を生き延びる道を教えよ』も同じである。

小説に出ている「戦い」とは、二つの戦争を意味する。その一つである朝鮮戦争は直接言及されている。また、太平洋戦争は言及されていないが、占領時代であるため、その影がある。この現実の戦争は歴史的に見ても繋がっているため、ここでは一応一つと捉えることにする。もう一つの「戦い」は、主人公が行う活動で、社会的な戦いである。朝鮮戦争は小説の時間には確かに続いているが、小説の基本的な筋はそれに関わらないから、朝鮮戦争のことではなかろう。では、太平洋戦争がまだ続き、アメリカ人と日本人の間には未だに平和はないと大江が

言いたいのか。否、小説の初めは上記で論じたように確かに平和がある。残るのは社会的な「戦い」であるが、それは如何なるものであるか詳しくみてみよう。

〈僕〉が加わっている運動は米兵が朝鮮へ戦争しに行くことを止めたい、という表面的な動機の上に立つ反戦活動である。日本人がアメリカ人と朝鮮人に死んで欲しくない、戦争を止めたい、という人道主義的な活動が、終戦間もなくにあることは歴史的な事実としては確かにあったが、その発想自体は大江の人道主義の表れであろう。日本を軍事占領する兵士たちの命を大切にする日本人という設定は、大江が見る日本人とアメリカ人の理想的な関係の一つであろう。因みにそのような運動は軍事占領司令部により圧迫されており、むしろそこに本当の「戦い」がある。

しかし、内面的にはもう一つの理由が見える。米兵が朝鮮に行かなければ米国に帰るであろうという発想が、そこにあるのではないかと考えられる。アメリカ人を助けたいと公にいう運動員は本当はアメリカ人に日本を去って国へ帰って欲しいのかも知れない。例えば「人間の羊」で描かれている事件が、歴史的な事実に基づいているとするならば、「戦いの今日」の主人公はそのような状況に非常に不満を覚えるに違いない。現状への不満という設定については、後ほど第七章第三節で詳しく論じるが、大江の小説にしばしば現れる現象である。この不満足の故、彼らはリスクを負ってパンフレットを配っている。しかし実のところ運動員はその運動が成果を出す、、アメリカ人が実際に逃げたくなるとは信じていない。〈アシュレイ〉が現れたら驚き、どうすればいいか分からなくなる。米軍基地はすっかり日本の生活の一部になり、一般の日本人が米兵が側にいるということが気に入らなくてもアメリカ人は簡単には帰らない、というのがここでの大江の現状認識である。だから日本人とアメリカ人は隣人関係を作らなければならない、互いに譲り合う必要がある、というのが大江のメッセージであろう。「戦いの今日」とはその隣人関係構築の試みであり、様々な面で異なる日本人とアメリカ人がよい関係を築くのはどんなに難しいことであるかを語っている小説である。状況がすべて肯定的なものであっても関係が必ずしもうまく行く訳ではない。互いへの思いやりは片方が崩れたら直ぐに破壊される。結果として平和的関係はまたも破壊されるのである。

第一節―6、「後退青年研究所」

この小説は、上記で論じた五篇の小説とはかなり違い、同じシリーズの小説ではない、という判断もできる。しかし、発表時期や小説内の時間、アメリカ人と日本人の出会いというテーマは他の小説と同じであるため、この小説も本論文で取り上げる。それぞれの小説の発表時間と作品中の時代設定に関しては第二章で論じた通りである。

「後退青年研究所」に出てくるアメリカ人は、民間人の心理学者である。初期短編ではここで初めて民間人が登場する。また、その描写は小説のごく僅かな一部であり、他の小説と比べると一番短いであろう。

その民間人である〈ミスター・ゴルソン〉とは次のような男である。

> 標準的な明るい米人で短い油煙色の口髭こそ生やしているが、まだ三十歳に達してはいない男だった〔後略〕。

この描写はそれまでの小説と違い、ステレオタイプ的な金髪の大男を描いてはいない。大江は日本人のアメリカ人に対する態度を小説上更に一歩進め、ステレオタイプを廃止する。

主人公の〈ぼく〉も以前の小説の〈僕〉らより一番アメリカ人に慣れており、アメリカ人と働くという関係まで進む。しかし、〈僕〉には〈ゴルソン〉がなぜその仕事をしているかは分からないし、〈ゴルソン〉がするに嫌悪感を抱いているし、自分のやっている受付の仕事などにも積極的ではない。それはただお金のための仕事であるし、「ぼくにはあまり深刻なコムプレクスはない」といった理由で、とにかく〈ぼく〉は〈ゴルソン〉のオフィスで働く。

> もっとも、そのオフィスで働いていたあいだ、ぼくが一種の自己嫌悪からオフィスの機能や目的に対して冷淡であり、深く知ろうとしなかったということも一方にはあるわけだ。

とあるように、〈ぼく〉にはこの仕事に対してやる気をもたない。

本論文で取り上げる初期小説では「後退青年研究所」は一番遅い時期に書かれ

たものである。また、日本人主人公のアメリカ人に対する態度は最も無関心なものである。これは「暗い川、おもい櫂」と「戦いの今日」に続き、中立的な関係の試みを描く第三作目であり、アメリカ人と日本人の関係が一番うまく行っている内容である。日本人はアメリカ人を嫌っても日本の生活の一部としてしか扱う道はなく、一緒に生活をしなければならないというメッセージは「戦いの今日」から引き継がれた主題になっている。「戦いの今日」との違いは、アメリカ人を好きになろうと思わなくとも、ただ平凡な関係があれば一番うまく行くだろう、というメッセージが含まれているようであることである。

この小説の重要なポイントは、アメリカ人が登場しても直接その人物にスポットライトが当たることはなく、オフィスにやって来る学生たちの問題に焦点が当てられているということである。すでに述べたように、大江は徐々に、アメリカ人はよいか悪いか、という点をめぐる筋書きから、日本人とアメリカ人の関係はもっと複雑であり、日本人の間にも様々な問題があるということを中心的に扱うストーリーに移ったと解釈できる。「人間の羊」でも後半の〈僕〉と〈教員〉の対立は、同じようにアメリカ人の出現により表面化する日本人同士の問題である。、アメリカ人はすでに日本の生活の不可欠な部分になったから、日本人はアメリカ人のことを悩むよりは日本人同士の問題を気にすればいいのではないか、というメッセージがここには読み取れる。この小説の題名も、他の小説と違い、アメリカ人のオフィスを意味するが、実際は日本人の問題を話題にするのである。しかし、〈ぼく〉がアメリカ人を完全に忘れることは無理であるし、在日アメリカ人の存在にはそれなりのいい面があると認めているであろう。なぜなら、アメリカ人は〈ぼく〉に日本人同士の間ではできない体験を与えるし、日本人同士の間でものを見る目を与えているからである。

〈ぼく〉は学生の問題について知ってはいたが、ゴルソン・オフィスで働くことにより、その問題の新たな面を見つけ新しい目でそれを見ることができるようになる。しかし、ここで大江が言いたいのは仕事はアメリカ人にもらえばいいということではもちろんない。広い意味では日本人には他の文化との接触が必要であり、様々なものを外から受け入れ自分のものにすることは日本人にも有益である、ということであろう。

以上、それぞれの小説におけるアメリカ人の描き方、登場人物としてのアメリ

カ人の意義、そして日本人主人公とアメリカ人の関係について論じた。まとめると、六篇の小説を一連のものと捉えると、これは、大江が日本人とアメリカ人の間の関係の様々なパターンを試み、日本人とアメリカ人の間の平和は如何なる状況で可能かという疑問に答えようとしたものであると言える。それぞれの条件を持つ日本人とアメリカ人の出会いは、いい点もあれば悪い点もあるため、平和的な関係の構築は難しい。そうではあるが、その平和の追求はとにかく必要であり、問題が起こっても日本人は必ずその関係から何かを得る。そして日本人にとってアメリカ人の存在は結局プラスに働くのであり、アメリカの文化、さらにはより広く、外国の文化の影響を受けることは日本人にとってよいことである。こういった点がこの一連の小説から得られるメッセージであろう。

第二節、主人公同士の関係

本節では、前節で論じてきたアメリカ人登場人物の描写とそれに関わる日本人主人公の描写に基づいて、登場人物同士の関係を論じる。

なお、ここは登場人物を三つの組みに分けて論じる。第二節―1 に、アメリカ人同士の関係を論じるが、アメリカ人の中の分裂、、白人と黒人の違いと小説におけるその違いの意味に関して論じる。第二節―2 では、対立的な存在である日本人とアメリカ人の関係に関して論じる。そして第二節―3 では、軍人と民間人の差、そしてこの二つのタイプの間に生じる関係に関して論じる。

第二節―1、白人と黒人との対立

ここまで論じてきた六篇の小説の中でアメリカ人の登場人物は、白人か黒人であった。それぞれの小説における白人と黒人の登場人物にはそれなりの理由があったが、ここではその対立がどのようなものであったかを、より詳しく論じる。

「飼育」には白人は直接出てこないが、暗示されている箇所はある。例えば、「敵、あいつが敵だって？」、「黒んぼだぜ、敵なもんか」、「黒んぼは敵じゃないからな」という〈兎口〉の発言がある。米軍人は白人であるというイメージが戦争中には強く、黒人は意外であったことを意味する。しかし、時代が進み日本人が黒人を見ることに馴れてゆくため、「暗い川、おもい櫂」や「戦いの今日」で出てくる黒人はそのような驚きを起こさない。

先にすでに言及したように、Hillenbrand は、大江は当時の日本における黒人のステレオタイプを意識的に使うと述べている[68]。その固定観念とは強力な大男、臭いがする、幼稚、原始的、凶暴といったものである。ただし、臭いに関しては主人公が《敵》に関して言っており、また後の「戦いの今日」では白人の主人公のことも臭うと言っている。固定観念の意識的な使用により、大江は表現したいアイディアを強調する。

「飼育」において、仮に黒人を白人と取り替えたならば、同じストーリーにはならなかったであろう。この点を理解するには、「飼育」とよく似た設定になっている「不意の唖」と比較するとよい。そこでは村人は警戒と恐怖の交じった不安感で外国兵を見てはいるが、外国兵は異人として排斥されるとともに憧憬の対象としても描かれている。その外国兵は「まっ白な皮膚と陽に輝やく金色の体毛とをもって」いる白人であった。また、「不意の唖」の白人兵が「外国兵」と表現されて、日本の外の意味を包括する領域の「外国」を意味しているのに対して、「飼育」の黒人兵は彼が黒人であることが分かった時点から「敵」の意味領域からはずれ、「黒んぼ」という差別的な意味しか持たなくなっている。

このような白人兵と黒人兵の表象の違いは「飼育」における黒人兵のモチーフを考える際、最も重要な意義を持つであろう。同じ外国兵でありながらも白人が憧憬の対象になるのに対して、黒人は動物的なイメージに形象されるという「白人対黒人」の対立的な構図は、大江が白人と黒人を作品の構成のために使い分けていたことを示しているからである。例えば「飼育」においては、「村」に下りてきた「異人」が黒人兵であったからこそ、動物的なイメージあるいは村人の認識が彼に向けられた。そして「飼育」は大江の解説によると、「監禁されている状態・閉ざされた壁の中に生きる状態」[69]というモチーフの小説であるため、監禁され飼育される黒人兵という存在は、戦前から戦後に変わる時代状況を示すために設定されているようである。

黒人兵は「村」にとって異人だったから動物的な存在として見られたのではなく、黒い肌を持っている黒人だったから動物的な存在になり、そして「飼育」の中で飼育される側として機能しているのである。

「あいつは獣同然だ」と黒人兵を野蛮な動物に見立てる村人の視線は、「黒人兵＝黒んぼ」という、すでに「村」の中で流布している黒人のイメージに基づい

ている。〈僕〉と兎口が黒人兵を最初から「黒んぼ」と認識し、「黒んぼだぜ、敵なもんか」と黒んぼだから「敵」ではないと考えるなど、村人の認識は黒人兵が村に入ってきた時点ではなく、すでに意識の内部に根を張っていたものである。白人が村に降りてきたら、敵対意識が消えず、同じアメリカ人でも完全に違う扱いをされたはずである。

黒人兵に対する村人の意識は、《町》の村に対する意識の影響も受けているとすでに述べたが、兪承昌は、それは近代欧米文明の黒人に対する視線の反映であると述べる[70]。その概念は主に西欧文明の優越意識に基づいた野蛮の象徴としての黒人認識である。要するに、黒人兵は「飼育」の差別構造を近代文明論的な差別構造につなげる機能をしている。このような解釈はできるかも知れないが、大江が小さい山村を描く際に欧米文明の人種差別的な概念を念頭に置いていたかは、筆者は疑問に思う。第三章の第一節で論じたように、これらの小説における黒人への態度は、むしろ日本の一般的なステレオタイプであるから、欧米文明の人種差別的な概念とは違う概念である。さらに、小さい山村に置かれた主人公は、日本の周りの世界から切り離されている以上、同じ日本の他の土地からも切り離されているから、その周りの世界の概念を知って抱くことはあり得ないと筆者は解釈している。「飼育」におけるこの村の切り離れた様は冒頭文の「村から《町》への近道の釣橋を山崩れが押しつぶす」という文章で最初から表現されているが、村の他の世界への唯一の繋がりは片足でゆっくりと稀にしか来ない〈書記〉であったこともこれに加わる。日本が戦争時代に周りの世界から切り離されているのと同様に、同じ日本の他の土地からも切り離されているから、その周りの世界の概念を知っていることはあり得ないように思われる。周りの世界の影響をほとんど受けていないという設定になっている小説の山村には、その周りの世界の概念が入ることはありえない。しかし、確かにこの小説では黒人は野蛮な扱い方を受け、村人は黒人兵を自分たちよりも低い身分の存在とみなしている。

また、右の兪の論に従うと、黒人兵はいつも動物的な扱いをされるはずであるが、次に黒人が出てくる小説、「暗い川、おもい櫂」ではそうではない。主人公の〈僕〉は黒人兵を「大したやつ」と思い、黒人に会ったことを嬉しく思っている。更に「戦いの今日」では、黒人は高度な教育を受けている者もいるということが強調されている。時代が進むごとに変化して行く日本人の黒人に対する意識の変

化がこのような描写の違いになっていると思われる。日本人は戦争中には黒人のことをほとんど知らなかったので、「飼育」では動物的な扱いになった。しかし、占領時代は黒人兵も多数日本に上陸したから、黒人への興味や関心も大きくなった。その試みは「暗い川、おもい櫂」で描かれている。そしてある程度の時間が経って「戦いの今日」で描かれているように、日本人はすでに黒人について多くの知識を持つようになった。そして日本人の黒人に対する態度も変わった。

黒人のイメージに進歩が見られるようになっても、白人の登場人物のほうがまだ多い。その白人兵に対してもステレオタイプ的な描写は非常に多く、アメリカ人＝白人＝金髪大男という設定は何回も繰り返されている。しかし、その描写も日本人のアメリカ人に対する知識が増えるとともに少しずつ変わって行くという点は重要である。「戦いの今日」で大江は、当時の日本人にはおそらく信じがたいような弱い白人を描く。この描写は勝利者であり占領者であり圧迫者であるアメリカ人のイメージと相反している。しかし、完全に弱者にすることもあまり意味がないためか、小説の最後にそのアメリカ人も権力を誇示する設定になっている。

では、「戦いの今日」の〈アシュレイ〉を黒人兵で置き換えることは可能であろうか。否、このような取り替え方はストーリーを壊すであろう。なぜなら、白人と黒人はまだ同じ扱いではなく、強くて乱暴な者という黒人兵に対するステレオタイプはまだ残っている。設定としては〈アシュレイ〉は弱者であるが乱暴な弱者はあり得ないから大江は主人公として白人を描いたのであろう。

このような白人と黒人の扱い方の差は、戦後の日本の現状を表している。しかし、大江はそれよりも細かく白人と黒人を見ている。アメリカ人同士の間で存在する肌の色の差別は日本にもアメリカ人と一緒に伝わったということに大江は気づいている。、それは占領時代が日本に紹介したアメリカの文化のネガティブな一面である。「戦いの今日」では娼婦〈菊栄〉の悩みを聞く憲兵隊は、〈菊栄〉の話が黒人のことであると分かった途端に聞かなくなり「ニッガー」と呟く。この人種差別は〈菊栄〉ら日本人には不愉快に感じられる。大江はこれによってわざと日本人主人公の黒人に対する態度を優しくさせているようである。ここまでの小説の流れで見ても黒人に対する態度は徐々にと好意的になることから、大江が日本における黒人に対する差別がなくなるように希望を持って描いたのではないかと解釈できる。

しかし、黒人のイメージだけをよくすると、それは白人の登場人物にマイナスになるから、大江は白人のイメージも次第に良くしていった。黒人に対する態度だけではなく、広くアメリカ人、総ての外国人に対する日本人の態度がそうなる将来の状況を大江は期待した。この一連の小説も、アメリカ人の様々な面を紹介し、日本の生活におけるアメリカ人とアメリカ人がもたらす文化の役割を紹介することで、日本人によるアメリカ人の捉え方が変わるとよいと願ったものだろう。

第二節―2、アメリカ人と日本人との対立

本章の対象になった一連の小説は、日本人とアメリカ人の出会いを題材にするが、日本人とアメリカ人の違いが小説の展開の主な動因になっている。本論文全体で論じる〈政治的人間〉と〈性的人間〉の関係はこのアメリカ人と日本人の関係から発展してきた関係であると筆者が主張したい。

この一連の小説で大江が扱う日本人とアメリカ人の主な違いは、次のようなものである。

まず、「後退青年研究所」を別とすれば日本人は全員民間人であり、アメリカ人は全員兵士である。その差は生活上の立場や生活の捉え方に大きく影響する。第二に、日本人主人公は少年か青年、大学生であるが、アメリカ人はほとんど年上か大人である。ただし、「戦いの今日」の〈アシュレイ〉だけは主人公とさほどの年齢差がない。第三に主人公の〈僕〉はいつも定住者であるという設定になっているが、アメリカ人は余所からやってきて小説の最後に去り、主人公とは関係がなくなる。

魏浦嘉は、外国人が日本人に対立することに対し、もう一つの対立が小説内にあるとする[71]。それは日本人同士の対立である。そのような二重対立は「飼育」「不意の唖」「人間の羊」によく見られる。主人公の立場からは他の日本人との関係がより重要であり、ほとんどの小説でそれがメインテーマになっている。しかし、アメリカ人の存在がそこになかったならば、主人公は周りの日本人と彼自身の間にある問題に気づくことはなかったろう。アメリカ人の存在は日本社会に存在する問題を明らかにするのであるから、アメリカ人の登場人物は小説にも必要である。先述のように、アメリカ人は日本人同士の間でできない体験を与えるし、日

本人同士の間でものを見る目を与えているからである。

さて、大江は様々な設定を試み、日本人とアメリカ人のあいだの平和を追求するが、そこには一定の接触のパターンが見られる。

初対面の日本人とアメリカ人は互いのことを怖がり、用心深く接触の準備をする。後に慣れ、興味を持ち相手を見ることになる。外国人兵も慣れ面白がり眺め返し微笑み返す。しかし、理解不足で問題が起こり、日本人に被害者が出て、日本人の態度は元の敵意に戻る。外国人兵が去る。このパターンは後の小説にも多少の変更をして現れる。これは米軍占領の歴史に似ており、それを喩えるものだと考えられる。

以上取り上げた六篇のなかで「後退青年研究所」以外のすべての小説が、このパターンに収まる。

これらの小説におけるアメリカ人の登場と日本人との対面は下記の点で興味深い。アメリカ人が何処か分からない所からやって来る。具体的に見れば「飼育」では空から降りてくる。「不意の唖」ではアメリカ人が霧の中からジープに乗ってやってくる。「人間の羊」では霧の中から現れるバスの中に登場する。「暗い川、おもい櫂」では〈僕〉がそれまで未知の世界であった隣の部屋から黒人が現れる。そして「戦いの今日」では日本人が入れない未知の世界である米軍基地から〈アシュレイ〉が現れる。「後退青年研究所」においてのみ、その出会いは平凡である。

日本人とアメリカ人が対面することで生じる対立には、コミュニケーションの問題が重要な役割を果たしている。最初の三篇では主人公は英語が分からない。そして日本人の登場人物たちは、ある程度そのことを自慢に思っているようにも見られる。例えば、「人間の羊」ではつぎのようになっている。

> 外国兵が何か叫んだ。しかし僕には、その歯音の多い、すさまじい言葉のおそいかかりを理解できなかった。外国兵は一瞬黙りこんで僕をのぞきこみ、それからもっと荒あらしく叫んだ。僕は狼狽しきって、外国兵の逞しい首の揺れ動きや、喉の皮膚の突然のふくらみを見まもっていた。僕には彼の言葉の単語一つ理解することができなかった。

この部分では、主人公は何も「理解でき」ず、ただ出来事を語るのみである。

狼狽はある。彼はフランス語を勉強しているから、ある程度普通の日本人より外国語の能力はあるはずである。しかし周りの他人の日本人と同様に、自分とアメリカ人の間に目に見えない壁を築く。言葉はその壁を通っていかない。(ただしこの時、主人公は「羊撃ち」という言葉だけが分かる。「羊」という言葉はその小説の表題にもなっているが、考えてみれば、日常的な言葉ではないから、主人公がなぜその言葉を理解できるのか、謎である)。「飼育」「不意の唖」「人間の羊」の三篇では主人公はアメリカ人の言葉は分からないという設定が繰り返し使われている。この三篇の展開性から考えても、「人間の羊」の段階でのアメリカ人に対する理解はまだ充分ではなく、アメリカ人との衝突の理由の一つも言葉が通じないことである。

だが同じ日本人でも、主人公と対立的な存在である者はアメリカ人の言葉を理解する。「人間の羊」で唯一アメリカ人の言うことを理解する人物は娼婦である。後の小説、「戦いの今日」や「暗い川重い櫂」でも娼婦は同じような役割を果たす。当時、彼女たちは通称「パンパン」と呼ばれていた。「パンパン」とは第二次世界大戦後の日本で駐留軍兵士相手の街娼をいう言葉であるが、この存在は大江の初期小説から中期小説にかけてしばしば登場する。大江はこの「パンパン」のイメージを利用し、普通の日本人とアメリカ人の間に媒介者のような存在として置く。言葉だけではない。出来事や事件も「パンパン」を通じて生じる。「人間の羊」では事件は

あんたたちの裸は、背中までひげもじゃでさ、と女はしつこく叫んでいた。
あたいは、このぼうやと寝たいわよ。

と言い出す「パンパン」の行動によって始まった。したがって、「パンパン」がそこにいなければ事件が発生しなかった可能性が高い。、この事件で不可欠なのは第三者の存在であった。この小説の事件に必要な三角関係は、日本人の主人公、「パンパン」とアメリカ人から成る。同じようなパターンはまた「戦いの今日」や「暗い川、おもい櫂」でも繰り返される。

この娼婦の存在によって日本人とアメリカ人の対立に第三者が入る訳である。対立は三重になるが同じアメリカ人と日本人の対立があることには変わりはない。

「不意の唖」の通訳も同じ役割をする。「飼育」にはその媒介者はおらず、「後退青年研究所」にもいない。、小説の展開で見れば媒介者が登場するのは、日本人とアメリカ人の関係が発展していく中期の作品においてである。「飼育」における日本人とアメリカ人の出会いは初対面であるため初期にあたる。「後退青年研究所」はこの一連の小説には時期的に最後になる。残る四篇は中期にあたり、そのすべてに媒介者が現れる。その時間的な設定では、媒介者の役割が浮かび上がる。媒介者は主に通訳や双方の説明をして、日本人とアメリカ人をつなぎ合わせる。そのつなぎ目は重要であるから「不意の唖」の設定のように、その人物が悪ければ日本人とアメリカ人の関係はうまく行かない。

日本人とアメリカ人の関係の発展では、特に初期では仲介者がなければ進まない。「人間の羊」に見られるように日本人がアメリカ人の隣に座っても、媒介者の娼婦が動かない限り日本人がアメリカ人に接することはなかったのである。そこでまたコミュニケーションの困難が重要な問題となる。

主人公にとって媒介者は、アメリカ人と一緒におり、最初の印象は悪い。しかし、時間が経つにつれ態度が軟化し「戦いの今日」の時期には仲良くなりさえする。その小説では初めて娼婦の名前も出る。媒介者の属性も徐々にポジティブになり、例えば同じ「戦いの今日」では娼婦は発音の綺麗な英語が話せるようになっている。

しかし、「戦いの今日」や「暗い川、おもい櫂」では媒介者が女であるため、それは更に問題を起こす。日本人主人公とアメリカ人と娼婦の間に三角関係が生じ問題が複雑化するのである。後に発表された大江の小説、例えば「部屋」でもそのような設定が繰り返され、また「われらの時代」ではより詳しく取り上げられている。

次の段階として、日本人主人公は英語ができるようになり、アメリカ人とのコミュニケーションが自分でできるようになると、媒介者の役割は不要になる。「戦いの今日」では娼婦はすでにコミュニケーションの手伝いはせず、最初に主人公にアメリカ人を紹介するという役割しかない。「後退青年研究所」では媒介者は全くなくなる。主人公は自分で総ての関係を作れるようになったからである。

また興味深いのは、主人公と外国人のそれぞれの小説における立場である。「飼育」においては黒人兵が補虜であり、主人公は自分のことを明らかに黒人兵より

上であると考えている。「不意の唖」と「人間の羊」においては米兵が力を持っており、ある程度最初から米兵と主人公の間に対立がある。主人公は米兵に対する自分の位置を明確に述べない。「戦いの今日」において主人公は米兵を手伝おうとしているが、自分の立場を米兵と同じレベルに置く。「後退青年研究所」では主人公は自らの意志でアメリカ人を自分の上司とする。このような変化にも発展性が見える。そこには小説の背景の時代の事情が反映している。占領時代が終わり、アメリカ人が圧迫者ではなくなった時代に入ると、「後退青年研究所」で描かれるような日本人とアメリカ人の関係ができる。

最後に、大江の自ら定義した主題「監禁状態」が日本人とアメリカ人の対立にどのような役割を果たすかを見てみよう。言ってみれば、監禁状態はすべての小説に共通し、それらを繋ぎあわせる状況でもある。主人公と米兵の接触はいずれの作品のなかでも限られた空間に置かれている。

「飼育」と「不意の唖」においてはそれは山で囲まれた村である。「飼育」ではそれはさらに地下倉に区切られ二重になる。また、主人公が黒人の虜になる場面では閉ざされた村の中の閉ざされた地下室の中の虜の腕の中で閉ざされている主人公が三重監禁空間に置かれている。「不意の唖」ではまた、閉ざされた村の中でも主人公が自分の内面に自分を閉ざし、言葉による外とのコミュニケーションを拒絶する。「人間の羊」ではその監禁空間はバスであり、また更に主人公は〈教員〉を避けようとして自分の内面に自分を閉じこめる。「戦いの今日」では閉ざされた空間は比較的少ないが、全くないとは言えない。主人公と米兵が郊外の家で身を隠す部分では、明らかに閉ざされた状態になる。また、喧嘩が起こった場所も小さい飲み屋である。「後退青年研究所」は小さいオフィスの中に置かれ、その閉鎖された空間は主人公により「地獄」と呼ばれる。主人公とアメリカ人の間で問題が起こるのは、ある程度その閉鎖された空間のためでもある。日本人とアメリカ人は両方とも限られた空間に閉じ込められて、互いから逃げられないのである。、この一連の小説における「監禁状態」は日本人とアメリカ人の関係に直接的に結びついている。日本人とアメリカ人は同じ閉ざされた空間の中で対面して関係を結ぶ。そしてその閉鎖的な空間は日本人とアメリカ人の間の問題の原因の一つにもなる。対面の原因、関係決着の動因、関係の破壊の原因の一つ、といった三つの役割を果たしながら、小説の展開の全ての過程に関わるのである。

第二節―3、軍人とそれ以外のアメリカ人の対立

「飼育」の冒頭では、作品の時間的な背景になっている戦争末期の暗鬱な状況を想起させるような谷間の村の風景が描かれている。特に「仮設火葬場」やそこに採集のため「死者の骨の残り」を探しにくる子供たちは、戦争がもたらす破滅や破壊、そして戦争の絶望的な状況を象徴している。本論文の研究対象になっている小説はすべて、戦争に対する反対と占領に対する反対という大江の意志に充ちている。この一連の小説における日本人主人公とアメリカ人主人公の間に起こる問題の大きな原因の一つは戦争である。大きい目で見ると、大江が描く同時代の青少年の見窄らしい状況は全て戦争の残響である。戦争が作りだした戦後の日本の状況に苦しみながら生活を送る主人公は、大江の戦争批判を象徴する形象である。

戦争を嫌った大江が兵隊について書こうとしたのはなぜであろうか。それはまず、時代の影響であると考えられる。戦後の日本は米軍なしには描くことができない。占領軍の存在は日本史の一時代を成すほど大きなものであり、大江は本論文で扱う小説以外の小説でもその存在に言及する。第二に大江が米兵を描いても、その描写を平和の構築のために使おうとしたと考えられる。そのため、大江は米兵を戦うものとしては描かず、普通の人間として描いたのである。それぞれのアメリカ人は内面的にも違い、性格も違う。小説の中心となるのは日本人主人公であるため、アメリカ人の描写は比較的少ないが、それにも関わらずその存在は確かにある。

大江はわざと米兵に民間の日本人を対立させた。民族の違いだけでなく、生活のスタイルも対立させるためである。

しかし、アメリカ人の民間人も小説に出てくる。「後退青年研究所」に登場するのは総て民間人であるから、他の一連の小説との違いが多くある。一見、これ以外の作品には民間人が登場しないようにも見えるが、「戦いの今日」の〈アシュレイ〉はまた他の軍人登場人物と違う。本章の第一節―5 に「戦いの今日」に関して詳しく論じた際、〈アシュレイ〉の弱さに注目したが、その弱さにより彼は兵士として扱いにくく、民間人的、一般人的に描写されている。何よりも〈アシュレイ〉はアメリカに戻り元の民間人になりたいと発言するのである。

大江が軍人にも、一般人的な〈アシュレイ〉にも、普通の人間の側面を探し出

し、同情しうる箇所を見出そうとする。それは大江の人道主義的思想を表している。しかし、アメリカ人が日本に新しい概念や新しい体験をもたらすといっても、彼らが皆聖人である訳でも悪人である訳でもない。民間人であれ、軍人であれ、大江に一番重要なのは人間的な関係、平和な関係の可能性である。そしてここまで論じてきたように、大江は小説上で様々な設定を通じてその可能性を探る。「飼育」のようにユートピア的な設定、「不意の唖」「戦いの今日」「暗い川、おもい櫂」のように日本人主人公が冒頭文でアメリカ人に対して好奇心を持つ設定、「人間の羊」のように日本人が最初からアメリカ人に対して無関心である設定、そして「後退青年研究所」のように主人公はアメリカ人を嫌っているが、ともに仕事をせざるを得ない設定、というようなっ様々な試みがなされている。

第三章の結論

大江の初期短編小説では、主人公がまず自分の外の世界とのコミュニケーションの経験を得る。主人公は今まで知らなかった状況と今まで会ったことのない人間である外国人と遭遇を体験する。今まで知らなかった世界とのコミュニケーションの困難を経て、主人公がその世界を知るようになり、自分をより深く知るようになり、自分を今までと一層違う人間と考えるようになる。、こうして彼は成長する。

また、主人公が外国人と直接に会うことで、外国人の既存のイメージがいかに実際の外国人と違うかが明らかになる。しかし、問題が起こっても外国人を特に批判する訳ではない。主人公は総ての罪が外国人にあるとは思わない。

また、主人公は外国人との接触により、自分の周りの日本人に対する捉え方を変え、自分と周りの人との違いを実感する。

大江の初期短編の世界には、大江の戦後状況に対する現実認識と歴史認識の一断面が象徴的にあらわれている。大江は「日本人」—「白人」—「黒人兵」の関係を優越な存在と劣等な存在に区分し、その中から生じる文明と野蛮の自己規定が崩れていく過程を、外部世界と遮断されている空間で生じた、戦争と差別を象徴する米兵と〈僕〉との関係を通して提示しているのである。、戦後という地政学的位置の激変にともない、近代日本がはらんできた優越と劣等という排除と差別から起因する内部的矛盾を、黒人兵と白人兵をモチーフ化することで立体的に構造化させ、近代日本の歴史を相対化する一つの不可欠な要素として機能させているのである。

言い換えれば、大江の初期短編における米兵の登場と、日本人とアメリカ人の関係、その後ろにある日本とアメリカの関係は、戦後の大江の日本および世界の捉え方を映している。戦後日本が敗戦によってアメリカに占領されたという「破滅とか屈辱とかのイメージ､絶望的なイメージ」の反映を意味するだけではなく、深層部に起こっている日本人の中のアメリカ人に対する態度の変更の投影をも意味するのである。侮辱的な状況におかれた日本人はアメリカ人を嫌っても、日本の生活の一部として扱う以外に道はなく、一緒に生活をしなければならない、というメッセージは、初期の大江の一連の作品を貫いている。

以上、それぞれの小説におけるアメリカ人の描き方、登場人物としてのアメリ

カ人の意義、そしてそれに因む日本人主人公とアメリカ人の関係について論じた。グリブニンの評論では、大江は「色々な文化の相互浸透と相互影響なしには人間の発展はあり得ない」（без взаимопроникновения культур развитие человечества невозможно.）、と考えていた[72]。六篇の小説を一連のものと捉えれば、大江は日本人とアメリカ人の間の関係の様々なパターンを試み、日本人とアメリカ人の間の平和は如何なる状況を必要としているか、という疑問に答えようとする。それぞれ異なる条件を持つ日本人とアメリカ人の出会いは、肯定的な面とともに否定的な面もあるため、平和的関係の構築は難しい。しかし、その平和の追求はとにかく必要であり、問題が起こっても日本人は必ずその関係から何かを得てはいる。

こうして大江作品は、アメリカ人はよいか悪いか、という問題設定から、日本人とアメリカ人の関係はもっと複雑であり、日本人の中にも様々な問題がある、というテーマに移っていったと言うことができる。、アメリカ人はすでに日本の生活の不可欠な部分になっており、日本人はアメリカ人のことを悩むよりは日本人同士の問題に目を向けれなければならないのではないか、というメッセージもここから読み取れる。しかし、アメリカ人を完全に忘れることは無理であるし、アメリカ人の存在にはそれなりのいい面がある。アメリカ人の存在は日本社会に存在する問題を明らかにするのであるから、アメリカ人の登場人物は小説にも必要である。そして日本人にとってアメリカ人の存在は結局はポジティブに働くのであり、アメリカの文化、より広く外国の文化の影響は日本人にはよいものである、というのがこの一連の小説のまとめたメッセージであると思われる。ここで扱われている作品は、通常「絶望・屈辱」といった極めてネガティブな感情の表れとして読まれるが、大江の主人公はそれを乗り越えようとしている。困難を乗り越えるきっかけの一つは、日本人とアメリカ人の出会いである。

日本人とアメリカ人の関係を扱う大江の小説は、初期作品以外にもたくさん見られる。アメリカ人の他に様々な民族との関係が大江を悩ませる。一例としては、現代日本における様々な民族と混血児が登場する「呼び声」という小説を挙げることができる。ただし、大江は〈民族〉という概念から徐々に離れていく傾向が見える。この初期小説の〈アメリカ人＝強者〉と〈日本人＝弱者〉の関係は、〈強者〉と〈弱者〉という観点への移動を見せ、そのまま中期の〈政治的人間〉と〈性的人間〉の関係に移る。

第四章　初期小説における〈政治的人間〉と〈性的人間〉のモチーフの再検討
—「飼育」のロシア語訳を中心に—

大江健三郎の小説は、資料Ｉで紹介するように、本論の筆者の母国のロシアで二十篇ほど翻訳されている。管見の限り、翻訳されたもののうちに初期小説は八篇である。本章では主に「飼育」の V.スミルノフによる翻訳[73]を扱うが、「不意の唖」の V.グリブニンによる翻訳[74]も視野に入れる。この小説は初期の代表的な小説であるため、大江の原文だけでなく、ソ連時代の翻訳を通しても同期の大江の傾向を見ることができる。

この二人の翻訳者に関して説明しよう。V.スミルノフ（В. Смирнов）に関する情報はほとんどなく、一九七〇年代に現代日本文学の翻訳に関わった人物であること以外は不明である[75]。「飼育」の翻訳以外に、星新一の短編小説の訳にその名前が見られる[76]。V.グリブニンは、ウラジーミル・セルゲエヴィチ・グリブニン（Владимир Сергеевич Гривнин,一九二三年生まれ）であり、モスクワ東洋学大学を卒業し、外国文学図書館に勤めた後、アジアアフリカ大学で日本語、日本文学、日本社会、日本人心理学などを教えた。現代日本文学作品の翻訳を多数出版し、その中には安部公房、芥川龍之介、川端康成、遠藤周作などの作品がある。

本章の議論は二つの考えに基づいている。第一に、大江の初期小説には、後年のテーマの芽生えがある。そのため、中期小説に発展した〈政治的人間〉・〈性的人間〉のモチーフをここに見ることができる。〈政治的人間〉・〈性的人間〉のモチーフは大江健三郎の中期小説において大きな位置を占めているため、すでに多くの研究者に分析されている。

また第二に、翻訳はある意味で解釈の一種である。文学作品を訳すという作業は、原文の意味を単に伝えるのではなく、原文の意味を理解した上でそれを違う言葉で言い改めることである。ここには第一に訳者の解釈が入り、第二に原文の意味の幾分かが落とされる可能性がある。それゆえ、翻訳とは原文の解釈を意味する。翻訳と原文の差を分析することにより、原文の理解を深め、新たな面からその内容を見ることができるのではないだろうかと考える。

この二つの発想に従って、本章では初期小説の翻訳を通じて〈政治的人間〉・〈性

的人間〉のモチーフを再検討する。この作業により、大江の初期小説における〈政治的な人間と性的な人間の関係のモチーフの新たなる解釈の可能性を追求したい。

第一節、大江の初期小説における〈政治的人間〉と〈性的人間〉

第一章に記した〈政治的人間〉・〈性的人間〉の定義は、「飼育」が書かれてから七年ほど経って行われたものである。「飼育」の執筆時期に、作家にはまだそのような明らかな思想はなかったであろう。しかし、その思想の芽生えはすでに小説の中に現れている。

森川達也などが指摘するように[77]、「飼育」における主人公の性的な側面は自然の中に置かれ、プリミティブなものである。同様に政治的な側面も、後の小説と比べて明確には書かれていない。ただ明らかなのは、この小説に〈政治的人間〉・〈性的人間〉という対を当てはめると、主人公は〈性的人間〉に当たり、黒人兵は〈政治的人間〉に当たるということである。本論文で扱うその他の初期小説ではこの対立は日本人対アメリカ人の対立になる。

第二章から第三章にかけて論じてきたように、この対立は戦後日本の歴史的・社会的状況の大江による写しである。後ほどの小説では日本人主人公はそのまま〈性的人間〉に発展した。アメリカ人登場人物に担われた役割は、まずは日本人の形で現れるようになって、次第に〈政治的人間〉となった。

第二節、ソ連時代の海外小説の翻訳の特徴

大江健三郎の小説のロシア語訳の大部分はソ連時代のものである。

大江健三郎の翻訳や他の現代日本作家のものはソ連における海外の社会主義作家の需要に応じてなされたものである。当時のソ連において、国内の作家はもちろん、海外の作家も共産主義や社会主義的な思想を示すものとして扱われた。ソ連と同じ思想が世界中に広まっている証拠として、プロパガンダに使われたからである。実際に多くのプロレタリア文学作品や社会主義的な発想の作家の作品がソ連時代にロシア語に訳された。

社会的な問題を取り上げる大江はソ連の思想家にぴったり合うように見えた。大江の主な作品は訳され、ソ連では有名な作家となった。

しかし、原文と翻訳は同じではない。ここにはソ連の検閲の問題がある。

ソ連の検閲機関は「文学・出版総局」（Главное управление по делам литературы и издательств (Главлит)）、略して「グラヴリット」と呼ばれる。機関としては一九二二年にソ連文部省の一部として発足し、後に独立した局になる。この機関はソ連で出版された全ての一般的な出版物を事前検閲した。一部の出版物、共産党が出版したものや軍事機関が出版したものはグラヴリットの管轄外であった。

ソ連のイデオロギーは出版禁止事項を決め、ソ連国民に危険とみなされた文書を禁じた。禁止事項の定義は検閲機関設立政令[78]をはじめ、数多くの政令に定められた。

出版禁止事項には、「ポルノグラフィ」性を持つもの、「卑俗」性[79]を持つものが含まれていた。前者は全ての性的・猥褻な描写を意味し、後者は下品なもの、暴力的、俗悪的な描写や内容を含む。禁止事項は年々増えていったが、この二つは機関の設立初期から定められていたものである。ソ連のイデオロギーにとって重要で注意の必要な事項であったためである。

これらの政策は、ソ連国民を育成するための対策の一種であった。検閲機関は人々を世界の「汚れ」から守り、「汚れた」思想を忘れさせるものとして構想された。もちろんそれは体制維持のための措置であったが、しかしそこにはソ連なりの社会的な善意もあったのである。ソ連に入った海外の出版物やそれらの翻訳も検閲されていた。

ソ連に入った海外の出版物やそれらの翻訳も検閲されていた。特に翻訳に関しては、ソ連のイデオロギーに合った訳文にするために、原文の意図がある程度変えられた。ソ連の思想により合致する作品が新しく生まれたと言っても過言ではない。

尚、これらの翻訳はソ連でおおいに読まれたと見られる。「不意の唖」が収載されている小説集は一九八三年に始めて出版され、出版部数は十万部であった[80]。その翌年は更に第二版[81]が出版され、五万部であった。一九九一年のソ連崩壊後も何回か出版された（詳細は資料Ⅰ参照）[82]。

第三節、翻訳の分析―「飼育」

ここでは、大江の小説がソ連の翻訳においてどういう形を取り、どういう解釈をもたらしたかを考えるために、「飼育」の原文とその翻訳を比較する。

資料 II は翻訳の分析の結果を表にまとめたものである。翻訳文を原文に照らし合わせ、異同を見つけ出し、翻訳文を日本語に再訳した。

なお、原文は初出（「文学界」一九五八年一月号）、初版（『死者の奢り』（短編集）文藝春秋、一九五八年）を使用した。後の全作品集などの出版において異同がないため、翻訳と原文の違いは翻訳者や検閲官が生み出した異同でしかあり得ない。

異同に関しては、それがなされた理由をそれぞれについて推測し、表に示した。原文の定本は初出を扱う。

表中の記号について、網がけは削除された箇所、傍線は追加された文書、波線は置き換えた表現に当たる。下記の分析における番号は表内の番号である。

分析した結果、異同の理由の不明な箇所が多いが（五十六カ所）、それらは表現上の置き換え・部分的な削除である。翻訳困難という理由も考えられるが、見当の付かない箇所も多い。翻訳困難の理由で異同になった箇所は、例えば三十番で、表現上変更された箇所である。訳者はそれを全面的に翻訳しようとしたと思われるが、あまりにも複雑な文章であるため、翻訳では原文の一部が落とされたり、また一部が単純化されている。

（原文）濃い乳は熟れすぎた果肉を糸でくくったように痛ましくさえ見られる唇の両端からあふれて剥き出した喉を伝い、はだけたシャツを濡らして胸を流れ、黒く光る強靭な皮膚の上で脂のように凝縮し、ひりひり震えた。

（翻訳）濃い乳は熟れすぎた果肉を切ったように唇の両端からあふれて剥き出した喉を伝い、はだけた胸を流れ、黒く光る皮膚の上でひりひり震える滴のように凝縮した。

(Густое молоко, словно мякоть надрезанного перезрелого плода, потекло из уголков рта по шее на раскрытую грудь, собираясь дрожащими каплями на глянцевито-чёрной коже.)

この二つのテキストを比較して見ると、翻訳においては大江の長い複雑な文章は単純化され、三箇所のディテイルは落とされ、また数カ所の表現が多少変えられていることが分かる。表現上の変更は、翻訳の際に他言語での分かりやすさの

ために行われることはあり得るが、一つの文の中で三カ所も削除されているディテイルについては説明ができない。

異同の理由の見当が付かない箇所は細かい異同に関わるものであり、検閲上の理由から削除されたとは思えない箇所である。例えば二十八番、二十九番は簡単なディテイルを訳者が落としている。それらの箇所は、個別に考えると大きく意味を変えないが、全体を考えると小説の大きな部分を損なっていることになる。精細な箇所を多く削除したり簡単化すれば全体的にはより簡単な文書になる効果が見て取れる。これらは検閲により削除されたものであるとは考えにくいため、訳者の判断によるものと考えられる。

また、〈黒人兵〉という表現を多くの箇所で〈黒人〉と置き換えたり、〈兵〉を〈飛行士〉に換えたりしている。これらは全て表に入れる意味はないと思われたので、五番のような著しいもののみ数カ所、表に記すことにした。これは一方では細かい異同に見られるが、他方では原作者の意図を全く無視する異同でもある。主人公たちの呼び方を作家は適当に使った訳ではない。大江は小説の全体的な意図を考慮して言葉を選んでいたはずである。例えば、黒人兵は子供に軽蔑的に「黒ん坊」と呼ばれても、その人物自身には兵士としての意識が最後まで残るため、「黒人兵」という呼び方を作家は小説を通して使っていると考えられる。翻訳はそれを無視し呼び方を適当に変更している。

意味が明らかに異なる訳者の誤解と思われる箇所は三カ所ある。しかし、そのような箇所は小説全体の理解にも多少関わる。例えば二十四番の、子供についての言及では、原文では〈書記〉が教師の話を伝えている。しかし翻訳ではそれは〈書記〉自身の言葉になっている。それにより、〈書記〉の〈村〉の子供に対する暖かい感情と、この言葉の間には、矛盾が生じてしまう。従って、〈書記〉の感情や態度は翻訳では間違って伝えられている。四十二番では殴るという行為の動作主が翻訳では変わり、大人は子供より黒人をよく理解したという意味になってしまっている。これによってもまた、小説全体に見られる子供と黒人兵の関係との不整合が生じる。実際は原文では、子供は大人より黒人兵をよく理解していたという設定である。従って、作家が意図した黒人兵に対する子供の感情は翻訳では伝わらなくなる。五十八番の翻訳文では〈書記〉はこれ以降〈村〉に全く来なくなるという意味になるが、原文では、主人公が〈書記〉がどうなっているかが分

からず、心配している様子を伝える文章であった。翻訳ではその「心配」は「絶望」になっている。細かい箇所のようではあるが、主人公の気持ちが誤って伝えられていることになる。

性的な描写の削除は六ヵ所ある。その内には水場の山羊との性交の場面（六十七番）の完全削除もある。このシーンの「飼育」における重要性はすでにClaremont[83]などに指摘されている。本論文ではこの場面の小説の構造上の役割を、主人公と黒人兵の関係における幸せな前半と敵対意識の現れる後半との境目として見ている。従って、この場面の削除により小説の重要なポイントが失われると考えられる。子供の目に映る黒人兵の像は大江が意図した神話性を失う。十二番では性的な用語の削除により、文章全体の意味は性的な意味を失い、純粋な子供遊びのような意味になる。

原始的な描写、下品な描写の削除や置き換え・緩和は八カ所ある。それらの中に村の生活に関わる箇所や子供の行動に関わる箇所がある。例えば九番や十番、主人公の子供たちが自分の食事を苦労して手に入れる描写は緩和され、ただ自分たちで手に入れるという意味になる。二十六番や四十六番の主人公が放尿する場面は、検閲を通る訳には行かなかった。ソ連のイデオロギーは、ソ連国民を上品に育て、幸せだけが満ちあふれた生活に導こうとした。ソ連国民が読む小説には、これほどに「汚い」描写が入ってはならないのであった。しかしこれらの箇所の多くは、〈村〉の生活の背景を描いている。この削除によって全体的にバックグラウンドにある〈村〉のイメージは平板でぼんやりとしたものになってしまう。

黒人兵を差別的に描写する箇所の削除や置き換えは十二カ所ある。そのうちに、黒人をわざと下品に描く箇所の削除がある。六十五番のように、黒人兵の臭いなどに関わる描写である。五十一番「黒人兵は家畜のようにおとなしい」という文章は小説のタイトルを説明する文章であるが、丸ごと削除されている。その次の五十四番は同じような表現を緩和し、「黒人兵は家畜である」と明確に示した原文を「黒人兵は可愛い家畜を思わせる」のような柔らかい意味に変えて翻訳にされている。

興味深いことに、黒人の描写は何カ所か子供の描写と対になっている。黒人に対しては認められず削除されても、子供に対しては認められた描写箇所がある。その一例としては、水場の性交の六十七番の場面が挙げられる。この六十七番の、

黒人の性交の描写は完全に削除されたにも関わらず、十二番の子供がやっていることの描写はほとんどそのまま残された。

（原文）女の子供たちに、彼の薔薇色のセクスを小さな人形のように可愛がらせていた。
（翻訳）女の子供たちに、彼を小さな人形のように可愛がらせていた。
(Позволял девочкам гладить и ласкать себя, как куклу.)

ここで考えられる理由は、子供の行為の描写が原文でも曖昧に描かれていることである。更に翻訳では「セクス」という、この行為の性的な意味を示す言葉の削除によりこの描写をまた一段と曖昧にしている。それらの行動は黒人の行動と並べたときに初めて性的な意味を得る。翻訳では黒人の行為が削除されたことにより、子供の行為も単なる遊びになってしまっている。

この翻訳の異同に関してもう一つ際立つ特徴は、小説の最後の部分の扱い方である。小説全体に大小の異同が多いが、黒人兵が殺されたシーン以降の語りは異同なしに翻訳されている。これがどういう意味をもたらすかは小説全体の理解のためにも重要であると考えられる。

小説の終わりは、主人公が大人の世界と自分自身の対立を敏感に悟る語りである。主人公は大人に見捨てられ、自分の父親の手により手の甲を砕かれた。自分はすでに子供ではないが、大人とも違う中間的な存在である、ということに主人公は気づく。

この描写は検閲には引っかからなかった。全体的に多く削られた文章は、平板になり、ぼんやりした印象を与えるが、最後の部分は大江が意図したままに残された。これにより最後の部分は全体の中でより浮き彫りになっている。小説のクライマックスは原文では水場の場面にあったが、翻訳では橇遊びの場面に移動すると考えられる。小説の内容が転換する境目という役割を失った水場の場面はその鋭さも失う。成長譚や人間関係の物語であった小説は、翻訳では社会的な問題の物語、親子世代対立譚になる。これは特に小説の終わりの橇遊びの場面の役割が変化したことから生じる。

第三章第一節—1、そして同章第二節—2 で論じたように、この小説において日

本人とアメリカ人の平和的な共存のユートピア的な意味は重要である。このユートピアは消された水場の場面とともに翻訳から消える。完全に消える訳でもはないが、象徴的な場面を失ってその意味合いが薄くなることは確かである。そしてその代わりに翻訳においてクライマックスになる橇遊びの場面は小説の主題を代表することになる。自分のことをもう子供ではないが、大人ともまた違うと考える主人公がこの小説のメイン・メッセージを表すことになる。従って、翻訳小説と原文の小説は大いに異なるテキストになっていると考えられる。

第四節、翻訳の分析—「不意の唖」

この節では、「不意の唖」の翻訳を前節の「飼育」の翻訳と同様に、小説の分析資料として扱い、その特徴と「飼育」の翻訳との異同を探る。ここでも原文の定本として初出を扱う。資料 III は翻訳の分析の結果を表にまとめたものである。

「不意の唖」の翻訳は、「飼育」のそれと同様に、原文と大きく異なる文章である。また、「飼育」と同様、原文には、初出（「新潮」一九五九年九月号）、初版（『見るまえに跳べ』（短編集）新潮社、一九五八年）、後の全作品集などの出版とのあいだに異同が見られないため、異同は翻訳者や閲覧官によるものでしかあり得ない。

分析した結果、異同の理由の不明な箇所は多いが（二十二ヵ所）、それらは表現上の置き換え・部分的な削除である。翻訳上の便宜的な理由で異同になった箇所は、翻訳上起こりやすいと考えられ、ここでは特に問題としない。訳者は本文の全部を翻訳しようとしたと思われるが、大江の文章はあまりにも複雑な文体であるため、翻訳では原文の幾分かが落とされていて、また幾分かが簡単にされている。説明的な加筆も多少見える。

異同の理由が不明な箇所は細かい異同のものであり、検閲で削除されたり、あるいは翻訳が困難であったとは思えないものである。例えば二十六番は簡単なディテイルを訳者が変えている。あるいは三番の、村の位置の説明文に加筆があり、如何なる理由で行われたのか不明である。

それらの箇所は、個別に考えると大きく意味を変えないが、全体としては小説の大きくて重要な部分を損なっていることになる。細かな箇所を多数削除したり簡略化すると全体的にはより平板な文章になる。これらは検閲により削除された

ものであるとは考えにく、訳者の判断による異同であろう。ただし、訳者の意図はあくまでも推測に依るので、これらの異同の理由は資料 III の表では〈不明〉として、括弧に書かれた理由は可能性を示すに過ぎない。尚、異同の理由の不明な箇所は本論文の課題ではないため、以下では触れない。

意味が明らかに異なる箇所は二ヵ所（七番と二十四番）ある。訳者の誤解とも思われるが、その二ヵ所は小説全体の理解に大きく関わらないと判断される。七番は、

（原文）女たちは年老いた者らさえ暗く狭い土間にうずくまって決して外に出ようとしなかった。

（翻訳）女たちと年老いた者は暗く狭い土間にうずくまって決して外に出ようとしなかった。

（Женщины и старики укрылись в темных, узких сенях и подглядывали оттуда, боясь высунуть нос наружу.）

となっている。原文では「女性は皆、老いたものを含めて」との意味である。翻訳では「女性と老人」となり、意味が変わっている。翻訳によれば、村人の大半が恐れて隠れたという意味になるが、原文では勇気のある者はもっと多いと解釈される。また、二十四番は、

（原文）そして体をぶるぶる震わせて水をきるとそのまま服を着こむのだ。

（翻訳）そして体を震えながら服を着こむのだ。

（Продолжая дрожать, они оделись.）

となっている。ここは意図的な行為である身体の震えが、寒さなどによる無意識の身震いになっている。この二カ所は訳者あるいは検閲による意図的な変化であるとは考えられないため、単純な誤訳であろう。

本節が一番問題にする異同は、〈対立の強調〉である。これらは、訳者あるいは検閲官の意図的な加筆と考えられ、小説の解釈に大きく関わるものである。

ここに論ずる〈対立〉とは、本論文のテーマである〈政治的人間〉と〈性的人

間〉の対立である。これらの加筆によって、原文でも明確に読み取れる村人と米兵・通訳の対立が翻訳では更に際立たされている。

性的な描写の削除は一ヵ所（二十三番）で、少ないように見える。しかし、それがこの小説の唯一明確な性に関わる表現であるということには注意が必要である。大江の初期から中期にかけての小説では〈セクス〉か〈セックス〉という言葉で男性の陰部を意味する表現が多いが、ここにもこの語が出てくる。「不意の唖」は全体に性的なモチーフはなく、この一ヵ所にのみ性的な用語が用いられているということには注意すべきであろう。

この場面は、〈通訳〉を川に沈める村人を描写するが、村人は何故翻訳のようにただ「裸」ではなく、「萎縮したセクスをあらわにして」いるのであろうか。本論文は、この場面は米兵の水浴の場面と対を成していると考える。

兵隊たちはまっ白な皮膚と陽に輝やく金色の体毛とをもっていた。

とあるように、村の子供の目で見る米兵は神話的な素晴らしさを持っている。これに対して同じ川に入る村人の身体は見すぼらしいものである。また、この小説中の唯一の性用語は、村人を〈性的人間〉の概念に結びつけているように思われる。大江は〈性的人間〉の行動を常に性的用語で満たしているからである。村人が〈性的人間〉であることは、米兵に抵抗しないという行為や振る舞いの描写のみからも理解できるが、この理解を促すために大江はわざと性的なイメージを加えていると考えられる。このイメージが翻訳テキストから消えるという異同もまた、原文と翻訳とをさらに切り離すものである。

第五節、翻訳された小説をどう読むか

この節では翻訳文と原文の違いはどう読めるか、そしてその差はどのような意味を持つかについて論じる。

翻訳から削除された箇所はまず、小説を簡略化する。大江の文章は構成的に難しいものであるが、この翻訳は忠実にそれを伝えるものではない。長い文章を幾つかに分けたり、難しい表現を削除したりして、分かりやすく簡単な文章になっている。

大江は牧歌的な生活を豊富に描いたが、翻訳では下品とされた多くの箇所が削除され、下品さが緩和された。結果としてストーリーの背景である村の生活の印象は薄くなる。

性的な描写の削除は少ないものの、そもそも小説にはそれは少なかった。初期小説では性的なるものはまだ主題ではなかった。結局この小説では、元々多くなかった性的な描写のほとんど全てが削除された。残ったのは曖昧に描かれた部分である。

黒人兵を差別的に描く箇所はソ連の思想では許されなかった。人間は全て平等であるという思想はソ連のイデオロギーの支柱の一つであったためである。翻訳者の意図は、差別の要素を削除すれば黒人兵がより肯定的なイメージになるというものであったろう。しかし、これらの要素は主人公に対しては、黒人兵の力を表しているものでもある。主人公の〈僕〉は黒人兵の外見や行動に圧迫されている。この場合、黒人兵は〈政治的人間〉として登場する。黒人兵は置かれた状況に妥協せず、最後までそれと戦い、命を落とす。この描写は大江の〈政治的人間〉の定義によく合っている。しかし、黒人兵の描写をソ連式の翻訳のように削ってしまうと、〈政治的〉な要素はほとんどなくなる。更に〈性的人間〉である主人公の性的な面を削れば、「政治的対性的」という構造がなくなり、対が失われて、残された面も本来の意味を失う。

何よりも、この小説における主人公と黒人兵の関係が崩れてしまう。黒人兵が主人公に与えていた影響は、大江が描写した黒人兵の全ての要素が揃って初めて理解できるものである。その大半の要素が削除された翻訳では、主人公が持っていた感情を明らかにしない。残っている要素から判断すれば、主人公はただ黒人兵を恐れ、彼が理解できなくて面白がっている。特に主人公が虜になり、黒人兵が今までと同じ者であるとは信じられない、という場面から窺える印象が薄くなる。黒人兵は主人公の目では別人になったと書かれているが、その差は翻訳では極めて小さくなり、もはや別人とは言えなくなってしまう。

検閲によって二人の人間的な関係性が薄くなるにつれて、他の要素が代わりに浮かび上がる。それはまず戦争の激しさとそれに伴う人間の心の激しさである。主人公の黒人に対する思考は感情的に説明できなくなり、代わりに戦争のために人の感情が鈍くなってこんな出来事になったという点が強調されることになる。

ちょうど小説の終わりに〈書記〉が〈僕〉にいう言葉がここに当てはまる。

「戦争も、こうなるとひどいものだな。子供の指まで叩きつぶす」

主人公と黒人兵の関係を外からしか見なかった〈書記〉は、最後にこの結論に至る。翻訳を読んだ読者もそれに近い立場に置かれることになるだろう。

ソ連の思想にとっては、原文における主人公と黒人兵との関係の理由付けは重要ではなかったのであろう。この小説はまず戦争小説として見られ、翻訳において一定の箇所が削られて「戦争小説らしさ」がより強く出ることになった。これがソ連のイデオロギーにとって好都合な新しいテキストの誕生である。

第六節、大江作品の翻訳から生まれる新たな小説

ソ連の検閲機関は、翻訳において他国の作家の作品を再編集することにより、当時のイデオロギーに合わせた、より理想的な小説をソ連国民に紹介しようとした。当時のソ連の思想にとって不要な要素を削除するプロセスは小説の「清掃」として考えられた。必要ではない文章を排除し、必要な文章だけを残す作業であった。ソ連国民を理想的な人間として育てるためには理想的な小説が必要であった。

先述した通り、性に関わる描写や「汚い・下品」とされていた原始的な生活の描写などが削除された結果、ソ連において大江は社会主義的な傾向をかなり強くもつ作家として知られることとなった。当時の評論の多くも、残された部分、主に大江が取り扱う社会的な問題、特に若者と大人の間の関係の問題、について論じている。

この翻訳は、大江の小説から性的な要素を抜く実験であるともいえる。この翻訳により、ソ連のイデオロギーが到達しようとした目的は、政治的な問題のみを扱う小説の誕生である。しかし、上記のように、黒人兵に対する主人公の態度の異同などの説明で述べた通り、性的な要素がなくなるにつれて政治的な要素も意味をなくしている。その意味では、この実験は失敗に終わったと言えよう。逆に言えば、このような「実験」を通して大江の小説における〈性的〉なものと〈政治的〉なものの止揚も明確になるのであり、切り離すことの出来ない、互いに必

要な要素である、ということが分かるのである。

ソ連では多くの場合、翻訳をした者が評論も書いた。評論家は大江の原文をロシア語に翻訳もしたため、検閲されていないテキストをよく知っていたが、それを自由に発表することはもちろんできなかった。

政治と性からなる大江の小説から〈性〉のモチーフを削除すれば、〈政治〉だけが残るとソ連の思想家たちは考えていたであろう。しかし、その両者は止揚されており、〈性的〉な側面がなければ〈政治的〉な側面は成り立たない。翻訳の結果はそれを逆説的に証明している。翻訳小説の考察で論じてきたように、〈性的〉側面を削除すると、〈政治的〉側面も成り立たなくなるので、これを逆に考えると〈性的〉側面があって初めて〈政治的〉側面も成り立つという結論に至る。

さらに本章の考察からは以下のことが言えるだろう。まず、性的な描写の他に、下品な描写、村の原始的な生活の要素なども削除もしくは緩和されている。このことによって小説全体のモードが変化し、文章は簡略化される。ディテールの豊かな描写はより平板な描写になり、大江の文章の面白みの一部が消える。

次に、黒人兵を差別的に描写する用語や表現も削除されている。このことによって、検閲官は大江を社会主義を言祝ぐ作家のイメージに合わせようとしたと考えられる。大江が示す黒人に対する態度はあまりにも社会主義的な作家に相応しく見えたために、検閲官はこの変更を行ったと思われる。

さらに、翻訳された小説と原文の比較の結果、部分的な異同だけではなく、小説全体の意味が変わることが分かる。社会的な問題と主人公のそれらとの戦いは表面に残っているものの、戦いの動機が曖昧になり、大江の主張も分からなくなる。また、これらの翻訳を大江の小説における政治と性の分離の試みとして考察すると、この「実験」は失敗したと言える。大江の描く両者の関係はそのまま受け取らなければ成り立たず、その関係は変更できない。翻訳におけるこのような異同の問題を踏まえるならば、大江における〈政治的〉なものと〈性的〉なものの関係の理解はさらに深まるのではないかと考えられる。

第四章の結論

本章では大江健三郎の初期小説である「飼育」と「不意の唖」における〈政治的人間〉と〈性的人間〉のあり方を、ソ連時代のロシア語翻訳を資料にして分析した。この二つの要素はアメリカ人主人公と日本人主人公という対立の形で現れ、翻訳においてどのように変容させられたかを分析した。翻訳とは、原文のテキストと多少異なる文章であるが、訳者の理解が反映されるため、ある意味では原文の解説でもあるといえる。翻訳は原文の表現を違う言葉で書き換えるため、原文で明確でない部分や見えにくい部分が露に出ることがある。更に、ソ連時代の翻訳は国の検閲が厳しかったため、翻訳と原文は大いに異なることになる。具体的には、ソ連時代の翻訳小説からは〈性的〉な要素が消され、〈政治的〉な要素もついでに消える、ということが分かった。元の、人間関係を主題とする小説では、その関係のパターンとして〈政治的人間〉と〈性的人間〉の関係を描いているが、翻訳された小説ではその両者の関係が消し去られ、社会的な問題や世代的な対立の主題に変わっている。この変形は当然、ソ連のイデオロギーに合致させるために行われたものであった。

逆に言えば、この小説における〈政治的人間〉と〈性的人間〉のモチーフは弱いものの、ここにはその萌芽があり、この両者が互いに必要なものとなっていることが理解できる。この対から片方を抜きとると他方も失われてしまう。ソ連時代のロシア語訳を、性的な要素を削除し政治的な要素だけ残そうとした「実験」として見れば、このような変形は小説の意味を全体的に変え、政治的な要素をも消し去るものである。大江健三郎の小説における〈政治的〉なものと〈性的〉なものは止揚し、互いに不可欠である。

ソ連がなくなり、検閲のないロシアになって以来、二十年ほど経ったにもかかわらず、新しい大江の作品や以前翻訳された作品を新たに解釈する評論は発表されていない現状にある。本論文は削除のない新しい翻訳の刊行が現代ロシアの日本文学者にとっての急務であると訴えるものでもある。これは、大江の文学における〈政治的人間〉と〈性的人間〉の理解、という本稿の主題にとっても、重要な課題だと考えられるからである。

第五章　ソ連の評論における〈政治的人間〉と〈性的人間〉のモチーフ
―「セヴンティーン」の評論を中心に―

ソ連においては戦後日本文学は広く読まれていた。大江健三郎を含め、安部公房、三島由紀夫、開高健、川端康成、北杜夫、遠藤周作など、当時の日本の代表的な作家の書いた多くの長編と小編作品はロシア語に訳され、ソ連で出版された。

しかし、ソ連時代のロシア語訳と原文の小説は本質的に違っていた。ロシア語訳からは政治や性、下品なものに関わる描写などが削除された。更に、翻訳においては加筆までもなされ、ある意味では新しいテキストが生まれた。

上記のような翻訳における異同の具体例は本論文の第四章と後ほどの第六章で分析しているが、本章ではその異同の理由や過程に関して考察する。

ソ連における外国文学の出版において一番大きな障壁は検閲機関から生じた。国の検閲機関は全ての出版物を出版事前に検閲し、出版許可を下したため、翻訳しても出版できない海外小説は多かった。出版禁止処分を受けた小説は出版社か訳者の手元に残り、棚上げにならざるを得なかった。このような状況においては外国文学の翻訳出版は常に訳者、編集者と検閲官の間のある程度の妥協の結果として実行された。

そこで本章では、大江健三郎のソ連時代のロシア語訳と評論を例にし、ソ連における外国文学の翻訳過程、検閲過程、そして出版過程が取った形を分析し、それらが小説に対してどのような影響をもたらしたかについて考察する。小説の翻訳とそれに関する評論は如何なるプロセスを経て出来上がり、そのプロセスは文章を如何に変えたかということを明らかにしたい。

また、翻訳の形で生まれ変わった小説、その生まれ変わった形を解釈する評論が原作からどれほど離れており、原作の理解が如何に変わったかについても明らかにしたい。特に、本論文の課題である〈政治的人間〉と〈性的人間〉のモチーフの変容を明らかにしたい。

第四章ではソ連の翻訳小説においてこのモチーフのあり方を論じてきたが、本章ではその続編としてソ連の大江評論を取り扱う。

第一節、ソ連の海外小説出版政策

大江健三郎の小説のロシア語訳の大部分はソ連時代のものである（資料 I 参照）。

大江健三郎の翻訳や他の戦後日本作家のものはソ連における海外の社会主義作家の需要に応じてできたものである。当時のソ連において、国内の作家はもちろん、海外の作家も共産主義や社会主義的な思想を発表することはイデオロギー上で重要であった。ソ連と同じ思想が世界中に広まっている証拠としてプロパガンダに使われたからである。実際に多くのプロレタリア文学作品や社会主義的な発想の作家の作品がソ連時代にロシア語に訳された。

ソ連においては外国文学の主な出版は文学専門誌『外国文学』（«Иностранная Литература»）で行われていた。この月刊誌は一九五五年から出版され、先駆者である雑誌『国際文学』（«Интернациональная литература»）の課題を継ぐ雑誌であった。『国際文学』は一九三三年から一九四三年まで出版され、第二次世界大戦によって途切れたが、『外国文学』はそれを戦後に蘇えらせたものであったと言える。『国際文学』も『外国文学』も翻訳小説をソ連で発表し、評論も発表した。当時の文学雑誌の多くでは投稿者に依存することがあった。翻訳者や評論家が雑誌に寄稿し、編集者は出版の可否を決める流れが一般的であった。しかし、『外国文学』は国の政策で働いた雑誌であったため、出版する作家と小説を編集局で決め、訳者と評論家に注文するという特徴的な雑誌作りを行っていた。後に「外国文学出版社」（издательство «Иностранная литература»）も創立された。それは雑誌上で好評を受けた小説を刊行した[84]。一例としては大江の『洪水はわが魂に及び』が挙げられる。雑誌では一九七八年の三号と四号に分けて掲載されたが、同年内に短編小説を加え十五万部の本として出版された。この場合は「外国文学出版社」ではなかったが、「プログレス」という外国文学の翻訳をを多数に出版し政府がらみもある、「外国文学出版社」と非常に似ている出版社であった（詳細は資料 I 参照）。雑誌『外国文学』は現在でも刊行され、大江健三郎は雑誌の国際委員会の一員である。

ソ連時代にはソ連において多数の外国文学の翻訳が出版されたが、多くの場合には原文と翻訳は同じ文章ではなかったと言える。ここにはソ連の検閲の問題がある。ソ連における外国文学の出版において一番大きな障壁は検閲機関から生じた。

ソ連の検閲機関の「グラヴリット」に関しては既に第四章で述べたが、ここで一九二六年以降、ソ連で出版された全ての出版物を事前検閲した[85]ということを改めて言及しておく。

外国文学の翻訳は別として、外国文学自体はソ連に入った時点でこのグラヴリットが完全なチェックをして外国文学の入国制御をしていた。A.ブリューム[86]によると、グラヴリット創立の時点からこの機能は組織に込まれ、ソ連に入る全ての荷物は書籍が入っていないかチェックされたという。これは国による思想支配方針の実行であった。国が認めた思想や知識以外は公開禁止となっていた時代であった。

また、改めて述べておくが、これらの対策は、ソ連国民を育てるための対策の一種類であった。検閲は国民を世界の「汚れ」から守り、「汚れた」思想を忘れさせる機関として構想された。それはソ連なりの社会的な善意のためのものであり、国のイデオロギーであった。国は理想的な国民を育てようとして、このような思想的コントロールの試みを実行した。

ソ連に入った海外の出版物やそれらの翻訳も検閲されていた。上記の出版禁止事節は外国文学の入国禁止事項としても扱われ、いずれかの事項に当たる書籍は入国禁止、あるいは部分的な削除（ページの切り取り、もしくは伏せ字処分）を受けてから入国許可を受けた。入国許可された書籍の一部は翻訳の対象に選ばれたが、ソ連のイデオロギーに合った翻訳を作る思考に基づき、翻訳は原文をある程度変えていた。ソ連の思想により合った作品が新しく出来たと言っても過言ではない。

国の検閲機関は全ての出版物を出版事前に検閲し、出版許可を下したため、翻訳しても出版できない海外小説は多かった。出版禁止処理を受けた小説は出版社か訳者の手元に残り、棚上げにせざるを得なかった。出版社が出そうとする本が出版禁止処分になると出版社は閉鎖せれる可能性もあった。このような状況においては外国文学の翻訳出版は常に訳者、編集者と検閲官の間のある程度の妥協の結果として実行された。海外小説を訳して読者に読んでもらいたい、それに翻訳料を受け取りたいという訳者が一方におり、もう一方に新しい小説を出したいが検閲に注意しなければならないという編集者がいた。第三者の検閲機関の理念は、グラヴリットの歴代最初の長官 P.I.レベデフ・ポリャーンスキイ

（П.И.Лебедев-Полянский、在任期間一九二二—一九三三[87]）が次のようにまとめた。「敵対する要素のいかなる決壊を不注意で許すよりは、少しでも怪しいものを止めた方がいい」（«Лучше что-либо сомнительное задержать, чем непредвиденно допустить какой-либо прорыв со стороны враждебной стихии.»）[88]。言い換えれば、少しでもソ連のイデオロギーに合わないと疑われるものは、削除した方がいいという方針であったが、それは検閲官に幅広い権利を与えることになった。翻訳の出版の形は訳者、編集者と検閲官の間の交渉によって決められたが、検閲機関は仕事量が多く、何回も同じ文章を再チェックするよりはただ禁止処分を下した方が楽であった。よって訳者と編集者は自己検閲をし、できるだけ検閲官がすぐに許す文章を作ろうとした。この状況は第四章と第六章で研究する多くの異動を説明する。

なお、大江の小説の翻訳はソ連で大幅に読まれたと見られる。「不意の唖」の場合、翻訳が収載されている小説集は一九八三年に始めて出版され、出版部数は十万部であった[89]。その翌年は更に第二版[90]が出版され、五万部であった。ソ連時代と現代のロシアにおいては、全ての出版物は出版部数を必須節目として奥付に載せるから出版者が予想する読者がその数字で分かる。「不意の唖」の翻訳の場合、翌年に追加版が出版されており、需要が多かったということが分かる。例外として奥付に出版部数は記載されていない出版物もあったが、資料Ｉで挙げる大江小説のロシア語訳の大半は出版部数が明確に分かった。

また、ここでソ連時代と比べ、現代ロシアの状況を見てみよう。大江の小説は一九九一年のソ連崩壊後も何回か出版されているが[91]、出版部数からしてもソ連時代ほどの人気はない。二〇〇五年からは新たな翻訳がでるが、これはロシアにおけるいわゆる「日本ブーム」に影響されたものである。村上春樹の小説ブームなど、日本の小説に対する人気を背景にして、ノーベル文学賞を受けた大江の小説が売れる見込みであった。ただし、出版された新たな翻訳が英語からの二重訳であったことは重要である。日本語からの翻訳より英語からの翻訳の方が、翻訳市場の状況でコストが安いし、レベルの高い翻訳者は英語の方が多いことが理由として考えられる。出版社は日本文学ブームに合わせてこれらの本を出したが、大きな成果は期待せずコスト減少に配慮したのであろう。現代ロシアはソ連時代と違い、外国文学の翻訳出版事業は国の支援がなくなり、出版社は厳しいマーケ

ットの実情と戦うことになったから、大江の翻訳はさほど出ない状況になった。

ソ連時代の文学雑誌『外国文学』においては外国小説を選択し出版を許可したのは編集長と編集委員会であったが、検閲機関も大いに携わっていた。出版の最終的な決定は編集長の責任ではあったが、事前検閲のため、検閲機関による出版禁止命令を押し切ることは殆どなかった。更に、出版が検閲機関に許可されても、検閲機関は翻訳と評論に関して修正を求めるケースが多かった。例えば海外生活を描く小説では、主人公はいわゆるブルジュア思想を肯定的に見る描写があれば、検閲機関は「マルキシズム主義者評論家による批判導入評論」を求めるケースがあった。

言い換えれば、ソ連時代の検閲機関はパッシブな検閲からアクティブな検閲に変わった。ここでいう「パッシブな検閲」とは、原作に伏字や削除などをし、原文を削る検閲処分を意味する。「アクティブな検閲」とは原文を削るとともに加筆や再編集をし、原文を大きく変える検閲処分を意味する。このようなアクティブな検閲は原作の「改善」を試み、新しい文章を生み出した。帝国ロシア時代に存在した検閲は主にパッシブなものであったが、ソ連時代のアクティブな検閲への変化は外国文学の翻訳・編集・出版の全ての過程に大きな役割を果たしていた。

このアクティブな検閲の仕事ぶりの一例は Marianna Tax Choldin の研究[92]に分析されている。Choldin はソ連で出版された西洋政治的書物の翻訳の三つを、その原文と比較し、ソ連の翻訳における異同とその意味を分析している。Choldin が述べる結論によると、ソ連の翻訳は単に原文を訳すよりは、原文をソ連のイデオロギーにより合う、ソ連の理想思想に好都合な文章に変えるものである。

大江の小説も同じ処理を受けたことは第四章と第六章で論じた。Choldin の研究はソ連時代に行われ、検閲に関する資料は殆ど公開されなかった時代であったため、多くの場合、「もしかしたら」や「のようである」といった表現がこの研究に見られる。限られた資料をもとにした Choldin の研究は結果として大いに予測に依る部分が多い。それと違い、本稿は幅広く公開された検閲関連資料を基にして考察を行っている。

第二節、ソ連の『セヴンティーン』評論翻訳

下記の評論は雑誌『外国での現代文芸』一九六三年三月号、全ソ連国立外国文

学図書館出版、八十一—八十三頁（«Современная художественная литература за рубежом» 1963 г. №3, Всесоюзная Государственная Библиотека Иностранной Литературы, стр. 81-83）で出版されたものの筆者による翻訳である。原文は資料VIに挙げるが、翻訳は本論文の研究対象であるため、全文を挙げることにする。

大江健三郎「セヴンティーン」。中編小説
東京、『文学界』、一九六一年、一号—二号

この中編は、著者の若さにも関わらず既に長く書き綴られた一連の作品の一部をなすにすぎない。だがこれは、非常に大事な部分である。題材は新聞のニュースからとられたものである。一九六〇年八月十三日、日本社会党の浅沼稲次郎委員長が若いファシストに殺された。大江はその題材を考察し、ファシストになった現代の若者の病と死の物語を書いたのである。

小説は主人公の十七歳の誕生日に始まる。著者は彼を一度も名前で呼ばない。セヴンティーン！敗戦後の日本で、アメリカの占領と経済成長の時代に成長した者は大勢いるからである。

家族のなかで一番年下の彼は、意志薄弱であると同時に病的に自尊心に満ちている。家族は彼を気にとめず、誕生日を祝うことさえ忘れる。唯一姉がちらっと思い出しはするが、その姉も他のことで頭が一杯である。彼は岐路に立っている。万華鏡のように繰り広げられる出来事が若者の目を刺激し、頭を混乱させる。民主主義者とファシストのどちらが正しいのか、これが彼の答えるべき問いである。彼はデモに行ったり、米兵に憤慨したりするが、日本の軍国主義の復活が彼の中に批判をかきたてるわけでもない。

セヴンティーンは強くなることを夢見ている。彼は不格好で虚弱で交際嫌いで臆病である。学校では嫌われている。自涜している時のみ自分を強く感じる。小説ではこの点に社会的な意義が込められている。、人生のとば口で自分を見失い、自分の手による興奮を必要とする者は、資本主義社会の恐ろしい産物であり、ファシズムの予備軍である。

ある日、セヴンティーンは偶然ファシストの街頭演説に行き当たる。共産主義者に対して筋道の立たないスローガンや罵声を投げつける演説者を彼は殆ど聞いていない。だがそこで予想外のことが起こる。彼の後ろに立っていた聴衆が彼の

ことをファシストと間違え、演説者に憤慨すると共に、彼のような若者が耳をそばだてて聞いていることにも憤慨するのである。セヴンティーンは恐怖に襲われるが、ファシストたちに助けられる。これが彼らとセヴンティーンとの出会いになり、対等な扱いに誇らしさを感じたセヴンティーンはファシズムに身を投じる。広島のデモの追い散らしにも参加する。彼はだんだんと組織に深入りしていく。しかし、組織の幹部が欲得ずくで組織に参加していることが分かったとき、彼は心から無私無欲に天皇のことを考えているのは自分だけなのだと確信する。そしてセヴンティーンはある言葉を見出す。〈使命〉、ミッションという言葉を。彼のミッションとは、天皇を救うことである。彼は〈委員長〉（浅沼は小説でこう呼ばれる）が演説する集会にやってくる。〈委員長〉殺害のシーンは小説のクライマックスである。「黒っぽい小さい姿が委員長に走りよる…衝突そして再び衝突…委員長は倒れ初め、黒っぽい姿は彼を掩う。それに終始カメラをかまえているカメラマンはこう言っているようだ、「傷を負わせたようでございますので、しばらくそのままお待ち願います！」。

セヴンティーンは刑務所で自殺する。ここで本は終わる。しかし物語は続く。セヴンティーンは大勢いるのであり、反動勢力は彼らを味方につけようと懸命である。まさにそれゆえに大江の摘発小説は右翼を憤怒させた。右翼は、平和擁護、原子力兵器反対、ファシズム復活反対を訴える大江が許せないのである。

しかし、大江のこの小説に深刻な欠点がないわけでもない。セヴンティーンの「社会的な病の物語」を描く大江は、病気の原因を主人公の肉体的な未完成性に見ようとする。実質的にこの側面のみを強調することで、大江は必然的に現実の一面的描写に陥り、それが鋭い政治的意義をもった作品の価値を引き下げている。V.サノビッチ

第三節、ソ連の『セヴンティーン』評論の解釈

ここで検閲が実際に外国文学の需要に対してどのような影響を与えたかについて、具体的に考察する。考察対象は、大江の短編小説『セヴンティーン』のソ連における評論を取る。

この評論を研究対象にした理由は下記の通りである。第四章で研究した大江健三郎小説のソ連時代ロシア語訳の特徴に加えて、同じ時代に発表された大江

評論は、大江のソ連におけるイメージをより明確にすることが第一の理由である。第二に、第四章で言及したように、大江の原文と大いに異なる翻訳小説はソ連に読まれ、大江の研究や評論はその異なった文章をもとにして行われた。序論から第四章にかけて、その例となるグリブニンによる評論を幾回か引用してきたが、ソ連時代評論がどういう形を取ってきたかについてより詳細ここで論じる。第三に、この評論は管見の限り、〈政治的人間と性的人間〉というテーマを主題とする小説を取り上げるソ連において唯一の評論であることである。先述のグリブニンなどによる研究は、主にその他の作品を対象にしている。第四に、この評論はソ連において大江の紹介という役割を担っていたから、大江に関する諸評論の中においてその地位は高い。ソ連において大江の紹介に関しては後により詳しく述べるが、大江のソ連における研究の第一歩という点で、そのステータスはこの評論を際立たせるのである。

V.サノビッチによる『セヴンティーン』の評論は原文の初出（『文学界』一九六一年一号と二号連載）から二年後（一九六三年三月）に出版された[93]。出版メディアである雑誌『外国での現代文芸』は全ソ連国立外国文学図書館の機関誌であり、無料で配布された。雑誌は当時の外国文学の最新小説に関する紹介文、評論を発表し、外国文学界のニュースや全ソ連国立外国文学図書館の最新の図書を紹介した。雑誌は一九六一年から出版され、現在は全ソ連国立外国文学図書館の後継者である全ロシア国立外国文学図書館によって一年に六回出版されている。

著者のビクトル・ソロモノビッチ・サノビッチ（Виктор Соломонович Санович、一九三九年生まれ）はソ連における日本文学の翻訳に大きな貢献を果たした日本学者であり、芥川龍之介の小説や「百人一首」の翻訳などで名を得た。自筆による翻訳以外でも広く活動し、「文芸」出版社（издательство «Художественная литература»）の社員であり、日本文学の翻訳出版において編集者や解説者としてその名がしばしば見える。例えば第四章で扱った大江の「飼育」の翻訳が載った小説集[94]の編集にサノビッチが携わっている。

先述のソ連における現代外国文学出版政策を実行する諸機関のうちに、「文芸」出版社は外国文学専門部署をいくつか持っていた。現在でも存在するこの出版社はもともと「国立文芸出版社」（«Государственное издательство

художественной литературы»）と称され、一九三〇年に創立された。V.サノビッチが勤めたのはその中の東洋文学編集局（«Восточная редакция»）であった。この機関は作業の一つとしてアジアとアフリカ諸国の文学の翻訳と出版を行った。V.サノビッチは翻訳者、評論家と編集者としてその政策に応じて外国文学の翻訳対象作品を選び、翻訳し、解説評論をつけて出版する作業に直接携わった役員であった。出版社としては古典文学も出版することはあったが、この作業は先述の政策とは別であった。雑誌『外国での現代文芸』はそれと違い、国の政策専門雑誌であったといえるであろう。V.サノビッチはその雑誌を刊行した全ソ連国立外国文学図書館に直接関係なかったが、同じような作業をする機関同士であったため、投稿はしていたと思われる。

評論は小説を紹介しながら評論家の解説を加えるといった形を取っている。小説の内容に関して原文とずれることが数カ所見られる。

まずは、セヴンティーンと〈皇道派〉との出会いの場面に関して、サノビッチは、

セヴンティーンは恐怖に襲われるが、ファシストたちに助けられる。

と紹介している。原文は、

おれは激しくふりかえり、おれを避難している三人組の女事務員が一瞬動揺するのを見た。そうだ、おれは《右》が、おれは突然の激しい歓喜におそわれて身震いをした。おれは自分の真実にふれたのだ、おれは《右》だ！おれは娘たちに向かって一歩踏み出したが、娘たちはおたがいの体をだきしめあって怯えきった小さな抗議の声をあげた。

、評論ではセヴンティーンは偶然の出来事によって〈皇道派〉に押されているが、大江の原文ではセヴンティーンが自分で第一歩を踏み出す。評論のこの点は、主人公を「資本主義社会の恐ろしい産物であり、ファシズムの予備軍である」と定義する点に合致している。、外的な状況に強調が置かれている。主人公は社会の被害者であるというアイディアはこの評論において他に数カ所に見える。それに

対して大江の原文ではセヴンティーンの内的な状況が〈皇道派〉へ主人公を導いたという解釈ができる。第七章で詳しく論じるが、主人公にあった現状への不満や仲間の需要などはその要因として考えられる。

第二に、サノビッチが引用する〈委員長〉殺害のシーンは数カ所において原文とまたずれている。評論では、

> 黒っぽい小さい姿が委員長に走りよる…衝突そして再び衝突…委員長は倒れ初め、黒っぽい姿は彼を掩う。それに終始カメラをかまえているカメラマンはこう言っているようだ、「傷を負わせたようでございますので、しばらくそのままお待ち願います！」。

となっているが、原文では

> 黒っぽい少年がスマートでない駈けかたで演説中の委員長に走りよる、衝突そしてふたたび衝突、委員長は倒れ、黒っぽい少年は酷たらしく捻じ伏せられる、それに終始カメラをかまえているカメラマン。
> 傷を負わせたようでございますので、しばらくそのままお待ち願います。

とある。評論の引用が数カ所で原文をカットしているのはまず分かるが、数カ所の言葉置き換えもあると分かる。「スマートでない駈けかた」という一文が省略されていることは、大江が主人公を滑稽に扱っていることを隠していると思われる。この評論は「ファシストになった現代の若者の病と死の物語」を改まった風の、真面目な小説として紹介しているが、滑稽な描写はそのイメージに合わない。故にここは真面目さを強調するための意図的に削除されている箇所であるように見られる。大江は小説中に主人公の振る舞いや考え方を非常に滑稽に書いているが、これは評論には都合の悪いディテイルであった。評論では、主人公を批判する大江が哀れに主人公を扱うように評論に見られる。

次に、「酷たらしく捻じ伏せられる」という原文の一文は「掩う」と置き換えられている箇所も、大江の意図を大きく変えると思われる。殺害は暴力的であったとしている原文を単純化し主人公の態度をこの文章から消している評論は、主人

公の性質を隠している。この置き換えは主人公は加害者ではなく、社会の被害者であるというアイディアの続きであると考えられる。

原文と評論のこの箇所のその他の異同、例えば「こう言っているようだ」という文句の加筆は翻訳上に必要なものと考えられるため、ここでは詳しく扱わない。

また、大きな論理的な問題としては、小説に登場する〈皇道派〉を〈ファシスト〉として定義することの妥当性がある。〈皇道派〉はファシスト運動であったかどうかは文学的な問題よりは政治的思想の問題であるから、本稿の問題から外れるものである。ここは大江が〈ファシスト〉という言葉を〈皇道派〉に対して小説では使っていないため、評論家側の定義の問題が存在するとしかいえない。「セヴンティーン」を論じる他の研究では、例えばヨシオ・イワモトが同類の言葉「ファシスト・メンタリティー」を使っているが、その言葉の説明はなされていない[95]。

上記のように、原文と評論における小説の内容にはずれがあるが、それはいかなる意味を持つか下記で考察する。

評論家は原文の完全な翻訳が出版されていなかったことを活用し、自由に原文の内容を扱ったことが分かる。原文は全ソ連国立外国文学図書館のカタログを確認したところ、書庫にあったが、日本語という当時のエキゾティックな外国語であったため読むことができる能力を持った読者は非常に限られていた。この理由のために、評論家は評論の目的に応じて原文の内容を改善し、上記でみたように引用としている箇所さえ原文通りにしていない。原文は評論家の意図、あるいは出版会社の意図に合わなかったから削除や加筆が必要であった。それでも、この小説は評論の対象として選ばれたが、小説に評論家の意図に合った部分があったということを意味していると思われる。具体的には、第一に、共産党の戦いと浅沼委員長の言及があるからである。大江が描く日本共産党のイメージは『セヴンティーン』では悪くはない。ソ連のイデオロギーとしてそれは都合のいい点であった。これは共産党は海外にも存在し、人気ある作家も共産党を意識し小説で取り上げるという共産党に対するポジティブなイメージをアピールできるからである。

第二に、〈ファシズム〉の批判が小説にあるためである。これはソ連がファシズムと戦った第二次世界大戦の正当化であり、戦後に続くファシズム思想との戦いは海外の作家もアピールするという点でソ連には好都合であった。ただし、上記

に既に言及したように、〈ファシズム〉とは評論家が使う言葉であり、小説には実際出ていない。しかし、ソ連のイデオロギーからすれば小説で説明されている〈皇道派〉の理念は〈ファシズム〉同様であった。

第三に、この評論はソ連の読者に対する大江健三郎という小説家の初紹介であった。管見の限り、ここでソ連の公式の文学界において初めて大江の名前が登場する。評論は日本における大江に対する社会的な反応にも言及しているので、当時の日本文学翻訳出版関係者は大江のことをある程度知っていたように見られる。当時の若い大江はソ連の外国文学翻訳出版担当者に魅力的に見えたのであろう。この評論の二年後（一九六五年）に始まった大江の多くの小説の翻訳出版はその魅力的な見方の反映であると思われる（大江小説のロシア語訳の一覧は資料 I 参照)。この評論はソ連における初めての大江の登場であったからこそ、ここに書かれた内容は後ほど出版された大江の小説の選択や大江に対する評論に大きく影響したと思われる。大江は様々な社会的な問題を題材にして小説を書いたが、ソ連で出版された翻訳は殆ど「社会対若者個人」というテーマを持つものであった。

『セヴンティーン』の翻訳はソ連ではあり得なかったであろう。評論にはこの小説の〈性〉に関する描写の言及は殆どないが、暴力に関する言及もない。しかし、原文は性的描写や暴力描写に満ちている。これらこそは出版禁止事項に該当したであろうから、この小説は評論を通して好都合な箇所だけが紹介されているという形でしかソ連であり得なかったという結論に筆者が至った。

検閲はこの小説の原文が載っている雑誌の入国許可を出したようであるが、確かな状況は分からない。雑誌の保管場所であった全ソ連国立外国文学図書館は、入国禁止処分を受けた書籍を例外として特別保存する機関の一つであった。当時の制度としては、そうした特別許可を持っている機関は入国禁止書籍を保存する際、その書籍のアクセスを制限していた[96]。『セヴンティーン』の原文がどういう扱いを受けたかは具体的な情報を今の時点で確かめることはできない。筆者が全ロシア国立外国文学図書館に問い合わせた結果、『文学界』の一九六一年 1 号と二号（登録記号四〇―〇六三）はともに図書館間相互貸借に貸し出され、不返却のため一九六八年八月付け第 1 処分証明書を以って欠巻処分を受け、カタログからも削除されていることが分かった[97]。

V.サノビッチが評論のために読んだ雑誌は上記のように確認できないが、同じ

雑誌はロシア国立図書館（Российская Национальная Библиотека, 当時はレニングラード M.Ye.サルトゥイコフ・シチェドリン記念公共図書館、Государственная Публичная библиотека имени М. Е. Салтыкова-Щедрина.）にあって現物を確認することができた。ソ連時代には入国する外国文学は首都モスクワ市と当時のレニングラード市（現在サンクト・ペテルブールグ市）の二箇所で検閲チェックを受けた[98]。よっては V.サノビッチが勤めたモスクワの図書館にあった雑誌と筆者が現物確認できた雑誌は別の検閲機関が入国許可を下したが、この二部の雑誌は同じ扱いを受けたと見られる。現物確認できた雑誌の表紙の左上には検閲官の印が見られる。表紙の写しは資料 VII で挙げるが、三角の形を持つ印の中に 125 という番号が確認できる。A.ブリュームによる解説では、三角印は入国許可を意味し、その中の番号は検閲官の個人番号である[99]。図書館の機関誌で取り上げる小説が載っている雑誌ならば自由アクセスができたと推定できるが、先述のように図書館間相互貸借も可能であったから、これは確実であると結論できる。

小説の内容の特徴に戻るが、評論で唯一言及されている〈自涜〉は、「社会的な意義が込められている」と評論家が解説をしている。評論としては、この説明によって猥褻なテーマを猥褻でなくする働きがあった。筆者はこの解説に賛成するが、大江はもともと猥褻な意味で性的な描写を入れている訳ではないという解釈をしている。

『セヴンティーン』の〈性的〉な描写は評論からほとんど姿を消しているが、この唯一の言及は大きな意味をもたらしている。完全に削除した方がイデオロギーとしては都合がよかったと思われるからである。検閲化された評論の中でも登場人物の性行為に関する言及はせざるを得なかったということは、この小説における〈性的〉なモチーフの大きな位置を占めていることを意味する。更に、第四章で見た通り、〈性〉のいかなる形も恐れて徹底的に削除した検閲の状況ではあったが、その状況でさえも、この〈性的〉描写は狭義の〈性〉自体に関するものではなく、社会的な状況の比喩であると強調されている。ここは評論家がある程度大江の意図を読めたと判断できる。序論や第一章で論じてきたように、大江も〈性的〉描写は狭義の〈性〉を意味しないと述べている。この評論の解釈もまた、本論文の主張に一致する。

第五章の結論

本章では、大江健三郎のソ連時代ロシア語訳と評論を例にし、ソ連における外国文学の翻訳過程、検閲過程、そして出版過程が取った形を分析した。第四章の具体的な翻訳の例に続き、本章ではより広くソ連における外国文学のあり方、そしてソ連の読者が眼にした翻訳小説の成り立ちを論じた。これによって大江の小説と翻訳小説の異動は第四章と合わせて更に大いに見え、原文の特徴はより立体的に浮かび上がった。ソ連時代に出版された「セヴンティーン」の評論の分析と原文との照らし合わせの結果、検閲による障壁が大きかったために外国文学の出版は難しく、出版された翻訳は検閲により大きく影響を受けたことが分かった。小説の翻訳とそれに関する評論は如何なるプロセスを経て出来上がり、そのプロセスが小説の内容を如何に変えたかということを明らかにした。それによって、ソ連における海外小説の特徴を明らかにした。検閲は部分的な削除のみではなく、加筆や原文の意図変更まで行い、積極的に小説の内容に影響をもたらしたことが明らかになった。この影響はアクティブな検閲であったと筆者は定義した。また、翻訳小説だけではなく、小説を短く紹介する評論文までも同じ干渉をしたことは、ソ連における外国文学と検閲の関係を立体的に浮き出すことになった。

また、翻訳によって生まれ変わった小説、その生まれ変わった形を解釈する評論が原文から如何に離れており、原文の理解が如何に変わるかを〈政治的と性的〉というモチーフの変化を示すことを通して明らかにした。翻訳小説は〈政治的と性的〉のモチーフを変えているが、検閲された翻訳テキストにおいても〈政治的〉なものと〈性的〉なものは、なおも小説におけるその位置を失っていないと筆者は結論する。これは筆者が主張するする〈政治的〉なものと〈性的〉なものの相互必要性という考えあを支持する証拠でもある。

このような異動の多い翻訳と原文と異なるテキストを論じる評論を読んだソ連の読者は、原文を読んだ日本の読者と如何に異なる解釈をしたか、その差はどのような意味をするのかと分析した。この差があるからこそ原文の特徴をより明らかにすることができる。

第六章　同時代における〈政治〉と〈性〉
―三島由紀夫を中心に―

〈政治的〉なものと〈性的〉なものの関係というテーマは、大江独自のテーマではなく、同時代の他の作家にも見られる。当時の日本の政治的・社会的な状況を映すこのテーマは、幾人もの作家の注意を引いた。したがって、〈政治的〉対〈性的〉という設定の小説は当時必ずしも珍しいものではなかった。

この現象は、先行研究で指摘されているように[100]、フランス文学の影響のもとに現れた。特にサルトルとロレンスの小説の影響が大きいが、同じテーマを扱うフランス作家も人気であった。佐々木基一の表現を借りれば、「サドが見直され、ジャン・ジュネが注目をひく時代であるから、人間存在をもっぱら性の側面から解明してみせる小説があらわれても別に不思議ではない」。[101]

戦後、まずは〈性〉を扱う文学が現れる。坂口安吾の「堕落論」(『中央公論』、一九四六年十号）と伊藤整の『性と文学』(一九五一年）はこの現象の始まったころの代表的な議論であると言えよう。小説では同じ坂口安吾の『白痴』(一九四六年)、田村泰次郎の『肉体の門』(一九四七年)、伊藤整の『火の鳥』(一九五三年）などがある。ソ連時代の研究者キム・レホはこの種の小説を「生理学的文学」（«физиологическая литература»）と呼んだ[102]。次に〈性〉と〈政治〉を結びつける小説が現れる。初期のものでは椎名麟三の『永遠なる序章』などである。これらの小説はフランス文学のテーマを発展させ、日本の同時代社会の状況を小説の材料にしている。

大江健三郎はサルトル等の影響でこのテーマに入ったと考えられるが、彼はこのテーマを独自に再構成し、戦後日本の若者が置かれていた状況が生み出した現象として〈政治的人間〉と〈性的人間〉の出現を扱った。エッセイや小説上では社会状況による圧迫のために若者は両者の何れかにならなければならなかったと、論じている。

本章では、このテーマを大江自身と同時期の他の作家がそれぞれどのように扱っているかを比較してみたい。特に本章で注目するのは三島由紀夫である。先行研究ですでに述べられている通り[103]、このテーマについて大江は三島に大きな影響を受けており、このテーマの扱い方に関して両者の間で一種の論争も起きてい

る[104]。また、性的なテーマについて三島は自身と大江とが似ているとも述べている。

私の〔中略〕小説はエロティックにのみ社会に関わっていて、大江健三郎とよくにていたと思う[105]。

このような作家本人の言葉は、この問題に関する何よりも強力な裏付けとなるが、本章で論じるように、小説テキストの読解によってもこのテーマの扱い方の両作家の類似性をより仔細に見て取ることができるだろう。大江も小説以外の場所で自分の小説のテーマに関して度々言及する。特に本論文で取り上げる〈政治的人間〉と〈性的人間〉とを理論的に説明する評論はその顕著な例である。この自分の作品について評論するという傾向も、大江は三島とでよく似ており、両作家を結びつけるもう一つの点となっている。同時代において、両者ほど自分の小説を繰り返し解説する者は少なかったと思われる。この二作家は同じテーマを扱う同時代の作家と比べて、自分の小説の書き方やこのテーマの扱い方に関する自意識が特に高かったと言えるであろう。

両作家の小説を研究にあたって、作家自身の評論なくしては小説の解釈は完全にならないというのが本稿の立場である。多くの先行研究は小説のみを扱い評論を無視している。大江の場合にそうであることはすでに述べたが、三島に関しても同じ指摘はすでに A.ドリンによってなされている。

〔前略〕三島の評論やエッセイは三島の小説に加筆し解説するだけではなく、文学研究者の多くの未解決問題に回答を与える。
(…публицистические и эссеистские произведения Мисима не только дополняют и поясняют его романы, но и дают ответ на многие нерешённые вопросы, стоящие перед литературоведами.)[106]

この指摘は、大江にも十分適用できると思われる。

一九七〇年の三島の自決以降も、大江の小説には三島の影響が見え、大江が長い間、三島の影響を受けていたことがわかる。例えば三島の自決三年後に書かれ

た「洪水はわが魂に及び」には〈縮む男〉という主人公がいる。この〈縮む男〉が三島を滑稽に描いたパロディであるということは有名である。これに関連して、Napier の次の指摘がある。

> 大江はしばしば講義や小説においてさえ三島について言及し、まるでなかなか死なない競争者の暗い影と戦い続けているようである。
> (Oe frequently refers to Mishima in his lectures and even in his fiction, as if he is still struggling with the dark shadow of a rival who refuses to die.)[107]

大江と三島は同じ時代の日本を考察し、同じ時代の問題をそれぞれの小説や評論で取り上げている。それぞれの作家が出す結論や提案する解決法は三島と大江では大きく違うものの、扱っている問題自体は同じものであるため、描写や扱い方は大きく類似している。本章では、〈政治的〉なものと〈性的〉なものを議論の中心に据えて、大江に見える三島の影響について考察し、二人の異なる点と類似点を明確にしたい。

ここでは同時期に発表された三島由紀夫の「憂国」（「小説中央公論」一九六一年一月号）と大江健三郎の「セヴンティーン」（「文学界」一九六一年一月号）を比較の対象に選んだ。この二つの小説は主人公とその周囲の関係という点で互いに非常によく似た小説でありながら、それぞれ異なるスタンスを取っている。両方ともバックグラウンドに天皇制を設定し、天皇の尊重という問題を扱おうとする。しかし、その裏面においてはそれぞれの隠れた動機が暗示され、作家の個人的な態度が窺える。

大江健三郎の小説の中で、政治と性にまつわるものは幾つかあるが、「セヴンティーン」と同時期の「性的人間」などはその一例である。同様に三島由紀夫の場合も、「憂国」や同時期の『十日の菊』においてやはり政治と性は絡み合っている。その中で「憂国」と「セヴンティーン」を選んだ理由は、それぞれが作家の代表的な作品と言えるものであり、主人公の設定が似ているからである。

「憂国」はいわゆる「二・二六事件」を背景にし、近衛連隊の〈武山信二中尉〉とその妻〈麗子〉と主人公とする。「二・二六事件」勃発の三日目に家に帰った中尉は反乱軍に加わった親友を勅命によって撃たねばならないと妻に報告する。

自分は新婚であるため、その親友に反乱のことを知らされなかったが、裏切られたことに悩む一方、親友を撃てないという悩みを妻に伝えたら二人は自刃すると決意する。最後の一緒のよるを一杯に味わうとも決め、晩御飯をし抱き合う夫婦は死に臨む。そして妻が見守られて先に中尉が自刃するが、妻は玄関を扉の鍵を開けてから自刃する。

先行研究において、大江と三島の作品における〈政治的〉なものと〈性的〉なものというテーマを作家ごとに論じるものは幾つもあるが、両作家を併せて論じるものは管見の限りなかった。唯一、Susan Napierの研究書では、両者の二種類の主人公の類似性に関する言及がある。

〔前略〕両作家による性の扱いにおける主な類似性は、パッシブとアクティブの対を成している主人公を使う傾向にある。

(…major similarity in the two writers' treatment of sexuality is their tendency to use dual protagonists, passive and active heroes.)[108]

ただし、Napierが扱う小説は「われらの時代」など、大江中期後半のものであり、二種類の主人公はアクティブとパッシブとして定義され、〈性的〉なテーマへの言及のみが見られる。本稿の解釈では、このアクティブとパッシブとという概念は〈政治的人間〉と〈性的人間〉という概念の展開であり、時期的には本論文で研究する中期より後のものである。ただし、時期のずれと〈性的〉なテーマへの限定という点を除けば、Napierの研究は本論文の主張に非常に近い指摘であるため、本論文を裏付けるものとして考えたい。

本論文は、「憂国」と「セヴンティーン」を分析し、表現や作家の態度の上での類似点・異同点を明確にする。

両作品の主人公の行動は公に自分の強さを表したいという動機からなる。しかし、内面的な動機は自分の弱さを隠すことにある。見る側に示す外面と見られる側の自分の内面のズレが生じることから、主人公には精神的な葛藤がある。これは両小説の一番大きな類似点である。

異同点はまず作家の態度に見え、表現上に現れている。グロテスクな誇張で小説を満たし内面を露出する大江は主人公に対して批判的に見える。「セヴンティ

ーン」で描かれている主人公の自分と他人の行動に関する思いは極端であり、異端的でグロテスクな描写が施されている。大江はこれらを主人公の目で見せているが、決して主人公の立場を支持している訳ではない。むしろ、グロテスクにすぎる描写は滑稽味を帯び、主人公を是認しない作家の立場を表す。他方、外面を誇張する三島は主人公の内面的なドラマに同情的に見える。ここは大江と逆の扱い方である。「憂国」において表面的に冷静で改まった文章で主人公を描く三島は、その背後で主人公の熱い心のことを物語り、主人公の犠牲を賛美する。

これらの特徴は両小説を解釈する上で大事なポイントであると考えられる。

第一節、大江を通して「憂国」を読む

〈政治的人間〉・〈性的人間〉という用語は大江独自のものではあるが、同じようなテーマを扱う三島の小説にも適用できるのではないかという仮説を立てみよう。ここで第一章の第一節に引用した大江の定義に再び戻ってみる。

> 政治的人間は他者と硬く冷たく対立し抵抗し、他者を撃ちたおすか、あるいは他者に他者であることをみずから放棄させる。〔中略〕性的人間はいかなる他者とも対立せず抗争しない。かれは他者と硬く冷たい関係をもたぬばかりか、かれにとって本来、他者は存在しない。かれ自身、他のいかなる存在にとっても他者でありえない[109]。

大江の定義を通して三島の小説を読むことによって、大江の定義はどれほど普遍的であり、どれほど確かであるかのを明らかにしたい。三島と大江の小説において〈政治的〉と〈性的〉の要素が類似性を持つならば、大江の理論的なとらえ方は三島にも十分当てはめることができるであろう。逆に、この定義は三島の小説に当てはまるならば、大江の定義は大江自身だけの空想ではなく、確実に同時代を写す理論であることがわかる。

大江の提供するこの定義を用いて「憂国」を読んでみると、登場人物の関係を次のように捉えることが出来る。〈武山中尉〉は〈性的人間〉に当たる。彼は〈他者〉である軍隊や天皇制に対立出来ない者である。それゆえに〈他者〉の圧迫から逃げ、妻を相手取って家に閉じこもる。そして〈性〉に救いを求め、妻に抱か

れて周りの世界を忘れようとする。これらの行為は全て〈性的人間〉のものである。

斎藤内府の邸は近くであったのに、二月二十六日の朝、二人は銃声も聞かなかった。ただ、十分間の惨劇がおわって、雪の暁暗に吹き鳴らされた集合喇叭が中尉の眠りを破った。中尉は跳ね起きて無言で軍服を着、妻のさし出す軍刀を佩して、明けやらぬ雪の朝の道へ掛けだした。そして二十八日の夕刻まで帰らなかったのである。(「憂国」参)

この文章から窺える〈武山中尉〉の行動は、軍隊の指示に従って反乱軍との戦いに参加したということである。

妻の〈麗子〉も主人に逆らわらず同行するから〈性的人間〉になる。下記の文章からは、〈麗子〉の主人に従う覚悟が明確に窺える。

言わないでも、妻が言外の覚悟を察していることが、すぐわかったからである。〔中略〕「覚悟はしておりました。お供をさせていただきとうございます」。(「憂国」参)

両方の主人公は他者の目を敏感に意識し、他者の目に映る自分がどのようなものであるかということで悩んでいる。他者は自分をこの姿で見ているだろうから、この様に振る舞いをする、というように主人公はいつも自分と他人の関係を意識する。これは下記の二つの引用文からも窺える。

「俺の切腹を見届けてもらいたいんだ。いいな」(「憂国」参)。

麗子は自分たちの屍が腐敗して発見されることを好まない。やはりあけておいたほうがいい。……彼女は鍵を外し、磨硝子の戸を少し引きあけた。(「憂国」伍)

この文章では、〈武山〉も〈麗子〉も彼らを見る者を強く意識していることが分

かるが、それぞれに違いもある。〈武山中尉〉は妻のことをその傍観者として認めているのに対して〈麗子〉はより広く、周りの人を意識している。新聞報告文体で書かれている小説の冒頭分（壱節全体）は、上記の〈麗子〉の振る舞いによって可能になる。夫婦は〈性的人間〉であったからこそ、その〈外〉の世界との対立に耐えられず、自害する。

「セヴンティーン」の主人公にもこの〈他者〉の意識が強く、そのことは次の文から窺える。

おれの怨みっぽい大きな鼻を見るたびに他者どもはみんな、ほらこいつはあれをやるやつだ、と見ぬいてしまっているのかもしれない。そしてみんなで噂しているかもしれない。(「セヴンティーン」1)

この様な文章は何度も小説中に繰り返され、主人公における他人の意識の拡大を示している。

第二の要素として、〈武山中尉〉には〈政治的人間〉になりたいという気持ちもある。これは反乱軍に属したかった気持ちとして表されている。

「俺は知らなかった。あいつ等は俺を誘わなかった。」(「憂国」参)

ここでは長い間付き合ってきた友達が秘密を教えてくれなかったことで裏切られた気持ちになる武山の様子が語られている。

「セヴンティーン」の主人公も同様である。小説の始まりには我が侭な野良猫のように誰にでも対立出来る強い人になりたい、と〈おれ〉は夢見る。しかし、〈武山〉も〈おれ〉も実際には願望を実現できない。

おれはギャングのような存在になりたい、とおれは考えたが、それこそ奇蹟でもなければ達成できない願望だということもわかっていた。(「セヴンティーン」1)

〈武山〉は事件が起こってからも反乱軍に再編入しようともしない。〈おれ〉

はテレビの政治家を真似て姉と議論をしてみても簡単に負ける。〈武山〉は「セヴンティーン」の主人公と同じく〈性的人間〉でしかあり得ない。この箇所は大江の定義によく当てはまる。

また、主人公が〈性的人間〉でありながら〈政治的人間〉の要素も持っている構造も「憂国」と「セヴンティーン」共通する。〈武山中尉〉は〈麗子〉に同行以外の選択肢を与えないから〈麗子〉を他者として認めず「他者であることをみずから放棄させ」た。

中尉は悩みを語っているのに、そこにはもう逡巡がないのである。(「憂国」参)

「セヴンティーン」の〈おれ〉が姉に暴力を振るって自分の意見を押しつけようとするシーンにもこの要素が見られる

おれは逆上した、おれは喚きながら姉の額をしたたか蹴りあげた。(「セヴンティーン」1)

両方の主人公の行動は公に自分の強さを表すという動機からなる。しかし〈性的人間〉である者は一所懸命その動機を隠そうとする。両者はそのため、天皇制を自分の看板にして他者に見せる。だが両者の内面的な動機は自分の弱さであり、それを隠すことである。

もう一つの要素は、両方の主人公は〈性的人間〉になることを自意識で選んだ訳ではなく、時代の事情や社会の事情によってこの生き方を余儀なくされているということである。「セヴンティーン」の〈おれ〉は家族の皆に同情されず、学校の同級生にも人気がなく、才能を発揮できない哀れな青年である。故に周りの批判的な目から逃げ隠れる道へと追いやられる。「憂国」の〈武山〉は仲間に見捨てられて一人で何もできない状態に置かれているから同じくこの状態から逃げる道を選ばざるをえない。この点でも「憂国」と「セヴンティーン」は同じような設定になっている。

しかし、〈武山中尉〉には「セヴンティーン」の〈おれ〉と異なる事情もある。〈武山〉に他者が二種類あることはまず、注目すべき点である。軍隊や天皇制は

他者であると同時に、反乱軍の友達も他者である。友達である他者にも〈武山〉は対立できない。両面から迫る他者に面した〈武山〉は結局どちらにも同化できず、自殺を選ぶ。

「明日の朝はきっと、奴らを討ちに出かけなければならんのだ。俺にはそんなことはできんぞ、麗子」(「憂国」参)

一方、大江の主人公は片方からの圧迫しか受けていないため、その圧迫に逆らわず同化するという選択肢は与えられている。その意味で大江の主人公は小説中の時間ずっと〈性的人間〉としての役割を果たしているが、三島の主人公は二つの圧迫力で押しつぶされそうになり、対立から逃げる道として自殺を選ぶ。

第二に、自殺のテーマに関して注意せねばならないのは、「憂国」の主人公と「セヴンティーン」の主人公の自殺に内容の類似性はないというポイントである。外面的な類似性は見られるが、それは両主人公が外に見せる形に過ぎないと考えられる。両者は確かに「天皇陛下の為に」と告げ自殺するが、それぞれの動機は異なる。〈武山〉は軍隊の圧迫に同化出来ず逃げる道を取ったが、〈おれ〉は右派に同化する行為の頂点として自殺を選ぶ。

主人公の置かれる事情には違いがあるため、主人公の行動も具体的なところでは異なる。しかし、先に述べたように、全体的な行動のパターンにおいて〈武山〉と〈おれ〉は多くの類似点を持っているので、両作家の〈政治的人間〉と〈性的人間〉のとらえ方は類似点を持っていると言えるだろう。、大江の主人公の定義は三島の小説にも十分当て嵌るのではないかと思われる。

第二節、作家のスタンスの特徴

両作家の類似点は多いが、それぞれのスタンスが違うことにも注目すべきである。

三島は大江と違って、主人公の行動を解釈するエッセイは書いていないため、小説から解釈できる範囲でしか三島のスタンスを論じることは出来ない。しかし小説だけを見ても大江の捉え方と明確な差があると分かる。

大江は〈政治的人間〉・〈性的人間〉という用語を用い、主人公の目で見た関

係にこだわる。そのため、主人公の内面が主題になる。

一方、三島は主人公の気持ちを伝えながら外から見る傍観者のスタンスを取っている。敢えて言えばこの場合、作家も主人公を見る他者である。作家は他者として主人公を見るが、主人公が他者に見せる側面は小説の主題になる。この点は大江と三島のスタンスの一番大きな違いであると考えられる。両者はここで正反対の立場をとっている。主人公の内面よりは主人公とその周りの関係に三島は注目する。主人公自身は見る役割か見られる役割かを問題としている。〈武山中尉〉は見られる役割を与えられており、彼を見る友達、軍隊、妻を意識している。

「俺の切腹を見届けてもらいたいんだ。いいな」。(「憂国」参)

麗子は自分たちの屍が腐敗して発見されることを好まない。やはりあけておいたほうがいい。‥‥‥彼女は鍵を外し、磨硝子の戸を少し引きあけた。(「憂国」伍)

〈武山〉には見る役割は与えられていない。〈麗子〉も見られる役割を担うが、主人の言わない言葉まで読み取ってその言葉に応じて応答する。

言わないでも、妻が言外の覚悟を察していることが、すぐわかったからである。〔中略〕「覚悟はしておりました。お供をさせていただきとうございます」(「憂国」参)

この箇所は、〈麗子〉の意識を表現し、〈麗子〉が見られていると十分分かっていることを意味する。ただ、見る役割も主人により彼女に与えられている。〈麗子〉は主人と違う立場を誇りに思う。

麗子は良人のこの信頼の大きさに胸を搏たれた。〔中略〕見届けてくれる人がなくてはならぬ。それに妻を選んだというのが第一の信頼である。(「憂国」参)

この箇所は、〈麗子〉の見る役割の自意識を描き、彼女はこれについても十分分かっている。そして主人に見られなくても期待された行動を完成する。

また、作家の態度も正反対である。グロテスクな誇張で小説を満たし内面を露出する大江は主人公に対して批判的である。、主人公の内側を見る作家は主人公の側には立たないという現象になる。外面を誇張的に強調する三島は主人公の内面的なドラマに同情的に見える。、外から見る作家は主人公の側に立っている。言ってみれば、作家が見せている立場と意味する立場は逆である。

これらの立場は、それぞれの小説で設定されている時代の反映だとも考えられる。主人公に同情する三島は「理想的な家族」や「天皇尊重」が公に大事にされた戦前を選ぶ。批判的な大江は家族の絆の浅い、天皇制度自体も明確にしていない時代である戦後を選んだ。この時代の選択はそれぞれの作家が意図した筋をより際立たせるために大きな役割を果たしていると考えられる。

作家の態度に関しては、それぞれを扱う評論ですでに多くが述べられている[110]が、両方を比較する研究は不足していた。上記で明らかにした通り、両作家の使うテクニックは同じでありながら使い道が異なることは、両小説を解釈する上で大事なポイントであると考えられる。

第三節、〈見る〉主人公と〈見られる〉主人公

三島の〈見る〉と〈見られる〉関係の概念は、大江の小説の解釈にも適用できると考えられる。〈政治的人間〉・〈性的人間〉という概念よりは単純なとらえ方であるが、主人公とその周りの登場人物の関係を同じく説明しているのである。〈政治的人間〉は〈見る〉側に当たり、〈性的人間〉は〈見られる〉側にあたる。主人公が他者の目の存在を意識するというテーマは小説に一貫して認められる。

〈見られる〉という表現、または〈他者の目〉という概念はサルトルにあるが、序論で言及したように、大江は大いにサルトルの影響を受けている。サルトルは

> 全ての人間にとっては、あたかもその行うところに全人類が注目し、その行うところに全人類がつとるかのように一切が行われる。

としている[111]が、言い換えれば、世界の目は人を見ているということである。大江、そして三島はこの表現を小説上に大いに活用する。

他者の目という表現は「憂国」「セヴンティーン」ともに出てこない。しかし、

三島が主人公にその他者の目を強く意識させることは先述した通りである。大江は他者の目を主題にしていないが、その存在は確実にある。また、表現として「他者の目」という言葉が「セヴンティーン」にある。これは主人公が〈性的〉な行為を行う場面で、彼が周りの世界はその行為を批判しているであろうと考えている時の文句である。

おれを一眼見るやいなや《なにもかも見とおしだぞ》といっておれを脅かす、あの他人の眼。(「セヴンティーン」1)

これは大江の他の小説にも出てくる。例えば「セヴンティーン」にテーマ的に近い「性的人間」には下記の文がある。

一瞬、一千万人の他人どもがＪを敵意の眼で見つめ、Ｊ！と呼びたてるようだった。(「性的人間」2)

ここも同じく、〈J〉が〈性的〉な行為を行う場面で周りの世界はその行為を批判していると考えている〈J〉の意識の描写である。「セヴンティーン」における〈他者の目〉は特に役割が大きく、主人公の〈おれ〉を〈右〉への運動に導くものである。この〈他者の目〉を恐れていた〈おれ〉は、〈右〉になったらおびえがなくなることが分かって、興味半分でしかなかった〈右〉への態度が一瞬にして熱情に変わる。

おれはいま自分が堅個な鎧のなかに弱くて卑小な自分をつつみこみ永久に他人どもの眼から遮断したのを感じた。<右>の鎧だ！(「セヴンティーン」1)

「他者の目」は、それを大切にしている三島の小説上には表現としては出てこないが、〈他者の目〉を副次的なテーマとしてしか設定していない大江の小説では出てくる。三島の影響を受けた大江は表現として「他者の目」を使い、主人公の内面に注目したのであろう。ここで両作家のテーマの共通点と異同点が明らかになった。

第四節、「憂国」のロシア語訳と〈政治的〉と〈性的〉のモチーフの再検討

ここでは、ソ連の翻訳[112]において三島の小説がどういう形を取り、どういう解釈をもたらすかを考えるために、「憂国」の原文とその翻訳を比較する。

本稿はすでに第四章で大江健三郎の「飼育」のロシア語訳を論じた際に同じ方法を取っている。そこからは、原文で見えにくい主人公同士の関係の特徴が分かったため、これは効果的な方法であったと判断される。従って「憂国」のロシア語訳も同じ方法で扱い、「憂国」の新たな解釈を探る。本節の仮説は、「憂国」のロシア語訳は「飼育」や「不意の唖」の翻訳と同様に、〈性的〉な側面を削除するが、それによって出来上がった翻訳小説における主人公の関係は原作に見られる関係と違ってくる、というものである。

「憂国」の翻訳はぢチハルティスヴィリになされ、大江の翻訳も発表された雑誌『外国文学』の一九八八年十号に発表された。グリゴリー・シャルヴォヴィチ・チハルティスヴィリ（Григорий Шалвович Чхартишвили、一九五六年生まれ）はソ連と現代ロシアの著名な日本研究者であり、現在は社会活動や作家としても名がある。日本専門家としてアジアアフリカ大学を卒業し、雑誌『外国文学』で勤めながら現代日本文学と英語文学の翻訳と出版に取り関わった。うちに三島由紀夫、丸山健二、井上靖、島田雅彦、安部公房、開高健などの小説を翻訳した。氏は日本文学と日本文化を紹介した功績により二〇〇九年に旭日小綬章を受章した。

資料 VIII は翻訳の分析の結果を表にまとめたものである。翻訳文を原文に照らし合わせ、異同を見つけ出し、翻訳文を日本語に再訳した。

異同に関しては、それがなされた理由をそれぞれに推測した。

原文の定本は初出を扱う。

表中の記号は、網がけは削除された箇所、傍線は追加された文書、波線は置き換えた表現に当たる。以下の分析における番号は表内の番号である。

分析した結果、異同の総数は十七ヵ所であった。

まず、性的な表現の緩和や削除は卌ヵ所あり。丨番のように、細かい所を削除したり表現をより和らげた訳となっている。特にこの丨番の場面は、政治的な内容に満たされた第一節と第二節のすぐ後に置かれた場面であり、小説に出てくる初めてのエロスの要素である。この場面で作家は後ほどのエロスに満たされる第

三節末を暗示・予告し、読者に後ほどのエロスの世界の味見だけをさせる。そのまま食事の比喩を続けると、読者の食欲を刺激させ、読者が後に来るメイン料理を待ちかねるようになる。

（原文） 演習のかえりの埃だらけの軍服を脱ぐ間ももどかしく、帰宅するなり中尉は新妻をその場に押し倒すことも一再でなかった。

（翻訳） 演習のかえりの埃だらけの軍服を脱ぐ間ももどかしく、帰宅するなり中尉は新妻を抱きたしめたくてたまらなくなったことも一再でなかった。

（часто, вернувшись со службы, поручик не успевал даже скинуть пропыленный мундир, так не терпелось ему заключить в объятия молодую жену.）

上記のように、この場面で原文の「その場に押し倒す」という明確な性的な意味を持つ表現は、翻訳で「抱き締めたい」という曖昧な表現になった。結果としては、前半の性的なテンションが一気に下がり、ほとんど消えてしまう。更に、この場面で〈性〉性が薄くなったことで、後ほどのベッド・シーンの〈性~~的~~〉性も薄まる。この結果からこそ、この場面の大事さが明確に見えるようになる。数限られた言葉によって、小説前半の感覚が変わることからは、逆説的に作家三島の技量が改めて示されるとも言える。

第三節末のベッド･シーンは、翻訳では全削除には至らなかった。Napier の評論では、

〔前略〕このシーンは三島が書いたもので一番エロティックなものであり、恋する人の情を爛熟にもポルノグラフィーにも陥らずに書くことができた。

(…this scene is the most erotic one Mishima ever wrote, managing to demonstrate the lovers' passion without descending into either overripeness or pornography.)。[113]

と述べられている。このシーンが丸ごとの削除を逃れたことで、テキストはほぼその本来の姿でロシアの読者に届けられることとなった。特に大江健三郎の「飼育」のロシア語訳に見えた性的な場面の丸ごと削除と対比してみればこれは大きな違いであり、翻訳の時代性が浮かび上がる。まとめると、「憂国」のロシア語

訳は「飼育」のロシア語訳よりも自由な時代に発表されたため、検閲でもそのまま通ったと考えられる。こういった歴史的な背景については第四章の第二節で論じたが、「憂国」は所謂「ペレストロイカ」、ソ連のイデオロギーと国の思想の方針が変わった時代に出版された。その時代以前に厳禁であったテーマの一部は発表許可を得て、検閲も一段と緩くなった。故に「憂国」のロシア語訳は「飼育」のロシア語訳より出版環境に恵まれたと言える。

しかし、表の〆番に見られるように、「逞ましい胸とその樺色の乳首に接吻した」という文章から直接的性用語である「乳首」が翻訳で消えたように、丸ごと削除はされなかったものの、このベッド･シーンの数カ所はまた削除された。それらは性的な表現の中でも一番テンションの高い、最も高揚した箇所であると考えられるものである。その削除によって全体的な高揚感も低くなる効果が見られる。庭園技師が潅木の際だって突き出る枝を切って潅木全体を低く平凡な形にするように、この削除によって、ベッド･シーンは全体に平板化・凡庸化したと言える。

感情的な表現の削除と置き換えも、性的な表現の削除に関わるものであり、小説全体の〈性〉的なモチーフの印象を薄くする効果があると思われる。例えば十番に、

> 中尉は雄々しく身を起こし、悲しみと涙にぐったりした妻の体を、力強い腕に抱きしめた。
>
> (Поручик сжал в могучих объятиях горько плачущую жену.)

とあるように、〈武山〉の描写の一部が削除されたことによって、この一文の感情性が弱まることが分かる。これらの削除の内には、中尉の目で見られる〈麗子〉に関する表現があるが、中尉自身に関する表現もある。後者に関しては、Cornyetz が指摘している「三島の男色趣味によるもの」[114]に当たる。Napier もこの箇所を「明らかに男色エロティズムの感触がある」（Obviously there is a touch of homoerotic in that.）[115]と言及している。これらは恐らく検閲で通らなかった箇所である。男色というテーマは、猥褻の極地に当たるとソ連では考えられ、男女関係の性描写よりも厳しく検閲された。上記で挙げた十番の削除はここに属する。

政治的な表現の削除に関しては、愛国主義・軍国主義に満ちた表現は検閲を通

らなかった。例えば十四番、

戦場の決戦と等しい覚悟の要る、戦場の死と同等同質の死である。
（Ибо ожидающая его смерть не менее почетна, чем гибель на поле брани.）

とある。この文章は「天皇陛下のため」と告がれる自殺を雄々しい戦死に等しくするものであるため、検閲を通らなかったと考えられる。この明らかに軍国主義的な文章は、前半の削除によって思想的な内容を失う。資料 IV[116]で挙げられているように、「主要な問題に関して我が国に敵対的なイデオロギーを流布する如何なる出版物も許可しないこと」（В недопущении всякого рода печатных произведений, через которые проводится враждебная нам идеология в основных вопросах）は検閲の一つの重要項目であった。ソビエト政権は平和主義を標榜していたため、軍国主義を協調する十四番と、天皇を万能神と立てる十五番が消されたのであろう。

異同理由の不明な箇所は表現上の置き換え・部分的な削除である。翻訳困難という理由も考えられるが、見当が付かない箇所もある。翻訳便宜上のものと考えられる箇所は例えば十一番である。この箇所は何重にも重ねられた説明の文章であるため、翻訳では同じ構造で書くのは困難であったのだろう。この文章を短く切る方法もあったであろうが、訳者は結局全文を短くしただけである。

異同理由の見当が付かないのは、例えば五番がある。前後の文脈で燗のことは書かれているものの、この文章の火鉢を燗で置き換える必要性は不明である。

また、これに近い異同に訳者の誤解と見られる二箇所がある。二番は文法的に複雑な繋がりの文章であるために誤解されたのかも知れない。若しくは文化的な説明が必要であったため、訳者がわざと簡略化した可能性もある。神棚と榊は日本の文化において日常的なものであるが、翻訳ではその関係と営みについての説明がない限り読者には理解不可能な文章になったかも知れない。

四番に関しては、漢字の読み取りの誤解であったと考えられるが、訳者は日本語の達人として有名なチハルティシヴィリであり、このような単純な理由の異同であったとは一概に言えない。にも関わらず、わざと〈栗鼠〉を〈土竜〉と置き換える理由は見当もつかないから、たまたまの間違いであったとしか考えられない箇所である。

上記に言及したこの翻訳の時代性についてここでより詳しく述べよう。出版された一九八八年とは、ソ連時代の末期である。当時のソ連は一九八五年から始まったいわゆる「ペレストロイカ」(「再建」)の途中であって、民主主義化が進んでいた。それによって検閲は緩められ、以前は考えられない本が出版されるようになった。「憂国」も恐らくそれ以前には出版することはできなかったであろう。〈性〉というテーマが完全禁止になっていた時代は終わった。しかしながら、まだ完全自由化にまでは至らず、翻訳者と出版社は、性的なものを大部分許可しながらも一定の制限をしていた時代であった。「憂国」の翻訳はその時代を反映して、性的なモチーフがある程度緩和されている。政治的なテーマは、唯一の思想と主義しか認めなかったソビエト政権が検閲項目の中で一番厳しく制限したテーマであった。「ペレストロイカ」の時代でも政治は危険なテーマであったが、「憂国」の翻訳における政治的なモチーフの削除も、この状況を反映していると言えるだろう。

「憂国」のロシア語訳は「飼育」のロシア語訳ほど大規模に原文を変化させるものではない。しかし、細かい箇所に見える削除や置き換えは、作品全体の印象を薄め、性的なモチーフと政治的なモチーフを淡くしている。従って、作品の解釈も変わり、主張するテーマが曖昧になる。この翻訳を紹介した同時代の評論[117]では、「憂国」の主なテーマは「･･･夫婦の二重自殺である」と指摘されている。また、文学研究家 A.ドリンによる論文「三島由紀夫の遺訓」[118]の分析によると、「憂国」は「三島による侍魂の不朽不滅な精神を歌う文学への転回点」(Поворот к «ангажированной» литературе, прославляющей «немеркнущие духовные ценности» самурайской морали, наметился в творчестве Мисима со времени опубликования… «Патриотизм».)[119]である。

尚、同じドリンはソ連時代が終わって自分の以前の論文を振り返る際、当時の検閲事情について言及している。

〔前略〕選択の自由はなく、フィールドワークもなく、代わりに強硬なイデオロギー検閲が作動していた。

(…не было свободы выбора, не было полевых исследований, но действовала жёсткая идеологическая цензура.)[120]

ここに窺えるのは、ソ連時代の日本文学研究者は研究する小説に関して自由に論じることができなかったということである。引用したドリンの「憂国」の評論も、彼の個人的な論ではなく、当時の検閲に求められた論であったと考えられる。

このドリンの論に次いでキム・レホ[121]も「憂国」を「殉教美学が最もむきだしになった形」（В наиболее обнаженном виде «эстетика жертвенности» представлена в… «Патриот».）[122]と呼ぶ。「三島は偽りの義に捧げられた狂信的な死の行為を極度に理想化し、深く個人的な箇所を芸術的視野から完全に排除してしまう」（Мисима… идеализирует фанатический акт смерти во имя ложного морального долга, полностью исключая из сферы художественного видения моменты глубоко личностные.）[123]という分析は、上記でみた検閲された文章全体を受けて書かれたものである。キムが指摘する「完全に排除」された主人公の個人的な部分とは、実は検閲によって削除された部分に現れているとも言えるのである。例えば卅番において、

> 口には出さなかったが、心も体も、さわぐ胸も、これが最後の営みだという思いに湧き立っていた。

とある。消された部分は、主人公の気持ちを著しく強調するものであると考えられるが、翻訳文からは消された。結果として最期を迎える主人公の気持ちは弱められ、「深く個人的な箇所を芸術的視野から完全に排除してしまう」という三島評は妥当性をもたされてしまうのである。

当時のソ連の読者がこのよう解説を受けた上でこのような翻訳を読んだら、原文を読んだ日本人の読者と大いに違う解釈をすると考えられる。薄くなった〈性的〉なモチーフは、〈政治的〉なモチーフとの対立性・コントラストを失い、両者は互いにほとんど関係なく小説上に浮かぶことになる。さらに〈政治的〉なモチーフも削られ、小説の強調点が〈政治的対性的〉の対立より夫婦の恋愛の方へ移動するだろう。

逆説的に言えば、削除された細かい箇所がこれほど作品全体の解釈に影響するということは、その箇所の重要性を裏付けるものでもある。この小説における〈政治〉と〈性〉は互いを必要不可欠として、小説全体の構造がその両者の周りに構

築されていることが新たに明確になる。大江の小説と同じように、三島においてもこの二つは止揚しているのである。

ここで小説の題名と〈政治的人間〉と〈性的人間〉というテーマの関係を考察しよう。上記ですでに言及したように、「憂国」の主人公には、彼が外側に見せている面と内側に隠している面があるが、小説の題名はその外面の方を強調する。それこそ小説の表である題名は、主人公が表・外面に出したかった気持ちを表している。しかし、これもまたすでに述べたように、主人公の内面はその外面とは違っていた。この点では、大江健三郎の小説「政治青年死す」の題名も同じようなものであると考えられる。この小説に関しては詳しく第七章で論じるが、その主人公は、「憂国」の主人公と同様に内面と異なる外面を表に見せようとしていた。題名もその表の面である、主人公が「政治青年」であることを表している。

英語訳では「憂国」は“Patriotism”[124]であるが、ロシア語訳も同じ言葉[「パトリオティズム」（«Патриотизм»）を使う。面白いことに先に引用したキム・レホによる評論では、この小説は「愛国者」（«Патриот»）という言葉で訳されている。題名を除けば、この言葉は文中に一度だけ、次の箇所でのみ出てくる。

> 中尉はだから、自分の肉の欲望と憂国の至情のあいだに、何らの矛盾や撞着を見ないばかりか、むしろそれを一つのものと考えることさえできた。（「憂国」参）

この文章のなかの「憂国」はロシア語訳で「愛国の感情」（«патриотическое чувство»）とあり、英語訳では“patriotism”であるが、両方とも基本的に題名の翻訳と同じである。

この言葉の不適切性に関しては既に Dennis Washburn[125]の論文などに指摘があるが、その理由と小説の内容との関係は詳しく論じられていない。「憂国」は文字通りに「祖国を憂う」ことであるが、詳しく定義すると、「現在の国情についてこのままではいけないと心配」することである。この現状への不満足に関しては、第七章第三節で詳しく論じる。“Patriotism”は日本語の「愛国」により近く、この言葉を定義すると、「自分の生まれた国を誇りに思う」ことである。これは現状をそのまま受け入れる意味もあると解釈すれば、作家の意図から外れる翻訳である

とも思われる。Washburn の指摘では、より適切な翻訳は“grieving for one’s country”[126]であるが、これは「国を憂う」という言葉の直訳である。

〈性的人間〉である〈武山中尉〉は外的状況により圧迫され、その外的状況は「国」という言葉で表される。主人公は外面的にその状況に同化し、国を憂うと表面的に示す。現状に不満足でありながら、現状の国のためにわが身を捧げると訴える主人公はなお「政治青年死す」の主人公と同じである。主人公のこの行動は自分を〈政治的人間〉として見せるためであり、傍観者の見る目を意識している。

上記のようなニュアンスは題名から解釈できるが、これは確かにロシア語でも英語でも一言で表せないものである。「憂国」に合う言葉はロシア語にも英語にもなく、説明的な訳を避けられない状態では“Patriotism”は妥当であるかもしれない。

一方、“patriotism”は三島が描く表面的な感情をより強調する、という解釈もできる。「愛国」は「憂国」より一般的かつ響きのよい言葉であり、〈武山中尉〉が見せた感情を単純化しはするが簡明に表す効果もある。いずれにしても、翻訳された本文と同様に、翻訳された題名もまたある程度原文を変えていると言えるだろう。

第五節、大江の初期作品を通して中期作品を読み直す

ここでは中期の代表的な作品である「セヴンティーン」を初期の「人間の羊」と比べながら論じてみたい。

第三章第一節—3、そして同章第二節—2 で論じたように、「人間の羊」では、米兵の出現により、主人公と読者が戦後の日本社会の分裂に気づく。バスの乗客は、直接米兵より何らかの被害を受けたグループと、それをただ観察するグループと、その状況から何かを得ようとする者とに分けられる。

この小説は日本人とアメリカ人の立場の点でもう一つの初期の小説「飼育」と正反対の設定になっている。大江はわざと同じような動物的なモチーフを使うことによりその二篇の対立を強調する。「飼育」で動物的な扱いをされたのは米兵であるが、「人間の羊」では日本人が動物扱いされている。もう一つの対立点は、小説の世界の現実性である。「飼育」の場合は神話的な世界における、最初は平和な関係が描かれている。「人間の羊」ではリアルな世界が描かれ、最初から日本人と

アメリカ人の関係は暴力的である。「飼育」の主人公は最後まで自分の置かれている世界を楽しんでいる。しかしこの世界が〈大人〉によって壊されると主人公はその世界を拒否するようになり、自分と周りの人々を切り離そうとする。一方、「人間の羊」の主人公は最初から彼を脅かす状況におかれ、更に暴力にさらされている。この場合、逃げ道としては〈現実の否定〉が選ばれ、主人公は教員から沈黙のまま逃げる。

中期小説に移って「セヴンティーン」では主人公は同じくリアルな世界に衝突し、圧迫される。主人公はそこからの逃げ道を、自分の性欲を満足させることのみに見ている。しかし、彼が得ようとする快楽は、〈自涜〉によるだけではない。彼は政治的な活動からも同じような気持ちを得る。それゆえ彼は右翼活動に全力を尽くして、政治的な活動を武器と盾として使って自分の〈内〉を周りの世界の干渉から守ろうとする。

「セヴンティーン」の主人公は明らかに〈性的人間〉である。彼は〈姉〉に代表される〈政治的人間〉から逃げようとし、さらに〈逆木原〉に代表されるまた別の〈政治的人間〉と手を組み、自分も〈政治的人間〉になろうとする。しかしその関係もやがて崩れる。「セヴンティーン」の第二部で、主人公はこの自己欺瞞に目覚め、右翼も実は逃げようとした〈政治的人間〉であることを悟り、絶望し、殺人を犯して監視所で自害する。

中期の小説の概念を用いて初期の「人間の羊」を観察してみると、主人公が同じく〈性的人間〉であることは明らかである。〈政治的人間〉はアメリカ人と教員である。大江がその作品を執筆したころに〈性的人間〉と〈政治的人間〉の対立の固定した概念がすでにあったかどうかはともかく、その概念の芽生えは明らかに見える。

また、主人公の性的意識の発達とともに初期から中期にかけて恥意識、罪意識も発達する。主人公は〈性〉に逃げ道を探すが、そのような道が周りの社会に批判されていることを敏感に察し、恥じている。しかし、これも後ほど解決し、中期の後の作品では恥意識はなくなる。

このような形で大江の小説上展開する日本社会における二つの人間のタイプの止揚は、長い間、大江にとって重要なテーマになった。

しかし、「性的人間」と「セヴンティーン」の主人公は、明らかに〈性的人間〉

であるものの、その役割を果たせていない様子も見られる。

場合により、彼らは〈政治的〉でもある。「性的人間」の〈J〉は痴漢被害者に対して、「セヴンティーン」の〈おれ〉は自分の姉などに対して、「対立せず抗争しない」とは言えない。むしろ「硬く冷たく対立し抵抗し」ていると思われる。

ここには小説と、批評における大江の定義との矛盾が見られる。

この矛盾はしかし初期作品にすでにあったと思われる。先述した「飼育」と「人間の羊」の主人公の立場の逆転は、〈政治的〉なものと〈性的〉なものの逆転でもあると言えよう。

よって、政治的と性的は〈対立〉の関係に置かれている一方、他方では〈止揚〉の関係にもあると主張したい。これは〈対立〉から〈止揚〉への展開の過程ではなく、同時に〈対立〉し〈止揚〉しているのである。

以上、それぞれの小説における〈政治的人間〉と〈性的人間〉の描き方、登場人物としてのそれぞれの意義について論じた。まとめると、初期小説から中期小説にかけての作品を一連のものと捉えれば、大江は、〈性的人間〉と〈政治的人間〉の間の関係の様々なパターンの設定を試み、〈政治的人間〉と〈性的人間〉の間の止揚の解決は如何なる状況で可能かという疑問に答えようとしているのだと言える。それぞれの条件を持つ〈性的人間〉と〈政治的人間〉の出会いは、対立葛藤があるからこそすぐには解決を見出さない。

第六章の結論

本章は、大江健三郎の〈政治的人間〉・〈性的人間〉のテーマを分析するために、同時期に三島由紀夫が執筆した小説との比較を行った。

両方を分析した結果、表現や作家の態度に関する類似点・異同点が明確になった。類似点は主人公の性格や設定されている状況に見られ、主人公の全体的な行動にも見える。そして両作家の〈政治的人間〉・〈性的人間〉というテーマの捉え方全般においても類似性が見出される。見る側に示す外面と見られる側の自分の内面のズレが生じることから、主人公において精神的な葛藤が起こる。これは両小説の一番大きな類似点である。

一番大きな異同点は、作家が主人公に対して表す態度に見える。グロテスクな誇張で小説を満たし内面を露出する大江は主人公に批判的に見える。主人公側からの目線を使い主人公の行動に対して反対する立場を取る。外部の傍観者の目線を使う三島は主人公の内面的なドラマに同情的に見える。これらの差は表現や時代設定のなかに見ることができる。大江のアプローチを三島の小説に適用して得られる解釈、また三島のアプローチを大江の小説に施してもたらされる解釈は、それぞれの小説の新たな面を際立たせる。

また、三島のロシア語翻訳の特徴で見た〈政治〉と〈性〉の止揚は、大江の小説と同様に、小説の解釈に重要なモチーフであることが確かめられた。

また、「憂国」のロシア語訳を分析した結果、仮説として設定したアイディアは完全には証拠付けられなかったが、否定もされなかった。翻訳小説からは〈性的〉な側面は確かに削除されたが、この小説は「飼育」ほど著しい検閲削除にはあわなかったことが分かった。これは「憂国」のロシア語訳の出版時期と「飼育」のロシア語訳の出版時期の違いに原因を持ち、「憂国」はより自由な時代に現れたため厳しく検閲されなかったのである。ただし、少ないとはいえ、削除はそこにあり、それよって出来上がった翻訳小説における主人公の関係は原作に見える関係と違うものになっているという仮説は確かめられた。性的な描写と感情的な描写の削除と書き換えによって小説の全体的な内容は主人公の内面を表さなくなり、二人の関係を描く小説よりは軍事主義的な自殺のみを描く小説になっている。

第七章　大江の〈政治的人間〉と〈性的人間〉の止揚
―「性的人間」と「セヴンティーン」を中心に―

本章では、第二章から第五章にかけて論じてきた大江の初期小説と中期小説の特徴をまとめ、本論文の本題である〈政治的人間〉と〈性的人間〉の〈止揚〉を論じる。

第三章と第四章で論じてきたように、初期小説には〈強者〉と〈弱者〉という形で中期の〈政治的人間〉と〈性的人間〉というテーマの先駆が見られる。初期の作品においては、〈強者〉と〈弱者〉は互いを必要としており、小説全体の構造はその対立の周りに書かれているという構造になっている。同じ第四章第六節で論じてきたように、この対立の片方を抜いたり弱めたりすると、もう一方の存在も同様に崩れ消えていく。

また、第六章で見てきたように、大江以外の同時代作家にも似たようなテーマの扱い方が見られる。三島由紀夫の作品を大江の作品と比較分析してみた結果、三島の「憂国」でも〈政治的人間〉と〈性的人間〉が互いを不可欠に必要としていることが明かになった。

従来の研究や評論では、大江の〈政治〉と〈性〉を二つの対立する要素と捉え、交差しない二つの世界として捉えてきた。大江自身がエッセイで解説しているように、日本の若者はいずれかにならざるを得なかったのである[127]。

しかし、上記で論じた通り、この二つは互いに離れることのできない存在である。第四章で「飼育」のロシア語訳を分析し、小説から片方を削除すれば他方も崩れ行くことを明らかにした。同時代の三島由紀夫の小説に関しても同じようなことが言える。、〈政治〉と〈性〉は互いに必要不可欠とし、常に交差する世界なのである。

また、小説の主人公は〈政治的人間〉か〈性的人間〉のいずれかであっても、常に他方の試みをするとも上記で論じてきた。

以下は、上記の点が中期小説において如何に現れているかについて、「性的人間」と「セヴンティーン」を中心に論ずる。この二作は大江の中期小説の代表的な作品であり、〈政治的人間〉と〈性的人間〉の主人公を細かく描写するものである。故に本論文の考察対象としては適したものであると判断し、この二つを取り上げ

ることになった。

「性的人間」(『新潮』一九六三年五月号）は二つの部分から成る小説である。前半は〈J〉という主人公は英語監督志望の妻と映画のスタッフとなる数人の友達を別荘に招く。途中は漁村を通る時、車に乗っている登場人物は村人に疎外された姦通女の家の側を通り、家の周りを囲み監視する村人の群れを通る。目の前にした場面で気を取られた七人はやがて別荘にたどり着き、映画の撮影を話し合いながら乱交をする。そして数人は微妙な「何かで見られる」感じがする。夜明けになって別荘に入り込んだ村の少年が見つかり、「オラ見タガゼ」と叫び逃げ出す。村人は別荘を囲い、前夜のように不気味な目で中の七人を監視するが、七人は不安と恐怖に陥る。〈J〉の妹はやがて気転を利かして皆を救う。そして七人は映画の撮影を始める。

後半は同じ〈J〉の数ヶ月後の出来事を描写する。ある日突然〈J〉は痴漢になる決意をしたが、電車でもう一人の痴漢である老人を逮捕から救って「痴漢クラブ」を作る。二人はまた少年の痴漢に会い、同じく逮捕から作ったが少年はわざと異端的な痴漢をしたと救命者に反論する。少年は「危険な痴漢」を夢見て、その思想を詩にしたいから自分で実現しなければならないと二人に説明する。山人はしばらく付き合うが、少年は幼女誘拐という新しい異端的な行動に走り、電車の路線に落ちて死ぬ。〈J〉の妻ははかつての映画のカメラマンと再婚すると告げ、〈J〉は父の誘いで父の会社の仕事をすると約束する。しかし、同じ日の内に〈J〉は突然決め直して地下鉄で痴漢をやる。数人の腕に捕まれる〈J〉は今まで知らなかった快楽と恐怖に陥る。

「セヴンティーン」(『文学界』一九六一年一月号）は主人公の〈おれ〉の皆に忘れられた誕生日から始まる。自衛隊の病院の看護婦をしている姉だけが誕生日のことを思い出したが、〈おれ〉は自衛隊のことで姉と口論し姉を蹴りつけて傷つけてしまう。〈おれ〉は誕生日に風呂場で「自涜」をしながら、みんなに「自涜常習者」と見られている自分に絶望し、機関銃でみんな殺してやりたいと考える。夕食の時、自称自由主義者の父は〈おれ〉に冷たく、東大に入るか就職するか、それとも防衛大に入るかと尋ねる。〈おれ〉に将来の明確なアイディアはないが、取りあえずだれかを殺したいと思いながら死への恐怖に捕らわれる。〈おれ〉は庭の物置に身を隠せ済んでいるが、この夜は無数の敵を日本刀で殺すとイメージして

唯一の友達として思う野良猫の〈ギャング〉に訪問される。翌日学校のテストで失敗する〈おれ〉は何回もクラスの笑いものになる。放課後ある同級生にに誘われ日当五百円で右翼のサクラになってみる。〈皇道派〉の〈逆木原邦彦〉の演説は意味不明な怒号にすぎなかったが、そばにいた三人の女事務員が〈おれ〉たちを非難することを聞いた〈おれ〉は初めて自分が《右》であることを自覚し、歓喜に陥る。〈逆木原〉は「ありがとう、きみのように純粋で勇敢な少年愛国者を待っていたんだ、･･･」と語りかけ、〈おれ〉は〈皇道派本部〉で入派する。数週間後〈逆木原〉は両親の許可を得て〈おれ〉を本部に引き取る。〈皇道派〉の制服は、傷つきやすい〈おれ〉の魂を永遠に隠す気がする。唐手と柔道に熱中しはじめ、〈おれ〉は「最も勇敢」で「最も凶暴」な、そして「最も右よりのセヴンティーン」になっていく。

「政治少年死す」(『文学界』一九六二年二月号）は、「セヴンティーン」の主人公の〈皇道派〉における活動、政治家の殺害と自殺を描く小説である。〈おれ〉は有望な党員となり、〈皇道派〉の思想や活動に身を投げる。かつて憧れの対象であった〈逆木原邦彦〉から離れ、より激しい思想を持つ党員〈安西繁〉と接近するようになる。八月の暑さの中で広島で全学連のデモに反対デモを行い、衝突で〈おれ〉は傷を負う。〈皇道派〉と付き合う名のある殺人者は「きっと大事をなす人物になる」と〈おれ〉を評価し、〈おれ〉は大喜びをする。テレビで〈皇道派〉を批判する左翼作家を脅かし放言を取り消しさせるために〈おれ〉はテレビ局の入り口に待ち伏せをする。対決の間にこの左翼の生き方の方が正しいかも知れないと考える〈おれ〉は同じ日の夜にキャバレーで彼の同性愛と麻薬中毒の習慣を知る。「売国奴を刺す」と誓って東京へ帰る途中、自分の悩みを〈安西〉に話すと決めたが、党本部に帰ると〈安西〉は党の消極性に不満を以て脱党したと分かる。残されたメモの指示に従って〈おれ〉は農場の生活を始め、今まで体験しなかった肉体労働を味わって感動する。久しぶりに家へ帰ると「決行」を決めて辞世を作る。ここから小説は「獄中」の時間に跳ぶが、〈おれ〉が犯した殺人は取り調べの描写で伝わる。事件は家庭裁判に送られ、死刑を受けないと分かった〈おれ〉は絶望する。そして最後の〈自涜〉をして敷布に首を絞める。

上記の「セヴンティーン」と「政治少年死す」は、本論文において一つの作品として扱う。大江はこの二つを二部作として書いたこともあるが、小説のストー

リーは「セヴンティーン」から「政治少年死す」へ続いているため、一つとして考えることは合理的である。

なお、本論文ではセヴンティーン」と「政治少年死す」の主人公である〈おれ〉は〈性的人間〉であることを前提にしているが、これに対して「政治少年死す」という題名は一見矛盾に見られる。イワモトヨシオはこれを次のように論じる。

『政治少年死す』という表題は皮肉である。その理由は、〔中略〕〈おれ〉は政治的人間の側面よりも性的人間の側面を内包しているからである[128]。

第六章ではすでに大江は主人公に対して皮肉なスタンスを取ると論じてきたが、上記の引用は同じアイディアを表現している。しかし、ここは単なる皮肉だけではなく、より深い意味も読み取ることができると考えられる。この小説では大江は〈性的人間〉は〈政治的人間〉に変わることができないというメッセージを込めているようである。そして、主人公のような現代日本の若者は殆ど〈性的人間〉であり、〈政治的人間〉になることは不可能であるという意味で「政治少年は死して性的青少年しか残らない」というメッセージになっているのであろう。

第一節、活動範囲と主人公の関係

筆者が大江の定義にとらわれずに、定義から逸脱して考察したいのは〈政治的人間〉と〈性的人間〉の活動範囲である。主人公の特徴として小説中に現れているものではあるが、大江の定義にはない点である。〈性的人間〉は狭い範囲を好み、極く限られたスペースの中でのみ行動する。

「性的人間」においては、この狭いスペースはまずは〈J〉が冒頭に乗る車に代表される。定員五人の車で七人も乗っているこの車はいかに狭く、人や荷物に溢れすぎているかが、数ページに渡る説明から窺える。そのジャガーは大きいという設定になっているが、大きさは外面的であり、内側は全員がろくに座れないほど狭くなっている。

ジャガーが通る村では、家に閉じこもっている女とその家の周りに集まっている村人というシーンを主人公が見る。閉じこもりの女は大江の定義に見られる「他者と対立できない」という点に当てはまることができるため、明らかに〈性的人

間〉であり、村人に圧迫されている。このシーンは後ほどの〈J〉の家を囲む村人のシーンの予告でもある。女の状態は、大江の初期小説に見られる〈監禁状態〉というテーマの反響でもある。女は自分の希望でその状況に置かれている訳ではなく、村人に閉じこめられている。これは初期小説の設定と同じである。

〈J〉の別荘も広いものの、限られたスペースである。村から離れ、外れにある場所であって、上記の女の家と同様に村人に疎外されている。その別荘を持つようになった〈J〉は始めから「湾までおりてくることを恐がっていた」し、村人が別荘の周りに集まると、〈J〉は恐がって庭に出られなかった。

「性的人間」の後半における限られたスペースは、電車に代表される。〈J〉は痴漢活動の現場として地下鉄を選び、小説後半の多くの出来事はそこで展開される。さらに、主人公たちが会う場所としては他にバーやアパートぐらいしかなく、ほとんどのシーンは限られたスペースで行われる。地下鉄以外でも痴漢の場所としての電車は当然であるとは言えるが、必ずしもそうではない。〈J〉が思い出す数百万人のデモの時に起きた痴漢のストーリーはその証左である。デモという空間的に限られていない状況で起こる痴漢は、電車の中の痴漢とは違うが、〈J〉に選択肢がない訳ではない。しかし〈J〉はわざと限られた空間である地下に入り、さらに限られた空間の電車を活動範囲として選ぶ。限られた空間の安全感を忘れられないからである。

「セヴンティーン」における限られた空間は〈おれ〉が住んでいる物置である。家族からも離れて一畳のスペースを作って住む〈おれ〉は〈J〉と同様に限られた空間を好む。

では、この限られた空間の意味は如何なるものであろうか。〈性的人間〉は限られた空間を安全地帯として求めている。周りの世界、周りの〈政治的人間〉の圧迫から我が身を守る試みとして、その周りの世界と自分の間に何かの壁を置いておけば少しでも安心できるという動機がここに見られる。その隠れ場は小さければ小さいほど、世界の人が見逃しやすくなり、その中に閉じこもる間だけでも世界の人の批判的な目から主人公を放っておくであろう。その中にいる時に限り、主人公はある程度自由を感じる。〈J〉はその別荘で自分の理想の〈性の小世界〉を作り、〈おれ〉は夢想の敵を日本刀で斬っている。

次に「性的人間」における村の疎外された女の家と〈J〉の別荘の違いについて

考えたい。上記で述べた通り、女の家は初期小説の〈監禁状態〉の影であるが、〈J〉の別荘はこのテーマの発展型である。小説の始まりの〈J〉のジャガーは監禁された女の家の側を止まらずに通り抜けることも、シンボリックである。この車も発展型の限られた空間であると考えれば、女の家を後にすることは大江の小説における旧型の〈監禁状態〉から発展型の限られた空間への移動のたとえとして捉えられる。〈監禁状態〉におかれる初期小説の主人公は、周りの圧迫や生活の状況によってその状態に陥る。初期小説の主人公は好んでその限られた空間を選ぶ訳ではない。これは特に青年刑務所を描写する「鳩」(『文学界』一九五八年三月号)という短編小説で最も明らかであろう。この小説は未成年犯罪者の少年院での生活を描き、逃げる道もない主人公の〈僕〉は獄中の幾つかの事件を乗り越えてやがて脱走を試みる。足の骨折を願いながら少年院の壁から下の川に飛び降りる〈僕〉の描写で小説が終わるが、脱走は旨く終わることを予想させない暗い描写である。不自由に閉じ込められている主人公の状態の説明には、刑務所という舞台は明示的である。他の小説でもこの不自由は明確に読み取れる。この初期型の限られた空間を〈J〉は通り過ぎて、自分の意思で選んだ新しい発展型の限られた空間である別荘へ向かう。

、中期小説に見られる限られた空間は初期小説と対照的に、主人公が自らの手で作る。監禁状態を脱出したい初期小説の主人公とは逆に、中期小説の主人公は限られた空間を自ら選び離れようとしない。外の自由を求める初期小説の主人公に対して、中期小説の主人公は限られた空間の安全感を求める。

Napier の指摘では、「性的人間」の主人公は

〔前略〕世界に疎外さえされていない。それより、彼らは世界を疎外するのを選んで、自らの世界を作る〔後略〕。

（…they have not even been rejected by the world. Rather, they choose to reject the world and create their own…）[129].

筆者は上記の指摘の後半には賛成するが、前半に関しては反論したい。「性的人間」の〈J〉に関して、上記の指摘は恐らく小説の冒頭文辺りを示している。確かに〈J〉は無事に村を通り過ぎて別荘へたどり着いている。小説の前半の終わり頃

まで村人は現れない。とすると、〈J〉が疎外されているとは明確に書かれていない。しかし、〈J〉の車が村を通り過ぎる途中に、下記のような記述がある。

> ジャガーが接近すると確かに人々は静かにスムーズに敷石道の両側の家々の軒先にしりぞいた。そのときかれらはもう、車とそのなかの七人に対して好奇心をいだいていないようだった。むしろまったく無関心にさえ見えた。

この村人の見る目は筆者の解釈では〈J〉たちを疎外する意味を暗示している。村人には〈J〉はヨソの者であり、決して村の小世界の人々と同じように見えない。また、上記ですでに言及した別荘の位置、〈J〉が閉じこもる空間は村の外れにあることも同じ事を暗示していると思われる。〈J〉はその村人の圧迫を恐れながら自分の小世界の空間へ逃げ込む。後ほど村人が別荘を囲む時には、この疎外と圧迫はより明確になる。

「性的人間」の後半に関しては、〈J〉は最初から周りの人に疎外されていないと解釈されやすい。〈J〉の痴漢行為は秘密であり、周りの人に知られていない限り〈J〉は周りの人と同じように見えて疎外されていないように見える。しかし、ここも細かいディテールに注意すれば疎外の暗示が見て取れる。一番分かりやすいのは〈J〉の妻の脱走である。〈J〉の妻は徐々に〈J〉と話さなくなり、結局〈J〉を捨てて〈カメラマン〉と付き合うようになる。〈J〉の妻は恐らく〈J〉の性質を誰よりも深く知るようになったために〈J〉と離れざるを得なかった。ちょうど妻と離れる頃は〈J〉の痴漢行為の始まりになった。

なお、この空間は、主人公が〈政治的人間〉になろうとする時点で消える。「性的人間」では〈J〉が痴漢になろうと決めた時、妻と住んでいたアパートから離れる。この場合は痴漢行為は痴漢被害者の意志を押し切って行われるものであるから、〈政治的人間〉らしい行為であると解釈される。「セヴンティーン」では〈おれ〉は右翼運動に参加すると、同じく家を出て右翼の本部で暮らすことになる。両方の場所の展開は、主人公が周りの広い世界に出る意味を持っている。この時点から、〈性的人間〉は〈政治的人間〉に化ける努力をする。それは大江の定義の「他者と硬く冷たい関係をもたぬ」態度を捨てることと同義になり、実作における理想的な定義の逸脱の一つにもなる。

では、〈J〉の場合に、「住んだアパートを離れる＝外に出る」という解釈と「電車＝限られた空間」という二つの解釈は矛盾しないのかが、問題になる。〈J〉は狭い小世界から出るとしたら、電車は同じ狭い世界であり得ないのではないのか。確かに電車は別荘とアパートと違う。大勢の人が同時にいて、〈J〉がわざと人に溢れている混雑時間を選ぶ。ただし、限られた空間性もここにあって、〈J〉の痴漢行為は周りに立っている人に見えない。〈J〉と痴漢被害者の二人だけの壁の見えない限られた空間がその場にできると言えば間違いないであろう。

同様に「セヴンティーン」の〈おれ〉も隠れ場の物置から外へ出たとは言っても、右翼としての行動の時に見えない壁の中に動く。その一例として、「政治少年死す」にある広島デモというエピソードに見られる〈おれ〉と全学連の学生の戦いの場面が挙げられる。太文字の「映画」で始まるこの場面は、確かに主人公の目で見るような映画の脚本の文体で書かれ、主人公は目の前に見られる襲い掛かるその瞬間だけの相手しか映らない。「性的人間」の〈J〉の痴漢行動の時と同じ壁の見えない限られた空間がその場にできる。

この壁の見えない限られた空間が必要である理由は、主人公の〈性的人間〉性質である。

〈政治的人間〉に化けようとする〈J〉と〈おれ〉は自分の〈性的人間〉の本質を変えられない。だからこそ主人公は〈性的人間〉にとって慣れた状況のような場面を行動場所として選ぶものと考える。周りの世界との対面の試みをする主人公は自分の中の〈性的人間〉を感じ続けている。

〈政治的人間〉に化けようとする〈性的人間〉の新しく作られた仮の安全空間はしかし、主人公を完全に護りきっていない。この仮の空間は従来の主人公が馴れている空間と違う。ここで暗示的なのは、主人公が選ぶ仮の安全空間は現存する場所ではないということである。両方の主人公の見えない壁の空間は大勢の人の真ん中であるし、常に動いていることは特徴的である。〈おれ〉の場合は、その空間は〈おれ〉が暴力を振る相手から相手へ跳ぶと共に移動している。〈J〉の場合は電車は常に動いている。そして両方の行き先は二人とも意識せずに気にしていない。大江はこの空間はアンリアルであると、上記の様に何重にも重ねた不自然性を描く。Napier の表現を借りれば、これは無世界（non-world）[130]である。

主人公はこの仮の空間が欺瞞であると徐々に悟っていく。主人公は見えない壁

を自分の周りにあると信じようとしているが、これらの壁は崩れやすく、実際は存在しないものであるから、主人公は周りの世界に晒されたままである。

更に主人公には完全に公の世界に出る選択肢が与えられている。〈J〉は父親に会社を継ぐように進められ、〈おれ〉は政治家の殺害によって有名人になる機会が与えられている。これらの選択肢は主人公が従来取った行動、、周りの世界から逃げて安全空間へ逃げ込む行為と正反対の方向に主人公を導く。本来の安全空間を半分捨てて仮の欺瞞の安全空間を立てた主人公は、あまりにもこの欺瞞に夢中になって一歩先へ導く選択肢を取ることを決める。

この決意はしかし、すぐ失敗に終わる。特に政治的な暗殺者となってしまった「セヴンティーン」の〈おれ〉の場合は著しい。与えられた選択肢を掴んで実際に殺人をした〈おれ〉は自らの手で自分の安全空間を壊したことに気が付く。最後の場面の刑務所の個室は小説の始まりの物置の反映である。この個室は元の隠れ場所に表面的に似ても、元の場所ではないということを理解し、主人公の精神を強く打つ。作家は主人公を元の隠れ場所のような所に最後に投げ込むというのは非常に滑稽な仕業であると解釈される。主人公は自分の安全な小世界を自分で壊して、もう元の状態へ戻れない、仮の安全空間にさえも戻れないということを悟る。元の物置に滑稽に似ている刑務所の個室はその悟りを一層強くする。

「政治的人間」の〈J〉の場合は完全に仮の安全空間から離れることには至らなかった。しかし、〈J〉はその仮の空間の欺瞞性を悟った。

〈J〉も〈おれ〉も自己欺瞞の内に踏み入れた広い世界では生き残ることは出来ないし、元の自分にも戻ることは出来ないと精神的な痛みを感じながら悟る。如何に自分自身を騙したかを分かった上で、両者は挫折した。二人の最後の自己破滅行為は、今の現状を最大限に利用しつつ自己破壊によって現状から逃げるという決意であったと筆者は考える。一瞬でも元の〈性の小世界〉を快楽で得ることによって少しでも現状からの脱走になると主人公は願ったのである。

上記のように、主人公の行動を空間と活動範囲いう概念から考えてみれば、主人公の空間の捉え方が主人公が取った選択に影響していることがよく分かる。

なお、〈政治的人間〉の役割と空間の関係は、大江は筆者がここで扱っている小説では語っていない。ただし、〈政治的人間〉は〈性的人間〉が隠れようとしている小屋の周りの空間全てを占めていることが分かる。〈政治的人間〉は〈性的人間〉

を圧迫し、その小屋に逃げさせる役割をする。

また、主人公と空間の関係からは、〈政治的人間〉と〈性的人間〉の関係のもう一つの側面が見えてくる。〈政治的人間〉の圧迫があるからこそ、〈性的人間〉は隠れ場を必要とする。〈政治的人間〉がなければ〈性的人間〉もその限られた空間を必要としないのであろう。、空間という主人公の活動範囲からみれば、〈性的人間〉は〈政治的人間〉を必要としている。

上記で論じて来た主人公と空間の関係、主人公同士と空間の関係は小説上に大きな役割を果たしているため、〈政治的人間〉と〈性的人間〉の理論的な定義においてもこれについて言及することが望ましい。

第二節、主人公とその仲間

第二に大江の定義から逸脱する箇所は、主人公とその仲間の関係である。

〈政治的人間〉は定義の通り、「他者に他者であることをみずから放棄させる」ことによって、他者を仲間にする。仲間を作ることによって、より多くの他者をまた同化することができる。ここで〈逆木原〉が〈おれ〉を右翼運動に招くシーンが典型的である。

「ありがとう、きみのように純粋で勇敢な少年愛国者を待っていたんだ、きみは天皇陛下の大御心にかなう日本男子だよ、きみこそ真の日本人の魂を持っている選ばれた少年だ」。(「セヴンティーン」3)

〈政治的人間〉の代表者である〈逆木原〉が〈おれ〉を必要とするというのは、〈性的人間〉を常に同化する必要性を持っている。〈性的人間〉がなければ、〈政治的人間〉の活動の大きな部分が意味を失い、なくなる。、仲間という観点から見れば、〈政治的人間〉が〈性的人間〉を必要不可欠にしている。

「性的人間」の場合も、仲間の必要性が主人公に敏感に感じられている。〈J〉は前半に自分の〈性の小世界〉の相手を必要としているし、後半には〈痴漢の友〉を作る。〈おれ〉は野良猫の友だちを作って、唯一の実際の友だちとして認識している。

「性的人間」と「セヴンティーン」の両方の場合、〈性的人間〉である主人公は

仲間を作るものの、その仲間は明らかに同じ〈性的人間〉ではない。寧ろ、野良猫も、元政治家の痴漢〈老人〉も〈政治的〉である。主人公もそれを認めているし、その仲間のような存在になりたいという願望も持っている。とすると、大江の定義の一部、「かれにとって本来、他者は存在しない。かれ自身、他のいかなる存在にとっても他者でありえない」と矛盾する。ここはしかし、この仲間関係の後の失敗が大事であろう。〈J〉は〈性の小世界〉の相手と離れ、やがて〈老人〉とも離れる。〈おれ〉は右翼運動に入る時から野良猫の〈ギャング〉を忘れる。、〈性的人間〉は仲間を必要としているが、いくら〈政治的人間〉を仲間にしてみても無駄である、「他のいかなる存在にとっても他者でありえない」という定義にもどることになる。

脇役の〈老人〉を〈J〉と比較してみたい。ここでもう少し詳しく〈老人〉の〈政治的〉性格に関して論じよう。その〈老人〉は〈性的人間〉であるとは言えないと思われるが、〈J〉と同じ活動をしている。元政治家であるから、〈政治的人間〉であろうか。その性格は詳しく書かれていないため、一概には言えない。〈政治的人間〉になろうとしている〈J〉が痴漢をやっているが、〈性的人間〉として残る。〈老人〉はそのモデルとなり、〈J〉に痴漢の継続の可能性を与えている。とすると〈老人〉は〈政治的人間〉であることになるが、上記で見た通り、痴漢活動は〈政治的〉でありながら〈性的〉でもある。、老人は〈J〉と逆パターンになる。〈政治的人間〉でありながら〈性的〉な世界に入る、という意味では〈J〉とちょうど正反対である。

まとめれば、〈政治的人間〉も〈性的人間〉も互いに仲間を作ろうとする試みをするが、失敗に終わる。しかし、この試みは必ず行うものであるから、両者は互いを必要不可欠とすることを意味する。主人公の関係は小説によって異なるにしても、両者が互いに化けようとする設定は変わらない。従って、この側面は両者の不変的要素である。

第三節、現状への不満

もう一つ、〈政治的人間〉と〈性的人間〉両方に現れることの背景には、現状に対する不満足がある。〈政治的人間〉も〈性的人間〉も置かれている状況がそれぞれの不満足を起こし、その現状を変えたいという希望をそれぞれのタイプの主人

公は持つ。

これは上記ですでに言及した問題ではあるが、大江の目で見た当時の日本社会の現状の反映である。第二章で論じてきた歴史的状況は中期小説では歴史と共に更に進んでいる。言ってみれば大江の小説は基本的に同時代を映している。戦争直後を主に扱う初期小説は、中期に入ると六〇年代―七〇年代を描くものに変わる。

第二章で論じたように、大江の初期小説ではアメリカ人は不可欠な部分になっていたが、小説の背景になる時代にとってもアメリカ人は不可欠な存在であった。初期小説の主な歴史的な出来事には、太平洋戦争とその終戦、そして占領と朝鮮戦争があった。中期小説の背景には、サンフランシスコ条約とそれに対する反対運動、日米同盟とそれに対する反対運動、国内の政党論争などがある。

初期小説では戦後直後の米軍占領時代の日本を大江は〈壁〉に囲まれた空間に譬えた。監禁状態に置かれる主人公は決してその状態に満足できず、脱走を夢見ている。占領は公式に終わっても状況はさほど変わらなかった、と小説で叫ぶ大江は、中期小説において主人公を同じく脱走を熱望する状況に置く。時代は進み、物事の名付け方は多少変わるが、大江の主人公たちが陥る困難は変わらない。主人公は周りの社会や状況に圧迫され、相変わらず脱走を夢見ている。

大江自身も小説の主人公のように、同時代に対して大いに不満足であったと言えるであろう。特に六〇年代から大江は活発に政治運動に加わるようになり、現在に至るまで作家の傍ら政治や社会問題の思想家としても名を上げてきた。大江の小説を大江の政治思想の発表として扱っている先行研究は多いが、本論文ではそれらの小説を大江による同時代の反映として扱う。同じ扱い方は例えばヨシオ・イワモトに見られる[131]。このような扱い方に重要なのは、作家自身の体験が小説とその主人公に大いに反映していることである。

初期小説において、現状を変えたいという希望は〈弱者〉主人公に見られる。ここで分かりやすい例は「人間の羊」の主人公の、〈教師〉から逃げたいとの思いである。被害をすでに受けている以上、その話も思い出しもしたくない主人公にとっては、「警察に届ける」という〈教師〉の誘いを断り、とにかく家へ帰って全て忘れたいという希望で一杯である。

しかし、〈強者〉が脱走する例も初期小説の所々にある。分かりやすいのは、本

論文の第二章で論じてきた「戦いの今日」のアメリカ人登場人物の日本人主人公に対する関係である。一見優良な状況に置かれているその兵士は、自分の立場さえ嫌い、日本人主人公を殴ってその関係を自分の手で破壊する。

中期小説では〈政治的人間〉と〈性的人間〉の脱走への願望はより明確に見られる。上記の第六章第二節で論じてきた活動範囲の選び方もこれに関連する。〈政治的人間〉も〈性的人間〉もそもそも置かれている状況を変えようとしているからこそ違う活動範囲を求めている。それよりも広く、主人公の全ての行動で脱走願望が現れると言えよう。

〈政治的人間〉の、現状に不満を覚え、周りの者を同化するか破壊するかという行動は、現状を積極的に変えるパターンである。「セヴンティーン」の〈皇道派〉の人々は目の前にしている〈赤〉や〈左〉の〈危機〉を我慢したくないからそれと戦う。「性的人間」の〈村人〉は目の前にしている〈女〉の〈不倫〉を我慢したくないから〈女〉を疎外する。

〈性的人間〉の場合は、同じ現状不満足はあるものの、主人公が取る行動のパターンは消極的である。これは文字通りの脱走に近い、現状からただ逃げる試みである。「性的人間」の〈J〉は前半に別荘へ逃げ込む。「セヴンティーン」の〈おれ〉は物置へ逃げ込む。これはしかし、只目を閉じて何もしないということではなく、小さくて消極的ながら、とにかく行動ではある。現状を無視するのではなく、自分と現状を切り離してみる行動である。小説の途中からではあるが、行動を取らない限り現状は変わらない、現状から逃げ道は現れないという意識が主人公に生まれる。

〈政治的人間〉が行動をとるタイプであることは、「他者と硬く冷たく対立し抵抗し、他者を撃ちたおすか、あるいは他者に他者であることをみずから放棄させる」と言う大江の定義からも窺える。しかし、〈性的人間〉も只現状に抵抗出来ずに我慢している訳ではない。現状からの逃げ道を願うこととそのために行動を取ることは〈政治的人間〉でも〈性的人間〉でも同じである。異なるのは具体的な逃げ道の違いである。

大江はそれぞれの逃げ道を図案化するようにこの〈政治的人間〉と〈性的人間〉という二つの用語を導入する。〈政治的人間〉も〈性的人間〉も何とかして現状を変えようとしているからこそ、それぞれの役割が生まれる。この特徴も大江の定

義に加えたい。

そこで、上記で提案するような定義の有効性を確かめる必要が生じる。第五章で取った方法に依って、これらの追加定義が三島由紀夫の小説にも適応できるかどうかについて以下に論じる。第五章で論じてきたように、大江と三島の〈政治的人間〉と〈性的人間〉の扱い方は類似している。そのため、筆者の追加定義が三島の主人公にも適応できると仮説を立てよう。

第五章で扱った「憂国」を再び対象作品として選ぶことにする。

主人公の活動範囲に関しては、「憂国」にも完全に適応できる。小説の全ての出来事は狭い一軒家の中で展開する。主人公の〈武山中尉〉は自分の家の安全地帯へ逃げ込み、入り口の扉にロックを掛ける。家の他の場所に対する言及は、主人公の思い出かナレータの言葉にしか出ておらず、言ってみればバーチャルな空間になっている。小説で現存している空間は武山夫婦の家に限られている。三島の他の小説にもこのような限られた空間へ逃げ込むモチーフはよく見られる。一例として挙げられるのは、「鍵の掛かる部屋」（一九五四）である。これも題名からすでに窺えるように、主人公は広い世界から救いを求めて小さな部屋へ逃げ込むストーリーである。エリート官僚とミステリアスな少女は密室の中での遊戯をするが、主人公は繰り返し繰り返しその部屋に戻ってドアの鍵が閉まる音を聞くと周りの世界から離れて安心できるという快楽を求める。

仲間を求める主人公は、「憂国」に明確に見られる。第六章第三節で論じたように、主人公は見られることを求めている。更に、〈武山中尉〉は妻の〈麗子〉に只見られるよりも仲間になってもらって同じことをしてほしがる。〈武山中尉〉は切腹を自分一人で決めたとは言えるが、妻の同意をも明らかに求めている。〈武山〉の場合は、元仲間に疎外されたからこそ最後の仲間に対する求めは激しく、切実である。〈武山〉は期待していた友達が反乱軍となって〈武山〉を仲間に入れなかったことは、常に仲間を求めた〈武山〉に著しいショックを与えた。代わりの仲間を見付けない限り、〈武山〉は恐らく何も行動を取ることができなかったのであろう。

現状不満に関しても、「憂国」には明らかに見て取れる。小説の題名からこそして、第五章で論じたように、「国の現状はそのままではいけないと心配する」という意味を持つものである。〈武山〉は置かれた状況を容認出来なかったからこそ

切腹を考えた。この場合、大江の主人公よりははるかに異端的な行動であるが、とにかく政状を変えたいという熱願は大江の主人公にも三島の主人公にも共通している。

全ての追加定義が「憂国」にも当てはまるという仮説はこれで確かめられたと思われるが、一つの問題が残る。それは〈麗子〉である。〈麗子〉も〈性的人間〉に属するが、小説における〈麗子〉の行動がどこまで自由であったかは先行研究でも問題になっている。筆者の解釈では、〈麗子〉は只主人の言いなりに行動した訳ではない。〈麗子〉にも自己主張があり、自由選択で取った行動を選んだと言える。その証左として次のことが挙げられる。〈武山中尉〉は〈麗子〉に同行することを命令せずに提案するだけであるし、切腹の準備の時に〈麗子〉が友達に残した贈り物もあるし、ベッドシーンの途中に〈麗子〉が頼んだことは全て自発的に他ならない。何よりも〈麗子〉が扉の鍵を開け、自刃したのは主人の切腹の後であるから、自分の意思で行った行動である。故に〈麗子〉の行動は〈武山中尉〉の行動と同じく扱うべきであると筆者は見ている。

上記のように、筆者が提案する〈政治的人間〉と〈性的人間〉の定義への追加内容は小説を理解する上に有効的なものである。

第四節、止揚

ここで本論文の本題である〈政治的人間〉と〈性的人間〉の〈止揚〉という用語について論じたい。

第一章第二節でみたきたように、従来の研究や評論では、大江の〈政治〉と〈性〉を二つの対立する要素と捉え、交差しない二つの世界として捉えてきたのが一般的であった。それは、日本の若者は「いずれかに」ならざるを得ないと大江自身が述べている[132]からである。

しかし、第二章から本章にかけて論じてきた通り、この二つは互いに離れることのできない存在である。、〈政治的人間〉と〈性的人間〉は互いを必要不可欠とし、常に交差する世界なのである。

この強調は大江の定義とは正反対に見られるが、上記の筆者が論じた節目と同様に、実際は大江の定義の発展的内容である。主人公は〈政治的人間〉か〈性的人間〉のいずれかであっても、常に他方の試みをする。それは常に失敗で終わる、

という結果から見れば、大江の定義通りになるのである。しかし、この試みも定義に加えたい。中期小説の〈性的人間〉である全ての主人公がその試みをするからである。

大江は〈政治的人間〉と〈性的人間〉を対立と闘争の過程を通じて発展的に統一する。小説上に見られる両者の対立は、最終的に主人公の新しい自覚を生み出す。性的人間である主人公の〈J〉と〈おれ〉は一所懸命に〈政治的人間〉になろうとしているが、その無理を悟る。大江の定義に従えば、〈性的〉なるものは決して〈政治的〉なるものと交差しないためであると容易に解釈される。しかし、主人公の「試み」を詳しく見ればこれと異なる結論に至る。主人公は意図的に〈政治的〉になろうとする以前からすでに〈政治的〉な要素を持っていた。主人公はそれを無意識的に持っていたのである。意図的に〈政治的〉になる試みをし始めれば、その眠っていた要素は露わになり、主人公を過激な異端行動にかりたてることとなる。主人公はしかし、その要素を自覚していないままである。自覚していないからこそ、最期の自己欺瞞の悟りと挫折が生じる。〈J〉は父親の後継ぎにはなれないと思い、それまでに行った〈安全な痴漢〉を捨てて、見られるに違いない、捕まるに違いない痴漢の極地に踏み込む。この〈J〉の絶望的な行為について、奥野健男はこの小説を坂上弘の『暖かい日』と比較し、「画一化されて行くサラリーマンの絶望的な抵抗を表現している」[133]と論じた。『暖かい日』の〈女性社員〉と〈J〉とは実際のサラリーマンとしての経験面では比較できないと筆者は考えるものの、確かに絶望感はその二人の主人公にとって奥野健男の論じるように同じようなものであろう。ただし、〈J〉はそれを予想するだけで、自分の〈性的人間〉性とその生活はいかにも合うことがなく、挑戦しようと思った願望の欺瞞性、〈政治的人間〉になり得ないことを悟る。

「セヴンティーン」の〈おれ〉は政治運動を信じようと思っていたが、仲間の裏側の本音を悟り、自己欺瞞したと悟って自殺をした。そもそも右翼運動に引っかかった時点では、この運動によって自分が変わる訳ではなく、外見にだけ何かが付いてくるという認識が主人公にはあった。〈弱くて卑小な自分〉はそのまま残った。

両主人公は自分の中に存在していないものを一生懸命作ってみようと思い、失敗したという結論に至った。その要素が自然に己の中にあると分かれば、極地の

最期には陥いらなかったであろう。

この極地、すなわち、「セヴンティーン」における青年の自殺はどうして起きたかということについて、上記より更に具体的な分析が必要であろう。小説の始めにおいて、青年は死を恐れている。他者の目線からの圧迫は〈おれ〉に縊るような気がし、〈おれ〉が反発的に周りの皆を殺したい気持ちで燃えている。

> ああ、おれのことを、他人どもは、あいつは自涜常習者だ、あの顔の色やら眼のにごりを見ろよなどといって厭らしいものでも見るように唾を吐いて見ているのだろう。殺してやりたい、機関銃でどいつもこいつも、みな殺しにしてやりたい。(「セヴンティーン」1)

上記の引用から窺える主人公の孤独感と周りの世界に対する怯えは反発願望を生む。この反発を実現できない主人公は更に悩んで、ほどを忘れて自分の姉を蹴り飛ばす。一回放った反発心はしかし、完全に自由に表面に出ることはできず、心の中の怯えは貯蓄するだけである。この怯えは、右翼運動に初めて出会った時に解かれ、〈おれ〉に宿命的な刺激を与える。

> おれはいま自分が堅個な鎧のなかに弱くて卑小な自分をつつみこみ永久に他人どもの眼から遮断したのを感じた。〈右〉の鎧だ。(「セヴンティーン」1)

この「鎧」を主人公は以前想像も出来なかったが、初めて上記のように感じた主人公はこの「鎧」が一生必要になったと思い込む。ただし、〈おれ〉はその「鎧」の下にある自分自身の弱い〈性的人間〉はまだそこにいると敏感に感じている。

> 皇道派の制服〔中略〕に身をかためて街を歩く時も、おれは激しい幸福感をおぼえ、甲虫のように堅牢に体いちめんに鎧をまとい、他人から内部のぶよぶよして弱く傷つきやすい不恰好なものを見られることがないのを感じる(「セヴンティーン」4)

ここには後になって主人公が体験した欺瞞からの目覚めの芽生えが隠れている。

主人公は「鎧」は何も変えていないと分かっているが、この時点ではまだそれを気にしていない。外側の〈政治的〉な様子と内側の〈性的人間〉の葛藤は、最初のうちは、主人公は自覚していないが、それは徐々に大きくなり、最後には自殺に導かれてゆく。

また、主人公の〈自涜〉もここで重要である。自身の〈性的人間〉性で悩む主人公はその〈性的〉性の象徴である〈自涜〉にふけっているが、政治運動にかかわるにつれて〈自涜〉のシーンは小説から消える。物理的な〈自涜〉は政治運動に代用されるようになったからである。その極地は次の文章に見られる。

おれは国会前広場での暴力の劇の日々からずっと訪れることのなかった、至福の強姦者のすばらしく熱く、じんじんする全精神と全肉体のオルガスムスに、たちまちおそわれてしまい、駆けながら呻いて歯ぎしりする《ああ、天皇よ、ああ、ああ！》(「政治青年死す」3)

この文章の意味するものは、主人公は〈政治的人間〉らしい活動に精神的な〈自涜〉を得るようになったといえる。しかし、この〈至福〉感も自己欺瞞であったことは、小説の幕に明らかになる。大江は自殺の前に物理的な〈自涜〉をする主人公を比喩的に小説の始めに戻す。言い換えれば、主人公は〈政治的人間〉らしい自己欺瞞の精神を捨てて、〈性的人間〉らしい行動に戻る。この帰還によって主人公は〈政治的人間〉になろうとする行為が間違いであり、失敗であったと自らに認め、自殺する。

大江がエッセイで論じる「青年は〔中略〕政治的人間を志向しながら性的人間におちいる罠を自分の足もとにつねに用意している」[134]と述べる点は、ちょうどここに現れている。これは〈性的人間〉が〈政治的人間〉に変わることの出来ない根本的な理念の証左である。

この時点まで見てきた〈政治的人間〉と〈性的人間〉の間の主人公の移動は、〈性的人間〉が〈政治的人間〉になろうとした片方のみであったが、「性的人間」の〈老人〉が代表するパターンは、これと逆方向も可能であることを意味している。、〈政治的人間〉と〈性的人間〉は文字通りに相互に染まれることや相互に志向することがある。

〈政治的人間〉と〈性的人間〉は互いに完全に化けることはあり得ない。その試みは絶えず行われるが、主人公は完全に自分の反対のタイプになることはできない。なぜならば、片方が他方に化ければ一方しか残らないからである。一方だけの存在は大江の小説の世界ではあり得ない。第三章で論じて来たように、仮に片方を小説からなくせば、小説全体は崩れて残った片方もなくなる。〈政治的人間〉だけの世界はあり得ないし、〈性的人間〉だけの世界もあり得ない。両者は同時に存在している時のみにバランスがあり、大江の小説の世界が存在する。

本論文で大江の小説に対して導入する〈止揚〉という用語は従来は哲学の用語である。『哲学事典』はこれを下記のように定義する。

止揚　この語は対立の統一というときにもちいられる。すなわち、分裂した諸要素がたがいに対立し闘争し、内的に浸透しあい、その過程をとおして統一され、高度に発展した事態が成立するとき、諸要素が統一のなかに止揚されたという[135]。

この定義を筆者は文学に合わせ下記のように定義する。止揚とは矛盾する諸要素（文学の場合は登場人物のタイプ）は、対立と闘争の過程を通じて互いに浸透し合い、発展的に統一することである。この概念は〈政治的人間〉と〈性的人間〉の関係をよく説明していると筆者は考える。ここまで具体的に見てきたように、大江の定義だけに従って小説を解釈して見れば、その定義に矛盾するような箇所はある。本章で提案してきた〈政治的人間〉と〈性的人間〉の追加要素は、大江の定義に見られる〈対立〉では説明できない。ここから大江の定義を乗り越えて、小説の解釈上に現れる諸要素をもとにして、より細かな定義の必要性が生じる。

筆者はこの必要性に応じてテキストを分析した結果、大江の定義に加える要素を提案し論じてきた。更にこの新しい要素を説明する理論としてこの〈止揚〉概念を用いたい。この概念にある「対立と闘争」は〈政治的人間〉と〈性的人間〉の相互侵入をも説明しているし、「発展的に統一する」ことも上記の例で明確に見えてくる。互いの関係上、活動範囲上、仲間の取得上、互いに化けようとする過程上、などには〈政治的人間〉と〈性的人間〉は互いを必要としている。この状態は単なる静態的な対立ではなく、常に変化しつつある〈止揚〉である。大江の

理論の様々な応用の試みも、やはりこのプロセスに当てはめることができる。

最後に、これらの小説に関するある可能性について考察したい。筆者は第四章で大江のロシア語訳を通じて見られる〈政治的人間〉と〈性的人間〉の関係を論じたが、同じ方法をここでも試みてみよう。仮に「セヴンティーン」がソ連時代にロシア語訳で出版されたとしよう。「飼育」と「憂国」の翻訳分析で見てきた傾向からすると、まずは性的な要素は翻訳小説から消されると判断できる。とすると、主人公の孤独感と他者に対する思いは説明ができなくなる。〈おれ〉が小説の前半において自分自身に対する不安、他者に対する不安を自分の想像する「性の小世界」において改める試みをする。実際の世界に対して、この空想の小世界は余りにも関係なく何も変えないから、〈おれ〉にはこの逃げ道に対する不満が募る。だからこそ新しく提供された「政治の小世界」に惚れ、頭から飛び込むことが読者に納得される。

仮にも「性の小世界」を削除してしまうと、〈おれ〉の動機は消え、小説全体の事実性・説得性が希薄になるであろう。

もう一つの問題としては、〈おれ〉が政治的な活動に関わることになっても決して自分の「性の小世界」を見捨てる訳ではない、ということが挙げられる。その小世界は「政治の小世界」と密接に絡みつくことになり、〈おれ〉が実世界に行う行動の延長になる。

この新たな「性の小世界」をまた翻訳の際に削除するとすれば、政治的な要素は消えない。しかし、大江がその二つの組み合わせによって意図した関係は消える。反天皇制思想に満ちた小説である「セヴンティーン」はその反天皇制の様子を失い、ただ政治的右翼の成り立ちを描こうとする小説になってしまうであろう。

逆説的に言えば、「セヴンティーン」における〈政治的〉と〈性的〉は互いに必要とすることがここからも明らかになる。

このような翻訳は実際に出版されてはいない。ここでこの可能性を取り上げる理由は、第四章で分析した傾向は「性的人間」と「セヴンティーン」にも適用できるからである。しかし、本論文の第五章で研究したように、「セヴンティーン」の評論はソ連時代に公開され、上記のように仮想した小説の様子は評論には十分に見えたから、この仮説は評論において確認できるといえる。

以上を踏まえて、新たに〈政治的人間〉と〈性的人間〉の関係を定義すると、

次のようになる。

「政治的人間は他者と硬く冷たく対立し抵抗し、他者を撃ちたおすか、あるいは他者に他者であることをみずから放棄させる。性的人間はいかなる他者とも対立せず抗争しない。かれは他者と硬く冷たい関係をもたぬばかりか、かれにとって本来、他者は存在しない。かれ自身、他のいかなる存在にとっても他者でありえない。ただし、両者は常に互いの存在を意識し、互いの要素を内服している。両者が互いに化かす必要性を感じ、止揚関係にある。しかし、この二つのベクトルが同じ内容をあわせもつことはありえないから、互いに他者側になろうとする行為は失敗せざるを得ない」。

大江の定義に本論文で明らかになった要素を加えてみると、なる。

第七章の結論

本章は大江健三郎が描く〈政治的人間〉と〈性的人間〉の関係の大江自身の定義を基にしつつ、その新たな解釈を試みた。これは本論文の中心を成す主張である。従来の大江研究においては、第一章に論じてきたように大江の小説はこの定義を完全に受け入れているものか、完全に受けないものかといった明確な二つの分立が見える。本論文では先行研究と違って大江の定義を受けながらそれを確かめる試みをした。作家解釈をありのままに受け入れず、小説上に必要と見られる要素をその解釈に加え、新たな定義を目指した。

テキストの分析対象としては、〈政治的人間〉と〈性的人間〉というテーマの代表作と思われる「性的人間」と「セヴンティーン」（その二部作「政治少年死す」も含めて）が選ばれた。分析の結果、〈政治的人間〉と〈性的人間〉の関係は大江がエッセイで提供する定義より複雑な関係にあることが分かった。テキストの解釈上に生じた新たな要素は、活動範囲と主人公の関係においてまず見える。〈政治的人間〉は活動範囲を広く取っているのに対して、〈性的人間〉は限られた空間を好むことが明らかになった。次に、主人公とその仲間の関係においても重要な要素が見え、〈政治的人間〉と〈性的人間〉は仲間を求めていることが明らかになった。第三に、〈政治的人間〉も〈性的人間〉も現状に対して不満足を抱き、現状を変える努力をする。これらの要素は〈政治的人間〉と〈性的人間〉の関係をより明確にし、大江のオリジナル定義に加えることにより、小説における主人公の行動がすべて解釈できるようになる。更に、筆者は応用的に見てきた主人公の関係に、理論的な説明として〈止揚〉という概念を導入し、大江の定義を乗り越える、新たな定義を示した。互いの関係上、活動範囲上、仲間の取得上、互いに化けようとする過程上、などには〈政治的人間〉と〈性的人間〉は互いを必要としている。この状態は単なる静態的な対立ではなく、常に変化しつつある〈止揚〉である。両者は常に互いの存在を意識し、互いの要素を含んでいることは重要である。

結論と展望

大江健三郎は現代日本のあらゆる問題を小説や評論で扱ってきた作家である。並べてみても限りがない長いリストになる多種多様なその諸問題は、大江が見ている現代日本の肖像をなしている。作品の問題設定は時代とともに変わっていくが、現代日本社会の有様、個人と社会の関係、少数派と多数派の関係という問題などは彼の多くの作品に取り上げられている。

大江の諸作品は、作品の主なテーマとアプローチにより、時期ごとに一定の統一性をもったまとまり、作品群へと分類することができる。初期、中期、後期をどのように精密に分けるか、どの作品から次の時期が始まるとみなすかについては、序論で見てきたように先行研究によって多少見解が異なりはするが、各時期の大江にとってどのようなテーマが問題となっていたかは概ね明確にしている。本論文が扱う「初期」とは、大江の文壇での活動が始まる一九五七年から長編小説が書き始められる一九六〇年代までである。この時期の途中から小説の主なテーマは〈監禁状態〉となる。その次の「中期」には、小説の主なテーマが〈村＝国家＝宇宙〉に変わる一九八〇年代までと本論文は定義する。

本論文では大江健三郎が描く諸問題のなかから〈政治的人間〉と〈性的人間〉という問題を選び、この問題の新たな解釈を試みた。このテーマは〈村＝国家＝宇宙〉というテーマに入る前の中期小説に見られるが、本論文第三章ではその萌芽が初期小説にすでに見られると論じている。言ってみればこのテーマは初期作品と中期作品とを繋ぐものである。

〈政治的人間〉と〈性的人間〉とは、序論と第一章第一節で示したように小説の登場人物の対立するタイプを指す大江健三郎の用語であり、「政治」そのものと「性」そのものを意味するものではない。この解釈は本論文の主張の一つである。

〈政治的人間〉と〈性的人間〉の関係を明らかにするために、本論文はいくつかの側面からこれらを考察した。先行研究の分析、問題の成り立ちと構成、〈政治的人間〉と〈性的人間〉の分離（不）可能性の問題、同時代の他の作家における〈政治的人間〉と〈性的人間〉のあり方、そして〈政治的人間〉と〈性的人間〉の止揚というテーマを各章で論じている。

先行研究の分析は第一章第二節で行い、問題設定のしかたによってそれらをいくつかのグループに分類した。その際、この問題に関する大江自身による定義を取り入れているかどうかということが、分類の第一の規準となった。第一のタイプの研究はおおよそ大江の定義を受け入れ、それをもとにして〈政治的人間〉と〈性的人間〉のあり方を論ずる。第二のタイプの研究は、大江における〈政治〉と〈性〉を狭義のものとして理解する研究である。第三のタイプは、大江の定義を取り入れずに、〈政治的〉なものと〈性的〉なもので作家が意味することを自ら探る研究や評論である。また、第四のタイプの先行研究として、〈政治〉と〈性〉の対立を〈外側〉と〈内側〉の対立に喩える研究がある。

多くの研究者や評論家が、大江の〈政治的〉なものと〈性的〉なものというテーマにおいて、大江自身の意図と異なることを論じている。この現象の理由としては、次のような点が挙げられる。まずは、大江の小説のみを研究や評論の対象にしていることがその原因であると考えられる。本論文はこれを踏まえて、小説とエッセイのテキストを同じレベルの資料とみなして研究を進めることにした。第二に、大江の〈政治的〉なものと〈性的〉なものの図案化の複雑さもその理由であると考えられる。本論文と主張の近い先行研究は、結局大江の定義を重んじるものであると結論づけられる。

本論に入ってまず最初に、〈政治的人間〉と〈性的人間〉というテーマの萌芽を初期小説に見出し、その分析を通して〈政治的人間〉と〈性的人間〉の成り立ちを追った。〈政治的人間〉と〈性的人間〉の先駆的形象は様々な形で初期小説に見られるが、本論文の研究対象としては、このペアが明確に認められるアメリカ人と日本人の対立する小説群を選んだ。この一群の短編小説で、主人公はまず自分の〈外〉の世界とのコミュニケーションの経験において、今まで知らなかった状況に置かれ、今まで会ったことのない人間である外国人に遭遇する。この接触によって主人公は外国人に対する何らかのイメージを得るが、これは、主人公による周りの日本人の捉え方をも変え、主人公は自分と周りの人との違いを敏感に実感する。

大江の初期短編の世界には、大江の戦後状況に対する現実認識と歴史認識の一断面が象徴的に現れている。第二章では、この小説の歴史的背景とその意義に関して論じた。大江は複数にわたる作品の設定を通して、「日本人」—「白人」—

「黒人兵」の関係性を提示し、その中に横たわる優越する存在と劣等な存在の区分けを問題にする。そしてまた、日本人の中のアメリカ人に対する態度の変更の投影を探る大江は、屈辱的な状況に置かれた日本人がたとえアメリカ人を嫌ったとしても、アメリカ人は日本の生活の一部として扱われる以外はなく、両者は一緒に生活をしなければならない、というメッセージを間接的に発している。これは、初期の大江の一連の作品を貫くものであると考えられる。

初期のそれぞれの短編におけるアメリカ人の描き方、登場人物としてのアメリカ人の意義、そしてそれに関わる日本人主人公とアメリカ人の関係について論じる際、本論文は六篇の小説を一連のものと捉えるスタンスを取った。大江はこれら一連の作品で、日本人とアメリカ人の関係の多種多様なパターンを試み、日本人とアメリカ人の間の平和は如何なる状況を求めるか、という問いへの答えを追求している。こうした試みの過程で、大江はアメリカ人はよいか悪いか、という単純な問題設定から、日本人とアメリカ人の関係はもっと複雑であり、日本人の間にも様々な問題がある、という問題設定に移ったと考えられる。さらに次の段階の大江においては、〈民族〉や〈人種〉や〈国民〉という概念から徐々に離れていく傾向が見られる。初期小説の〈アメリカ人＝強者〉と〈日本人＝弱者〉の関係は、〈強者〉と〈弱者〉という対立への観点移動を見せ、そのまま中期の〈政治的人間〉と〈性的人間〉の関係に移る。この過程は本論文の第三章に論じた。

次に第四章では、初期小説の翻訳を素材にして、原文では見えにくいテキストの特徴を捉える試みを行った。中期小説に関しても同様に、原文とその翻訳という二つの資料を分析した。具体的には、大江の初期小説「飼育」と「不意の唖」における登場人物を〈政治的人間〉と〈性的人間〉の先駆と見なし、これらの登場人物の関係がソ連時代のロシア語への翻訳テキストにおいて如何なる形で現れているかを分析した。ここから明確になったのは、検閲的性格の翻訳がなされた小説のテキストからは〈性的〉な要素が消されたことである。さらに、その結果として、テキストの読解においては〈政治的〉な要素も連動してその意義を失ってしまう、ということである。人間関係を主題とする大江の小説は、その関係のパターンとして〈政治的人間〉と〈性的人間〉の関係を描いているが、〈性的〉なものを検閲されて失った翻訳テキストは〈政治的人間〉と〈性的人間〉の両者を見失い、小説は社会的な問題や世代的な対立を主題とする作品になった。新たに

生まれた変形された小説は、ソ連のイデオロギーには都合のよいものであった。こうした理解をもとに、原文テキストに対して逆説的なアプローチをしてみると、この小説における〈政治的人間〉と〈性的人間〉のモチーフは弱いものの、その芽生えもそこにあり、この要素同士が如何に互いに必要不可欠なものとなっているかが見えてくる。〈政治的人間〉と〈性的人間〉の対から片方を抜きとると他方も失われ、この変形によって小説の意味全体が変わってくる。これは翻って見れば〈政治的人間〉と〈性的人間〉の分離不可能性の証拠である。

第五章では、第四章の論をさらに発展させ、大江のソ連時代ロシア語訳と評論を例に、ソ連における外国文学の翻訳過程、検閲過程、そして出版過程が取った形を分析した。結果として検閲による障壁が大きかったことに依って外国文学の出版は難しく、出版された翻訳は検閲により大きく影響を受けたことが明らかになった。検閲は部分的な削除のみならず、加筆や原文の意図変更までも行った。このような、積極的に小説の内容に影響をもたらしたものは、アクティブな検閲と呼ばれるものである。また、翻訳小説だけではなく、小説を短く紹介する評論文までもが原文の内容をある程度変更して伝達したことも明らかになった。こうした評論文の干渉は、ソ連における外国文学の受け入れと検閲の連続的関係を物語っている。して、小説の翻訳とそれに関する評論が如何なるプロセスを経て出来上がり、そのプロセスが原文の内容を如何に変えたかという点を示したことで、ソ連で流通した外国小説の特徴の一端が明らかになった。

また、翻訳の形で生まれ変わった小説、その生まれ変わったテキストを解釈する評論が原作からどれほど離れており、それにより原作の理解が如何に変わるかについて論じた際には、〈政治的〉なものと〈性的〉なものというモチーフの変化を主な論点とした。検閲された翻訳テキストではこのモチーフはかなりの変容を被っているが、しかしそこでも〈政治的〉なものと〈性的〉なものはなおも小説におけるその位置を失っていない。これもまた、本論文が主張する〈政治的〉なものと〈性的〉なものの相互必要性という考えを逆側から裏付ける証左となっていると言えるだろう。

上記の点を理解する上で、筆者は次に大江の〈政治的人間〉・〈性的人間〉のテーマをもう一面から分析するため、同時期に三島由紀夫が執筆した小説との比較を第六章で行った。結果としては、表現上や作家の態度上の類似点・異同点が明

確になった。類似点は主人公の性格や設定されている状況に窺え、異同点は作家が主人公に対して表す態度に見られる。

そこで見えてくる大江と三島のこのテーマへの関わりをさらに論証するために、「憂国」のロシア語訳を分析した。この研究は同章の第四節をなしている。仮説として設定したアイディアは完全には証拠づけられなかったが、否定もされなかった。この小説は「飼育」ほど著しい検閲削除を受けなかったことが判明したが、ただし少ないものの、削除はやはりあった。その過程によって出来上がった翻訳小説における登場人物の関係性は原作に見られる関係性とは異なるものになったという点は確かめられた。性的な描写と感情的な描写の削除と書き換えによって、小説の全体的な内容は主人公の内面を表さなくなり、登場人物の関係を描くというよりは軍事主義的な自殺のみを描く小説になったと言える。

第七章では、本論文の主題である〈政治的人間〉と〈性的人間〉の〈止揚〉について、「性的人間」と「セヴンティーン」を対象に考察した。この分析は、ここまでの分析に基づいて行い、〈政治的人間〉と〈性的人間〉の大江自身の解釈を検討しながら論じた。その結果、〈政治的人間〉と〈性的人間〉の関係は大江がエッセイで提示する定義より複雑な関係にあることが分かった。ここでは、テキストの解釈上に生じた新たな要素を大江のオリジナルな定義に加えることにより、小説における主人公の行動がすべて解釈できるようになると論じた。さらに、応用的に見てきた主人公の関係に、理論的な説明が付けられる〈止揚〉という概念を導入し、大江の定義を乗り越える新たな定義を示した。そして〈政治的人間〉と〈性的人間〉は確かに〈止揚〉関係にあるという本論文の課題の結論に至った。

本論文では〈政治的人間〉と〈性的人間〉というテーマを初期作品と中期作品に限って扱ったが、大江の小説の主なテーマは後に変わっていくとしても、登場人物の同じような関係は後期の作品にも見られる。それらの関係は様々に変わりつつありながら基本的に同じ要素から成り立つために把握しやすい。一例は『万延元年のフットボール』における兄弟〈蜜三郎〉と〈鷹四〉の関係である。先行研究の多くはその関係を「アクティブとパッシブの対立」[136]と定義するが、これは〈政治的人間〉と〈性的人間〉の一つの発展型であると解釈できる。、初期から中期にかけての大江作品に見られる〈政治的人間〉と〈性的人間〉というテーマの理解は、後の作品の理解にも繋がるものと思われる。

中期の次の時期には、小説の主なテーマが〈村＝国家＝宇宙〉に変わる一九八〇年代からである。この時期は大江が一旦主人公同士の関係を置いておき、主人公の周りの世界に注目することになった。しかし、中期でできあがった〈政治的人間〉と〈性的人間〉の関係はここで止まった訳ではない。その関係はメインテーマではなくなったにしても、大江は常に対立しながら止揚する主人公のタイプを小説に書き上げ、また様々なパターンの試みを続ける。

終わりに、本論文全体を閉じるに当たって振り返ってみるに、まだ十分意をつくしたとは言いがたい箇所もあることに気づかされる。筆者は、本論文で論じてきたことを発展させながら、今後も継続して大江健三郎とその時代の文学の研究を続けていきたいと考えている。

注

[1] 篠原茂『大江健三郎文学事典』。森田出版、一九九八　二十頁
[2] 大江健三郎『死者の奢り』（短編集）。文芸春秋新社、一九五八　三〇二頁
[3] 一条孝夫『大江健三郎』。和泉書院、一九九七　二三頁
[4] Yasuko Claremont. The novels of Ōe Kenzaburō. Routledge, 2009 p. 1-18
[5] 「われらの性の世界」//『厳粛な綱渡り』(大江健三郎全エッセイ集)。文藝春秋、一九六五　二三四頁
[6] 同書、二三五頁
[7] 同書、二三二頁
[8] 同書、二三三頁
[9] 「戦後世代のイメージ」//『大江健三郎同時代論集１。出発点』。岩波書店、一九八〇　十六頁
[10] 「われらの性の世界」//『厳粛な綱渡り』(大江健三郎全エッセイ集)。文藝春秋、一九六五　二三六頁
[11] 菅野昭正「たいへんなりきさく」。文芸時評『日本読売新聞』一九六三年五月六日//『文芸時評体系』昭和篇 III 第五巻。ゆまに書房、二〇〇九年十月　二百六十八頁、など
[12] 『文学界』一九六一年三月号
[13] 河上徹太郎「不愉快な大江の「性的人間」」文芸時評（上）『読売新聞』一九六三年四月二六日//『文芸時評体系』昭和篇 III 第五巻。ゆまに書房、二〇〇九年十月　二二四頁
[14] 平野謙「今月の小説（上)」『毎日新聞』一九六三年十一月二十九日//同書、二三四頁
[15] 菅野昭正「たいへんなりきさく」。文芸時評『日本読売新聞』一九六三年五月六日//同書、二百六十八頁
[16] 例えば、團野光晴「〈肉体生〉としての戦後的リアリズムの系譜—三島由紀夫から大江健三郎へ—」金沢大学国語国文学会二〇〇九年度研究発表会発表、二〇〇九年十月
[17] イワモトヨシオ「アイデンティティーの探求」//『大江健三郎文学　海外の評価』武田 勝彦（著）、サ ミュエル・横地淑子（著）、ヨ シオイワモト（著)。創林、一九八七　二九頁
[18] 同書、四四頁
[19] 一条孝夫『大江健三郎—その文学世界と背景—』和泉書院、一九九七
[20] 渡辺広士『大江健三郎』審美社、一九九四
[21] 安藤始『大江健三郎の文学』おうふう、二〇〇六
[22] Susan J. Napier. Death and the Emperor: Mishima, Ōe, and the Politics of Betrayal. The Journal of Asian Studies,1989.2 No. 48—1 p. 71—89
[23] 蘇明仙『大江健三郎論—〈神話形成〉の文学世界と歴史認識—』(比較社会文化叢書Ｉ)。花書院、二〇〇六年１月
[24] 川口隆行「「セヴンティ-ン」・「政治少年死す」論--「純粋天皇」の考古学」。『国文学攷』一五三号。一九九七年三月　三三—四四頁
[25] 饗庭孝男「大江健三郎における政治と文学」//『国文学解釈と鑑賞』一九七一年七月号　二二頁
[26] 黒古一夫『大江健三郎論。森の思想と生き方の原理』彩流社、一九八九年八月一六八頁

[27] 佐々木基一「空気と格闘の大江氏。その抵抗素・中野重治の作品」文芸時評（中）『東京新聞』一九六三年四月二六日//『文芸時評体系』昭和篇 III 第五巻。ゆまに書房、二〇〇九年十月　二一八頁
[28] 河上徹太郎「不愉快な大江の「性的人間」」文芸時評（上）『読売新聞』一九六三年四月二六日//同書、二二四頁
[29] 森房雄「私の手におえない」文芸時評（下）『朝日新聞』一九六三年四月二八日//同書、二三二頁
[30] 森川達也「大江健三郎における性の意味」//『国文学解釈と鑑賞』一九七一年七月号　二八頁
[31] 山田博光「大江健三郎」//『国文学　解釈と教材の研究』　一九七〇年七月臨時増刊号（第十五巻第十号）　「100 人の作家に見る性と文学」　一八四頁
[32] 秋山公男『近代文学・性の位相』翰林書房、二〇〇五年十月　一九一頁
[33] 松原新一「大江健三郎における「性」と「政治」」//『国文学解釈と鑑賞』一九七一年七月号　十頁
[34] 高橋和巳「〈性〉的素材主義批判」『文学界』一九六四年七月一日//『文芸時評体系』昭和篇 III 第六巻。ゆまに書房、二〇〇九年十月　三六六頁
[35] 岩田英作「『性的人間』における罪のモチーフとその背景」//『島根大学国語教育論叢』第六号、一九九七年三月
[36] V.グリブニン「大江の芸術道」//『万延元年のフットボールと短編小説』モスクワ、ナウカ出版一九八三　十頁
(В. Гривнин.Творческий путь Оэ Кэндзабуро//Кэндзабуро Оэ.Футбол 1860 года.Роман и рассказы. Издательство «Наука», 1983 стр.10)
[37] 王新新『再啓蒙から文化批評へ―大江健三郎の 1957～1967―』東北大学出版会、二〇〇七
[38] 蓮實重彦『大江健三郎論』青土社、一九九二
[39]一条孝夫『大江健三郎―その文学世界と背景―』。和泉書院、一九九七　二六頁
[40] 大江健三郎『死者の奢り』（短編集）。文芸春秋新社、一九五八　三〇二頁
[41] V.グリブニン「大江の芸術道」//『万延元年のフットボールと短編小説』　モスクワ、ナウカ出版一九八三　六頁
(В. Гривнин.Творческий путь Оэ Кэндзабуро//Кэндзабуро Оэ.Футбол 1860 года.Роман и рассказы. Издательство «Наука», 1983 стр.6)
[42] 愛媛県史。年表。愛媛県史編さん委員会編　一九八九年二月　四五八頁
[43] 同書、四六〇頁
[44] 『読売報知』一九四五年七月二十八日第一面　一段目
[45] 『朝日新聞』一九四五年七月二十八日第一面　四段目
[46] 「戦後世代のイメージ」//『大江健三郎同時代論集１。出発点』。岩波書店、一九八〇　一六頁
[47] 同書、二七頁
[48] 同書、二七頁
[49] 同書、一一頁
[50] 同書、一二頁
[51] Margaret Hillenbrand. Doppelgangers, Mysogyny, and the San Francisco System: The Occupation Narratives of Ōe Kenzaburō. The Journal of Japanese Studies – 33: 2 summer 2007 p. 409
[52] 兪承昌「『飼育』における黒人兵の象徴性―黒人兵のモチーフと戦後認識の一断面」//『名古屋大学国語国文学』二〇〇三年１２月（通号九十三）一一九―一三三頁
[53] Sharalyn Orbaugh. Japanese Fiction of the Allied Occupation: Vision, Embodiment, Identity. Brill, 2006.12 p. 480

[54] 一条孝夫『大江健三郎文学の軌跡』新日本出版社、一九九五
[55] ロルフ・ロバート「『飼育』における無垢の喪失」//『大江健三郎文学海外の評価』　武田勝彦、サミュエル・横地淑子、ヨシオ イワモト （著)。創林社一九八七　二三九頁
[56] 黒古一夫『大江健三郎論。森の思想と生き方の原理』。彩流社、一九八九年八月　一二五頁
[57] 兪承昌「『飼育』における黒人兵の象徴性—黒人兵のモチーフと戦後認識の一断面」//『名古屋大学国語国文学』二〇〇三年十二月（通号九十三）一一九—一三三頁
[58] 「戦後世代のイメージ」//『大江健三郎同時代論集１。出発点』。岩波書店、一九八〇　二六頁
[59] V.グリブニン「大江の芸術道」//『万延元年のフットボールと短編小説』。モスクワ、ナウカ出版、一九八三　六頁
(В. Гривнин.Творческий путь Оэ Кэндзабуро//Кэндзабуро Оэ.Футбол 1860 года.Роман и рассказы. Издательство «Наука», 1983 стр.6)
[60] Steve Redford. Oe Kenzaburo's "Unexpected Muteness" and Unreliable Interpreters: Developing Students' Critical Savvy for Comparative Culture Studies.//『静岡大学教育学部研究報告. 教科教育学篇』三十七巻　二〇〇六年三月　一九〇頁
[61] Paul Sminkey. An Analysis of Japanese Attitudes During the American Occupation As Seen Through Post-War Japanese Literature: 大江健三郎著「不意の唖」・「人間の羊」，小島信夫著「アメリカンスクール」，野坂昭如著「アメリカひじき」を中心に//『鹿屋体育大学学術研究紀要第』二十四号、二〇〇〇年九月　二八頁
[62] ロジャー・トーマス『人間の羊』の人文論//『大江健三郎文学海外の評価』武田勝彦、サミュエル・横地淑子、ヨシオ イワモト （著)。創林社、一九八七　二二頁
[63] 紅野敏郎。「第一創作集『死者の奢り』」「解釈と鑑賞」一九六九年九月
[64] 木村幸雄。大江健三郎の初期短篇について–『人間の羊』と『不意の唖』。『言文』三十四巻、一九八六年十二月
[65] Paul Sminkey. An Analysis of Japanese Attitudes During the American Occupation As Seen Through Post-War Japanese Literature: 大江健三郎著「不意の唖」・「人間の羊」，小島信夫著「アメリカンスクール」，野坂昭如著「アメリカひじき」を中心に。//『鹿屋体育大学学術研究紀要第』二十四号、二〇〇〇年九月　三一頁
[66] 木村幸雄。大江健三郎の初期短篇について–『人間の羊』と『不意の唖』//『言文』三十四巻、一九八六年十二月
[67] グリブニン・ウラジミル。大江の芸術道。『万延元年のフットボールと短編小説』モスクワ、ナウカ出版、一九八三　卞頁
(В. Гривнин.Творческий путь Оэ Кэндзабуро//Кэндзабуро Оэ.Футбол 1860 года.Роман и рассказы. Издательство «Наука», 1983 стр.6)
[68] Margaret Hillenbrand. Doppelgangers, Mysogyny, and the San Francisco System: The Occupation Narratives of Ōe Kenzaburō. The Journal of Japanese Studies – 33:2 summer 2007 p.409
[69] 『大江健三郎全作品 冖』新潮社、一九六六
[70] 兪承昌「『飼育』における黒人兵の象徴性—黒人兵のモチーフと戦後認識の一断面」//『名古屋大学国語国文学』二〇〇三年十二月（通号九十三）一一九—一三三頁
[71] 魏浦嘉。〈他者の目〉—大江健三郎初期作品を中心に。//『お茶の水女子大学

大学院人間文化研究科人間文化研究年報』二十六巻。二〇〇二年　二–三二頁
[72] V.グリブニン。大江の芸術道/『万延元年のフットボールと短編小説』モスクワ、ナウカ出版一九八三　三頁
(В. Гривнин.Творческий путь Оэ Кэндзабуро//Кэндзабуро Оэ.Футбол 1860 года.Роман и рассказы. Издательство «Наука», 1983 стр.3)
[73] V.スミルノフ訳「飼育」//『現代日本小説集一九四五—一九七八』キム・レチュン編、モスクワ、文学社、一九八〇　二八五—三二五頁
(«Содержание скотины», пер. В. Смирнова// «Современная японская новелла 1945-1978». Сост. Ким Лечуна. М.: Художественная литература, 1980 стр. 285-325)
[74] V.グリブニン訳「不意の唖」//『大江健三郎。万延元年のフットボール・短編小説』モスクワ、ナウカ出版、一九八三
(В.Гривнин.Немые поневоле.//Кэндзабуро Оэ.Футбол 1860 года.Роман и рассказы. Издательство «Наука», 1983)
[75] スミルノフとは非常に一般的なロシア人苗字であり、翻訳には下の名前の冒頭文字しか明記されていないため訳者の身分を突き止めることは困難である。
[76] V.スミルノフによる星新一の物語の紹介は新聞「ネデーリャ」(「一週」) 一九七四年一月二十八日—二月三日付け第五（七二五）号二十二頁に見られる。物語の題名は「アーアアーアアア！」としているが、原文の題名は未詳。
(Синъити Хоси. А-аа-ааа! : Сказка / Пересказал с японского В. Смирнов// Неделя: Иллюстрированный еженедельник : «Известия Совета депутатов трудящихся СССР». Воскресное приложение. — 1974. — 28 января – 3 февраля. — № 5(725). стр. 22.)
[77] 森川達也「大江健三郎における性の意味」//『群像日本の作家 23 大江健三郎』小学館、一九九二　三二頁
[78] 人民委員会議政令「文学・出版総局の設立に関して」。資料 IV 参照 Декрет СНК о создании Главного управления по делам литературы и издательств *(Главлит)*　1922.6.6.
[79] 人民委員会議政令「文学・出版総局の設立に関して」第 3 条、Инструкция Главлита его местным органам, I-7-г　1922.11.「グラヴリット本部より地方局への訓示」第 1 条第 7 次、等。資料 V 参照
[80] V.グリブニン訳「不意の唖」//『大江健三郎。万延元年のフットボール・短編小説』モスクワ、ナウカ出版、一九八三
(В.Гривнин.Немые поневоле.//Кэндзабуро Оэ.Футбол 1860 года.Роман и рассказы. Издательство «Наука», 1983)
[81] V.グリブニン訳「不意の唖」//『大江健三郎。万延元年のフットボール・短編小説』モスクワ、ナウカ出版、一九八四
(В.Гривнин.Немые поневоле.//Кэндзабуро Оэ.Футбол 1860 года.Роман и рассказы. Издательство «Наука», 1984)
[82] 例えば、V.グリブニン訳「不意の唖」//『大江健三郎小説選』モスクワ、パノラマ社、一九九九
(В.Гривнин.Немые поневоле.//Оэ К. Избранные произведения. М.:Панорама, 1999)
[83] Yasuko Claremont. The novels of Ōe Kenzaburō. Routledge , 2009
[84] 『ソ連における検閲一九一七—一九九一。資料集』（A.V.ブリューム編）モスクワ、ロッスペン二〇〇四　三八八頁
(Цензура в Советском Союзе 1917-1991. Документы (сост. А.В. Блюм). М., Росспэн, 2004 с.388)
[85] 同書、九八頁
[86] A.ブリューム『完全恐怖政治時代における検閲、一九二九—一九五三』サンク

ト・ペテルブールグ、「アカデミック・プロジェクト」出版、二〇〇〇　一二四頁
(А. Блюм. Цензура в эпоху тотального террора.1929-1953. Санкт-Петербург, «Академический проект», 2000 стр.124)
[87] 『ソ連における検閲一九一七—一九九一。資料集』（A.V.ブリューム編）モスクワ、ロッスペン二〇〇四　五七五頁
(Цензура в Советском Союзе 1917-1991. Документы (сост. А.В. Блюм). М., Росспэн, 2004 с.575)
[88] 同書、九九頁
[89] V.グリブニン訳「不意の唖」//『大江健三郎。万延元年のフットボール・短編小説』モスクワ、ナウカ出版、一九八三
(В.Гривнин.Немые поневоле.//Кэндзабуро Оэ.Футбол 1860 года.Роман и рассказы. Издательство «Наука», 1983)
[90] V.グリブニン訳「不意の唖」//『大江健三郎。万延元年のフットボール・短編小説』モスクワ、ナウカ出版、一九八四
(В.Гривнин.Немые поневоле.//Кэндзабуро Оэ.Футбол 1860 года.Роман и рассказы. Издательство «Наука», 1984)
[91] 例えば、V.グリブニン訳「不意の唖」//『大江健三郎小説選』モスクワ、パノラマ社、一九九九
(В.Гривнин.Немые поневоле.//Оэ К. Избранные произведения. М.:Панорама, 1999)
[92] Marianna Tax Choldin. Censorship via translation: Soviet treatment of Western political writing// The Red Pencil, Marianna Tax Choldin (ed.), Maurice Friedberg (ed.). Routledge, 1989, pp.29-52
[93] V.サノビッチ「セヴンティーン」//『外国での現代文芸』一九六三年三月号、全ソ連国立外国文学図書館出版、八一—八三頁
(В. Санович. Семнадцатилетний//«Современная художественная литература за рубежом» 1963 г. №3, Всесоюзная Государственная Библиотека Иностранной Литературы, стр. 81-83)
[94] V.スミルノフ訳「飼育」//『現代日本小説集一九四五—一九七八』キム・レチュン編、モスクワ、文学社、一九八〇　二八五—三二五頁
(«Содержание скотины», пер. В. Смирнова// Современная японская новелла 1945-1978. Сост. Ким Лечуна. М.: Художественная литература, 1980 стр. 285-325)
[95] イワモトヨシオ「アイデンティティーの探求」//『大江健三郎文学　海外の評価』武田 勝彦（著）、サミュエル・横地淑子（著）、ヨシオイワモト（著）。創林、一九八七　三九頁
[96] A.ブリューム『完全恐怖政治時代における検閲、一九二九—一九五三』サンクト・ペテルブールグ、「アカデミック・プロジェクト」出版、二〇〇〇　一二六頁
(А. Блюм. Цензура в эпоху тотального террора.1929-1953. Санкт-Петербург, «Академический проект», 2000 стр.126)
[97] 二〇一三年八月十四日、電話による問い合わせ。回答者は書庫管理係長 A.V.バウリナ（заведующая книгохранилищем Александра Владимировна Баулина）.
[98] A.ブリューム『完全恐怖政治時代における検閲、一九二九—一九五三』サンクト・ペテルブールグ、「アカデミック・プロジェクト」出版、二〇〇〇　一二六頁
(А. Блюм. Цензура в эпоху тотального террора.1929-1953. Санкт-Петербург, «Академический проект», 2000 стр.126)

[99] 同書、一二七頁
[100] 例えば、渡辺広士『大江健三郎』審美社、一九九四
[101] 佐々木基一「空気と格闘の大江氏。その抵抗素・中野重治の作品」文芸時評(中)『東京新聞』一九六三年年四月二六日//『文芸時評体系』　昭和篇 III 第五巻　ゆまに書房、二〇〇九年十月　二一八頁
[102] キム・レホ「戦後日本におけるモダーン小説」//『イデオロギー闘争と外国東洋現代文学』。モスクワ、ナウカ、一九七七　一八七頁
(К. Рехо.Модернистский роман в послевоенной Японии // Идеологическая борьба и современные литературы зарубежного Востока. М, Наука, 1977 стр. 187)
[103]團野光晴「〈肉体生〉としての戦後的リアリズムの系譜—三島由紀夫から大江健三郎へ—」金沢大学国語国文学会二〇〇九年度研究発表会発表、二〇〇九年十月、など
[104] 佐々木基一「空気と格闘の大江氏。その抵抗素・中野重治の作品」文芸時評（中)『東京新聞』一九六三年四月二十六日//『文芸時評体系』昭和篇 III 第五巻。ゆまに書房、二〇〇九年十月　二一八頁
[105] 『討論　三島由紀夫 vs.東大全共闘《美と共同体と東大闘争》』。新潮社、一九六九　二四頁
[106] A.ドリン「三島由紀夫の〈遺訓〉」//『イデオロギー闘争と外国東洋現代文学』。モスクワ、ナウカ、一九七七　二〇七頁
(А. Долин. «Заветы» Мисима Юкио»// Идеологическая борьба и современные литературы зарубежного Востока. М, Наука, 1977 стр. 207)
[107] Susan J. Napier. Escape from the wasteland. Romanticism and realism in the fiction of Oe Kenzaburo & Mishima Yukio.. Harvard University Press, 1995 p.xviii
[108] 同書、p.48
[109] 「われらの性の世界」//『厳粛な綱渡り』(大江健三郎全エッセイ集)。文藝春秋、一九六五　二三二頁
[110] 大江の態度に関してはヨシオ・イワモト「アイデンティティーの探究—「セヴンティーン」と『政治少年死す』における自己と他者」//『大江健三郎文学海外の評価』武田勝彦、サミュエル・横地淑子、ヨシオ イワモト （著)。創林社一九八七．二九頁など。三島の態度に関しては柴田勝二「三島由紀夫「憂国」論—「大義」としての肉体—」//『相愛大学研究論集』十三（二）、一九九七年三月．などを参照
[111] ジャン・ポール・サルトル「実存主義とは何か：実存主義はヒューマニズムである」//『サルトル全集』伊吹武彦訳。人文書院、一九五五　第十三巻　二七頁
[112] G.チハルティシヴィリ訳「憂国」//『外国文学』一九八八年十号
(Патриотизм, пер. Г.Чхартишвили// «Иностранная литература», 1988.10)
[113] Susan J. Napier. Escape from the wasteland. Romanticism and realism in the fiction of Oe Kenzaburo & Mishima Yukio.. Harvard University Press, 1995, p.89
[114] Nina Cornyetz. The Ethics of Aesthetics in Japanese Cinema and Literature: Polygraphic Desire. Routledge, 2007 p. 109
[115] Susan J. Napier. Escape from the wasteland. Romanticism and realism in the fiction of Oe Kenzaburo & Mishima Yukio. p.48. Harvard University Press, 1995, p. 90
[116] 人民委員会議政令「文学・出版総局の設立に関して」第 3 条、Инструкция Главлита его местным органам, I-7-г　1922.11.「グラヴリット本部より地方局への訓示」第一条第七次、等。資料 IV と V と参照

[117] 『文学と芸術』、一九八八年度。レニン名誉ソ連国立図書館出版、一九八九一一四頁
(Литература и искусство. 1988. Государственная библиотека СССР имени В.И. Ленина, 1989, стр. 114)
[118] A.ドリン「三島由紀夫の〈遺訓〉」//『イデオロギー闘争と外国東洋現代文学』、モスクワ、ナウカ、一九七七　二〇五—二一八頁
(А. Долин. «Заветы» Мисима Юкио»// Идеологическая борьба и современные литературы зарубежного Востока. М, Наука, 1977 стр. 205-218)
[119] A.ドリン「三島由紀夫の〈遺訓〉」//『イデオロギー闘争と外国東洋現代文学』、モスクワ、ナウカ、一九七七　二〇七頁
[120] A.クラノフ『対話』モスクワ、A.セミョーノフ出版、二〇一二　二三頁
(А. Куланов. Тайва. М.: Издатель А.Семёнов, 2012, стр. 23)
[121] キム・レホ『現代日本小説』モスクワ、ナウカ、一九七七
(Ким Рехо. Современный Японский Роман. М., Наука, 1977)
[122] 同書、五四頁
[123] 同書、五五頁
[124] Geoffrey W. Sargent. Patriotism//Mishima Yukio.Death in Midsummer and other stories. New York, New Directions Publishing, 1966
[125] Dennis Washburn. To Make Gods And Demons Weep: Witnessing The Sublime In “Death In Midsummer” And “Patriotism”// Imag(in)ing the War in Japan. Mark Williams; David Stahl (ed.). Brill, 2010 p.99
[126] 同書、p.99
[127] 「われらの性の世界」//『厳粛な綱渡り』（大江健三郎全エッセイ集）。文藝春秋、一九六五　二三三頁
[128] イワモトヨシオ「アイデンティティーの探求」//『大江健三郎文学　海外の評価』武田 勝彦（著）、サミュエル・横地淑（著）、ヨ シオイワモト（著）。創林、一九八七　三八頁
[129] Susan J. Napier. Escape from the wasteland. Romanticism and realism in the fiction of Oe Kenzaburo & Mishima Yukio. Harvard University Press, 1995 p.82
[130] 同書、p.87
[131] イワモトヨシオ「アイデンティティーの探求」//『大江健三郎文学　海外の評価』武田 勝彦（著）、サ ミュエル・横地淑子（著）、ヨシオイワモト（著）。創林、一九八七　三十頁
[132] 「われらの性の世界」//『厳粛な綱渡り』（大江健三郎全エッセイ集）文藝春秋、一九六五
[133] 奥野健男「サラリーマンのニヒルな心情描く。新任の作品にめだつ傾向」文芸時評（上）『北海道新聞』一九六三年六月六日//『文芸時評大系』昭和篇 III 第五巻。ゆまに書房、二〇〇九年十月
[134] 「われらの性の世界」//『厳粛な綱渡り』（大江健三郎全エッセイ集）。文藝春秋、一九六五
[135] 『哲学事典』初版第四刷　平凡社、一九七三年八月　七〇五頁
[136] 例えば T.P.グリゴリエワ「人と社会」//『美しい日本の私』第二巻。モスクワ、アルファM出版、二〇〇五　二八三頁
(Т.П. Григорьева. Человек и Общество// Красотой Японии Рождённый т.2. М., Альфа-М, 2005 стр. 283)

参考文献

日本語

1. サルトル・ジャン・ポール。「実存主義とは何か：実存主義はヒューマニズムである」//『サルトル全集』第十三巻　伊吹武彦訳。人文書院、一九五五
2. ヒール・ルイズ。神話あるいは政治?--大江健三郎「不意の唖」における神話的比喩と戦後の暗喩。椙山女学園大学文化情報学部紀要第一号、二〇〇一
3. 愛媛県史。年表。愛媛県史編さん委員会編、一九八九年二月
4. 安藤始『大江健三郎の文学』おうふう、二〇〇六
5. 一条孝夫『大江健三郎』和泉書院、一九九七
6. 王新新『再啓蒙から文化批評へ一大江健三郎の 1957～1967—』東北大学出版会、二〇〇七
7. 岩田英作「『性的人間』における罪のモチーフとその背景」//『島根大学国語教育論叢』第 6 号、一九九七年三月
8. 饗庭孝男「大江健三郎における政治と文学」//『国文学解釈と鑑賞』一九七一年七月号、二十二頁
9. 『群像日本の作家 23 大江健三郎』小学館、一九九二
10. 紅野敏郎「飼育」//『解釈と鑑賞』四五二巻　一九七一年七月
11. 黒古一夫『大江健三郎論。森の思想と生き方の原理』彩流社、一九八九年八月
12. 三島由紀夫『花ざかりの森・憂国』。新潮社、二〇一〇年十二月
13. 山田博光「大江健三郎」//『国文学　解釈と教材の研究』　一九七〇年七月臨時増刊号（第十五巻第十号）　「100 人の作家に見る性と文学」　一八四頁
14. 児島正幸「大江健三郎初期作品論—意識的な移動」//『帝京国文学』七巻　二〇〇〇年九月
15. 秋山公男『近代文学・性の位相』翰林書房、二〇〇五年十月
16. 勝又浩「大江健三郎—作家の出発期と文学活動」//『解釈と鑑賞』一九七八年十二月
17. 松原新一「大江健三郎における「性」と「政治」」//『国文学解釈と鑑賞』一九七一年七月号　十頁
18. 照屋佳男「静謐とコミュニケ-ション」//『早稲田人文自然科学研究』一九九六年三月（通号四十九）
19. 赤坂憲雄『異人論序説』砂子屋書房、一九八五年十二月
20. 川口隆行「「セヴンティーン」・「政治少年死す」論--「純粋天皇」の考古学」。『国文学攷』一五三号一九九七年三月
21. 蘇明仙『大江健三郎論—〈神話形成〉の文学世界と歴史認識—』(比較社会文化叢書Ｉ)。花書院、二〇〇六年一月
22. 大江健三郎『厳粛な綱渡り』（大江健三郎全エッセイ集）文藝春秋、一九六五
23. 大江健三郎『死者の奢り』(短編集)。文芸春秋新社、一九五八

24. 大江健三郎『性的人間』（短編集）。新潮社、一九九八年五月
25. 『大江健三郎三郎小説』。新潮社、一九九六―一九九七
26. 『大江健三郎同時代論集１。出発点』。「戦後世代のイメージ」。岩波書店、一九八〇
27. 『大江健三郎文学　海外の評価』武田 勝彦（著）、サ ミュエル・横地淑子（著）、ヨシオイワモト（著）　創林、一九八七
28. 渡辺広士『大江健三郎』審美社、一九九四
29. 『討論　三島由紀夫 vs.東大全共闘《美と共同体と東大闘争》』。新潮社、一九六九
30. 『文学界』、一九六一年一月号、二月号、三月号
31. 『文芸時評体系』　昭和篇 三 第五巻―八巻　ゆまに書房、二〇〇九年十月
32. 木村幸雄「大江健三郎の初期短篇について–「人間の羊」と「不意の唖」」//『言文』三四巻、一九八六年十二月
33. 蓮實重彦『大江健三郎論』青土社、一九九二
34. 兪承昌「「飼育」における黒人兵の象徴性―黒人兵のモチーフと戦後認識の一断面」//『名古屋大学国語国文学』二〇〇三年十二月（通号九十三）
35. 團野光晴「〈肉体生〉としての戦後的リアリズムの系譜―三島由紀夫から大江健三郎へ―」金沢大学国語国文学会二〇〇九年度研究発表会発表、二〇〇九年十月
36. 魏浦嘉「〈他者の目〉―大江健三郎初期作品を中心に」//『お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間文化研究年報』二十六巻、二〇〇二

英語

1. Claremont, Yasuko. The novels of Ōe Kenzaburō. Routledge , 2009
2. Cornyetz, Nina. The Ethics of Aesthetics in Japanese Cinema and Literature: Polygraphic Desire. Routledge, 2007
3. Hillenbrand, Margaret. Doppelgangers, Mysogyny, and the San Francisco System: The Occupation Narratives of Ōe Kenzaburō. The Journal of Japanese Studies – 33:2 summer 2007
4. Napier, Susan J. Death and the Emperor: Mishima, Ōe, and the Politics of Betrayal. The Journal of Asian Studies,1989.2, No. 48–1
5. Napier, Susan J. Escape from the wasteland. Romanticism and realism in the fiction of Oe Kenzaburo & Mishima Yukio. Harvard University Press, 1995
6. Orbaugh, Sharalyn. Japanese Fiction of the Allied Occupation: Vision, Embodiment, Identity. Brill, 2006.12
7. Redford, Steve. Oe Kenzaburo's "Unexpected Muteness" and Unreliable Interpreters: Developing Students' Critical Savvy for Comparative Culture Studies: 大江健三郎著「不意の唖」・「人間の羊」，小島信夫著「アメリカンスクール」，野坂昭如著「アメリカひじき」を中心に．静岡大学教育学部研究報告．教科教育学篇三十七巻　二〇〇六年三月
8. Sargent, Geoffrey W. Patriotism//Mishima Yukio.Death in Midsummer and other stories. New York, New Directions Publishing 1966

9. Sminkey, Paul.。”An Analysis of Japanese Attitudes During the American Occupation As Seen Through Post-War Japanese Literature”: 大江健三郎著「不意の唖」・「人間の羊」，小島信夫著「アメリカンスクール」，野坂昭如著「アメリカひじき」を中心に。鹿屋体育大学学術研究紀要第二十四号、二〇〇〇年九月
10. Washburn, Dennis. To Make Gods And Demons Weep: Witnessing The Sublime In “Death In Midsummer” And “Patriotism”// Imag(in)ing the War in Japan. Mark Williams; David Stahl (ed.). Brill, 2010

ロシア語

1. Библиография Японии. Литература, изданная в Советском Союзе на русском языке м 1959 по 1973 г. М., Наука, 1984
（『日本関連文献。一九五九から一九七三までソ連でロシア語で出版された書物』モスクワ、ナウカ、一九八四）
2. Гривнин В. «Творческий путь Оэ Кэндзабуро»//Кэндзабуро Оэ.Футбол 1860 года.Роман и рассказы. Издательство «Наука», 1983
（V.グリブニン。大江の芸術道。『万延元年のフットボールと短編小説』モスクワ、ナウカ出版一九八三）
3. Григорьева Т.П. Человек и Общество// «Красотой Японии Рождённый») т.2. М., Альфа-М, 2005
（T.P.グリゴリエワ「人と社会」//『美しい日本の私』第二巻。モスクワ、アルファM出版、二〇〇五）
4. «Идеологическая борьба и современные литературы зарубежного Востока». М, Наука, 1977
(『イデオロギー戦争と外国東洋現代文学』モスクワ、ナウカ、1977)
5. Ким Рехо. Современный Японский Роман. М., Наука, 1977
（キム・レホ『現代日本小説』モスクワ、ナウカ、一九七七）
6. Куланов А. «Тайва». М.: Издатель А.Семёнов, 2012
（A.クラノフ『対話』モスクワ、A.セミョーノフ出版、二〇一二）
7. Литература и искусство. 1988. Государственная библиотека СССР имени В.И. Ленина, 1989
（文学と芸術、一九八八年度。レニン名誉ソ連国立図書館出版、一九八九）
8. Мисима Юкио. «Патриотизм», пер. Г.Чхартишвили// «Иностранная литература», 1988.10
（G.チハルティシヴィリ訳「憂国」//『外国文学』一九八八年十号）
9. Неделя: Иллюстрированный еженедельник : «Известия Совета депутатов трудящихся СССР». Воскресное приложение. — 1974. — 28 января – 3 февраля. — № 5(725)

（「ネデーリャ」（「一週」）一九七四年一月二十八日—二月三日付け第五（七二五）号）

10. Оэ Кэндзабуро. «Немые поневоле». Пер. В.Гривнина//Кэндзабуро Оэ.Футбол 1860 года.Роман и рассказы. Издательство «Наука», 1983（V.グリブニン訳「不意の唖」//『大江健三郎。万延元年のフットボール・短編小説』モスクワ、ナウカ出版、一九八三）
11. Оэ Кэндзабуро. «Содержание скотины», перевод В. Смирнова// «Современная японская новелла 1945-1978». Сост. Ким Лечуна. М.: Художественная литература, 1980
（『現代日本小説集一九四五—一九七八』キム・レチュン編、モスクワ、文学社、一九八〇）
12. «Современная японская новелла 1945 — 1978». Сост. Ким Лечуна. М.: Художественная литература, 1980
（『現代日本小説集一九四五—一九七八』キム・レチュン編、モスクワ、文学社、一九八〇）
13. «Цензура в Советском Союзе 1917—1991. Документы» (сост. А.В. Блюм). М., Росспэн, 2004
（『ソ連における検閲一九一七—一九九一。資料集』(A.V.ブリューム編)モスクワ、ロッスペン二〇〇四）

謝辞

著者は本論文をまとめるに当たり、多くの方々にご指導とご協力をいただきました。ここに感謝の意を表します。

主任指導教員の金沢大学大学院人間社会環境研究科教授である杉山欣也先生には数年に渡り、根気よき心暖かいご指導と励ましをいただきました。心より感謝を申し上げます。

元主任指導教員の上田正行先生には、大江健三郎という研究方向を与えて下さり、長い間のご指導をして下さったことに対して、感謝を申し上げます。

副指導教員の金沢大学大学院人間社会環境研究科教授である加藤和夫先生には、一時期主任指導教員にもなっていただき、研究手法及び論文の書き方を丁寧にご指導いただきました。また、同じく副指導教員の金沢大学大学院人間社会環境研究科教授である西村聡先生には、常に前向きかつ親切なご指摘やアドバイスをいただきました。心より感謝申し上げます。

本論文に、研究資料としてロシア語文献を多いに活用したが、ソ連検閲に関わる資料を提供し、親切なアドバイスを下さった金沢大学外国語教育研究センターの准教授平松潤奈先生に感謝申し上げます。また、ロシアの資料の大部を手に入れることで手伝い、常に励ましを下さったロシア科学アカデミー東洋文献研究所の専任研究員であるV.P.ザイツェフに感謝を申し上げます。

資料 I

大江健三郎小説のロシア語訳目録。翻訳の出版年順に並べてある。

出版物	原文名、訳者名など	注釈
Оэ К. Чудная работа / Пер. с яп. А. Бабинцева // № 36. Новеллы японских писателей. — М.: Главная редакция восточной литературы издательства «Наука», 1968. — С. 56–66.	「奇妙な仕事」A.バビンツェフ訳	
Оэ К. Футбол 1860 года / Пер. с яп. В. С. Гривнина // Иностранная литература. — М., 1972. — № 1. — С. 143–208; № 2. — С. 70–154.	「万延元年のフットボール」V.グリブニン訳	
Оэ К. Лесной отшельник ядерного века / Пер. с яп. З. Рахима // Японская новелла 1960–1970. — М.: Прогресс, 1972. — С. 278–307.	「核時代の森の隠遁者」Z.ラヒム訳	
Оэ К. Люди-бараны / Пер. с яп. Г. Иммерман // Красная лягушка. Новеллы японских писателей. — М.: Главная редакция восточной литературы издательства «Наука», 1973. — С. 102–117.	「人間の羊」G.インメルマン訳	
Оэ К. Опоздавшая молодёжь: Роман / Пер. с яп. В. С. Гривнина; Предисл. В. Маевского. — М.: Прогресс, 1973. — 342 с. (тираж не указан)	「遅れてきた青年」V.グリブニン訳、部数未記載	
Оэ К. Объяли меня воды до души моей…: Роман / Пер. с яп. В. С. Гривнина; Предисл. Т. Григорьевой // Иностранная литература. — М., 1978. — № 3. — С. 142–191; № 4. — С. 25–157.	「洪水はわが魂に及び」V.グリブニン訳	
Оэ К. Объяли меня воды до души моей: Роман и рассказы / Пер. с яп. З. Рахима, В. С. Гривнина, В. Смирнова; Предисл. Т. Григорьевой. — М.: Прогресс, 1978. — 416 с. — 150000 экз. Рассказы: «Содержание скотины», «Лесной отшельник ядерного века», «Неделя почитания старости».	「洪水はわが魂に及び」V.グリブニン訳、 「飼育」V.スミルノフ訳、 「核時代の森の隠遁者」Z.ラヒム訳、 「敬老週間」V.グリブニン訳、十五万冊	
Оэ К. Содержание скотины / Пер. с яп. В. Смирнова // Современная японская новелла 1945–1978. — М.: Художественная литература, 1980. — С. 285–325.	「飼育」V.スミルノフ訳	
Оэ К. Записки пинчраннера / Пер. с яп. В. С. Гривнина // Иностранная литература. — М., 1981. — № 11. — С. 157–183; № 12. — С. 54–177.	「ピンチランナー調書」V.グリブニン訳	

Оэ К. Записки пинчраннера: Роман / Пер. с яп. и предисл. В. С. Гривнина. — М.: Радуга, 1983. — 315 с. — 50000 экз.	「ピンチランナー調書」V.グリブニン訳、５万冊	
Оэ К. Футбол 1860 года. Роман и рассказы / Пер. с яп. и вступит. ст. В. С. Гривнина. — М.: Главная редакция восточной литературы издательства «Наука», 1983. — 432 с. — 100000 экз. Рассказы: «Неожиданная немота», «Перевозка», «Тёмная река, тяжёлые вёсла», «Лаборатория отступившей молодёжи», «Собачий мир», «Небесное привидение Агу», «Дух-хранитель атомного века».	「万延元年のフットボール」、「不意の唖」、「運搬」、「暗い川、おもい櫂」、「後退青年研究所」、「犬の生活」、「空の怪物アグイー」、「アトミック・エイジの守護神」全て V.グリブニン訳、十万冊	
Оэ К. Футбол 1860 года. Роман и рассказы / Пер. с яп. и вступит. ст. В. С. Гривнина. — М.: Главная редакция восточной литературы издательства «Наука», 1984. — 431 с. — 50000 экз. Рассказы: «Неожиданная немота», «Перевозка», «Тёмная река, тяжёлые вёсла», «Лаборатория отступившей молодёжи», «Собачий мир», «Небесное привидение Агу», «Дух-хранитель атомного века».	「万延元年のフットボール」、「不意の唖」、「運搬」、「暗い川、おもい櫂」、「後退青年研究所」、「犬の生活」、「空の怪物アグイー」、「アトミック・エイジの守護神」全て V.グリブニン訳、五万冊	
Оэ К. Игры современников: Роман / Пер. с яп. и предисл. В. С. Гривнина. — М.: Радуга, 1987. — 400 с. — 100000 экз.	「同時代ゲーム」V．グリブニン訳、十万冊	
Оэ К. Опоздавшая молодёжь. Футбол 1860 года. Романы / Пер. с яп. В. С. Гривнина. — М.: Правда, 1990. — 624 с. — 100000 экз.	「遅れてきた青年」V.グリブニン訳、十万冊	
Оэ К. Игры современников: Роман / Пер. с яп. В. С. Гривнина. — СПб.: Амфора, 1999. — 461 с. — 9000 экз.	「同時代ゲーム」V．グリブニン訳、九千冊	
Оэ К. Объяли меня воды до души моей: Роман / Пер. с яп. В. С. Гривнина. — СПб.: Амфора, 1999. — 448 с. — 8000 экз.	「洪水はわが魂に及び」V.グリブニン訳、八千冊	
Оэ К. Избранные произведения / Сост. О. Жданко; Послесл. Т. Григорьевой. — М.: Панорама, 1999. — 400 с. — 5000 экз. Содержание: роман «Объяли меня воды до души моей»; рассказы «Неожиданная немота», «Тёмная река, тяжёлые вёсла», «Неделя почитания старости» (пер. с яп. В. С. Гривнина);	「洪水はわが魂に及び」V.グリブニン訳、 「不意の唖」V.グリブニン訳、 「暗い川、おもい櫂」V.グリブニン訳、 「敬老週間」V.グリブニン訳、 「あいまいな日本の私」N.スタロセルスカヤ訳、五千冊	「あいまいな日本の私」は英語訳からの二重訳

Нобелевская лекция «Многосмысленностью Японии рождённый» (1994, пер. с англ. Н. Старосельской).		（前頁から続く）
Оэ К. Записки пинчраннера: Роман / Пер. с яп. В. С. Гривнина. — СПб.: Амфора, 2000. — 331 с. — 5000 экз.	「ピンチランナー調書」V. グリブニン訳、五千冊	
Оэ К. Футбол 1860 года: Роман / Пер. с яп. В. С. Гривнина. — СПб.: Азбука-классика, 2004. — 352 с. — 10000 экз.	「万延元年のフットボール」V.グリブニン訳	
Оэ К. Камнем, камнем сквозь пустоту… (отрывок из романа «Проснись, новый человек!») / Пер. с яп. и вст. О. Исаевой // Иностранная литература. — М., 2005. — № 10. — С. 30–38.	「落ちる、落ちる、叫びながら」O.イサエワ訳	「新しい人よ眼ざめよ」の一部翻訳
Оэ К. Подкидыши на этой планете (Abandoned Children of This Planet) / Пер. с англ. А. Блейза // Совсем другие истории: Сборник рассказов / Сост. Надин Гордимер. — М.: Открытый мир, 2006. — С. 372–384. Перевод второй части романа «Тихая жизнь» (оригинальное название: яп. 静かな生活). Перевод осуществлён по изданию: Oe Kenzaburo. A Quite Life. Translated by Kunioki Yanagishita and William Wetherall. New York: Grove Press, 1996. 240 pages.	「この惑星の棄て子」A.ブレイズ訳	「静かな生活」の一部、英語訳からの二重訳
Оэ К. Эхо небес (оригинальное название: яп. 人生の親戚) / Пер. с англ. В. Кобец. — СПб.: Амфора, 2010. — 252 с. — 4000 экз.	「人生の親戚」V.コベツ訳	英語訳からの二重訳
Оэ К. Эхо небес. Пер. с англ. пер. романа В. Кобец. — Амфора. — М., 2012.— 256 с. — 3035 экз.	**「人生の親戚」V.コベツ、三千三十五冊**	英語訳からの二重訳

資料 II

「飼育」翻訳における異同

原文	翻訳文	再訳文	番号/異同の理由
「こいつの親は狼と交接したんだ」という意味のことを兎口は、卑猥なしかし現実感のみちあふれた方言でいった。	— Его предки блудили с волками, — с видом знающего человека сказал Мицукути.	「こいつの親は狼と交接したんだ」と物知りの顔で兎口はいった。	1 下品な描写の削除・置き換え
「飛行機を見た」と弟が父の背へ叫んだ。「大きい敵の飛行機」	— А мы видели самолёт! — крикнул брат. — Огромный вражеский самолёт…	「飛行機を見た」と弟が叫んだ。「大きい敵の飛行機」	2 （不明）
それに罠でとらえた鼬の皮を乾かして《町》の役場へ渡す	Кроме того, он сдавал в городское управление шкурки попадавшихся в ловушки колонков.	それに罠でとらえた鼬の皮を町の役場へ渡す	3 （不明）
僕らを見つけて腕を振りながら駈けて来た。	Завидев меня с братом, он вскочил и побежал к нам.	僕らを見つけて飛び起きて駈けて来た。	4 （不明）
それに乗っかって来た敵兵を探してるのさ	А вражеских лётчиков уже разыскивают.	それに敵の飛行士を探しているのさ	5 （不明） 「兵」を「飛行士」で置き換えた箇所が多い。（不明）
「樅の林に突っこんでばらばらだよ」と兎口が眼を光らせて早口にいった。	Упал в пихтовый лес — и вдребезги, — протараторил Мицукути.	「樅の林に突っこんでばらばらだよ」と兎口が早口にいった。	6 敵の墜落を喜ぶ子供は軍事主義の描写とされた？
「知ってるさ」と僕も唇を硬くしていった。	— Как не знать, — ответил я.	「知ってるさ」と僕はいった。	7 （不明）
彼らの汗ばんだ皮膚と荒あらしい体臭が一つの季節のように谷あいをおおいつくす。	А резкий запах их пота неотвратимо, как осень, воцарится во всей лощине.	彼らの汗の荒あらしい臭が秋のように避けがたく谷あいをおおいつくす。	8 （不明）
僕らは自分たちのための食物を探さねばならない。	Нам самим придется готовить себе завтрак.	僕らは自分たちのための朝飯を作らねばならない。	9 原始的な生活の描写の緩和。
底の浅い鉄鍋に水を汲みこんでから火を焚きつけると、僕らは倉庫の奥の籾殻の中へ腕を突っこんで馬鈴薯を盗む。	Потом мы зачерпнули котелком воды, развели огонь и набрали картошки из-под слоя рисовой шелухи.	鉄鍋に水を汲みこんでから火を焚きつけると、僕らは籾殻の中から馬鈴薯を取り出した。	10 原始的な生活の描写の緩和。
僕らが短い労働のあと始めた食事は単純だが豊富	Наш завтрак был прост, но обилен.	僕らの朝食は単純だが豊富だった。	11 （不明）

だった。			（前頁から続く）
女の子供たちに、彼の薔薇色のセクスを小さな人形のように可愛がらせていた。	Позволял девочкам гладить и ласкать себя, как куклу.	女の子供たちに、彼を小さな人形のように可愛がらせていた。	12 性的な描写の削除
兎口が背後から僕の脇腹を強くこづき、僕を子供たち仲間から引き離して楠の深ぶかした蔭へつれて行った。	Мицукути сильно толкнул меня сзади в бок и отвёл в сторону.	兎口が背後から僕の脇腹を強くこづき、余所へつれて行った。	13 （不明）
大人の腕の白い揺らめきが厚い揚蓋を内側から閉ざした。	Мелькнули белые руки, и толстая крышка люка захлопнулась.	白い腕が揺らめき、厚い揚蓋は閉ざした。	14 （不明）
屋根裏で耳を澄ましても地下倉の叫びは決して聞えないであろう	Наверху вряд ли услышишь его крики	上では彼の呼びは決して聞えないであろう	15 （不明）
子供の僕らには、それをどうすることもできない。	（なし）	（なし）	16 （不明）
「躰中、牛の臭いがする」	（なし）	（なし）	17 黒人を差別的に描写する表現の削除
そして躰いちめんの皮膚が、発情した犬のセクスのようにひくひく動いたり痙攣したりして、僕らをかりたてるのだった。	Мускулы у нас судорожно подёргивались, мы были взбудоражены.	そして躰の筋肉が、ひくひく動いたり痙攣したりして、僕らをかりたてるのだった。	18 性的な描写の削除
父は昨夜、食事のあと猟銃を新しい弾丸で充填し、夜の見はりへ出て行ったのだった。	Вчера вечером отец перезарядил ружье и отправился в ночной караул.	父は昨夜、食事のあと猟銃を充填し、夜の見はりへ出て行ったのだった。	19 （不明）
父の膝の間の包みをかつぎあげ、階段を駈けおりる。	Вскинул на плечи связку шкурок и бегом спустился по лестнице.	皮の包みをかつぎあげ、階段を駈けおりる。	20 （不明）
道の両側に小さい地崩れのあるところでは剥きだされた赤土が血のように生なましく、陽をうけて照りかがやいていた。	В местах маленьких оползней по обе стороны дороги, словно свежая кровь, рдела на солнце обнажившаяся красная глина.	道の両側に小さい地崩れのあるところでは剥きだされた赤土が生なましい血のように、陽をうけて照りかがやいていた。	21 （不明）
村の大人たちも子供らも、その片足の男を《書記》とよんでいるのだが、	У нас в деревне и стар и млад звали этого одноногого мужчину	村の大人たちも子供らも、その片足の男を《書記》とよんでいるのだが、	22 （不明）

村の分教場の身体検査の時、その男は医師の助手のような仕事もした。	«писарем», потому что во время медицинских осмотров в школе он записывал то, что говорил врач.	村の分教場の身体検査の時、その男は医師の言う事を書いていたからだ。	（前頁から続く）
あの黒んぼ、殺すの？」	Его убьют?	「彼、殺すの？」	23 差別用語の緩和
「女教師が怠けもので、文句ばかりいいやがって、出かけようとしないんだ。 村の子は汚れていて臭くて厭だとさ」	Учительницы у вас лентяйки, только и знают, что жаловаться, а уходить не уходят. Дети в деревне грязные, вонючие и противные.	「お前らの女教師が怠けもので、文句ばかりいいやがって、辞めようとしないんだ。 村の子は汚れていて臭くて厭だ」	24 訳者の誤解？
《町》の樹もまた、その街路の子供たちのように陰険でなじみにくいのだ。	（なし）	（なし）	25 文章の緩和
僕は板戸を狭く開き、放尿するために窓枠へ上った。 霧が生きもののようにおおいかぶさってき、僕の鼻孔のなかへすばやくしのびこんで来た。 僕の尿は長い距離を飛び、敷石の上ではじけちり、倉庫の一階から張り出している出窓にあたるとはねかえって僕の鳥肌だった腿や足の甲を暖かく濡らした。 弟が動物の仔のように僕の脇へ頭を押しつけ、熱心に僕の放尿を覗きこんでいた。 　僕らはそのままの姿勢で暫くいた。 小さな欠伸がいくつも僕らの細い喉へあふれ、そのたびに僕らは透明で意味のない涙を少しずつ流すのだった。 「兎口は、あいつを見た	— А Мицукути видел негра?	「兎口は、黒人を見たか？」	26 原始的な生活の描写の削除

か？」と僕は板戸を閉ざす手伝いをするために肩の細い筋肉をこわばらせている弟にいった。			（前頁から続く）
光度の低い裸電球に照しだされて、そこに《獲物》がうずくまっていた。彼の黒い足と柱を結びつける猪罠の太い鎖が僕の眼をぐいぐいひきつける。《獲物》は長い両膝を抱えこみ、顎を膝に乗せたまま充血した眼、粘ついて絡んで来る眼で僕を見あげた。	Там, в свете слабой лампочки без абажура, обняв руками колени и положив на них голову, сидел на корточках пленный. Мое внимание сразу привлекла толстая цепь с кабаньим капканом, которой негра приковали за ногу к столбу. Не меняя позы, пленный вскинул на меня какие-то липучие, цепкие глаза.	光度の低い裸電球に照しだされて、そこに捕虜が両膝を抱えこみ、顎を膝に乗せてうずくまっていた。 彼の足を柱に結びつけている猪罠の太い鎖が僕の眼をぐいぐいひきつける。捕虜は姿勢を変えずに粘ついて絡んで来る眼で僕を見あげた。	27 （不明） 差別用語の緩和・削除
食物の籠を黒人兵が見つめ、父が見つめ、僕が見つめた。	Негр пристально смотрел на корзину.	食物の籠を黒人が見つめた。	28 （不明）
脂の乾くまで焼いた干魚	Хорошо прожаренная рыба	よく焼いた魚	29 （不明）
濃い乳は熟れすぎた果肉を糸でくくったように痛ましくさえ見える唇の両端からあふれて剥き出した喉を伝い、はだけたシャツを濡らして胸を流れ、黒く光る強靭な皮膚の上で脂のように凝縮し、ひりひり震えた。	Густое молоко, словно мякоть надрезанного перезрелого плода, потекло из уголков рта по шее на раскрытую грудь, собираясь дрожащими каплями на глянцевито-чёрной коже.	濃い乳は熟れすぎた果肉を切ったように唇の両端からあふれて剥き出した喉を伝い、はだけた胸を流れ、黒く光る皮膚の上でひりひり震える滴のように凝縮した。	30 （不明）
自分の空腹をおし殺す努力をしなければならない僕は、父たちのすばらしい《獲物》を検討する、かなり息苦しい余裕をえたのだった。それは、確かになんというすばらしい《獲物》だったことだろう。	Хотя меня мутило от голода, мне всё же удалось рассмотреть его как следует.	自分の空腹をおし殺す努力をしなければならない僕は、それでもきちんと彼を検討することができた。	31 （不明） 差別用語の削除
そして、むっと喉へこみあげてくる嘔気のように執拗に充満し、腐蝕性の	（なし）	（なし）	32 差別的な描写の削除

毒のようにあらゆるものにしみとおってくる黒人兵の体臭、それは僕の頬をほてらせ、狂気のような感情をきらめかせる……			（前頁から続く）
弟は寝台の上に坐りこんで、眼を光らせていた。弟の眼は熱をおび、そして少し恐怖に乾いているのだった。	Брат сидел в постели, его глаза жарко блестели, в них стоял страх.	弟は寝台の上に坐りこんで、眼を熱く光らせていた。弟の眼は恐怖に満ちているのだった。	33 （不明）
「とても臭うだけさ」と僕は疲れの湧出のなかでいった。	— Очень чёрный, — сказал я, захлёстнутый волной усталости.	「とても黒いだけさ」と僕は疲れの湧出のなかでいった。	34 差別用語の削除
僕は枯れた草の葉や、多毛質の草の実のこびりついているシャツを脱ぎ、汚れた裸足を雑巾でぬぐうために躰を屈め、弟の次の質問をうけつける意志のないことを誇示した。	Я снял рубашку, облепленную сухими травинками и мохнатыми семенами лесных растений, и нагнулся обтереть ноги тряпкой, всем своим видом показывая, что не желаю отвечать на дальнейшие расспросы.	僕は枯れた草の葉や、多毛質の草の実のこびりついているシャツを脱ぎ、足を雑巾でぬぐうために躰を屈め、弟の次の質問をうけつける意志のないことを誇示した。	35 （不明）
僕は弟の横にもぐりこみ、顔を汗と小動物の臭いのする毛布に埋めた。	Я лег рядом с ним и зарылся лицом в пахнущее потом и мышами одеяло.	僕は彼の横にもぐりこみ、顔を汗と鼠の臭いのする毛布に埋めた。	36 （不明）
《町》の役場と駐在所では、黒人兵の捕虜をどう処置することもできないと書記はいうのだった。	В городском управлении и полицейском участке, говорил писарь, не знают, что делать с пленным негром.	町の役場と駐在所では、黒人兵の捕虜をどう処置するべきか分からないと書記はいうのだった。	37 （不明）
しかもあの遠い山道を危険な黒人兵を護送することも村の人間たちの力では難かしいだろう。	К тому же и конвоировать его по дальней горной дороге деревенским будет не под силу.	しかもあの遠い山道を彼を護送することも村の人間たちの力では難かしいだろう。	38 差別用語の置き換え
長い雨期と洪水が何もかもを複雑にし困難にしたのだ。 しかし書記が命令的な口調、一種の下級官僚的な尊大な口調になると村	Долгий период дождей и наводнения усложнили путь в город. Но вот писать заговорил высокомерным тоном, свойственным мелким	長い雨期と洪水が町への道を複雑にし困難にしたのだ。 しかし書記が命令的な口調、一種の下級官僚的な尊大な口調になると村の	39 （不明）

の大人たちは弱よわしくそれに屈伏するのだった。	бюрократам, и взрослые подчинились.	大人たちはそれに屈伏するのだった。	
僕は深い安堵と期待と、大人たちから感染したむくむく動きまわる不安に満たされていた。	Меня переполняло ожидание и передавшееся от взрослых неясное беспокойство.	僕は期待と、大人たちから感染したむくむく動きまわる不安に満たされていた。	40 （不明） （前頁から続く）
倉庫の壁に背をもたせて僕は、兎口にせきたてられ小さい尻を陽に焼いて自分の生れてはじめての体験に熱中する子供らを見おろしながら、不思議な満足と充実、陽気な昂揚を感じた。 兎口は、大人たちの群らがりから離れて来た猟犬を裸の膝に倒して蚤を探し、それを飴色の爪でつぶしながら、傲慢な罵声をまじえて子供たちに号令するのだった。	Я стоял, прислонившись спиной к стене, и, глядя на подгоняемых Мицукути ребятишек, которые, припав к окошку и выставив на солнце худенькие зады, впервые увлечённо набирались собственного жизненного опыта, испытывал странную удовлетворённость и какой-то радостный подъем. А Мицукути, завалив к себе на колени прибредшую от взрослых охотничью собаку, искал и давил у неё блох, при этом высокомерным голосом командуя детьми.	壁に背をもたせて僕は、兎口にせきたてられ小さい尻を陽に焼いて自分の生れてはじめての体験に熱中する子供らを見おろしながら、不思議な満足と充実、陽気な昂揚を感じた。 兎口は、大人たちの群らがりから離れて来た猟犬を裸の膝に倒して蚤を探し、それをつぶしながら、傲慢な罵声をまじえて子供たちに号令するのだった。	41 （不明）
激しく殴られ蹴りつけられた後のように、ただ大人たちに見られただけで傷ついてしまったように。	Он лежал так, будто его жестоко избили, испинали ногами, словно его ранили, а видели это только взрослые.	激しく殴られ蹴りつけられて傷ついてしまった後のように、彼が寝転がっていた、それは大人たちにしか見えなかった。	42 訳者の誤解？
父も猟銃を黒人に擬すことを止め壁にもたれて退屈そうだった。	Отец, со скучающим видом опустив ружьё, прислонился к стене.	父も退屈そうに猟銃を下ろして壁にもたれた。	43 （不明）
しかし、黒人兵の躰がどうかするはずみにかしぎ、その足首にからみついた猪罠の鎖が金属質の硬い音をたてると、僕は激しい勢でおびえが回復し、僕の血管のすみずみになだれこ	Однако, когда негр, почему-то потеряв равновесие, свалился на бок и закреплённая у него на ноге цепь с кабаньим капканом резко звякнула, прежний страх с новой	しかし、黒人兵の躰がどうかするはずみにかしぎ、その足首につけられていた猪罠の鎖が金属質の硬い音をたてると、僕は激しい勢でおびえが回復し、僕の筋のすみずみ	44 （不明）

んで、あらゆる皮膚を鳥肌だたせるのを感じるのだ。	силой ожил во мне, разлился по жилам и мурашками пробежал по телу.	になだれこんで、あらゆる皮膚を鳥肌だたせるのを感じるのだ。	
しかし僕は、午後一度だけ兎口が地下倉へ入って来ることを特に父に頼んで許してもらったのだった。	Тем не менее для Мицукути я особо выхлопотал у отца разрешение раз в день приходить в подвал.	しかし僕は、一日に一回兎口が地下倉へ入って来ることを特に父に頼んで許してもらったのだった。	45 （不明）
兎口はその仕事を過度な熱心さでやりとげ、時には堆肥場脇の大きい水槽にうつす前に樽を木片でかきまわして、黒人兵の消化、特に下痢の状態を説明し、それが雑炊の中の玉蜀黍粒に原因することなどを断定するのだった。僕と兎口が父につきそわれ、樽をとりに地下倉へ下りて行き、黒人兵がズボンをずりさげ黒く光る尻を突き出して、殆ど交尾する犬のような姿勢で小さな樽にまたがっているのにでくわしたりすると、僕らは黒人兵の尻のうしろで暫く待たねばならない。 そういう時、兎口は畏敬の念と驚きとにうたれて、夢みるような眼をし、樽の両側にまわされた黒人兵の足首をつなぐ猪罠がひそかな音をたてるのを聞きながら僕の腕をしっかり掴んでいるのだった。	Мицукути относился к этому делу с величайшей серьёзностью.	兎口はその仕事を過度な熱心さでやりとげた。	46 下品な描写の削除
町役場からの遅い指示を待ちうけてじっとしていることはできない。	Ждать сложа руки указаний от городского управления было негоже.	町役場からの指示を待ちうけてじっとしているのはみっともない。	47 （不明）
黒人兵の監視を引受けた	Мой отец, на которого был	黒人の監視を負わされた	48 （不明）

僕の父さえ、猟に出はじめると、黒人兵はどんな保留条件もなしに、ただ子供たちの日常をみたすためにだけ、地下倉の中で生きはじめたのだった。	возложен надсмотр за негром, начал снова выходить на охоту, и негр безраздельно стал предметом лишь нашего детского любопытства.	僕の父が猟に出はじめると、黒人兵はただ子供たちの日常をみたすものになった。	
僕らはいつもその桃色の炎症を起した傷ついた皮膚を気にしていた。	Это беспокоило нас.	僕らはそれを気にしていた。	49 （不明）
僕と弟を突然回復した黒人兵への恐怖が息もたえだえにする。	От страха у нас перехватило дыхание.	僕らを恐怖が息もたえだえにする。	50 （不明）
黒人兵は家畜のようにおとなしい……	（なし）	（なし）	51 差別的な描写の削除
その夜ふけ、地下倉の揚蓋の巨きい南京錠をおろしに来た父が、黒人兵の自由になった足首を見たが、不安に胸を熱くしている僕をとがめはしなかった。	Поздней ночью пришёл отец и, пройдя в подвал, увидел, что ноги негра свободны.	その夜ふけ来た父が、黒人兵の自由になった足首を見たが、不安に胸を熱くしている僕をとがめはしなかった。	52 （不明）
翌朝、僕と弟と兎口は朝食を届けに行き、黒人兵が猪罠を膝の上でいじりまわしているのを見た。 猪罠は兎口が壁に投げつけたために咬みあう接合部が壊れているのだった。	На следующее утро, принеся негру завтрак, мы — я, брат и Мицукути — увидели, что он, положив на колени кабаний капкан, пытается его починить. Когда Мицукути швырнул капкан в стену, он поломался.	翌朝、僕と弟と兎口は朝食を届けに行き、黒人が猪罠を膝の上で直そうとしているのを見た。 猪罠は兎口が壁に投げつけたために壊れているのだった。	53 （不明）
黒人兵が僕らに語りかける、家畜が僕らに語りかけるように、黒人兵が語りかける。	Негр заговорил с нами. Это было невероятно, так же невероятно, как если бы с нами заговорило домашнее животное.	黒人兵が僕らに語りかける。家畜が僕らに語りかけると同じように信じられないことだった。	54 差別的な描写の緩和
僕らは駈けて部落長の家へ行き、村の共有財産の一つの道具箱を土間からかつぎ出して地下倉へ運んだ。	Мы побежали к дому старосты, и, взяв у него ящик с инструментами, составлявшими общую собственность деревни, возвратились в подвал.	僕らは駈けて部落長の家へ行き、村の共有財産の一つの道具箱を部落長のところから取って地下倉へ戻った。	55 （不明）
「あいつ、人間みたいに」	— Он совсем как	「あいつ、人間みたいに」	56 下品な描写の削除

と兎口が低い声で僕にいった時、僕は弟の尻を突っつきながら笑いで躰をよじるほど幸福で得意な気持だった。	человек, — тихо сказал мне Мицукути, и на душе у меня стало радостно и весело.	と兎口が低い声で僕にいった時、僕は幸福で得意な気持だった。	
それらは僕の心に、不快ではない嘔気、欲望と結びついたかすかな反撥をよびおこすのだった。	Это вызвало у меня лёгкую тошноту, смутное отвращение.	それらは僕に、不快ではない嘔気、かすかな反撥をよびおこすのだった。	57 （不明） （前頁から続く）
そして、《町》の指令をなかなか伝えようとしない。	Не будет больше приходить в деревню с указами.	そして、《町》の指令をもう伝えに来ない。	58 訳者の誤解？
不恰好な煙草に火をつけて、背の高い黒人兵に渡した。	Свернул самокрутку, зажёг её и подал негру.	手巻き煙草を作ってそれにに火をつけて、黒人に渡した。	59 （不明）
黒人兵は躰を起し、巨きい掌で涙をぬぐい、それから彼の逞しい腰をしめつけている麻地のズボンから黒く光るパイプを取り出すと書記にさし出すのだった。 書記がその贈り物を受けとり、黒人兵が満足そうにうなずき、彼らに夕暮の葡萄色をしたかげりを作る陽ざしがあふれた。	Негр выпрямился, вытер своей огромной ладонью слёзы, потом достал из кармана брюк глянцевито-чёрную трубку и сунул её в руки писарю. Писарь принял подарок, негр удовлетворённо кивнул. Они стояли, залитые светом солнца в надвигавшихся вечерних сумерках.	黒人兵は躰を起し、巨きい掌で涙をぬぐい、それからズボンから黒く光るパイプを取り出すと書記にさし出すのだった。 書記がその贈り物を受けとり、黒人兵が満足そうにうなずき、彼らに夕暮のかげりを作る陽ざしがあふれた。	60 （不明）
部落長の家の部落共有の種牛が道を来ると草むらに下りてそれを避ける	Племенной бык, составлявший общую собственность деревни, сторонился встречавшихся на его пути зарослей кустарника.	部落共有の種牛が道を来ると草むらに下りてそれを避ける	61 （不明）
僕と弟はその皮剥ぎを手伝うために午前中ずっと倉庫の土間ですごさねばならない。	Нам с братом предстояло помогать снимать с него шкуру.	僕と弟はその皮剥ぎを手伝わねばならない。	62 （不明）
黒人兵がやって来ると僕と弟は皮剥ぎ用の血に汚れ柄に脂のこびりついたナイフを握りしめた父の両側に息をつめて膝をつ	Когда он появился, мы с братом, затаив дыхание, стояли на коленях по бокам отца, державшего измазанный кровью нож с	彼がやって来ると僕と弟は血に汚れ柄に脂のこびりついたナイフを握りしめた父の両側に息をつめて膝をつき	63 （不明）

き	засаленной рукояткой		
僕と弟がその臓物をこぼさないように注意して、それを共同堆肥場へ棄てに行き、汚れた指を広い木の葉でぬぐいながら帰って来ると、すでに鼬の皮は脂肪の膜と細い血管を陽に光らせ、裏がえされて板に釘づけられようとしている。	Мы с братом понесли её на свалку, а затем вернулись домой, на ходу вытирая испачканные руки листьями деревьев. К этому времени шкурка была уже вывернута мездрой наружу, и её оставалось только прибить гвоздями к доске.	僕と弟がそれをゴミ捨て場へ棄てに行き、汚れた指を木の葉でぬぐいながら帰って来ると、すでに鼬の皮は裏がえされて板に釘づけられようとしている。	64 （不明） （前頁から続く）
僕らはそれをいつも笑いのたねにして涙を流すほど大笑いするのだったが、黒人兵の皮膚が汗ばみはじめると、僕らには傍でいたたまれないほど、それは臭いたてた。	Для нас это всегда был повод посмеяться, и мы смеялись до слёз.	僕らはそれをいつも笑いのたねにして涙を流すほど大笑いするのだった。	65 差別的な描写の削除
陽が熱く僕らすべての硬い躰にあふれ、水はたぎるようにあわだち、きらめいていた。	Я весь был полон жаркого солнца. Вода, словно закипая, пенилась и искрилась.	陽が熱く僕の躰にあふれ、水はたぎるようにあわだち、きらめいていた。	66 (不明)
それから急に僕らは、黒人兵が堂どうとして英雄的で壮大な信じられないほど美しいセクスを持っていることを発見するのだった。僕らは黒人兵の周りで裸の腰をぶつけあいながらはやしたて、黒人兵はそのセクスを握りしめると牡山羊がいどむ時のような剽悍な姿勢をしてわめいた。 僕らは涙を流して笑い、黒人兵のセクスに水をぶっかけた。 そして、兎口が裸のまま駈け出して行き、雑貨屋の中庭から大きい牝山羊をつれて戻って来ると僕らは兎口の思いつきに拍	(なし)	(なし)	67 性的な描写の削除

手喝采した。 黒人兵は桃色の口腔を開いて叫ぶと、泉からおどり上り、おびえて鳴く山羊にいどみかかっていった。 僕らは狂気のように笑い、兎口は力みかえって山羊の首を押さえつけ、黒人兵は陽にその黒く逞しいセクスを輝かせて悪戦苦闘したが牡山羊のようには、うまくゆかないのだ。			（前頁から続く）
僕らは躰を下肢に支えることができなくなるまで笑い、そのあげく疲れきって倒れた僕らの柔かい頭に哀しみがしのびこむほどだった。	Мы так хохотали, что в конце концов ноги отказались нам служить. Мы вышли из водоёма и в изнеможении повалились на землю. В наши детские души закралась печаль.	僕らは躰を下肢に支えることができなくなるまで笑い、そのあげく疲れきって水場を出て倒れた僕らの子供らしい心に哀しみがしのびこむほどだった。	68 （不明）
僕らがいかに黒人兵を愛していたか、あの遠く輝かしい夏の午後の水に濡れて重い皮膚の上にきらめく陽、敷石の濃い影、子供たちや黒人兵の臭い、喜びに嗄れた声、それらすべての充満と律動を、僕はどう伝えればいい？	Как мне передать меру нашей любви к нему, искрящееся на мокрой коже солнце того далёкого сверкающего летнего дня, густую тень на камнях мостовой, запах детских тел, охрипшие от радости голоса — все эти переполнявшие меня тогда ощущения?	僕らがいかに黒人兵を愛していたか、あの遠く輝かしい夏の午後の水に濡れて重い皮膚の上にきらめく陽、敷石の濃い影、子供たちの臭い、喜びに嗄れた声、それらすべての充満と律動を、僕はどう伝えればいい？	69 差別的な描写の削除
僕らの古代めいた水浴の日の夕暮、夕立が激しく谷間を霧の中へとじこめ、夜がふけても降りやまなかった。	В тот же вечер хлынул проливной дождь и окружил лощину завесами мглы.	同じ日の夕暮、夕立が激しく谷間を霧の中へとじこめ、夜がふけても降りやまなかった。	70 （不明）
そして黒人兵が歌い終ると、もう明りとりから雨はしぶきこんでこないのだった。	Когда он умолк, дождь уже кончился.	して彼が歌い終ると、もう雨は止んだ。	71 （不明）
谷間の畠や林から仕事着	Один за другим они	仕事着をつけ、不満に頬	72 （不明）

をつけ、不満に頬をふくらませた大人たちが次第に帰って来、僕の父も、銃身に小柄な野鳥を数羽くくりつけて、土間に入って来た。	входили в дом, одетые в рабочую одежду, с недовольными лицами. Пришёл и мой отец. К стволу его ружья было привязано несколько небольших птиц.	をふくらませた大人たちが次第に帰って来、僕の父も、銃身に小柄な野鳥を数羽くくりつけて、土間に入って来た。	
しかし、僕らは驚きと失望の底にいたのだ、黒人兵を引渡す、そのあと、村に何が残るだろう、夏が空虚な脱けがらになってしまう。	(なし)	(なし)	73 （不明） （前頁から続く）
受胎した川魚の腹のように丸い彼の唇はゆるく開かれ、白く光る唾液が歯茎の間から流れた。	(なし)	(なし)	74 下品な描写の削除
僕は苛だちで貧血をおこしそうだったのだ。	Казалось, от страха кровь застыла в моих жилах	僕は恐怖で血管の血液が止まった気がした。 とまる	75 （不明）
地下倉の中で僕は短い時間、あっけにとられて、すばやく動きまわる黒人兵の引きしまった腿の動き、尻の肉の収縮などに眼をうばわれていた。	Там он забегал с такой стремительностью, что я совершенно оторопел и едва успевал следить за ним глазами.	地下倉の中で僕はあっけにとられて、すばやく動きまわる黒人兵の引きしまった腿の動きに眼をうばわれていた。	76 下品な描写の削除
僕は彼に引きずられ、彼と親しかった時そうしたと同じように、彼のむんむんする体臭の中に裸の膝をついた。	Я, как в ту пору, когда мы дружили, стоял перед ним на коленях, вдыхая жаркий запах его тела.	僕は彼に引きずられ、彼と親しかった時そうしたと同じように、彼のむんむんする体臭の中に膝をついた。	77 （不明）
時どき僕の父が明りとりから覗きこみ、おとりにされた息子へうなずいて見せるたびに僕は涙を流した。	Время от времени в окошко заглядывал отец, и каждый раз, как он успокаивающе кивал своему ставшему заложником сыну, я заливался слезами.	時どき僕の父が明りとりから覗きこみ、おとりにされた息子へ安心させる為にうなずくたびに僕は涙を流した。	78 (不明)
しかし、あのいつも笑ってばかりいる黒くて臭う大男を疑ることができるか？	Но можно ли было не доверять этому постоянно улыбающемуся чёрному великану?	しかし、あのいつも笑ってばかりいる黒い大男を疑ることができたか？	79 差別的な用語の削除

しかもいま、僕の前の暗闇のなかで鋭い歯音を時どきたてている男が、あの大きいセクスのばかな黒んぼうだとは思えない。	Мне и теперь трудно было представить себе, что этот время от времени скрежетавший зубами человек и прежний глупый негр — одно и то же лицо.	しかもいま、僕の前の鋭い歯音を時どきたてている男が、あのばかな黒んぼうだとは思えない。	80 性的な用語の削除
僕には剥き出された白い尻が非常に無抵抗で弱く感じられ、屈辱が僕の喉から食道を通じ、胃の内壁まで、すべて真黒にそめてしまうようにさえ感じられるのだ。	Мой оголённый зад казался мне необычайно уязвимым и беззащитным, унижение, казалось, прошло у меня по пищеводу в желудок и окрасило всё в чёрный цвет.	僕には剥き出された尻が非常に無抵抗で弱く感じられ、屈辱が僕の食道を通じ、胃の内壁まで、すべて真黒にそめてしまうようにさえ感じられるのだ。	81 (不明) （前頁から続く）
僕は地熱のほてりが内側から伝わって来る壁に汚れた額を押しつけ、声をひそめて長い間、すすり泣いた。 夜は長かった。	Я прижался лбом к нагретой земным теплом стенке и долго плакал, тихо шмыгая носом. Ночь тянулась нескончаемо.	僕は地熱のほてりが内側から伝わって来る壁に額を押しつけ、声をひそめて長い間、すすり泣いた。夜は終わりなく続いていた。	82 (不明)
そして疲れが僕を重く領し、僕はくずおれて眠った。	В конце концов усталость сморила меня, и я забылся сном.	結局疲れが僕を重く領し、僕は眠った。	83 (不明)

資料 III

「不意の唖」翻訳における異同

原文	翻訳文	再訳文	番号/異同の理由
外国兵をのせた一台のジープが夜明けの霧のなかを走ってくる	Сквозь рассветный туман едет «джип» с иностранными солдатами.	外国兵をのせた一台のジープが夜明けの霧のなかを走っている。	1. 不明（翻訳上の便宜・簡略化）
罠にかかった小鳥の翼を針金につらぬいてまるめたものを肩にかけ、谷間のはずれの自分の猟場をまわっていた少年がそれを見つけ、しばらくは息をつめてそれを見まもっていた。	Мальчик, который обходил свои охотничьи угодья в конце долины, закинув за спину нанизанных на проволоку пичужек, попавших в расставленные им силки	罠にかかった小鳥の翼を針金につらぬいたもの肩をにかけ、谷間のはずれの自分の猟場をまわっていた少年がしばらくは息をつめてそれを見まもっていた。	2. 不明（翻訳上の便宜・簡略化）
かれの父がその小さな集落の部落長をしている、その父が耕作に出る支度をととのえている所へ少年が青ざめて 帰って来た。	Отец его был старостой этой крохотной, прилепившейся к холму деревеньки, и мальчик, побелевший от страха, направился туда, где отец заканчивал последние приготовления к выходу в поле.	かれの父が岡にひっついたその小さな集落の部落長をしている、その父が耕作に出る支度をととのえている所へ少年が怖さで青ざめて 帰って来た。	3. 不明（翻訳上の便宜・説明化）
そして決してかれらと争うな。	И ни в коем случае не вступать в сражение	そして決してかれらと戦い始めるな。	4. 対立の強調
そして陽がかなり高くなってからジープはじつに静かにすばらしい速度で谷間の村へ入って来た。	Солнце уже стояло высоко, когда «джип» бесшумно на большой скорости въехал в деревню.	そして陽がかなり高くなってからジープはじつに静かにすばらしい速度で村へ入って来た。	5. 不明（翻訳上の便宜・簡略化）
かれらを村の大人たちや子供たちが遠まきにとりまいて見守った。	На них смотрели стоявшие в отдалении взрослые и дети.	かれらを村の大人たちや子供たちが遠ざかって立って見守った。	6. 不明（翻訳上の便宜・簡略化）
女たちは年老いた者らさえ暗く狭い土間にうずくまって決して外に出ようとしなかった。	Женщины и старики укрылись в темных, узких сенях и подглядывали оттуда, боясь высунуть нос наружу.	女たちと年老いた者は暗く狭い土間にうずくまって決して外に出ようとしなかった。	7. 不明（訳者の誤解？）
大人たちは通訳の言葉にもかかわらず、外国兵を見るためになかなかひきあ	И собравшиеся, не обращая внимания на слова переводчика, все не	集まった人は通訳の言葉にもかかわらず、外国兵を見るためになかなかひき	8. 不明（翻訳上の便宜・簡略化）

げて行こうとしなかった。 かれらも子供らも嘆声をあげて外国兵を見つめていた。 「大人は仕事に戻ってくれ」と通訳がくりかえした。	уходили, пытаясь получше рассмотреть иностранных солдат. Они разглядывали их, издавая возгласы восхищения. — Идите работать, — повторил переводчик.	あげて行こうとしなかった。 かれらは嘆声をあげて外国兵を見つめていた。 「仕事に戻ってくれ」と通訳がくりかえした。	（前頁から続く）
「みんな、仕事に帰ろう」と少年の父親がいった。	— Все возвращайтесь на работу, — сказал староста.	「みんな、仕事に帰ろう」と部落長がいった。	9. 不明（翻訳上の便宜・簡略化）
子供たちは少しずつ輪をせばめて、もっと良く見るために兵隊たちへ近づいて行った。 あまり恐くなかった。	Дети постепенно подходили все ближе и ближе, сжимая кольцо вокруг «джипа», чтобы лучше рассмотреть солдат.	子供たちは少しずつ輪をせばめて、もっと良く見るために兵隊たちへ近づいて行った。	10. 不明（翻訳上の便宜・簡略化）
子供らは、裸になった外国兵の体を驚嘆して見つめた。	Дети опасливо смотрели на обнаженные тела солдат.	子供らは、裸になった外国兵の体を恐れながら見つめた。	11. 対立の強調
外国兵たちもほとんど通訳をあいてにしない様子だった。 ただ通訳の方で、水をぶっかけに行ったりすると、たちまち数人の外国兵の包囲にあって悲鳴をあげながら退却する、そういうくらいなものだった。	Иностранные солдаты сделали вид, будто не обращают на него внимания. Но стоило переводчику войти в воду, как он оказался в кольце солдат и тут же с воплем выскочил на берег.	外国兵たちもほとんど通訳をあいてにしない様子だった。 ただ通訳が水に入ると、たちまち数人の外国兵の包囲にあって悲鳴をあげながら退却した。	12. 不明（翻訳上の便宜・簡略化）
再び、その話を聞いた外国兵が笑い声をけたたましくひびかせ、それにつれて子供らも喉をいっぱいにあけて幸福に笑った。	Услыхав его рассказ, они громко расхохотались, вслед за ними рассмеялись и дети.	その話を聞いた外国兵が笑い声をけたたましくひびかせ、それにつれて子供らも笑った。	13. 不明（翻訳上の便宜・簡略化）
子供らは、笹や羊歯類の生いしげった中へ後ずさった。	Отец, сидя в полутьме у очага, расщеплял вместе с матерью бамбук и связывал его в небольшие пучки.	父親は暗い囲炉裏の横に坐って母親と一緒に乾燥した竹の皮をよりわけて小さい束にする仕事をしていた。	14. 不明（翻訳上の便宜・簡略化）
そして、通訳のほかは誰もその作業に身をいれようとしなかった。	И никто, кроме переводчика, поисками не стал заниматься.	そして、通訳のほかは誰もその作業をしようとしなかった。	15. 対立の強調
子供らは、笹や羊歯類の生	Дети попятились назад,	子供らは、笹や羊歯類の生	16. 不明（翻訳上の便宜・

いしげった中へ後ずさった。	скрывшись в зарослях низкого бамбука и папоротника.	いしげった中へ後ずさった。	簡略化） （前頁から続く）
「行こう、立合うことにしよう」と父親がいった。	— Пошли, — сказал отец мальчика.	「行こう」と青年の父親がいった。	17. 不明（翻訳上の便宜・簡略化）
子供らはその外国兵たちを見まもって楽しい時をすごした。	Дети, наблюдая за ними, радовались, что солдаты такие мирные.	子供らはその外国兵たちを見まもってその平和に嬉しかった。	18. 対立の強調
少年はねばっこい唾を口腔いっぱいにためてジープを見つめていた。	Затаив дыхание, он смотрел на «джип».	少年は息を止めジープを見つめていた。	19. 不明（翻訳上の便宜・簡略化）
そして通訳の黒っぽい頭を見あげた。	И смотрел в глаза переводчика.	そして通訳の目を見た。	20. 不明（翻訳上の便宜・簡略化）
かれは陽気にしゃべりながらひょいひょい跳んでついて来た。	Он то и дело подпрыгивал.	かれはひょいひょい跳んでついて来た。	21. 不明（翻訳上の便宜・簡略化）
お前の村の大人ときたら頭がどうかしてるよ」	У тебя голова лучше работает, чем у взрослых из вашей деревни.	お前の村の大人よりもの分かるよね	22. 不明（翻訳上の便宜・簡略化）
そして剛毛がいちめんに生え筋肉が石のようにかたくもりあがっている数人の大人の体が萎縮したセクスをあらわにして通訳をかこんだ。	Его окружили обнаженные мускулистые люди с небритыми лицами.	そして筋肉がもりあがっている数人の大人の裸の体が通訳をかこんだ。	23. 性的な描写の削除・置き換え、翻訳上の便宜・簡略化
そして体をぶるぶる震わせて水をきるとそのまま服を着こむのだ。	Продолжая дрожать, они оделись.	そして体を震えながら服を着こむのだ。	24. 不明（訳者の誤解？）
大人たちは坂道のはじまりまで少年を送って来た。	И проводили мальчика до дороги, которая шла вверх, к его дому.	大人たちは彼の家へ続く坂道のはじまりまで少年を送って来た。	25. 不明（翻訳上の便宜・説明）
家の背部にすぐ連なる栗をふくむ雑木の林から旺んな小鳥の声が湧きおこった。	С деревьев позади дома — там росли и каштаны — послышалось пение пробудившихся птиц.	家の背部にすぐ連なる栗をふくむ雑木の林から目覚めた小鳥の声が湧きおこった。	26. 不明
しかし、かれらのまわりに子供らは決して近づいてもこなければ遠くからかれらを見まもっている様子もなかった。	Но детей нигде не было видно.	しかし、子供らは周りにまわりに見えなかった。	27. 不明（翻訳上の便宜・説明）
外国兵のなかでいちばん澄んだ青い色の眼をした	Голубоглазый солдат, самый добродушный из	外国兵の青い色の眼をした男が菓子の包みを投げ	28. 対立の強調

男が菓子の包みを投げてやったが、女の子供も犬も身うごき一つしないでその遊びをつづけた。	всех, бросил ей пакетик со сладостями, но девочка, продолжая свою игру, даже не посмотрела в его сторону.	てやったが、女の子供は振り替えもしなでその遊びをつづけた。	（前頁から続く）

資料 IV

1922. 6. 6. 人民委員会議政令「文学・出版総局の設立に関して」（抜粋）

第 3 条　文学・出版総局とその機関は下記の出版物の出版や普及を禁ずる

a. ソビエト政権を批判するアジプロを含むもの、

b. 当国の軍事的秘密を公開するもの、

c. 虚偽の情報を普及することにより世論を刺激するもの、

d. 民族的や新教的な狂信を招くもの、

e. 猥褻性を持つもの

『ソ連における検閲 1917-1991.資料集』(A.V.ブリューム編)モスクワ、ロッスペン 2004 32 項

1922. 6 июня. Положения о Главном Управлении по делам литературы и издательства (Главлит)

(выдержки)

3. Главное Управление по делам литературы и издательства и его органы воспрещают издание и распространение произведений:

а) содержащих агитацию против советской власти,

б) разглашающих военные тайны Республики,

в) возбуждающих общественное мнение путем сообщения ложных сведений,

г) возбуждающих националистический и религиозный фанатизм,

д) носящих порнографический характер.

«Цензура в Советском Союзе 1917–1991. Документы» (сост. А.В. Блюм). М., Росспэн, 2004. С. 32.

資料 V

1922.12.2「グラヴリット本部より地方局への訓示」（抜粋）

第 1 条　グラヴリットとその地方局の権利及び任務

第 7 次　出版物の検閲は下記のものからなる

a. 公開禁止事項の出版を禁ずること（事項は別紙の通り）、

b. 共産党とソビエト政権を明らかに批判する記事の出版を禁ずること、

c. 主題における我が国に敵対的なイデオロギーを普及する如何なる出版物をきんずること（主題は社会、信教、経済、国民問題、芸術、等）、

d. 卑俗な出版物、猥褻な出版物（ポルノグラフィ）、不公平な報告等を禁ずること、

e. ソビエト政権と共産党の威信を傷つける緊迫した箇所（事実、数字、評価）の削除

『ソ連における検閲 1917–1991.資料集』(A.V.ブリューム編)モスクワ、ロッスペン 2004 36–37 項

1922.2 декабря Инструкция Главлита его местным органам.

I. Права и функции Главлита и его местных органов.

7. Цензура печатных произведений заключается:

а) В недопущения к печати сведений, не подлежащих оглашению (см. перечень).

б) В недопущении к печати статей, носящих явно враждебный к Комм. партии и Сов. власти характер.

в) В недопущении всякого рода печатных произведений, через которые проводится враждебная нам идеология в основных вопросах (общественности, религии, экономики, в национальном вопросе, области искусства и т. д.).

г) В недопущении бульварной прессы, порнографии, недобросовестной рекламы и т. д.

д) В изъятии из статей наиболее острых мест (фактов, цифр, характеристик), компрометирующих Соввласть и Компартию.

«Цензура в Советском Союзе 1917-1991. Документы» (сост. А.В. Блюм). М., Росспэн, 2004. С. 36–37.

Я п о н и я

Кэндзабуро Оэ. СЕМНАДЦАТИЛЕТНИЙ. Повесть

Оэ,Кэндзабуро. Сэбэнтин. Токио. "Бунгакукай", 1961, № 1-2.

Эта повесть - только звено довольно длинной уже, несмотря на молодость автора, цепи произведений Оэ, но звено очень важное. Сюжет ее взят из газетной хроники: 13 августа 1960 года молодым фашистом был убит председатель Социалистической партии Японии Асанума Инэдзиро. Размышляя над этим, Оэ написал историю болезни и смерти современного молодого человека, ставшего фашистом.

Повесть начинается в день семнадцатилетия героя. Автор нигде не называет его по имени. Семнадцатилетний! Ведь их много семнадцатилетних, выросших после поражения Японии во второй мировой войне, в обстановке американской оккупации и экономического бума.

Младший в семье, он слабоволен и в то же время болезненно самолюбив. Дома его не замечают и даже забывают поздравить с днем рождения, старшая сестра, правда, вскользь вспоминает об этом, но у нее свои заботы. Он на перепутье. Калейдоскоп событий режет глаза и кружит голову юноши. Кто прав - демократы или фашисты - вот вопрос, на который он должен ответить. Он ходит на митинги, возмущается американскими солдатами, но возрождение японской военщины не вызывает его осуждения.

Семнадцатилетний мечтает стать сильным. Он некрасив, тщедушен, замкнут и труслив. В школе его презирают. Он чув-

ствует себя сильным, лишь когда занимается онанизмом. И это получает в повести социальное осмысление: человек, потерявший себя на пороге жизни, нуждающийся в искусственном возбуждении - страшный продукт капиталистического общества, подготовлен для фашизма.

Однажды семнадцатилетний попадает на фашистский митинг. Он почти не слушает оратора, который выкрикивает бессвязные лозунги и ругательства по адресу коммунистов. И тут происходит неожиданное: люди, стоящие сзади, принимают его за фашиста, они возмущены оратором и тем, что подобные юнцы, развесив уши, его слушают. Семнадцатилетний напуган, но на помощь ему приходят фашисты. Так они находят семнадцатилетнего, а он, гордый обращением с ним, как с равным, находит себя в фашизме. Семнадцатилетний участвует в подавлении демонстрации в Хиросиме. Он все больше и больше втягивается в организацию. Но когда узнает, что его начальники примкнули к ней лишь из собственных корыстных интересов, он утверждается в мысли, что искренне и бескорыстно любит императора только он. И семнадцатилетний находит слово: симэй - миссия. Это его миссия - спасти императора. Он приходит на собрание, где выступает Председатель (так в повести назван Асанума). Сцена убийства Председателя - кульминация повести: "...черненькая фигурка подбегает к Председателю... удар, еще один удар... Председатель начинает падать, черненькая фигурка скрывает его. Оператор, застывший со своей камерой, как будто говорит: "Вы, кажется, нанесли ему рану! Прошу Вас, замрите так на минутку!".

- 82 -

Семнадцатилетний убивает себя в тюрьме. Этим заканчивается книга. Но история продолжается: семнадцатилетних много, и реакция прилагает все силы, чтобы привлечь их на свою сторону. Именно поэтому разоблачительная повесть Оэ вызвала такую ярость правых. Они не могут простить ему его выступлений в защиту мира, против атомного вооружения, против возрождения фашизма.

Но все же повесть Оэ не свободна от серьезных недостатков. Создавая "историю социальной болезни" семнадцатилетнего, он склонен видеть причины болезни в физической неполноценности героя. Акцентируя по существу только эту сторону, он неизбежно приходит к одностороннему изображению действительности, и это снижает достоинства острого по своему политическому звучанию произведения.

В.Санович

- 83 -

Редактор Г. П. Злобин

Адрес редакции: Москва, К-12, ул. Разина, 12, ВГБИЛ, Бюллетень „Современная художественная литература за рубежом“

Сдано в производство 12|III—1963 г. Подписано к печати 23|IV—1963 г. Ф. 6. 60x90|16. 8,25 печ. л. Заказ 425. Бесплатно

Типография Всесоюзной государственной библиотеки иностранной литературы.

資料 VII

ロシア国立図書館（Российская Национальная Библиотека）所蔵の『文学界』一九六一年一月号の表紙。左上に検閲官の三角印が確認できる。

資料 VIII

「憂国」ロシア語訳における異同表

原文	翻訳文	再訳文	番号/異同の理由
演習のかえりの埃だらけの軍服を脱ぐ間ももどかしく、帰宅するなり中尉は新妻をその場に押し倒すことも一再でなかった。	часто, вернувшись со службы, поручик не успевал даже скинуть пропыленный мундир, так не терпелось ему заключить в объятия молодую жену.	演習のかえりの埃だらけの軍服を脱ぐ間ももどかしく、帰宅するなり中尉は新妻を抱きたしめたくてたまらなくなったことも一再でなかった。	1. 性的な表現の緩和
捧げる水は毎朝汲み直され、榊はいつもつややかに新しかった。	Рэйко ежедневно поливала священное деревце сакаки, росшее в кадке перед алтарем, и его зелень всегда была свежей и пышной.	麗子は神棚前の樽に生えた榊に毎朝水をやり、その緑はいつもつややかに新しかった。	2. 訳者誤解？
この世はすべて厳粛な神威に守られ、しかもすみずみまで身も慄えるような快楽に溢れていた。	（なし）	（なし）	3. 性的な表現の削除
陶器の犬や兎や栗鼠や熊や狐がいた... 麗子はその一つの栗鼠を手にとってみて	фарфоровые собака, заяц, крот, медведь, лиса… Она взяла крота в руку	陶器の犬や兎や土竜や熊や狐がいた… 彼女はその一つの土竜を手にとってみて	4. 訳者誤解？
よく熾った火鉢のかたわらにあぐらをかいた。	он сел возле жаровни, на которой нагревалось сакэ.	爛が置かれた火鉢のかたわらにあぐらをかいた。	5. 不明
彼は耳をそこに集中して、貴重な時間の一瞬一瞬を、その柔らかい蹠が立てるきしみで隈なく充たそうと試みた。	поручик весь обратился в слух, он желал насладиться каждым мгновением.	彼は耳をそこに集中して、貴重な時間の一瞬一瞬を隈なく充たそうと試みた。	6. 感情的な表現の削除
口には出さなかったけれど、心も体も、さわぐ胸も、これが最後の営みだという思いに湧き立っていた。	Их души, тела и мысли были полны сознанием того, что это — в последний раз.	心も体も、胸も、これが最後の営みだという思いに湧き立っていた。	7. 感情的な表現の削除
ついで太い首筋に、強い盛り上がった肩に、二枚の楯を張り合わせたような逞ましい胸とその樺色の乳首に接吻した。	Потом — мощную шею, широкие плечи, выпуклую, словно заслоненную двумя щитками мускулов грудь.	ついで太い首筋に、強い盛り上がった肩に、二枚の楯を張り合わせたような逞ましい胸に接吻した。	8. 性的な表現の削除

中尉の肌は麦畑のような輝きを持ち、いたるところの筋肉はくっきりとした輪郭を露骨にあらわし、腹筋の筋目の下につつましい臍窩を絞っていた。	Кожа поручика отливала цветом спелой пшеницы, живот был прикрыт рельефным панцирем мускулатуры.	中尉の肌は麦畑のような輝きを持ち、腹筋の筋目はくっきりとした輪郭を露骨にあらわしていた。	9. 性的な表現の削除
中尉は雄々しく身を起こし、悲しみと涙にぐったりした妻の体を、力強い腕に抱きしめた。	Поручик сжал в могучих объятиях горько плачущую жену	中尉は悲しみと涙にぐったりした妻の体を、力強い腕に抱きしめた。	10. 感情的な表現の削除
四谷界隅の省線電車や市電の響きも、濠の内側に谺するばかりで、赤坂離宮前のひろい車道に面した公園の森に遮られ、ここまでは届いて来ない。	грохот поездов и трамваев от станции Ёцуя сюда не долетал, приглушенный парком дворца Акасака.	四谷界隅の省線電車や市電の響きも、赤坂離宮の公園の森に遮られ、ここまでは届いて来ない。	11. 不明
中尉の留守中に麗子がこの部屋の整理をすませ、すがすがしく掃除をしておいたので、片隅に引き寄せられた紫檀の卓のほかには、八畳の間は、大事な客を迎える前の客間のけしきと渝らなかった。	комната, еще днем убранная Рэйко, приобрела такой вид, будто семья ожидала какого-то важного гостя.	中尉の留守中に麗子がこの部屋の整理をすませ、すがすがしく掃除をしておいたので、間は、大事な客を迎える前の客間のけしきと渝らなかった。	12. 不明
夫婦は水の流れるように淡々とそれぞれの支度にいそしんだ。	супруги занялись приготовлениями.	夫婦は支度にいそしんだ。	13. 不明
戦場の決戦と等しい覚悟の要る、戦場の死と同等同質の死である。	Ибо ожидающая его смерть не менее почетна, чем гибель на поле брани.	戦場の死と同等同質の死が待っているからである。	14. 政治的表現の削除
それらは目の前の妻と等しく、どこからでも、どんな遠くからでも、たえず清らかな目を放って、自分を見つめていてくれる存在だった。	Все эти святые символы смотрели на него ясным взором жены.	それらは目の前の妻と等しく、清らかな目を放って、自分を見つめていてくれる存在だった。	15. 政治的表現の削除
ズボンの左方を折り返して、腿を少しあらはし、そこへ軽く刃を滑らせた。	спустил брюки до половины и легонько полоснул себя по ноге.	ズボンを半分まで下ろし、足へ軽く刃を滑らせた。	16. 感情的な表現の置き換え
初めて良人の血を見た麗子は、恐ろしい動悸をし	Рэйко впервые видела кровь мужа, у нее	初めて良人の血を見た麗子は、息が詰まった。	17. 不明

た。	перехватило дыхание.		（前頁から続く）